

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (153)

東九州自動車道建設(曾於弥五郎IC～末吉財部IC間)に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ

じょう づか いな むら
定塚遺跡・稲村遺跡
(曾於市大隅町)

第3分冊

2010年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書
(153)

定塚遺跡・稲村遺跡
第3分冊

二〇一〇年三月
鹿児島県立埋蔵文化財センター



3分冊目次

本文目次

第4節 縄文時代早期の調査

3 遺物

(1) 土器……………1

1 A類土器……………1

1 B類土器……………37

1類土器底部……………55

2 A類土器……………74

2 B類土器……………76

2 C類土器……………89

3類土器……………94

2・3類土器底部……………109

4類土器……………112

5類土器……………112

6 A類土器……………120

6 B類土器……………120

6 C類土器……………143

7類土器……………162

8 A類土器……………169

8 B類土器……………169

9類土器……………185

10類土器……………189

11類土器……………189

12類土器……………192

13類土器……………192

(2) 石器……………214

石鏃……………214

石槍……………214

石匙……………214

スクレイパー類……………214

楔形石器……………225

使用痕のある石器……………225

石核類……………225

異形石器等……………225

スクレイパー状石器……………225

刃部磨製石斧……………257

礫器……………257

磨石類……………257

ハンマーストーン……………257

砥石……………257

石皿……………257

軽石製品……………257

第5節 縄文時代前期・中期の調査

1 遺構（落とし穴状土坑）……………275

① Type 1……………275

② Type 2……………275

③ Type 3……………277

④ Type 4……………277

2 遺物……………284

(1) 土器……………284

(2) 石器……………284

第6節 縄文時代後期・晩期の調査

1 遺構（土坑）……………290

2 遺物……………290

(1) 土器……………290

(2) 石器……………290

第7節 古代以降の調査……………296

挿図目次

第1～8図	縄文土器1～8	2～9
第9～16図	縄文土器9～16	11～18
第17～33図	縄文土器17～33	20～36
第34～39図	縄文土器34～39	38～43
第40～43図	縄文土器40～43	45～48
第44～59図	縄文土器44～59	50～65
第60～66図	縄文土器60～66	67～73
第67・68図	縄文土器67・68	75・76
第69～71図	縄文土器69～71	78～80
第72～74図	縄文土器72～74	82～84
第75～77図	縄文土器75～77	86～88
第78～82図	縄文土器78～82	90～94
第83～86図	縄文土器83～86	96～99
第87～90図	縄文土器87～90	101～104
第91～96図	縄文土器91～96	106～111
第97～103図	縄文土器97～103	113～119
第104～125図	縄文土器104～125	121～142
第126～128図	縄文土器126～128	144～146
第129～149図	縄文土器129～149	148～168
第150～153図	縄文土器150～153	170～173
第154～157図	縄文土器154～157	175～178
第158～166図	縄文土器158～166	180～188
第167～172図	縄文土器167～172	190～195
第173図	完形土器1	197
第174図	完形土器2	198
第175図	完形土器3	199
第176図	縄文土器のサイズ1	200
第177図	縄文土器のサイズ2	201
第178図	煤付着土器1	204
第179図	煤付着土器2	205
第180図	煤付着土器3	206
第181図	煤付着土器4	207
第182～191図	縄文時代の石器1～10	215～224
第192～222図	縄文時代の石器11～41	226～256
第223～234図	縄文時代の石器42～53	258～269
第235図	出土遺物分布図1	270

第236図	出土遺物分布図2	271
第237図	出土遺物分布図3	272
第238図	出土遺物分布図4	273
第239図	出土遺物分布図5	274
第240図	落とし穴状土坑1	278
第241図	落とし穴状土坑2	279
第242図	落とし穴状土坑3	280
第243図	落とし穴状土坑4	281
第244図	落とし穴状土坑5	282
第245図	落とし穴状土坑6	283
第246図	縄文土器173	285
第247図	出土遺物分布図(Ⅲ～Ⅴ層)	286
第248図	縄文時代の石器54	287
第249図	縄文時代の石器55	288
第250図	縄文時代の石器56	289
第251図	土坑実測図1	291
第252図	縄文土器174	292
第253図	縄文時代の石器57	293
第254図	縄文時代の石器58	294
第255図	縄文時代の石器59	295
第256図	土坑実測図2	296

表目次

表1	底部と胴部の接合状況一覧	59
表2	完形品法量一覧	202
表3	遺構内・包含層出土土器法量一覧	203
表4	落とし穴状土坑一覧	276

データ目次

データ1～6	完形土器出土状況1～6	208～213
--------	-------------	---------

第四章 第4節 縄文時代早期の調査 3 遺物

(1) 土器

1類土器 (1~802)

1類土器は、平底の底部から口縁部に向かい緩やかに外傾する深鉢形や、底部から口縁部に向かいほぼ垂直に立ち上がる円筒形の深鉢形を基本的な器形とし、外面の口縁部上端や、口縁部上端から口唇部にかけて貝殻やヘラ状工具を用いた1~2列の刺突文を施し、その下位に底部付近まで斜位や横位の貝殻腹縁を用いた貝殻条痕調整が行なわれている。内面はヘラ状工具と考えられる施文原体を用いた工具ナデを主としたナデ調整や、外面と同じように貝殻腹縁を用いた貝殻条痕調整、ヘラ状工具を用いたと考えられるケズリ調整などが行なわれている。

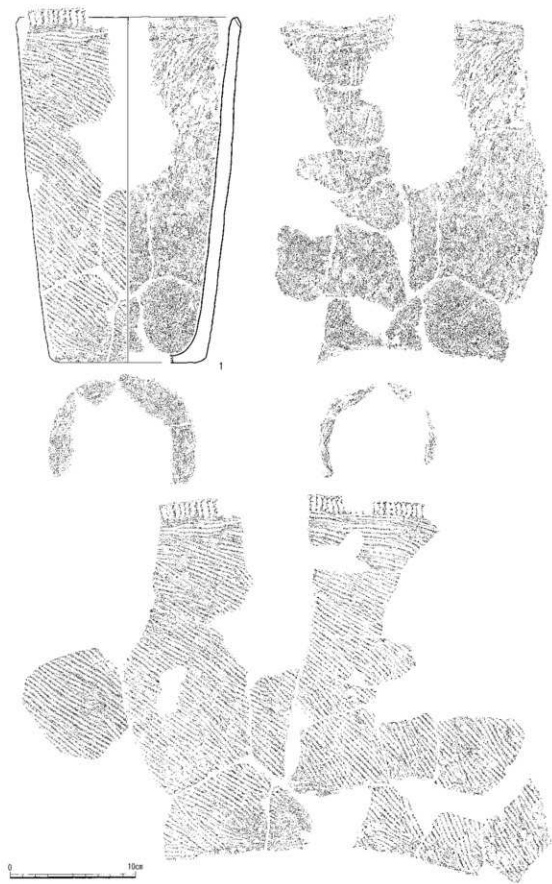
1A類土器 (1~577)

1A類土器は1類土器のなかでも、口縁部断面形が稜を持たず程度の差はあれ丸みを持つものや、一部のみ平坦に整形されるものが該当する。口唇部を完全に平坦に整形していないため、口縁部上端に施される刺突文も口縁部上端から口唇部にかけてまたがるように施されている。口縁部上端に施される刺突文の下位には貝殻条痕調整が行なわれ、刺突文直下のみ横位方向に施され、それより下位は斜位方向に施されるものや、刺突文直下から斜位方向のみに施されるものが大半を占めるのが特徴である。1A類は口縁部断面形態からさらに細分することが可能である。

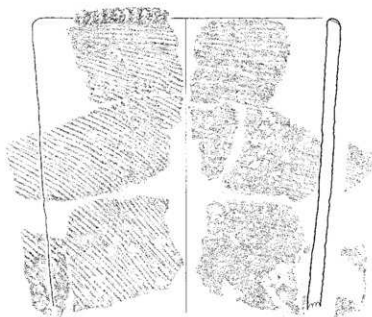
1~230は口縁部断面形態が丸みを持つものや、やや尖り気味に整形される土器群である。

1~151は口縁部上端から口唇部にかけて1列の貝殻刺突文を巡らす土器の一群であり、そのなかでも1~124は貝殻刺突文の直下に横位方向の貝殻条痕調整を行なったのち、斜位方向の貝殻条痕調整を行なう土器の一群である。1は口縁部上端から口唇部にかけて縦位の貝殻刺突文を1列巡らせ、丸みをもった口唇部を持つ完形土器である。器面調整は、外面は貝殻刺突文直下のみ横位の貝殻条痕調整が行なわれ、それよりも下位には底部に至るまで斜位の貝殻条痕調整が行なわれている。観察する限りではまず斜位の貝殻条痕調整を施し、その後横位の貝殻条痕調整が行なわれ、最後に貝殻刺突文が施されたと考えられる。内面は口縁部付近のみ横位方向のヘラ状工具を用いたと考えられる工具ナデ調整が行なわれており、その下位にも同じ工具ナデ痕が斜位方向に底部に至るまで残っている。内外面ともに口縁部付近のみ横位方向の調整が行なわれ、それ以下は斜位方向の調整が行なわれているという共通点が確認できる。また、外面には部分的に炭化物やススが付着していたり、器壁のちょうど半分ほどの厚さで器面が剥落している箇所も観察できる。底部外面はナデ調整が行なわれている。3には縦長の彫り切り穿孔で1対の補修孔が作られている。補修孔自体はほぼ外面から彫り切られており、内面には極々僅かな彫り切りの痕跡しか残っていない。また、断面を観察すると器壁のちょうど中ほどあたりにひびが入っており接合痕のようにも見える。口縁部付近のみに巡るようにススが付着している。4は内面調整がやや深い貝殻条痕調整で行なわれており、一部にはケズリを意識したと考えられる痕跡が観察できる。5は内外面ともに磨減が著しく、特に内面を観察する限りでは焼成が不良であったと考えられる。6・8には外面が大きく剥落している部分が観察できる。74は内面の口縁部直下に貝殻腹縁で押圧した痕跡が残っている。84は外面の貝殻刺突文や貝殻条痕調整の凹んだ部分が一部朱色を呈しており赤色に塗られていた可能性も考えられるが、土器の胎土のなかに赤色鉱物が確認できるものが多く存在しており、それにより土器の器面が赤っぽく見えることから一概には赤色に塗られているとは判断できない。

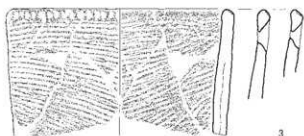
125~151は刺突文下位の貝殻条痕調整が斜位方向のみに行なわれている一群である。



第1図 縄文土器 1



2



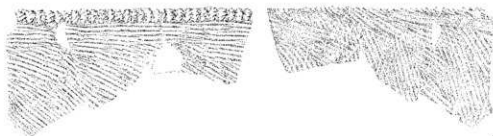
3



4



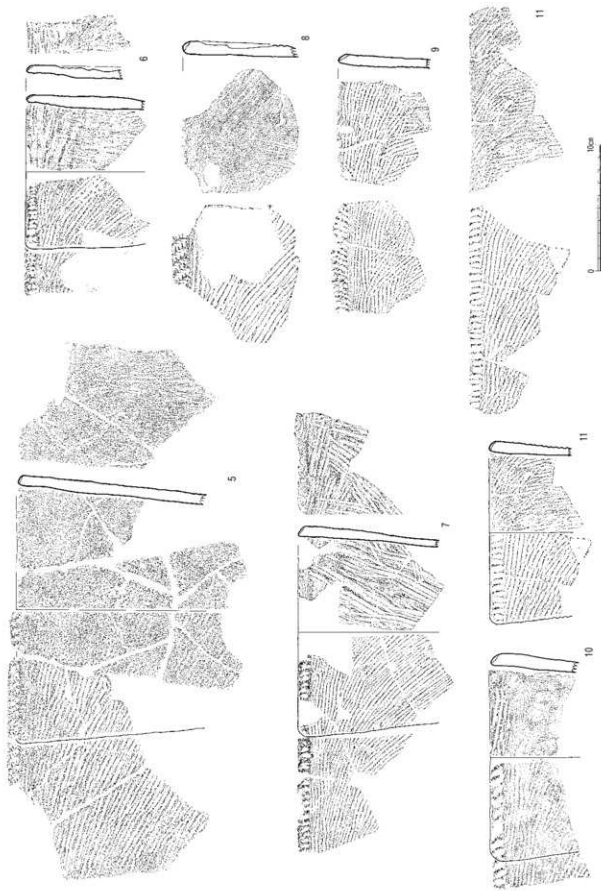
3



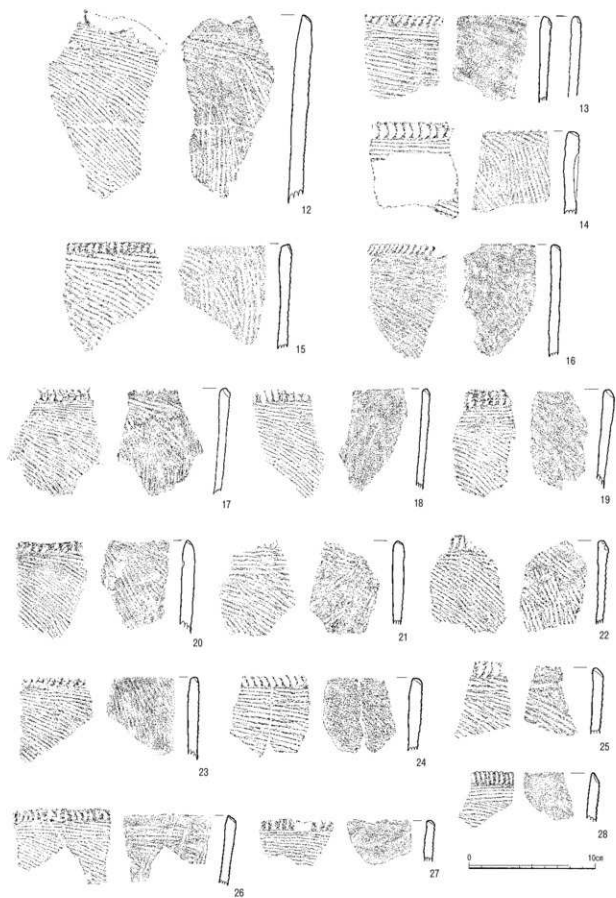
4

0 10cm

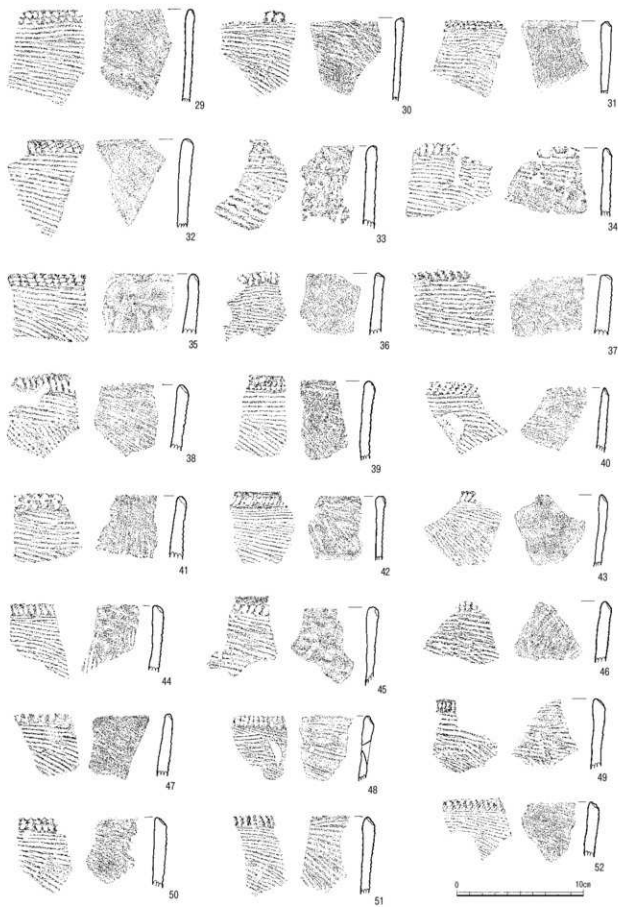
第2図 縄文土器2



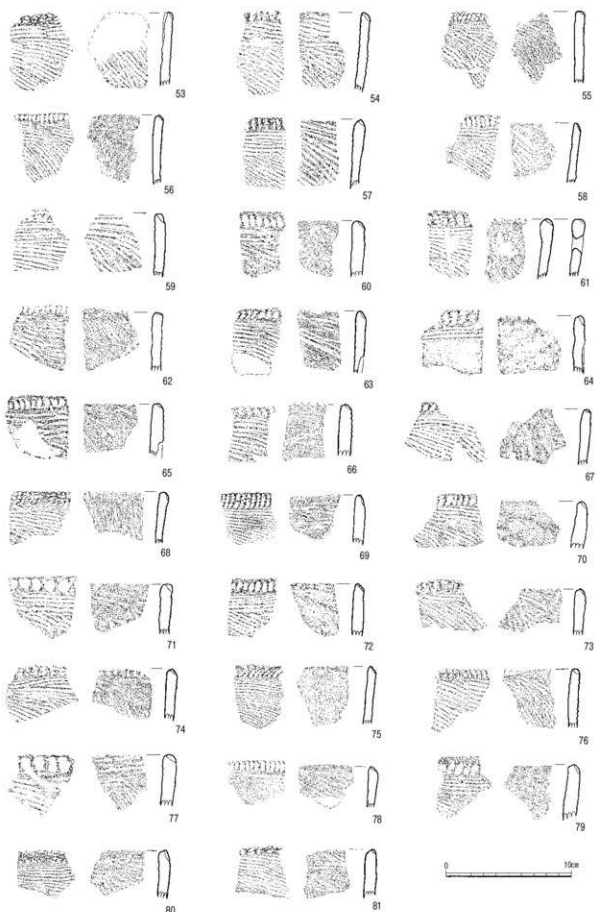
第3図 織文土器3



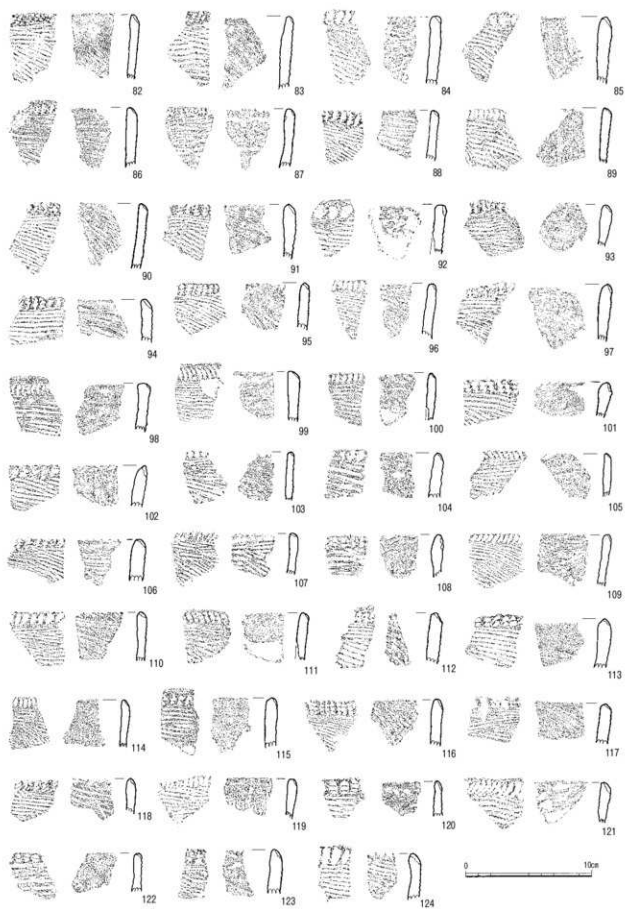
第4図 縄文土器4



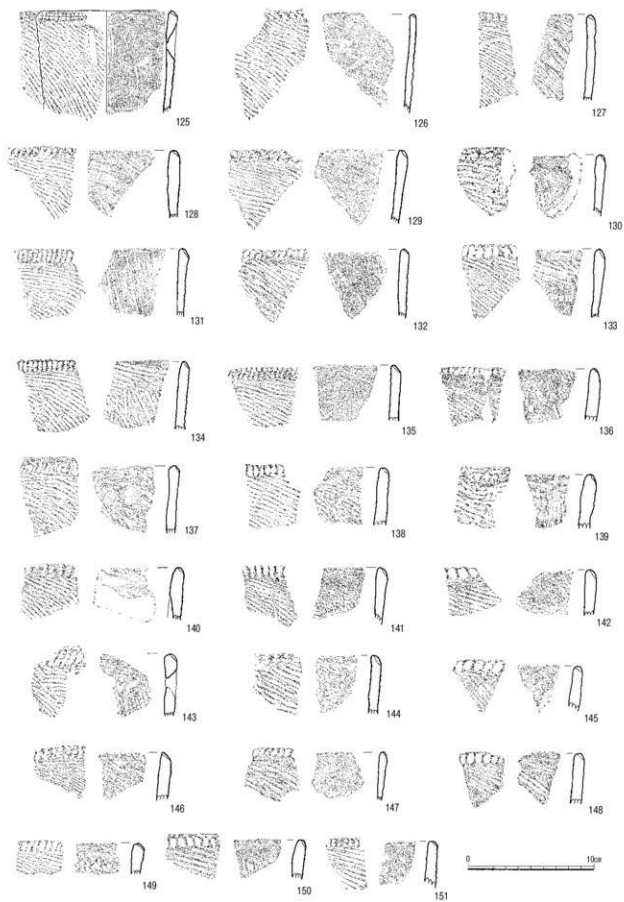
第5圖 縄文土器5



第6図 縄文土器6



第7圖 縄文土器7



第8図 縄文土器8

152～164は口縁部上端から口唇部にかけて2列の貝殻刺突文を巡らせる土器の一群である。152は口縁部上端から口唇部にかけて斜位と縦位の貝殻刺突文を1列ずつ計2列巡らせ、丸みをもった口唇部を持つ完形土器である。口唇部には平坦に整形した後には刺突文が施されており、一部に僅かな平坦面が残り内面との間に稜が作られている。器面調整は、外面は貝殻刺突文直下の横位の貝殻条痕調整が施され、それよりも下位には胴部下半まで斜位の貝殻条痕調整が行なわれ、底部付近ではそれがやや横位気味に施される。内面は口縁部付近の横位方向や斜位方向の貝殻条痕調整が行なわれ、上から軽くナデ調整が行なわれており、それより下位にはヘラ状工具を用いたと考えられる工具ナデ調整が行なわれている。底部は外面の僅かな部分しか残存していないが、貝殻条痕調整が確認できる。外面には口縁部から胴部中ほどまで炭化物やススが付着している。また、内外面ともに器壁のちょうど半分ほどの厚さで器面が剥落している箇所も観察できる。縦長の彫り切り補修孔も1箇所穿孔されている。

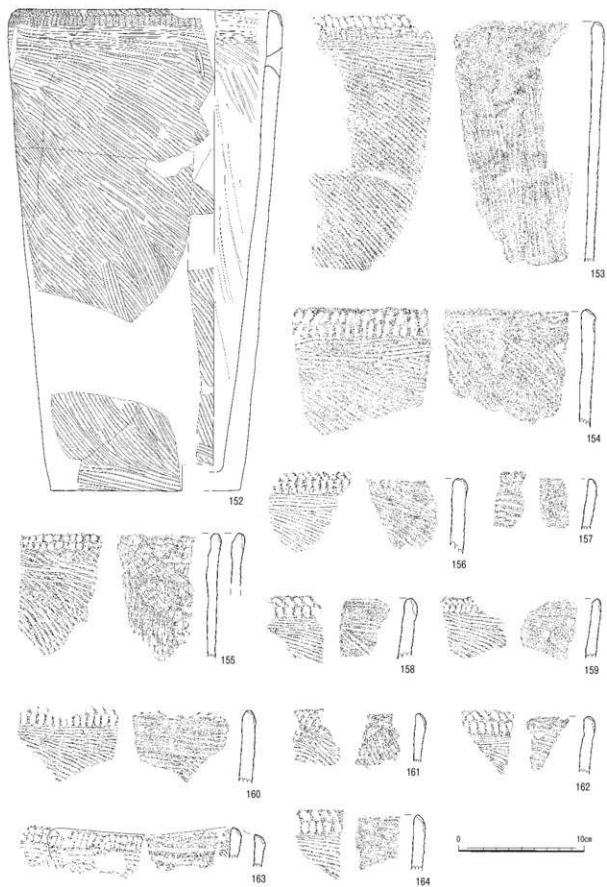
165～230は口縁部上端から口唇部にかけて1列のヘラ状工具刺突文を巡らせる土器の一群であり、165～194はヘラ状工具刺突文の直下に横位方向の貝殻条痕調整を行なった後に、斜位方向の貝殻条痕調整を施す一群である。165は外面が広範囲にわたり剥落しており、その剥落した部分に1対の補修孔が確認できる。補修孔の形状は外面から見ると一つは円形、もう一方は縦長であり、内面からは双方ともに円形に見え、円形の回転穿孔と縦長の彫り切り穿孔の2つの補修孔が対になっているように見える。しかしながら、円形穿孔と縦長穿孔を組み合わせた補修孔も確認されており、さらに組み合わせられた補修孔の場合、縦長穿孔が外面の表面に近い部分にしか確認できないことから、外面が剥落した状態で確認できるこの補修孔が確実に円形穿孔だけでおこなわれているとは言い難い。167・169は内面に粗いケズリ調整が行なわれている。また、169は口縁部上端から口唇部にかけてヘラ状工具刺突文が鋸歯状に施されており、このように鋸歯状に刺突文を施す例は少ない。

195～212は刺突文下位の貝殻条痕調整が斜位方向のみに行なわれている土器の一群である。199は内面の口縁部上端のみ指ナデの痕跡や指頭痕が残っており若干凹み、それよりも下位にはケズリが行なわれている。また、外面には部分的ではあるが口縁部上端から胴部中ほどまでススが付着している。

213～230は口縁部上端から口唇部にかけて2列のヘラ状工具刺突文を巡らせる一群である。213は口縁部上端にやや斜位気味のヘラ状工具刺突文を2列巡らせ、内面との間に明確な稜はないが内傾していたり、やや尖り気味の丸みをもった口唇部を持つ完形土器である。外面器面調整は刺突文直下から底部まで斜位の貝殻条痕調整が行なわれている。口縁部上端の刺突文には貝殻条痕調整により潰れた部分が観察できるので、刺突文を施した後に貝殻条痕調整が行なわれたと考えられる。内面はヘラ状工具を用いたと考えられる。底部は外面は工具ナデ調整、内面は器面がでこぼこしているが工具ナデ痕が確認できる。また、底部片は円形に割れており、その部分が接合面と考えられる。215は内外両面から彫り切りの縦長穿孔が行なわれたと考えられる補修孔が作られているが、外面からは割り幅と幅広く穿孔されており、穴の形状が長細い楕円形を呈している。内面からは単純な彫り切り技法が用いられている。

231～460は平坦気味に整形した口唇部に、口縁部上端から口唇部にかけて刺突文を施すため、刺突文を施すときの圧力で押された粘土が平坦に整形した口唇部に被さる断面形状を持つ土器群である。

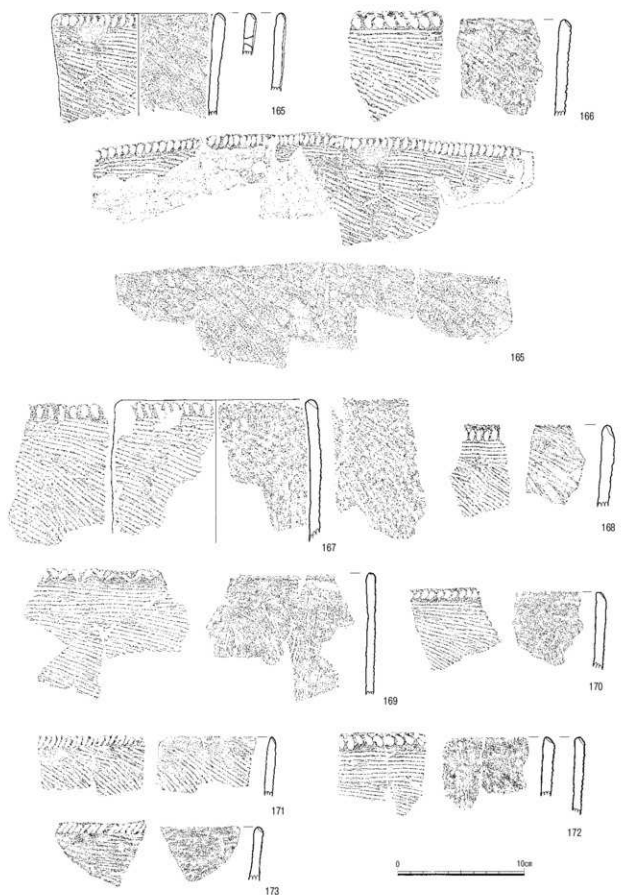
231～396は口縁部上端から口唇部にかけて1列の貝殻刺突文を巡らす土器の一群である。231は口縁部上端から口唇部にかけて斜位の貝殻刺突文を1列巡らす胴部下位付近まで残存する土器である。貝殻刺突文を施すときに盛り上がった粘土がギザギザの小波状をなしている。



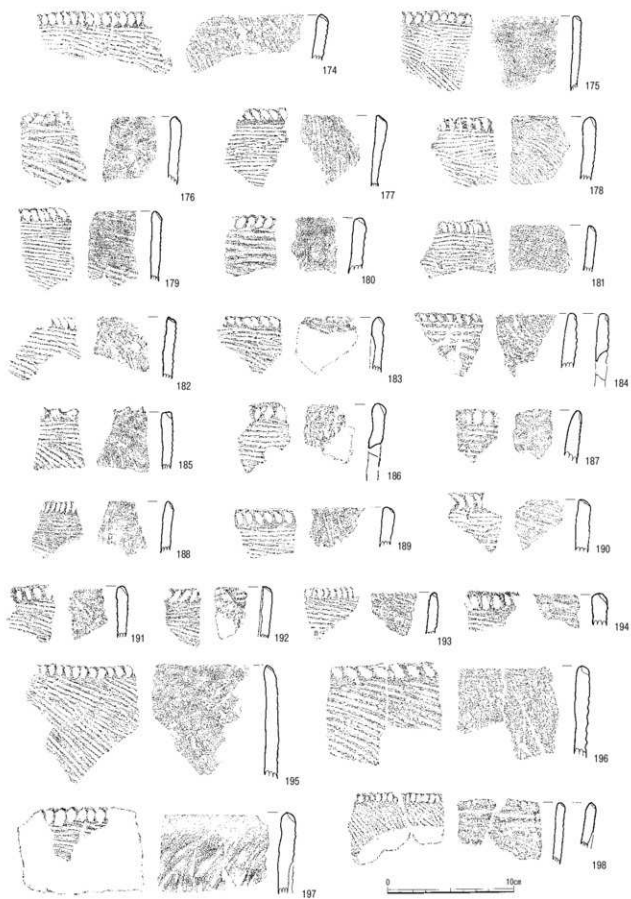
第9図 縄文土器9



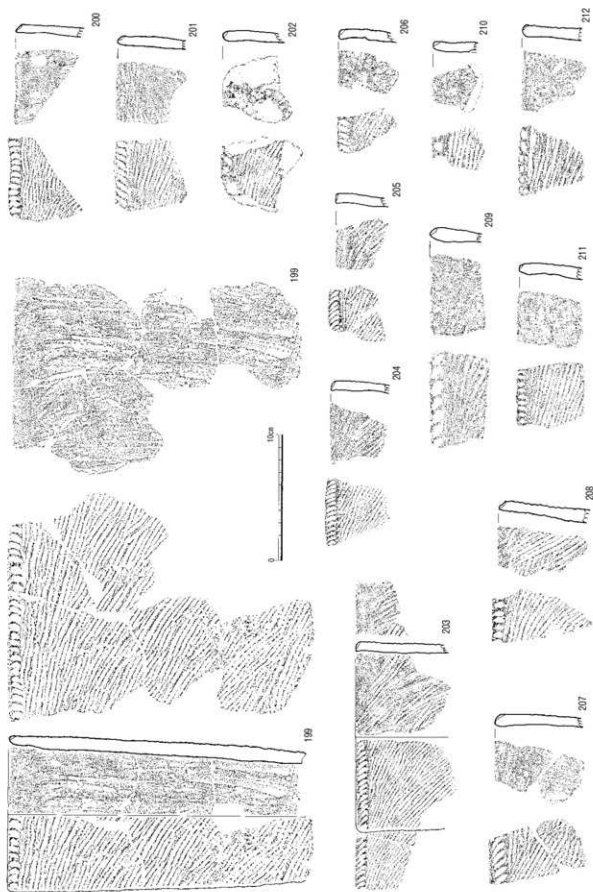
第10图 絹文土器10



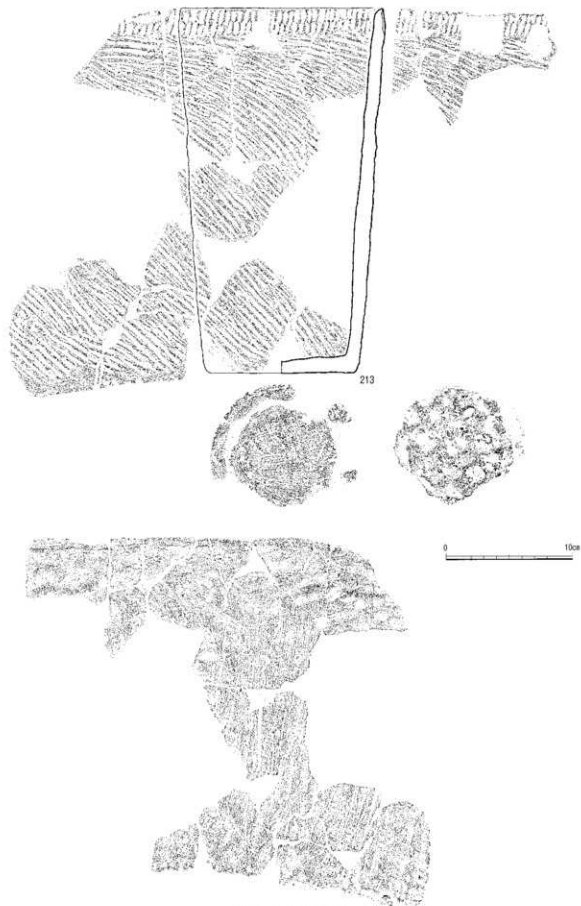
第11圖 縄文土器11



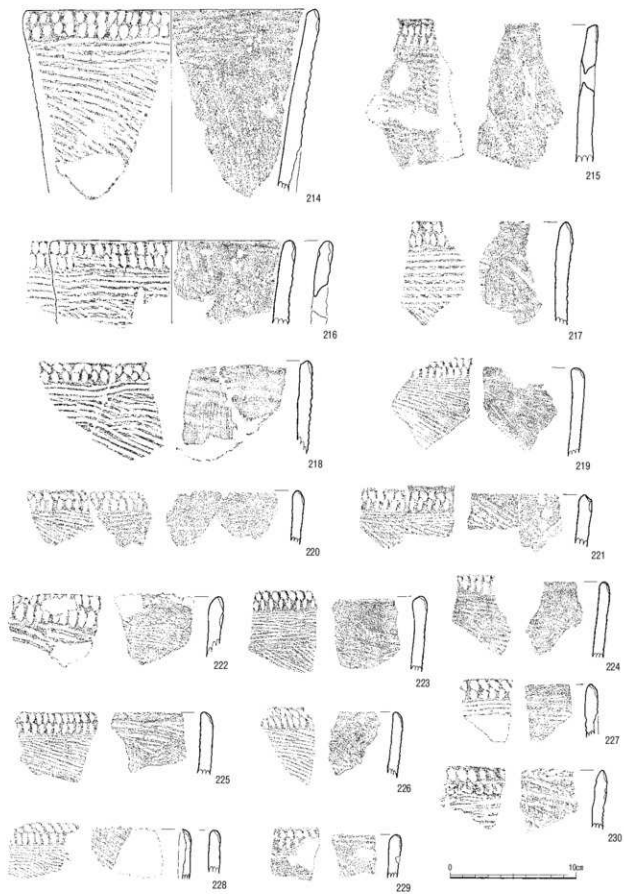
第12図 縄文土器12



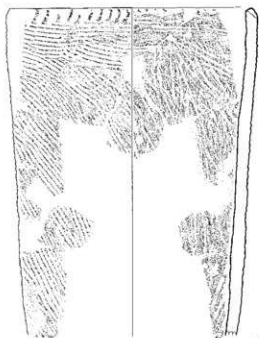
第13図 補文土器13



第14図 縄文土器14



第15図 縄文土器15



231



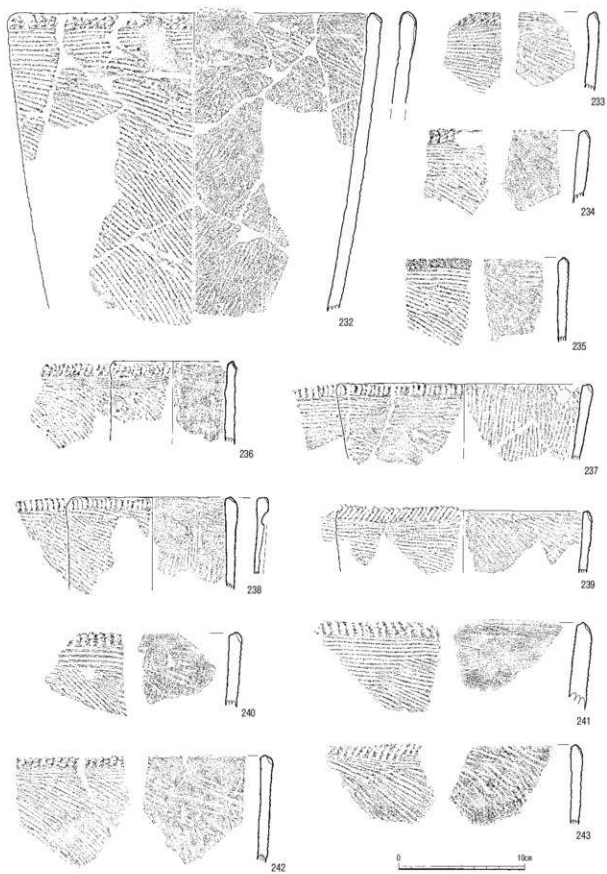
231



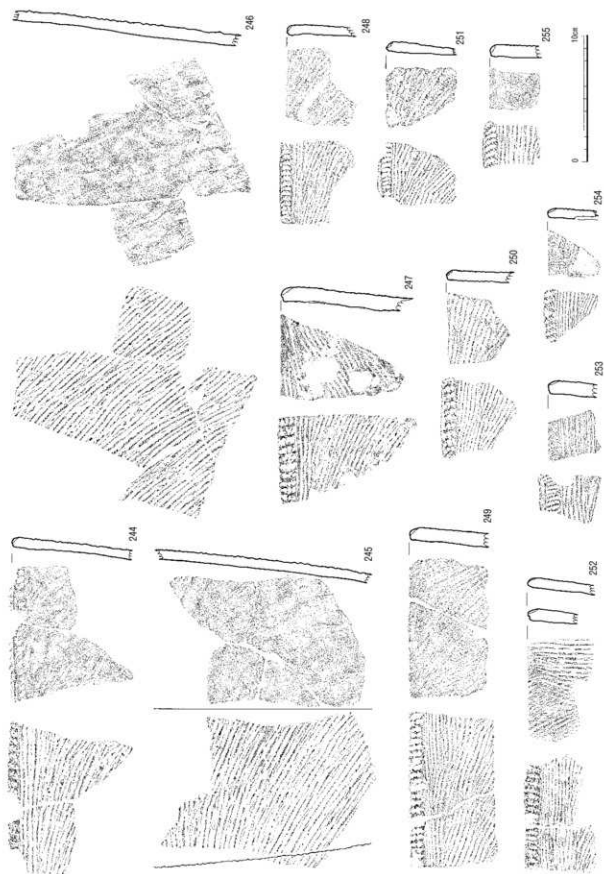
第16図 縄文土器16

232は口唇部から胴部上半の横位貝殻条痕調整と斜位貝殻条痕調整の境目の辺りにかけて文様が調整の上から、部分的ではあるが粘土が貼り付けられており、ナデ調整が施されている。238は剥内面には胴部上半にかけて炭化物が付着しているが、口縁部直下には付着は見られない。剥落した部分に穿孔途中の補修孔が1箇所確認できる。形状から彫り切りの縦長穿孔であると考えられる。244~246は同一個体であると考えられる。244は内面の口縁部上端に貝殻押圧を巡らしたような痕が残っているが、使用した工具は不明である。器面調整は押圧が施されている口縁部上端のみナデられており、それよりも下位はヘラ状工具によるケズリのちナデ調整が行なわれている。252は内面に口縁部上端から縦位の貝殻条痕調整が行なわれている。256と257は同一個体である。内面は貝殻条痕調整後にナデ調整が施されているが、ナデ消しとまではいかず貝殻条痕調整がはっきりと確認できる。これは1A類土器の内面調整に多く見られ、貝殻条痕を完全にナデ消すという意識はみられない。また、胎土には3mm~1mm以下の赤色の粒子が多く含まれており、特に内面は赤色粒子の影響で全体的に赤っぽい色を呈している。内外面ともに器壁の半分ほどの厚さまでの剥落があり、外面の口縁部を含む胴部上半にはススが付着している。272と275は部分的ではあるが貝殻刺突文が2列になっており、397~400と同類である。311は縦長の彫り切り穿孔による補修孔が1箇所確認できる。断面図では補修孔が貫通した形で推定復元をしているが、破片資料のため穿孔が貫通しているかは不明である。319は内面の口縁部上端に工具ナデの上から指押さえの痕が残っており、その部分が窪んでいる。323は内面口縁部付近が大きく窪んでおり、その部分のみ指紋が多く残っており、指ナデが行なわれている。329は外面の刺突文直下に剥落が見られる。337は外面からのみ彫り切りの縦長穿孔による補修孔が作られており、長細い楕円形の形状をしている。また、断面を観察すると器壁の中ほどに口唇部から真っ直ぐ下りる接合線が確認できる。340は外面に穿孔途中の補修孔が1箇所確認できる。斜め方向に彫り切りの縦長穿孔が行なわれているが、補修孔の部分で割れており、穿孔途中で割れたため途中で放棄した可能性が考えられる。359は内面の口縁部付近が大きく窪んでいる。一見するとケズリが行なわれている様であるが、曲線を描いて窪んでいることと、ナデ調整が施されていること、指の太さと合致することなどから指押さへの可能性が考えられる。389は円形穿孔と縦長穿孔の両方の技法を用いて作られた補修孔が1箇所確認できる。実測図には3つの断面が書かれているが、右の2つの断面図はそれぞれ円形穿孔のみの断面を表し、左は縦長の彫り切り穿孔の断面を表している。断面図の通り縦長穿孔は円形穿孔の上部には達していないのが分かる。穿孔はほぼ完全に外面からのみ行なわれている。396は縦長の彫り切り穿孔による補修孔が1箇所確認でき、穿孔は外面からのみ施されている。

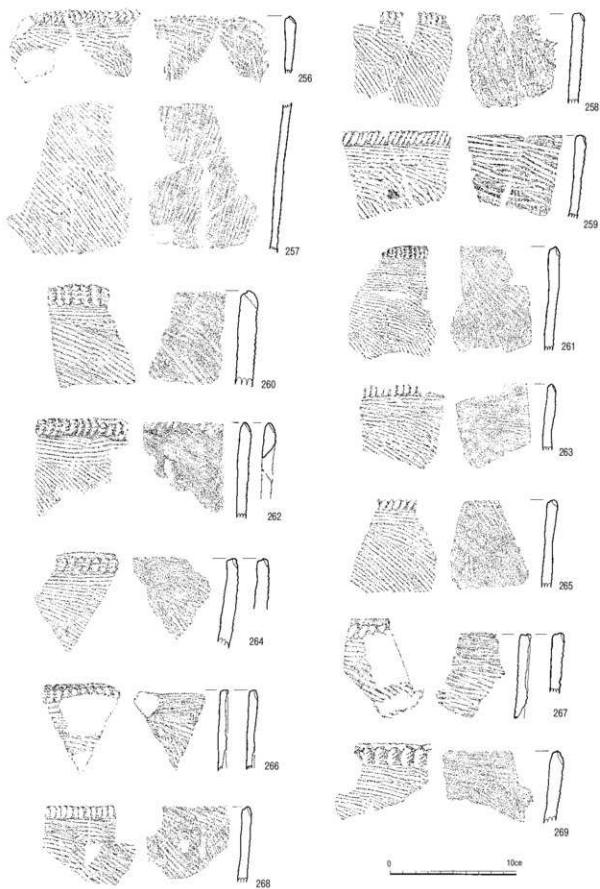
397~400は口縁部上端から口唇部にかけて2列の貝殻刺突文を巡らす土器の一群である。397と400は同一個体である可能性が高い。ともに1列目の貝殻刺突文と2列目の貝殻刺突文の大きさが異なっている。観察するかぎりでは施文原体は同じであり、斜め方向から刺突するか、真っ直ぐに刺突するかという刺突の施し方の違いによるものと考えられる。398は232と同じように口唇部から口縁部上端にかけて粘土が貼り付けられている。ただし398に関しては粘土を貼り付けたあとに横位の貝殻条痕調整が施され、さらに貝殻刺突文が施されており、貝殻刺突文の上から粘土を貼り付けたと考えられる232とは異なっている。また、部分的ではあるが貝殻刺突文が2列施されている箇所もある。1列目の貝殻刺突文が無い部分の幅と、2列目の部分的な貝殻刺突文の施されている幅はともに約3.5cmであり、1列目の刺突文の施されない部分を2列目で補填した可能性も考えられる。



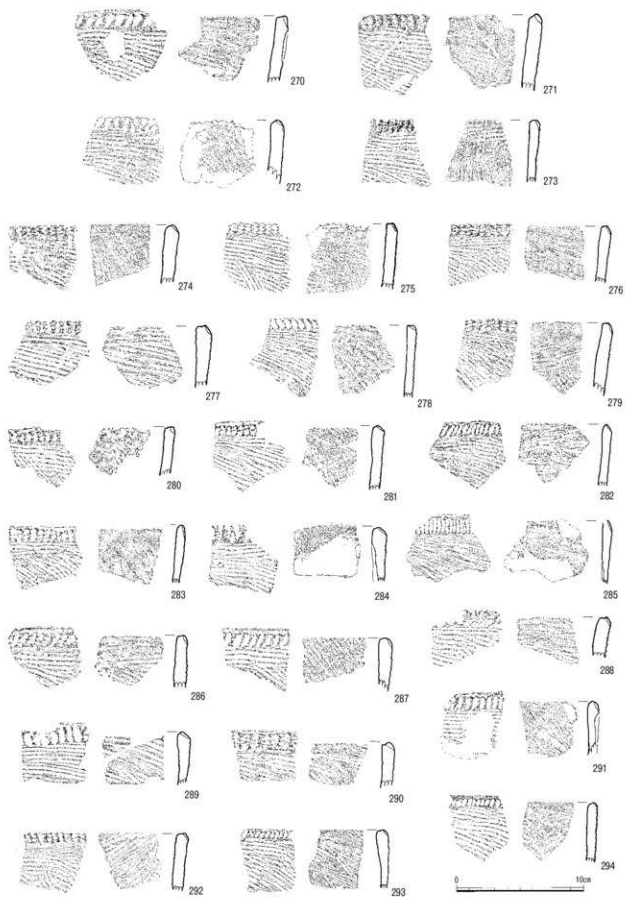
第17図 縄文土器17



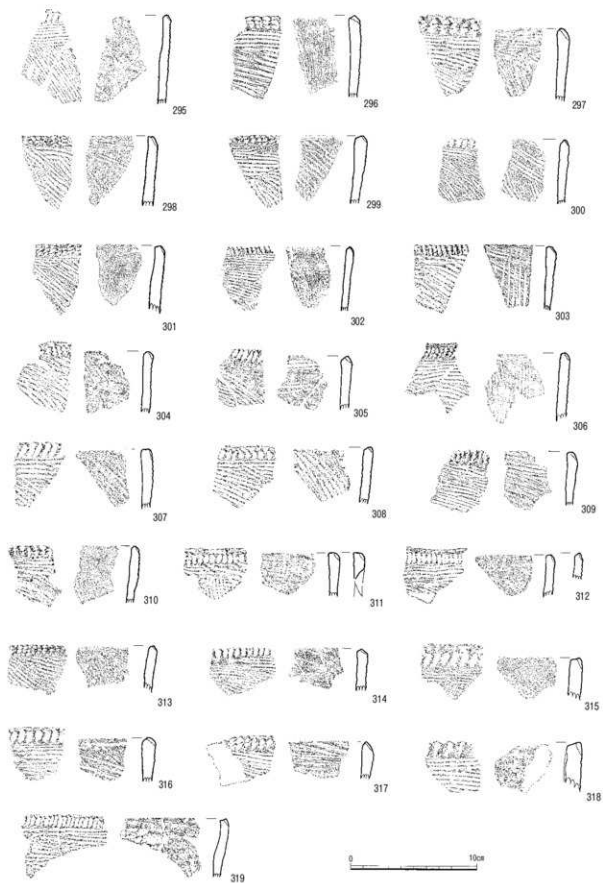
第18図 補文土器18



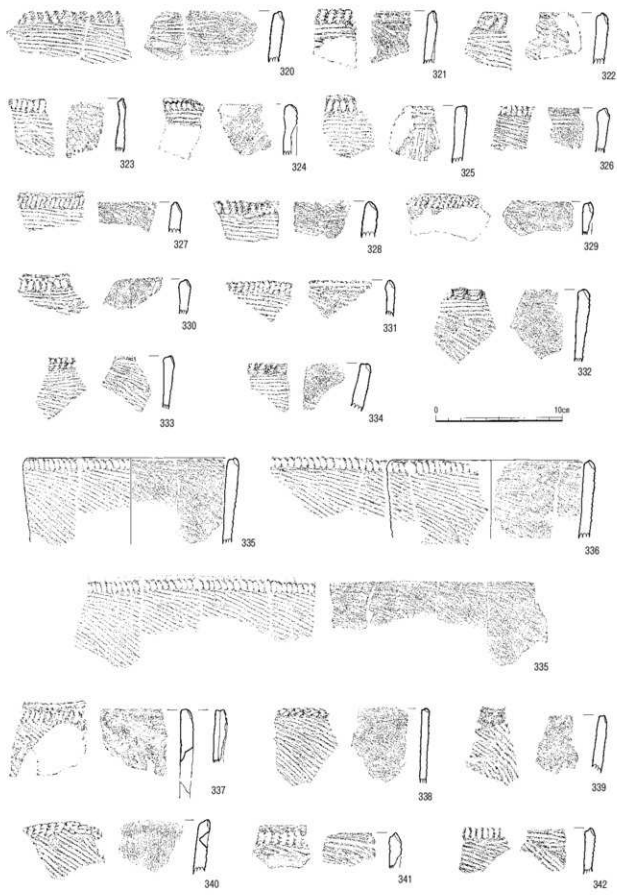
第19図 縄文土器19



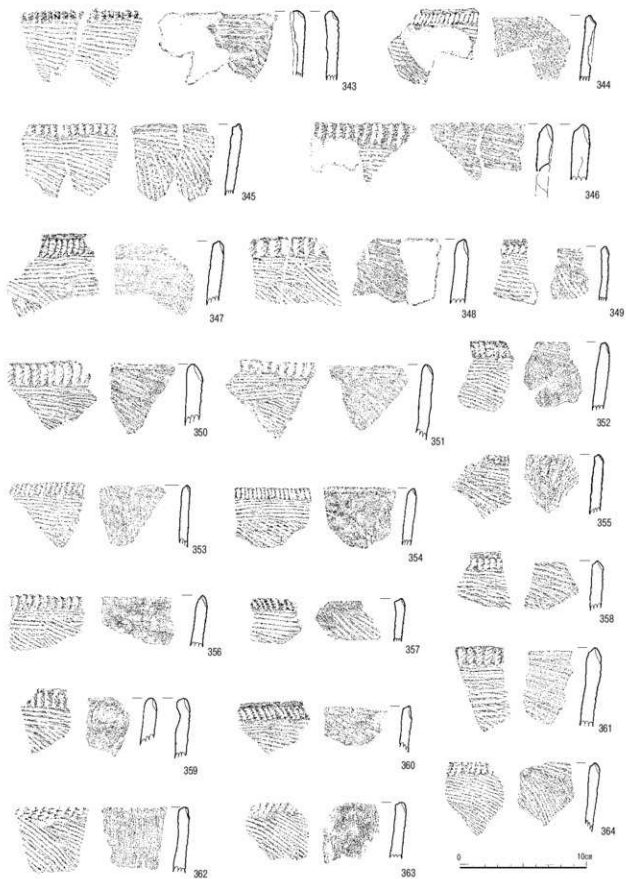
第20図 縄文土器20



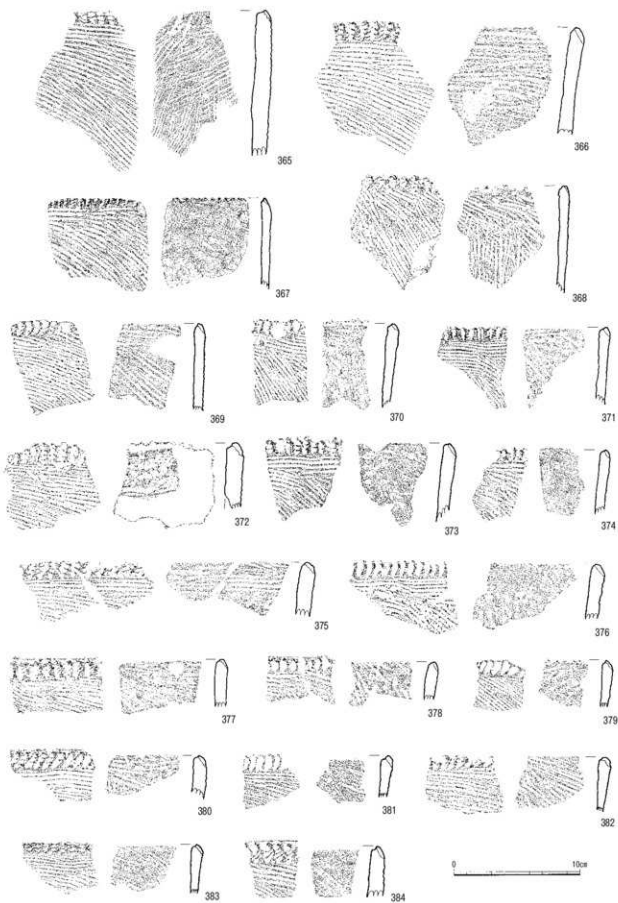
第21図 縄文土器21



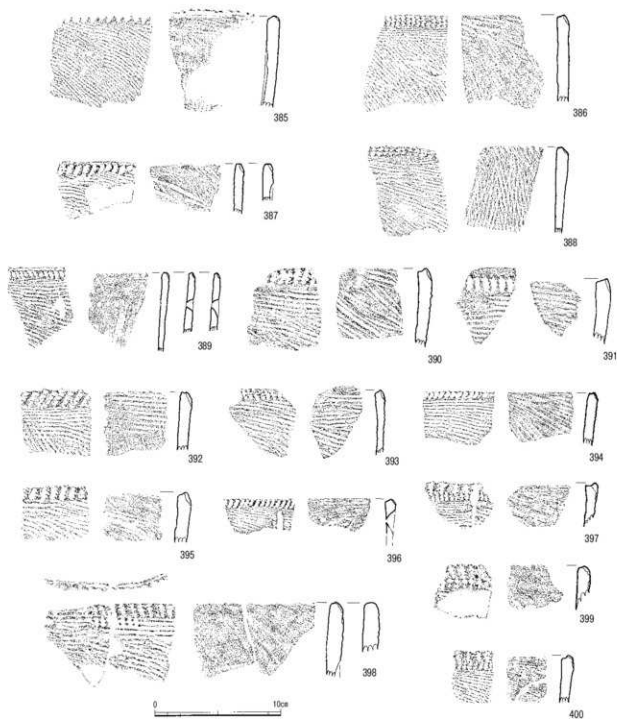
第22図 縄文土器22



第23図 縄文土器23



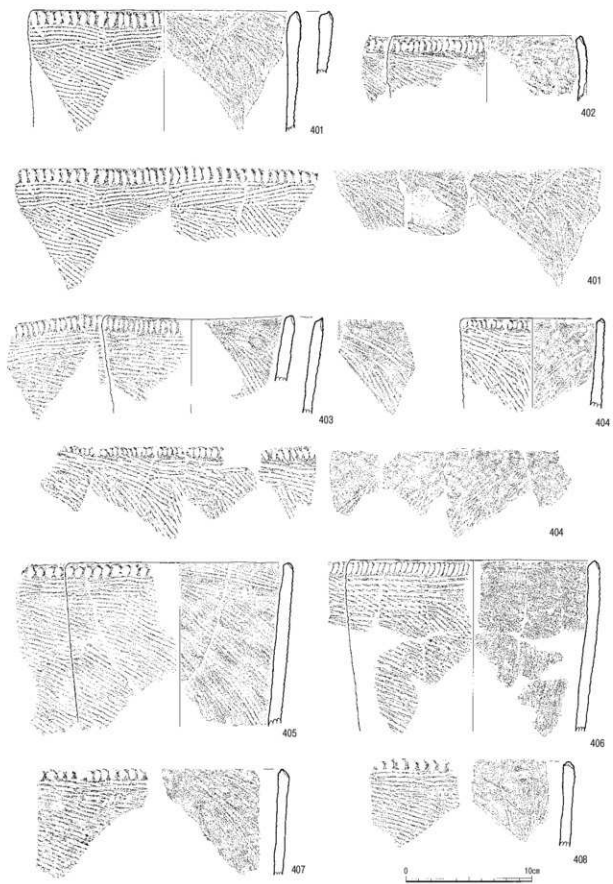
第24図 縄文土器24



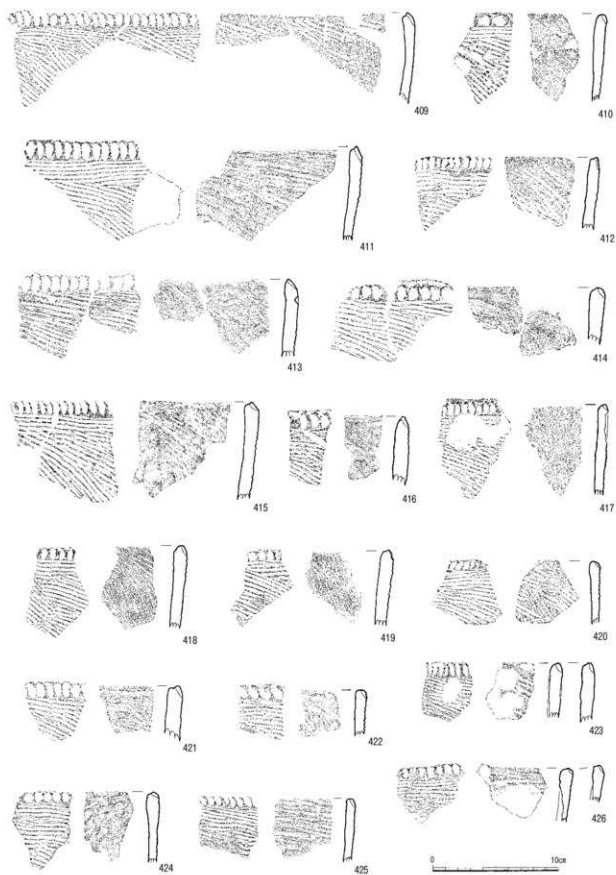
第25図 縄文土器25

401～452は口縁部上端から口唇部にかけて1列のヘラ状工具刺突文を巡らす土器の一群である。403は内面に器壁の半分ほどの厚さの剥落がある。405は外面の貝殻刺突文直下のみ横位の貝殻条痕調整を行ない、それよりも下位には斜位の貝殻条痕調整が行なわれている。内面の貝殻条痕調整も口縁部付近のみ横位方向に行なわれており、貝殻条痕調整後にナデ調整が行なわれている。

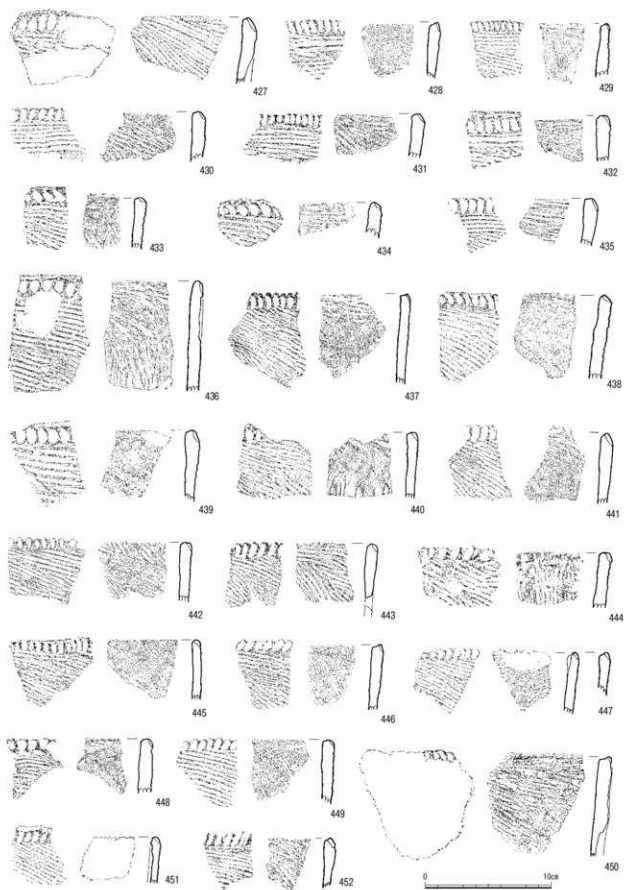
453～460は口縁部上端から口唇部にかけて2列のヘラ状工具刺突文を巡らす土器の一群である。



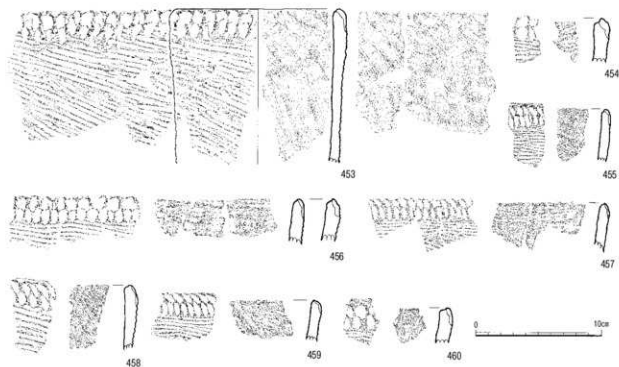
第26図 縄文土器26



第27図 縄文土器27

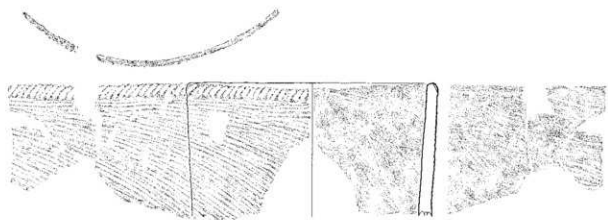


第28図 縄文土器28

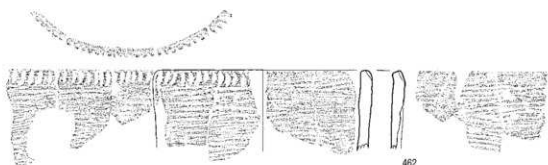


第29図 縄文土器29

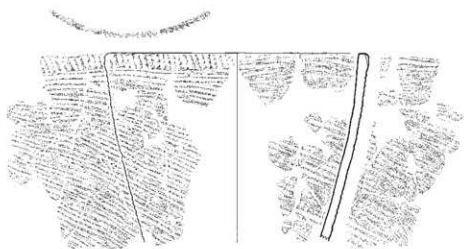
461～577は口唇部に一部平坦に整形されたままの面が保持されるが、刺突文自体は口縁部上端から口唇部にかけて施される土器の一群である。461～519は口縁部上端から口唇部にかけて1列の貝殻刺突文を巡らす土器の一群である。461は口縁部上端から口唇部にかけて斜位の貝殻刺突文が1列巡らされている。貝殻刺突文の下位には直下のみ横位の貝殻条痕調整が行なわれ、それよりも下位には斜位の貝殻条痕調整が行なわれている。この横位の貝殻条痕調整は、貝殻刺突文と斜位の貝殻条痕調整の後から行なわれている。内面調整は貝殻条痕調整後に工具ナデやナデ調整が行なわれており、特に口縁部付近では丁寧なナデ調整により貝殻条痕調整がナデ消されている部分も見られる。外面には口縁部上端を除いてススが付着している。462は内外面ともに横位の貝殻条痕調整が施されている。外面には剥落が見られる。463は口縁部が若干内湾する器形を呈する土器である。内面調整は貝殻条痕調整の後、丁寧にナデられているが、ナデ消すまではいかない。また、外面には口縁部付近を除く胴部上半にススの付着が見られる。464は外面の刺突文直下のみススが付着している。465補修孔が1対確認できる。補修孔は2箇所ともに破損しているが、縦長の彫り切り技法による穿孔が行なわれていることが確認できる。471は内外面ともに貝殻条痕調整が行われており、内面もその上から特にナデ調整などは行なわれていない。外面には粘土に混入していた小礫が外れたような楕円形の穴が開いており、大きな剥落も見られる。474は外面の貝殻刺突文下位の横位貝殻条痕調整を最後に行なったため、その時に押された粘土により貝殻刺突文直下に僅かな盛り上がりを作っている。縦長の彫り切り穿孔により作られた補修孔も1箇所あり、ほぼ外面から穿孔されているが、内面にも僅かに彫り切りが行なわれた痕跡が残っている。また、内面にはやや深めのケズリ痕が残っているが、それを含めてその上から丁寧に工具ナデと指ナデが行なわれている。486は内面が器壁の厚さの中ほどまで大きく剥落している。494・497は共に縦長の彫り切り技法による補修孔が作られているが、497は斜位方向に彫り切りが行なわれている。



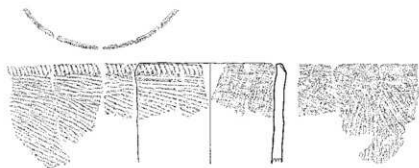
461



462



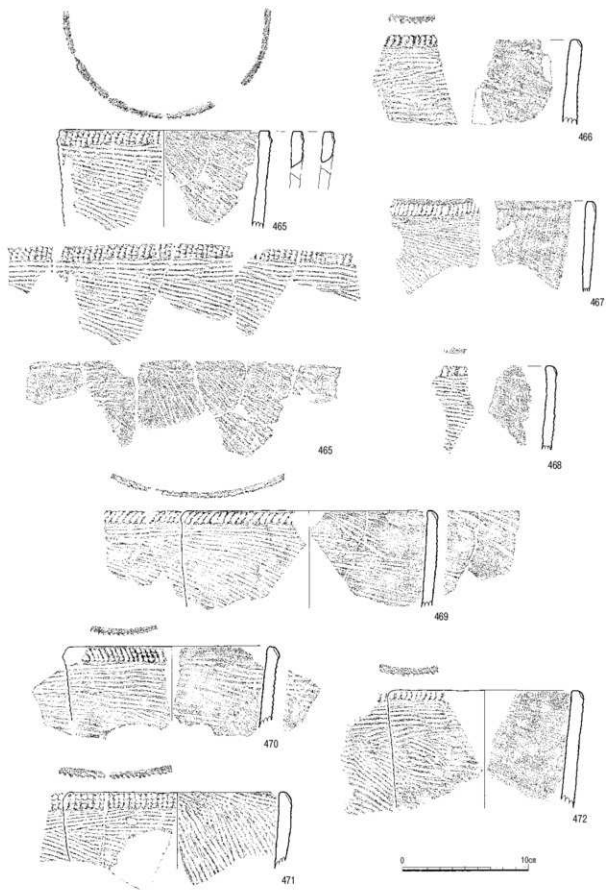
463



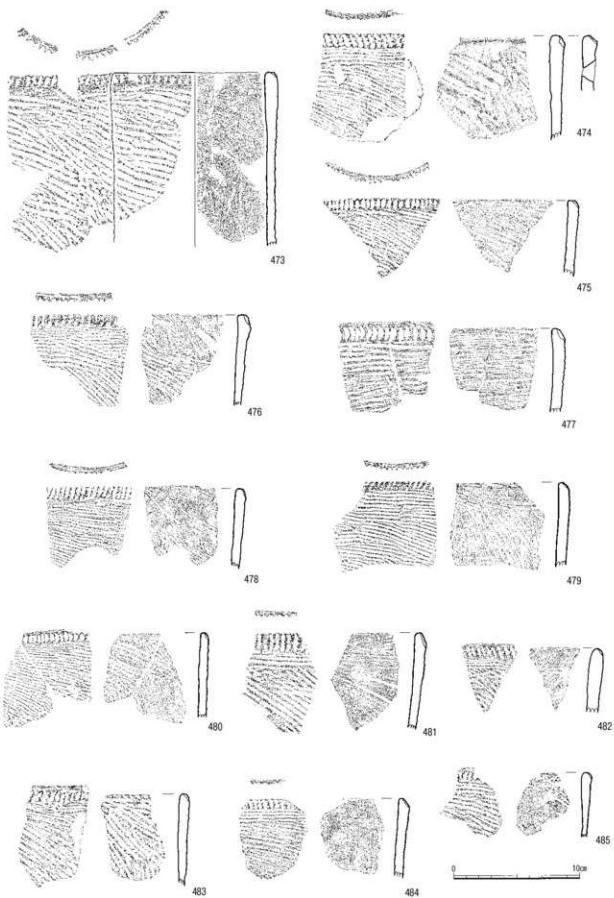
464



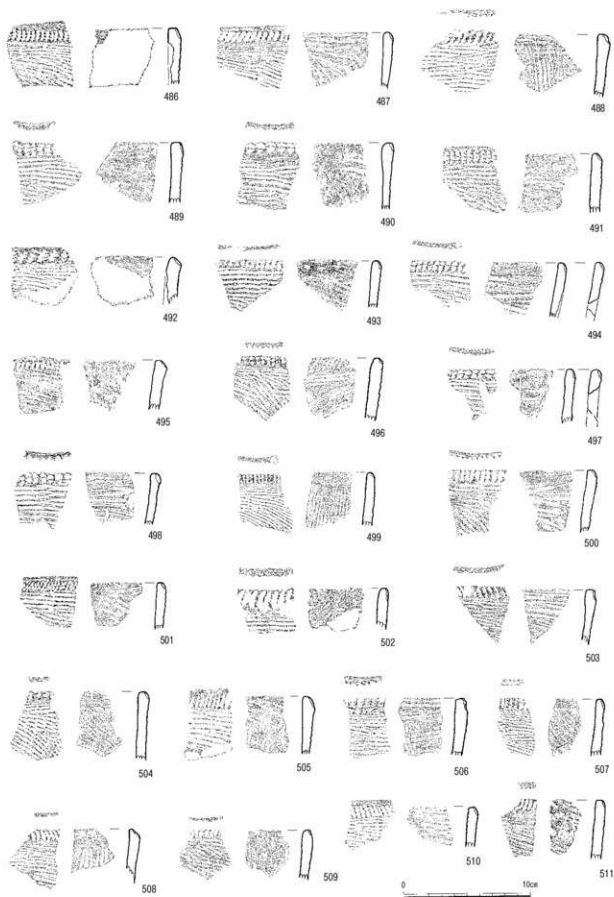
第30図 縄文土器30



第31図 縄文土器31



第32図 縄文土器32



第33図 縄文土器33

515は縦長の彫り切り技法による補修孔が作られているが、やや幅広くに彫り切られている。穿孔は完全に外面からのみ行なわれている。516は外面に粗い貝殻条痕調整が行なわれており、焼成が非常に良く、また質量も他の同程度の土器片と比較すると重く、重厚な印象を受ける土器である。

520～538は口縁部上端から口唇部にかけて2列の貝殻刺突文を巡らせる土器の一群である。口唇部がほぼ平坦に整形されており、1B類土器の口縁部断面形態と類似している。しかしながら、1B類土器は口唇部にはキザミや押圧文を施し、口縁部上端には1A類と同じようにヘラ状工具刺突文を施すという違いがあるのとは異なり、口唇部と口縁部上端に施された刺突文が同じ形態をしている。いずれにせよ535～538は1B類に非常に近い土器であると言える。

539～557は口縁部上端から口唇部にかけて1列のヘラ状工具刺突文を巡らせる土器の一群である。

566は口縁部上端から口唇部にかけて、ヘラ状工具の角部を用いて施したと考えられる三角形の形をした刺突文列が施されている。刺突文は貝殻条痕調整を行なった後に施されたこととみられ、刺突文下部の粘土が貝殻条痕の上に被さっている。内面調整は縦方向の貝殻を用いたケズリが行なわれているが、口縁部直下のみはナデ調整が行なわれている。

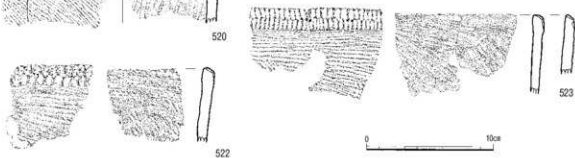
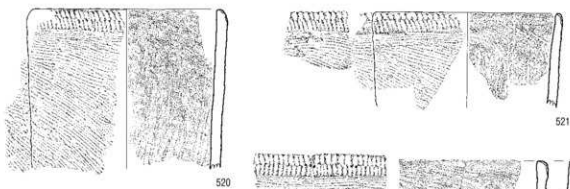
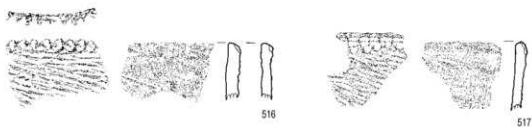
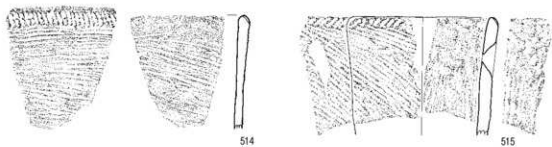
558～577は口縁部上端から口唇部にかけて2列のヘラ状工具刺突文を巡らせる土器の一群である。

570～577は2列のヘラ状工具刺突文が羽状に施されている土器の一群である。573は外面が円形に薄く剥落している。576は縦長の彫り切り穿孔による補修孔が1箇所確認できるが、補修孔付近で破損しているため詳細は不明である。しかしながら、内面に彫り切りの痕跡などは確認できない。

1B類土器 (578～699)

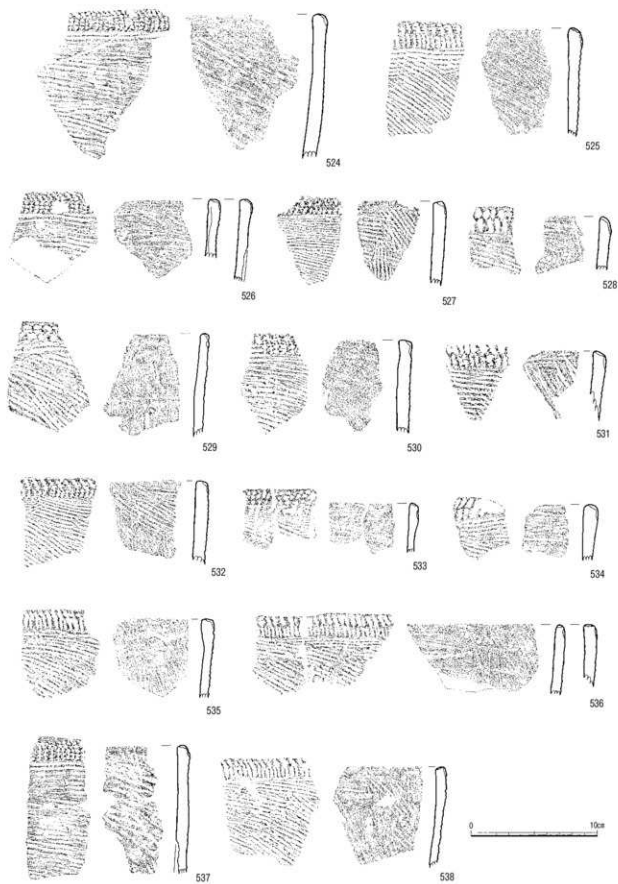
1B類土器は器形が底部から口縁部にかけてほぼ垂直に立ち上がる円筒形土器で、口唇部を平坦に整形し、口縁部上端との間に明確な稜を有する土器群である。そのため、刺突文は口縁部上端のみに施され、口唇部には口縁部上端に施される貝殻刺突文やヘラ状工具刺突文とは異なった浅い押圧文やキザミが巡らされている。また、刺突文も貝殻刺突文を施すものが減少し、ヘラ状工具刺突文を施すものが増加する。刺突文下位の貝殻条痕調整は横位方向のみに施されるものが多くなる。さらに内面調整も工具ナデのみで器面調整を施すものが増加する。

578～599は口縁部上端に貝殻刺突文を施す土器の一群である。ほぼ全ての土器が貝殻刺突文直下のみ横位の貝殻条痕調整を行ない、その下位には斜位の貝殻条痕調整を行なっているが、589のみは横位の貝殻条痕調整のみが施されていると推測される。さらに589のみ口唇部に貝殻復縁部による押圧文が施され、その他の土器の口唇部は工具ナデを主としたナデ調整が行なわれているのみで、特に文様は施されていない。578は口縁部上端に1列の貝殻刺突文を巡らし、斜位の貝殻条痕調整を施した後に、貝殻刺突文の直下に横位の貝殻条痕調整が行なわれている。そのため、貝殻刺突文直下は横位の貝殻条痕調整を行なったときに押し上げられた粘土が僅かな盛り上がりを作っている。内外面ともに器面調整は浅い貝殻条痕調整が行なわれており、内面は口縁部付近のみ工具ナデの痕跡が残っている。また、外面には胴部中ほどに炭化物が付着している。579には1対の補修孔が作られており、共に円形穿孔が行なわれているが、片方には縦長の彫り切り穿孔の痕跡も観察できる。補修孔は共にほぼ外面からのみ穿孔されているが、内面にも僅かな円形穿孔の痕跡が見られる。590は口縁部上端に貝殻刺突文の代わりに貝殻押印文が施されている。

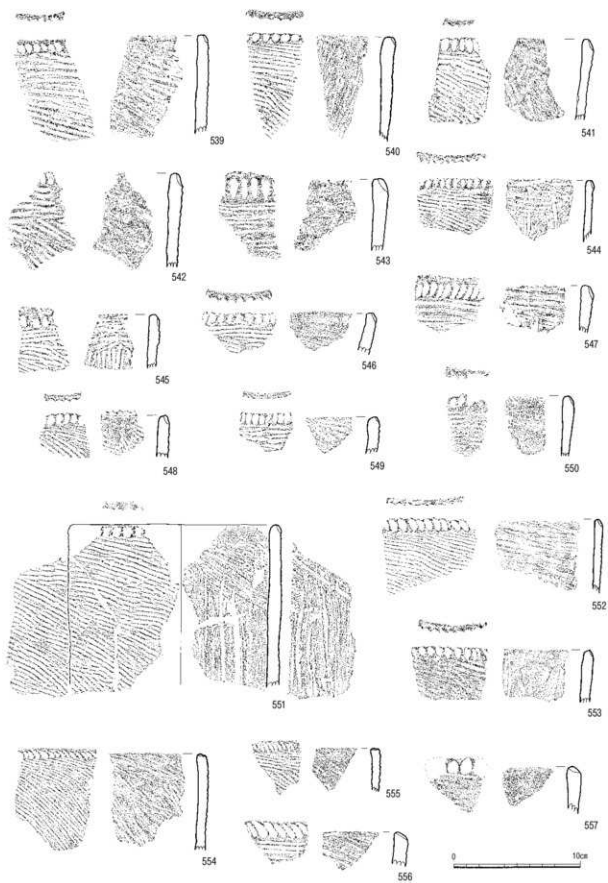


0 10cm

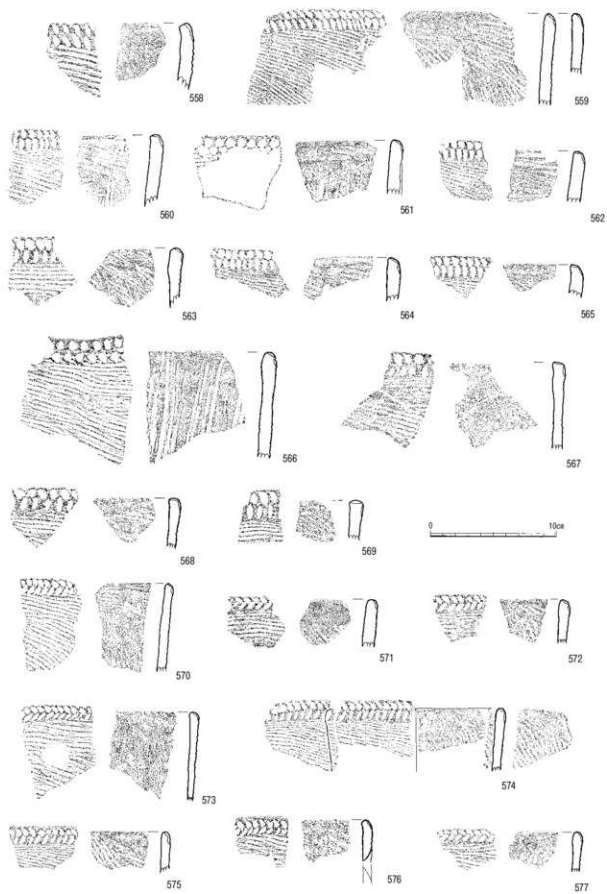
第34图 縄文土器34



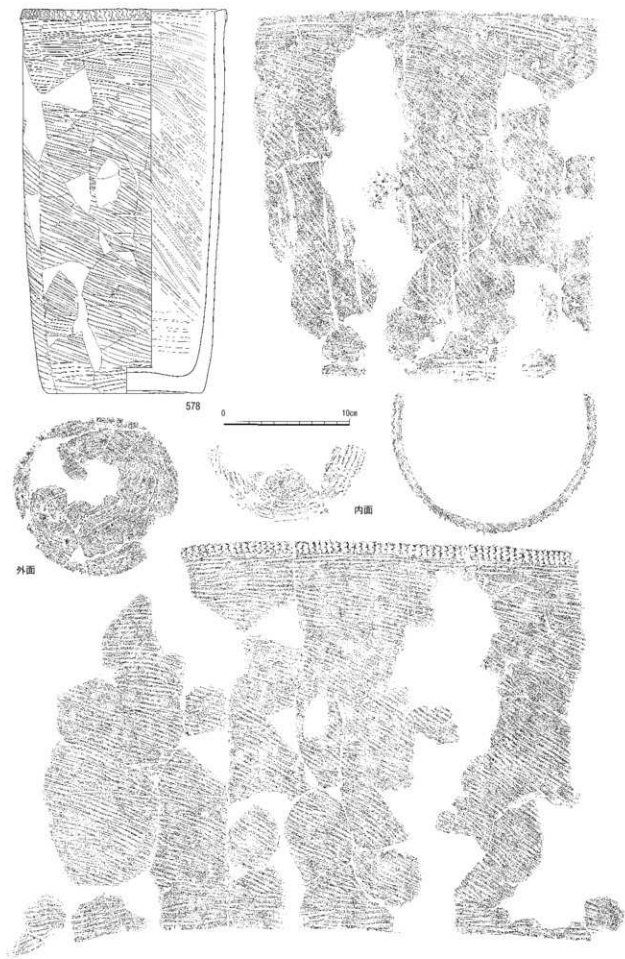
第35図 縄文土器35



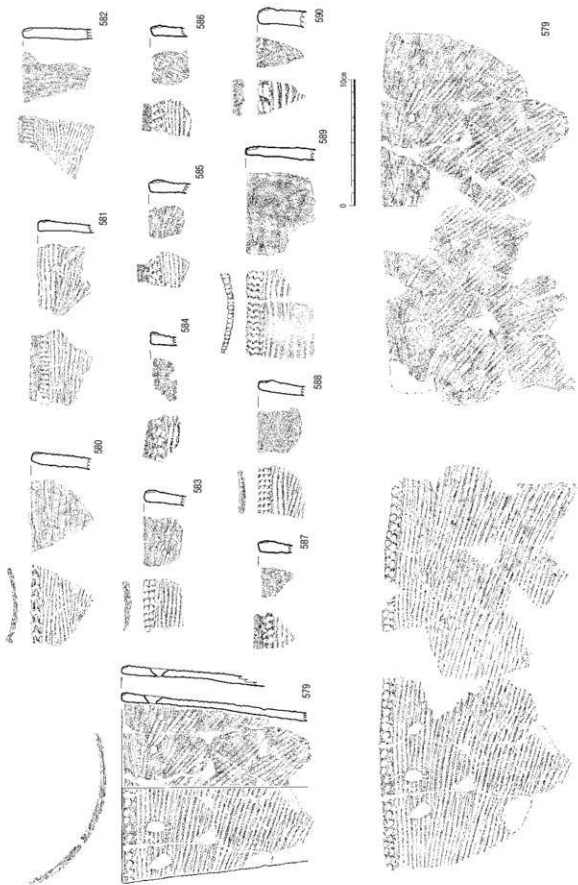
第36図 縄文土器36



第37図 縄文土器37



第38図 縄文土器38



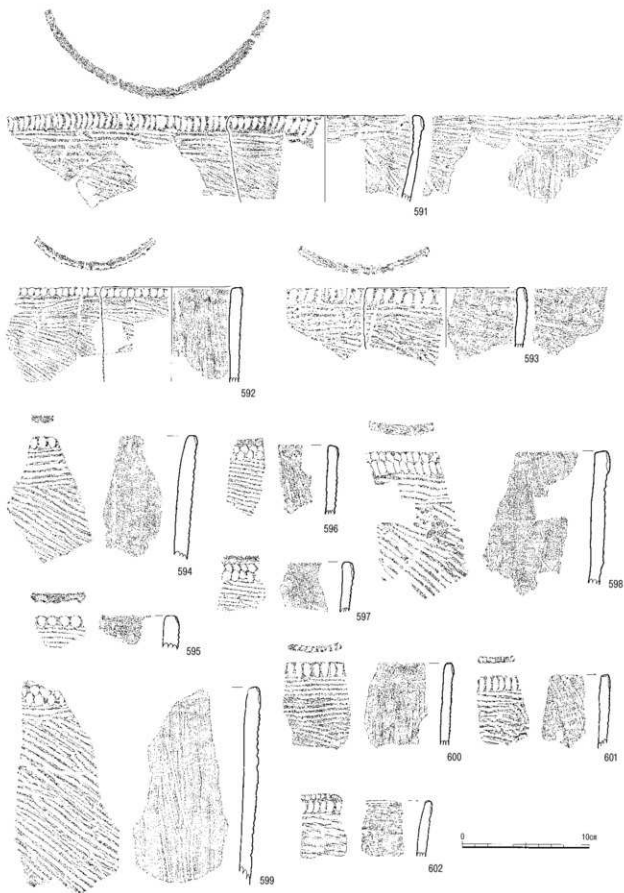
第39図 織文土器39

591～699は口縁部上端にヘラ状工具刺突文を施す土器の一群である。その中でも591～602はヘラ状工具刺突文直下のみ横位の貝殻条痕調整を行ない、その下位には斜位の貝殻条痕調整を施す土器の一群である。591～595、600～602には1列のヘラ状工具刺突文が巡らされ、596～599は2列のヘラ状工具刺突文が巡らされている。また、600～602のみ口唇部に文様が施され、それ以外の土器は特に文様は施されず、ナデ調整などが行なわれているのみである。591は口縁部上端のヘラ状工具刺突文が施される部分のみが肥厚する形状をした土器である。これは、刺突文を施した後に直下の横位貝殻条痕調整が行なわれているため、押し上げられた粘土が僅かに盛り上がることで、口唇部の平坦面を保持するためにヘラ状工具刺突文が下方に力を加えられながら施されたこと、刺突文下位の貝殻条痕調整が器壁を削る行為を伴ったことなどからヘラ状工具刺突文が施されている文様帯のみ肥厚したと考えられる。内面調整は口縁部付近のみ横位方向の貝殻条痕調整が行なわれており、その下位はヘラ状工具によるケズリが行なわれている。592は外面が薄く剥離している。器壁の厚さの半分ほどが剥落しているのとは違い接合線などは確認できない。599は外面の胴部中ほどにのみミスが付着している。600～602は口唇部に押圧文が施されている。

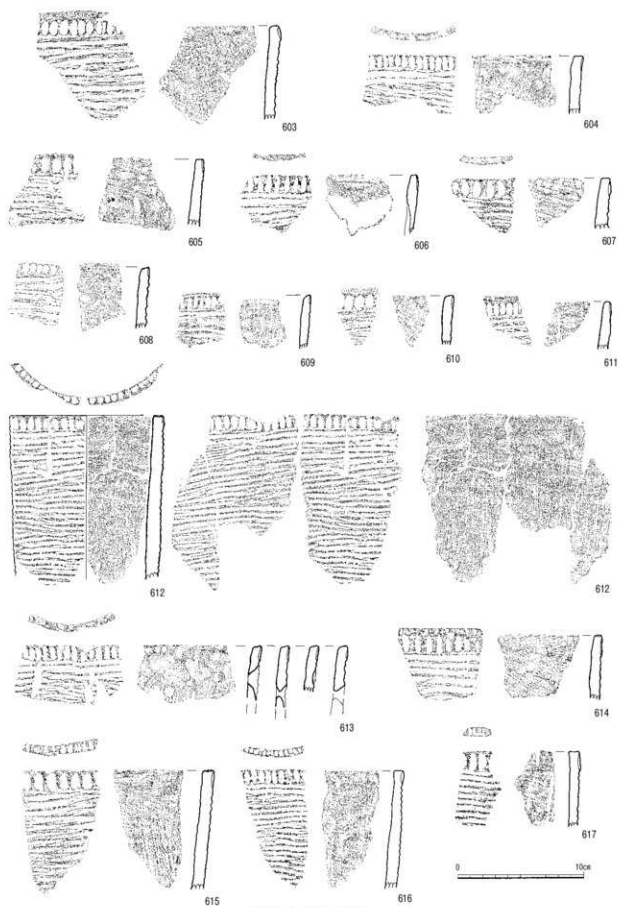
603～699はヘラ状工具刺突文の下位に横位の貝殻条痕調整のみが行なわれている土器の一群である。

603～633は1列のヘラ状工具刺突文が巡らされ、603～611の口唇部は無文、612～633の口唇部には押圧文を主とした文様が施される。612は横位の貝殻条痕調整を行なった後に口縁部上端のヘラ状工具刺突文を施したと考えられ、横位の貝殻条痕の上から刺突文が重なっているのが観察できる。613は手に平に乗る程度の土器片に4箇所補修孔が確認できる。1箇所はほぼ欠損しているが、すべて縦長の彫り切り技法が用いられており、対で残っている補修孔の一方のみが円形の回転先行を併用しているようであり、この補修孔は内面からは回転穿孔のみが行なわれている。対のもう一方は前述の通り欠損していて詳細は不明である。他の2箇所の縦長穿孔の補修孔の中で貫通している方は外面のみから穿孔が行なわれている。最後の1箇所は器面の浅い部分までしか彫り切りが行なわれていない。621は斜位方向の補修孔が作られている。縦長の形をしており彫り切り技法で穿孔されたと考えられるが、1A類土器の補修孔に作られた縦に長い彫り切りと比較すると縦の幅が短くコンパクトな形になっている。さらに内面からは円形の回転穿孔が行なわれている。628は口唇部に細かいキザミが施されている。

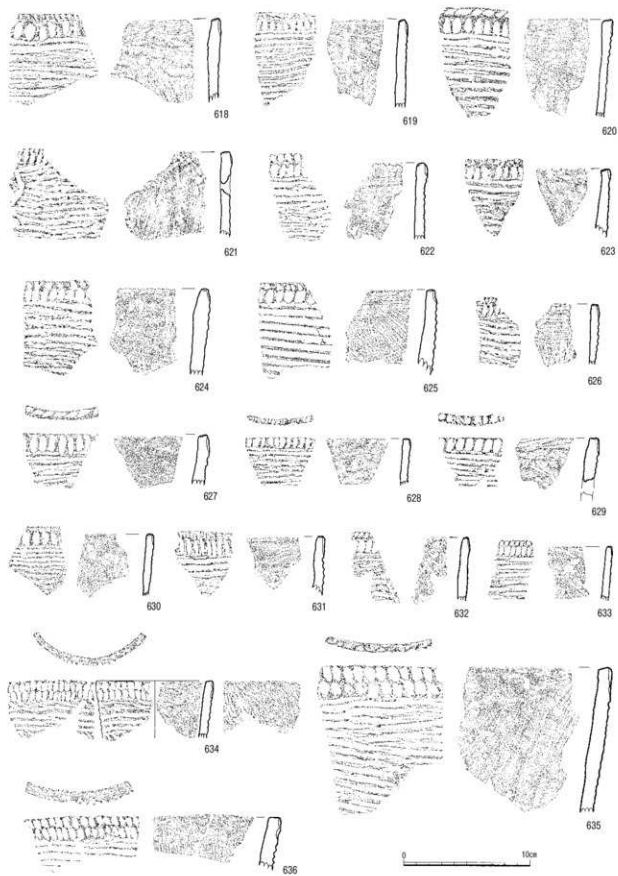
634～661は2列のヘラ状工具刺突文が巡らされる土器の一群である。634～639の口唇部は無文、640～661の口唇部には押圧文を主とした文様が施される。634はよく観察すると横位だけではなく斜位の貝殻条痕調整も行なわれている。口径が9.3cmと小さくマグカップほどの大きさと推定される。640は口縁部から胴部中ほどにかけての640-1、胴部中ほどから底部に至る640-2から成っている。その他に同一個体と考えられる2破片を拓本のみであるが掲載している。口唇部には浅く押圧文が巡らされ、口縁部上端にはヘラ状工具刺突文が互い違いに2列巡らされている。器面調整は外面は底部付近までは横位の貝殻条痕調整が行なわれているが、底部付近でやや斜位気味に変化している。内面は口縁部付近のみナデ調整が行なわれており、それよりも下位は縦位方向のケズリが行なわれている。底部は外面は工具ナデ、内面も雑ではあるがナデ調整が行なわれているようである。縦長の彫り切り技法による補修孔も1箇所確認できるが、内面からは彫り切りが行なわれておらず、回転穿孔のような痕跡が確認できる。また、640-1には口縁部付近を除いた胴部上半に、拓本のみ掲載した小さな方の口縁部片は全体にミスが付着している。640-2にはススの付着は見られない。



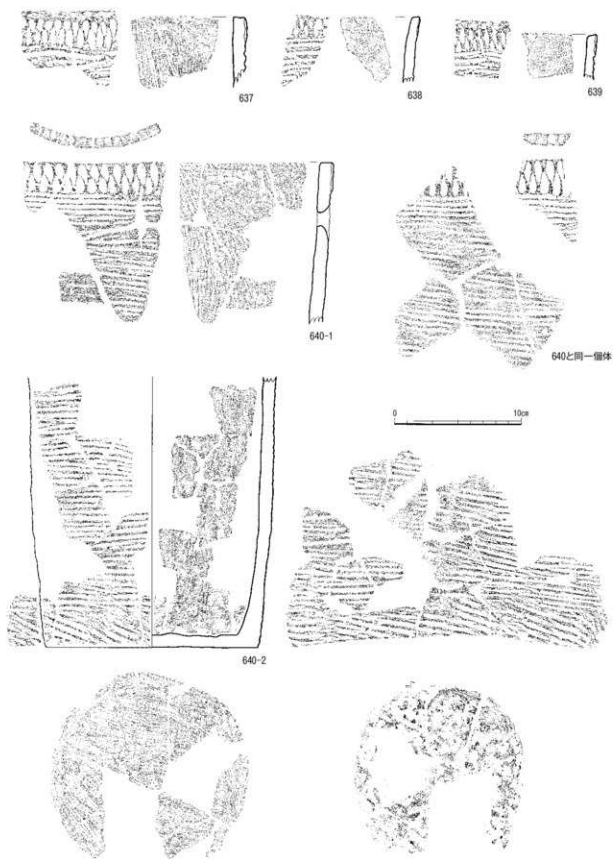
第40图 縄文土器40



第41圖 縄文土器41



第42図 縄文土器42



第43図 縄文土器43

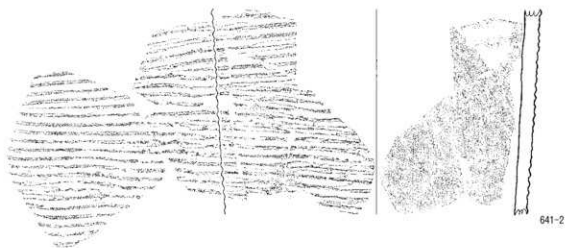
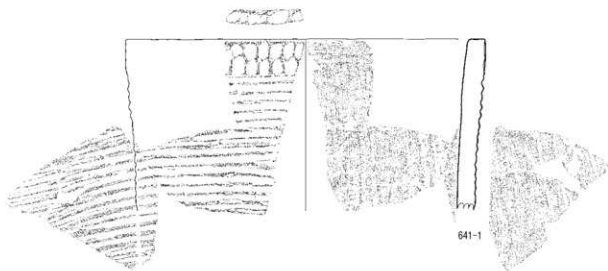
641-1～641-4は同一個体である。647は外面の広い面積が器壁の厚さの中ほどまで剥落しており、口縁部付近の刺突文の施されている部分に炭化物が付着している。649は器壁の厚さが約1.5cmの重量感のある土器片である。円形穿孔による補修孔が1箇所あり、ほぼ外面からの穿孔であるが、極僅かに内面からも円形穿孔が行なわれている。また、土器の器面に浅くではあるが縦長の彫り切り痕が残っている。刺突文帯を含む口縁部付近には炭化物の付着が見られる。656・659・660は全て補修孔の部分が破損しているが、残存部分から彫り切り技法を用いた縦長穿孔が行なわれていたと考えられる。

662・663は口縁部上端のヘラ状工具刺突文が斜位に2列施される土器である。663には彫り切り技法による縦長の補修孔が途中まで穿孔されている。穿孔の痕跡は外面のみに確認できる。

664～677は口縁部上端のヘラ状工具刺突文が1列目には縦位方向に、2列目には斜位方向に施される土器の一群である。664は内外面共に磨減が激しく、触るとほろほろと表面が剥がれ落ちる。665は胎土中に5mmほどの小礫が含まるなど非常に粗い胎土から作られた土器である。また、内面調整も粗いケズリが施されており、ケズリの工程中に小礫が動くことによりできた筋がそのまま残っている。

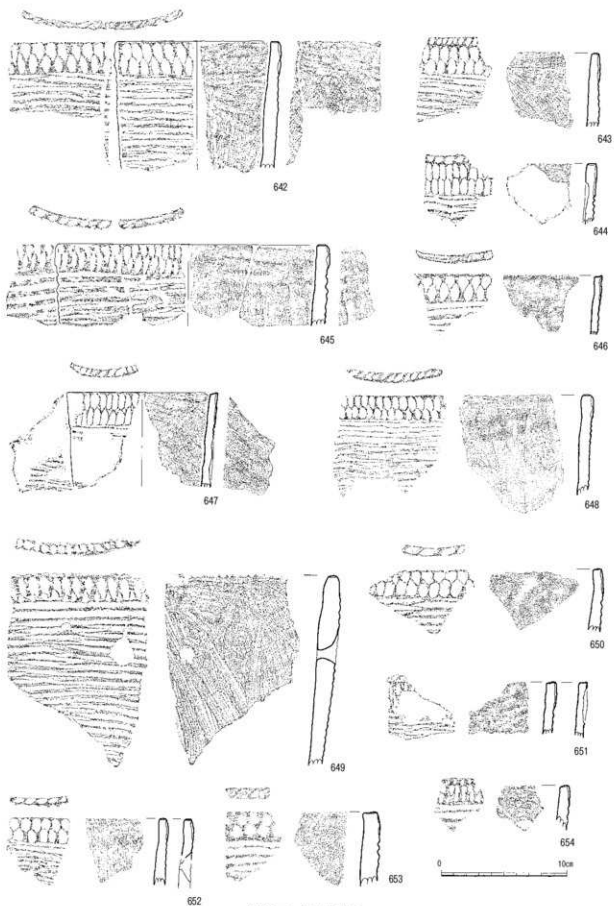
678～693は口縁部上端に2列の刺突文を巡らせる土器の一群であるが、1列目と2列目では刺突文を施す施文原体が異なっている。678～691は刺突文の1列目がヘラ状工具刺突文、2列目が貝殻刺突文で文様が施されている。678は平坦に整形した口唇部にナデ調整を施し、器面調整は外面は横位の貝殻条痕調整、内面の口縁部付近は横位、それよりも下位は縦位のケズリが行なわれており、ケズリが行なわれている面は非常に滑らかに整えられている。彫り切り技法を用いて穿孔された縦長の補修孔があり、内面の補修孔の周りには、貫通したときにできたと考えられる剥離が見られるのみで、穿孔の痕跡は無い。679は波状口縁を呈すると考えられる土器である。681にも補修孔が確認できるが、残存状況が悪いためにどのような形状の補修孔が穿孔されていたかはよく分からない。683は器壁の厚さが約1.5cmの重量感のある土器片である。外面が器壁の厚さの中ほどまで大きく剥落している。また、口縁部付近にのみ炭化物が付着している。685は非常に焼成がよく硬質な土器片である。しかしながら、内面は器壁の厚さの中ほどまで広く剥落している。692は刺突文の1列目がヘラ状工具刺突文、2列目が細い筒状の原体を用いた竹環文で文様が施されている。693は1列目がヘラ状工具刺突文、2列目が2連を一単位とした縦位の貝殻刺突文で文様が施されている。

694～699は口縁部上端に施される刺突文が3列で形成される土器の一群である。694・695は刺突文の1列目を縦位、2・3列目を斜位のヘラ状工具刺突文で文様を施している。ただし、695に関しては3列目の刺突文は直下の横位貝殻条痕調整によって半分以上が潰れてしまっている。696・697は細いヘラ状工具により1列目は縦位、2・3列目は羽状の形になるように斜位方向の刺突文が施されている。696・697は口唇部のケザミ目、胎土、焼成の違いから別個体であると断言できるが、それ以外は全く同じ文様や調整が施されている。698・699は口唇部に向かい先細りするが、口唇部は平坦に整形されている。口縁部上端には、1列目に縦長のヘラ状工具刺突文、2列目に貝殻棒状の工具を用いたと考えられる刺突文、3列目に1列目と同じ工具で施しているが、やや短めの刺突文が施されている。3列目のヘラ状工具刺突文に関しては、直下の横位貝殻条痕調整に切られているので、本来は1列目と同じ位の長さの刺突文であった可能性がある。彫り切り技法によって穿孔されたと考えられる補修孔が1箇所確認できるが、上下に長く彫り切りの痕跡が見られる縦長の補修孔ではなく、彫り切りの幅が短いコンパクトな補修孔である。698・699は同一個体の可能性がある。

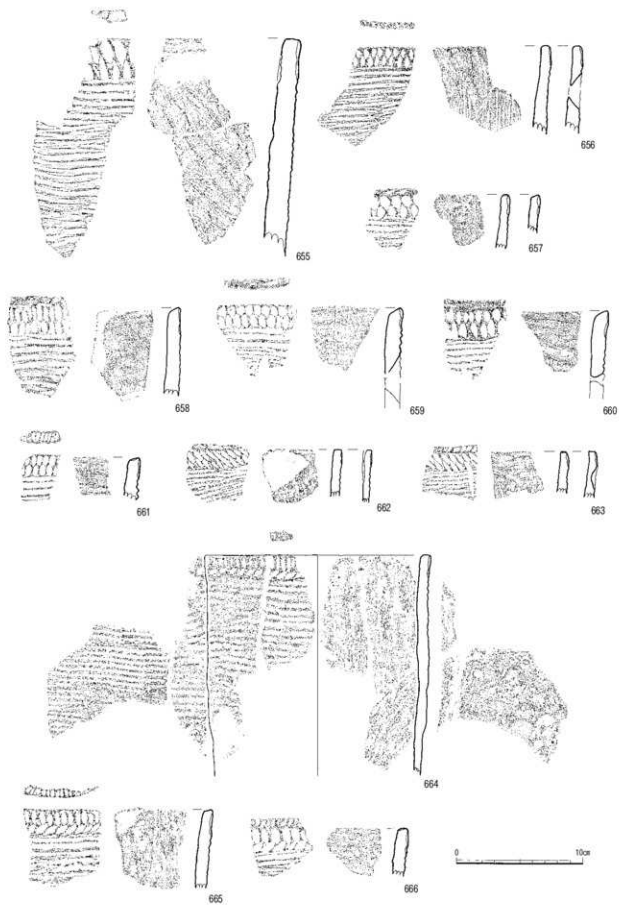


0 10cm

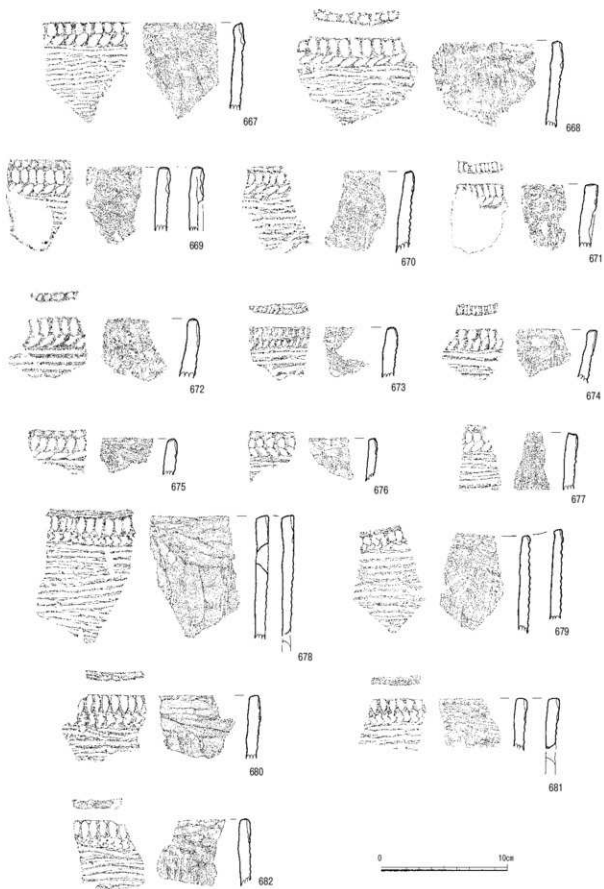
第44図 縄文土器44



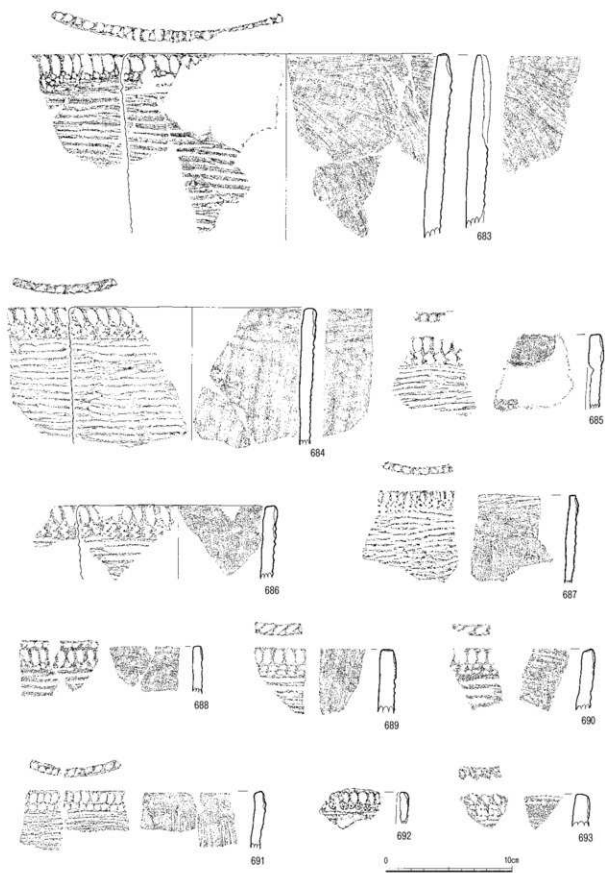
第45図 縄文土器45



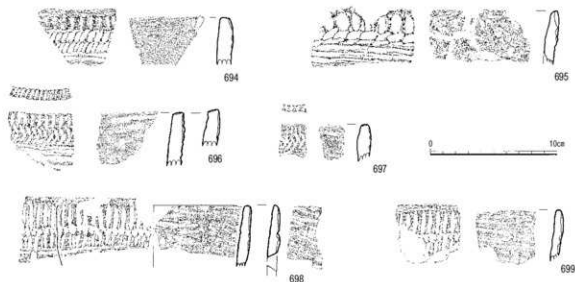
第46図 縄文土器46



第47图 縄文土器47



第48図 縄文土器48

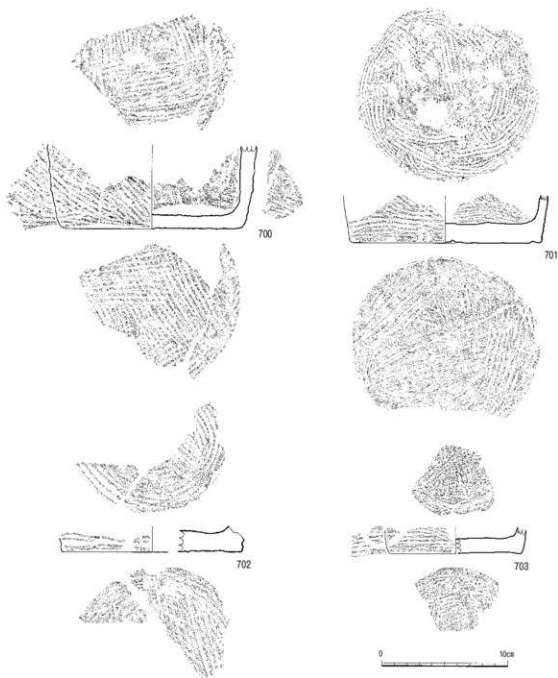


第49図 縄文土器49

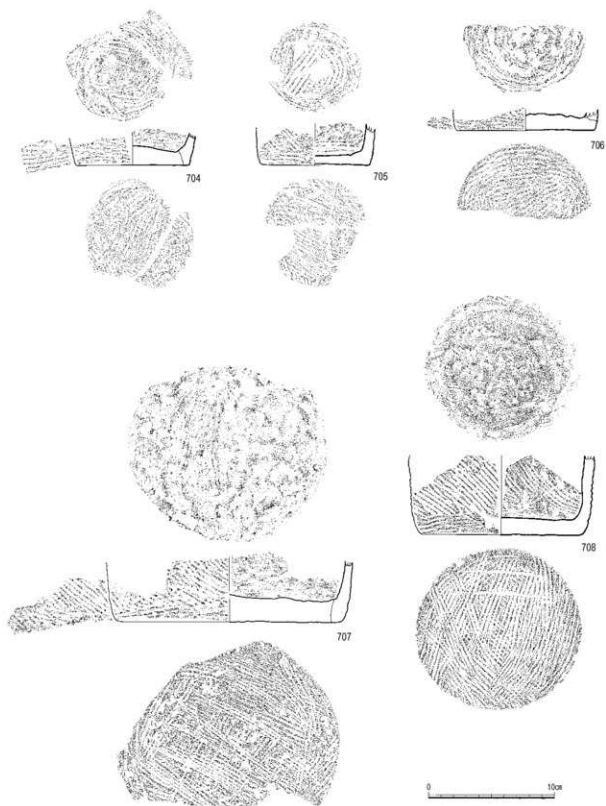
1類土器底部 (700~802)

700~777は1類土器の底部である。底部の特徴だけでは1 A類と1 B類の区別がつかないために1類土器底部として一括して扱う。701は内面底部縁辺部に沿って貝殻条痕調整を行ない、中心に近い部分是指ナデなどが行なわれている。このように内面底部縁辺部に行なわれる円形の貝殻条痕調整は、胴部と底部の接合線を消すために行なわれたと考えられる。また、内面は底部のみ黒く変色しており、一部は黒色の縁辺に炭化物が付着している。703は胴部の底部と接する部分に横位の貝殻条痕調整が行なわれている。内面底部には貝殻の腹の部分を用いた押圧が行なわれている。704は断面観察をすると内面径が大きく外面径が小さい底部のパーツに横から胴部のパーツを接合している接合線が確認できる。705も704と同じように底部と胴部を接合していたと考えられる接合面が底部部分で確認できる。706はその割れかたから、円形の底部パーツの上に胴部パーツを乗せる形の接合がされていたと考えられる。707は破損した底部片の側面に接合面が残っていることから、横方向からの接合が行なわれたと考えられる。708は外面底部に底部径(約13cm)よりも一回り小さい(直径約10cm)の円形の黒色に変化した部分が見られる。709は底部の側面に接合面が確認でき、また底部と胴部の境目にも外面底部へと延びる縦方向のヒビが確認できることから、横方向からの接合が行なわれた可能性が大きい。さらに、外面底部の中心に近い部分が器壁の厚さの半分ほどまで剥落しており、その剥落部分と同じ位置に接合線らしきものが確認できる。710は内面底部に貝殻の腹の部分を用いた押圧が内面底部縁辺部に沿うように円形に施されている。711・712は底部付近の胴部と底部の縁辺部のみの破片であり、底部の中心部分のみ欠落している。713は内面底部の縁辺部に沿って丁寧な円形のヘラ状工具を用いたと考えられる工具ナデ調整が行なわれている。一単位の工具ナデの幅は約1.8cmである。円形に行なわれた工具ナデから外れた内面底部中心部は、工具ナデが行なわれてはいるが雑であり少し盛り上がっている。715は底部の側面に接合面が確認できる。717は直径が約7cmの小型の土器である。胴部外面には他の1類土器と同じように貝殻条痕調整が行なわれているが、底部付近のみ通常の工具ナデ痕よりも目の細かい工具ナデの痕跡が残っている。この小型の土器も断面観察により底部に横方から胴部が接合されていることがわかる。また、底部の側面に接合面も確認できる。719・720は底部の側面に接合面が確認できる。724も

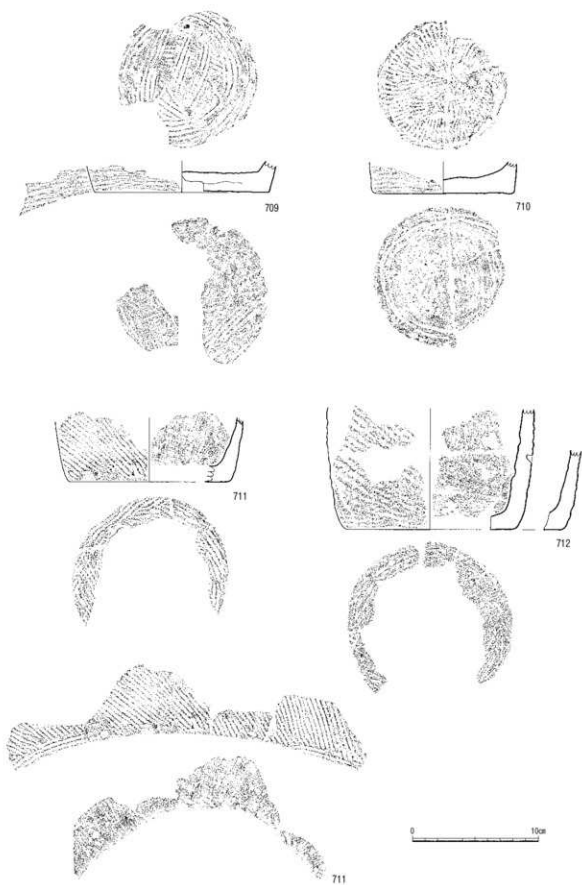
円形に割れた底部片の側面全周に接合面が確認できる。また、胴部内面には器壁の厚さの中ほどまで剥落が見られ、底部付近には炭化物と考えられる黒色の粒子の付着が見られる。さらに胎土には赤色の粒子が含まれており、部分的に赤褐色のマーブル状の発色が見られる。725も底部の側面に接合面が確認できる。726は胎土に1～2mm程の小礫が大量に含まれており、そのせいか器面が非常に脆くなっておりボロボロと崩れ落ちる。727は底部に底部径より一回り小さい径の黒色に変化した部分が見られる。728は円形の底部片の側面に接合面が確認でき、胴部と接合された状態の断面をよく観察すると、底部と胴部を接合した後にくらかの粘土を内面底部に貼り付け、底部と胴部の接合面を補強している様子が観察できる。730は底部外面の一部が器壁の厚さの中ほどまで剥落している。



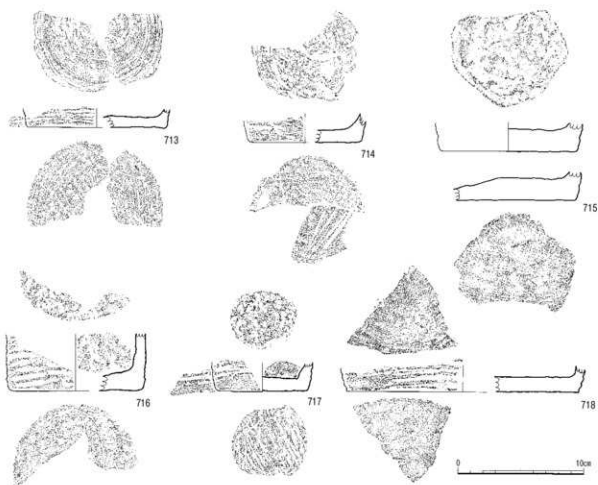
第50図 縄文土器50



第51図 繩文土器51



第52図 縄文土器52



第53図 縄文土器53

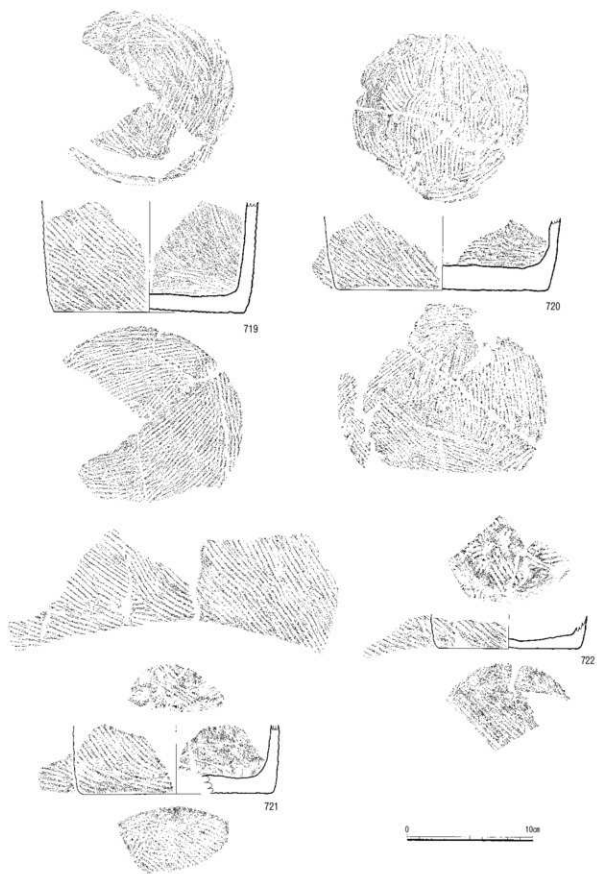
表1 1類土器底部における底部と胴部の接合状況一覧

番号	接合状況	確認方法
704	側面	接合面・線
706	上面	割れ方
707	側面	接合面
709	側面	接合面・ヒビ
711	側面	割れ方
712	側面	割れ方
715	側面	接合面
717	側面	接合面・線
718	側面	接合線
719	側面	接合面
720	側面	接合面
724	側面	接合面

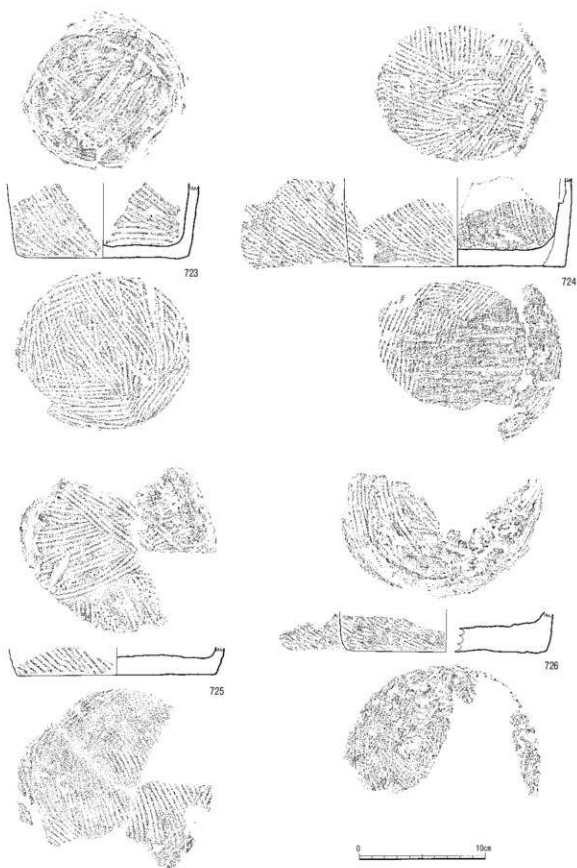
番号	接合状況	確認方法
727	側面	接合面
728	側面	接合線
732	側面	割れ方
737	側面	接合線
739	側面	接合面
741	側面	接合面
747	側面	接合面
752	側面	接合線
754	上面	接合面
755	側面	接合面
761	側面	接合面
762	側面	接合面

番号	接合状況	確認方法
763	側面	接合面
764	側面	接合面
766	側面	接合面
767	側面	割れ方
769	側面	接合面
770	上面	接合面
771	側面	接合面
772	上面	接合面
773	側面	接合面
775	側面	割れ方

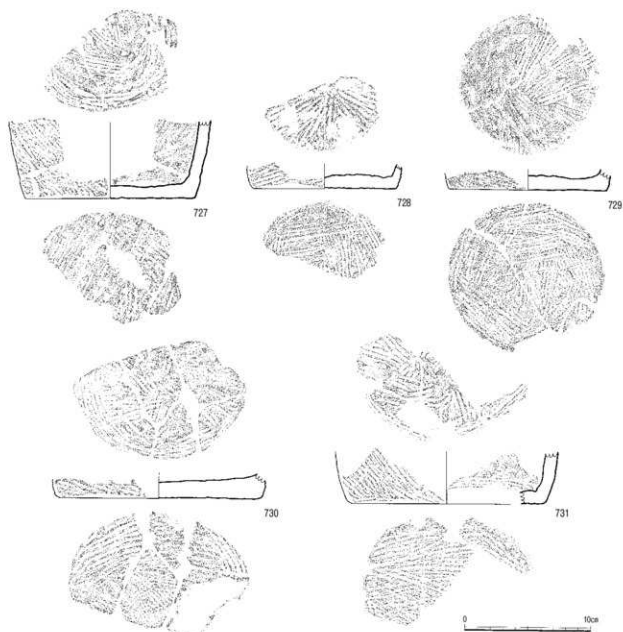
※確認方法は接合面や接合線（「線」と省略）のように目に見えて確認できるものと比較して、割れ方やヒビのように表面的な特徴で確認しているものは精度が落ちる。



第54図 縄文土器54

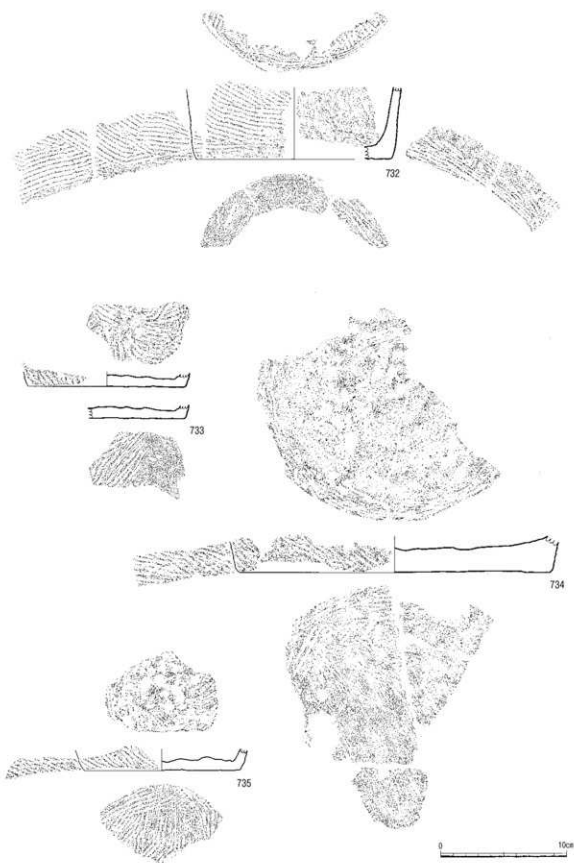


第55図 縄文土器55

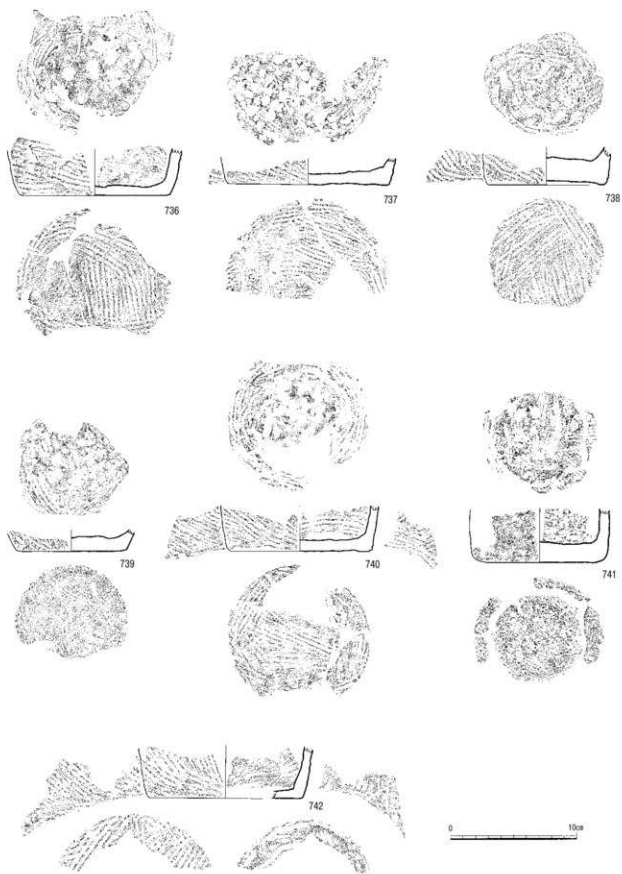


第56図 縄文土器56

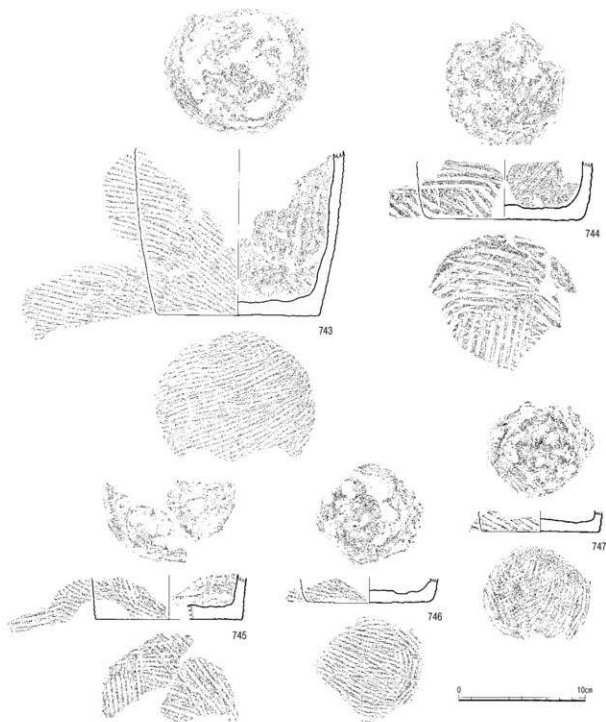
732は底部の中心に近い部分が円形に欠落しているのが分かる。3つの破片から成っているが、同じ位の幅で縦方向の割れ方をしているのが特徴である。733は内面底部の器面調整が縁辺部は中心に向かう貝殻条痕調整、中心部は指押さえのような痕跡が残っている。貝殻条痕調整は底部と胴部の境目に刺突後に引かれた様で、貝殻腹縁部の痕が貝殻刺突文のような形状で残っている。外面底部は貝殻条痕調整が行なわれる部分と工具ナデが行なわれる部分に分かれて存在している。736は外面底部縁辺部にキザミが施されている。底部付近の胴部や外面底部に施されている貝殻条痕調整を切っていることから、器面調整の後から施されたと考えられる。737は断面観察から底部側面に僅かだが接合線が確認できる。739は底部側面に接合面が確認できる。741は円形に割れた底部片の側面に胴部片が接合されている。接合された胴部片は、ほぼ同じ幅で縦方向に割れているのが特徴である。



第57図 縄文土器57



第58図 縄文土器58



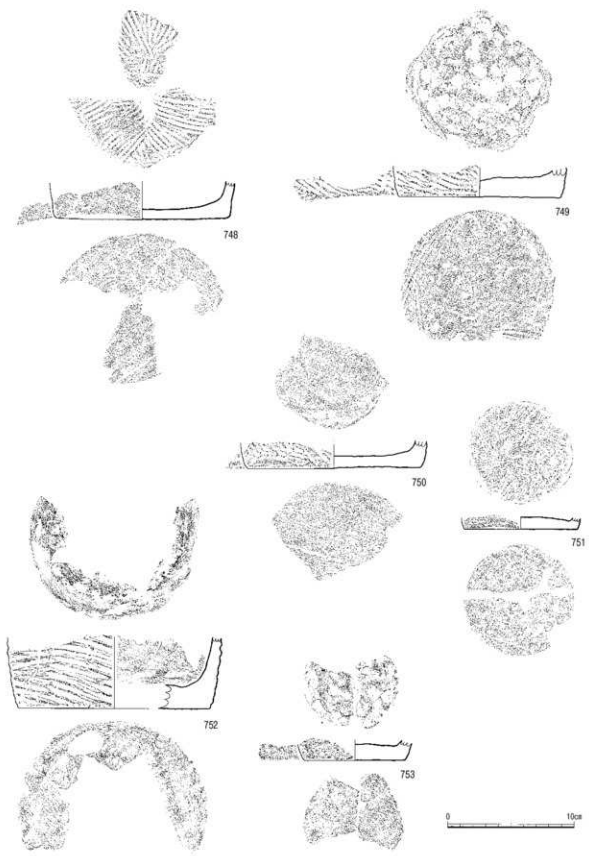
第59図 縄文土器59

743～746は内面底部に指押さえの痕跡がはっきりと残っており、指の形の窪みが見られる。747は底部側面に接合面が確認できる。748は内面底部と胴部が接合する底部縁辺部にかけて器壁が厚くなっており、底部と胴部を接合した後に上から粘土を貼り付けて補強した可能性がある。また、外面底部には底部径より一回り小さい黒色に変化した部分が確認できる。外面底部には器面の表面だけが薄く剥がれた剥離があり、その断面から黒色のごく表面的な変化であることが分かり、黒斑であると考えられる。

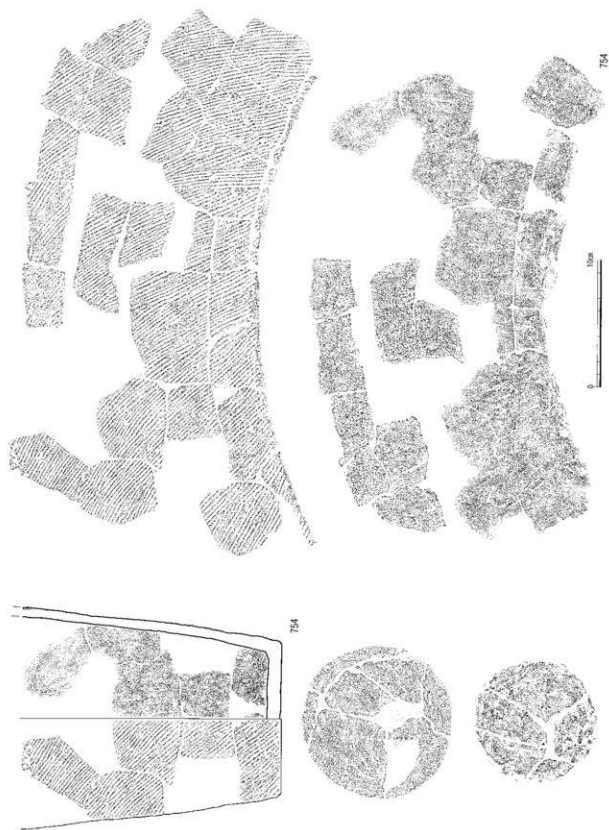
749は内面底部に指押さえの痕や、先端が角張った棒状の工具で刺突したような痕が残っている。750は内面底部に非常に丁寧なナデ調整が施されている。752は断面観察により胴部を底部の側面に接合している接合線が確認できる。また、この土器片は3つの小破片から成っているが、これにヒビの入っているところを合わせると、ほぼ均等に5等分に縦方向に割れていることが分かる。754底部から口縁部上端の刺突文まで確認できるほぼ関係に近い土器である。しかしながら口縁部断面形態が確認できないためここで紹介することにする。口縁部上端に施されている刺突文は一見すると貝殻刺突文のようにも見えるが、細部が珍しい形態の文様になっており、貝殻の肋を用いたか、もしくは他の工具を用いた可能性もあり、詳しくは分からない。さらに、この土器は径約12cmの底部の上面に胴部パーツを乗せる形で成形されている。まず底部直上に高さ3cm幅の粘土が積まれ、その上にも同じく3cm幅の粘土が積み上げられていることが土器片の接合状況から観察でき、その破片の上下の断面に接合面と考えられる滑らかな面が確認できた。残念ながらそれよりも上面は残りが悪く、確認できたのは下から2段のみである。また、この2段に積み上げられた粘土の帯は、土器をほぼ8等分する形に縦位方向にも割れている。この土器に関してはまとめても取り上げ、さらに詳しく分析することにする。755は底部側面に接合面が確認できる。757・758は胴部から底部付近の破片である。内面に底部との接合面が確認でき、底部側面と接合されていたことが分かる。761～764・766は内面底部の側面に接合面が確認できる。761・763・764は側面観が内部径が小さく外部径が大きい台形状を呈しており、762は部分的な確認しかできないが内部径のほうが大きい台形状を呈している。また764は内面底部の一部、器壁の厚さの中ほどまで剥落している。767・769・771・773は内面底部の側面に接合面が確認できる。また775は底部片の割れかたから側面で接合されていた可能性が考えられる。770・772は内面底部の上面に接合面が確認でき、772は内面底部の縁辺部に幅約1.5cmの接合面の帯がきれいに一周している。ただし、772は7下層から出土している点からここに掲載したが、極端に底部の厚さが薄い点や胎土観察などから塞ノ神式土器の底部の可能性がある。777は底径5cmの小型土器の底部である。

778～782は胴部に横位の貝殻条痕調整が行なわれる1B類土器の底部片である。778は外面底部に編物圧痕が残っており、いわゆる網代底になっている。内面底部は縁辺部しか確認できないが、胴部と底部の接合部分に指ナデが行なわれている。また、外面胴部は横位の貝殻条痕調整が行なわれているが、胴部下半にはこの横位貝殻条痕調整の上からケズリが行なわれている部分が見られる。779～782は底部の側面に胴部を接合したと、779・780は割れ方から、781・782は接合面から考えられる。782は外面胴部の底部付近に横位の貝殻条痕調整が行なわれ、その上位には縦位の貝殻条痕調整が行なわれている。

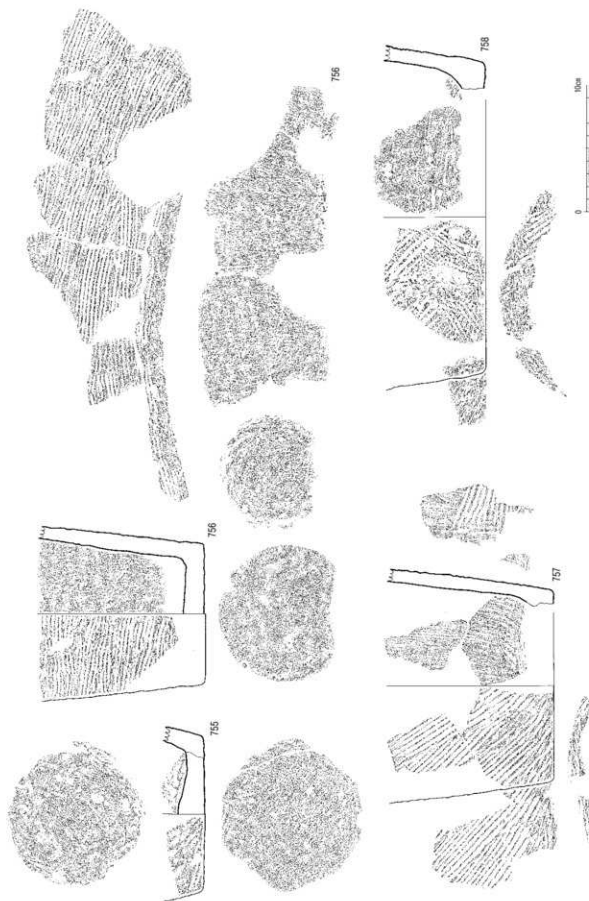
783～802は底部に編物圧痕が残る網代底の土器である。786は割れ方から底部の上面で胴部と接合された可能性が考えられる。795・802は底部付近の胴部片であるが、内面最下部に底部の側面と接合する接合面が確認できる。796は底部から胴部にかけて真っ直ぐ立ち上がるのではなく、斜位方向に立ち上がる土器である。この胴部が底部付近で斜位方向に立ち上がる点に加えて、底部と胴部の間には接合の僅かな痕跡も見られない点、胴部と底部の器壁の厚さが同じである点から、粘土を折り曲げて胴部から底部にかけての角部を成形した可能性がある。801も底部の側面に接合面が確認できる。内面底部は平坦ではなく、縁辺部から端部に向かって徐々に立ち上がる形状をしている。



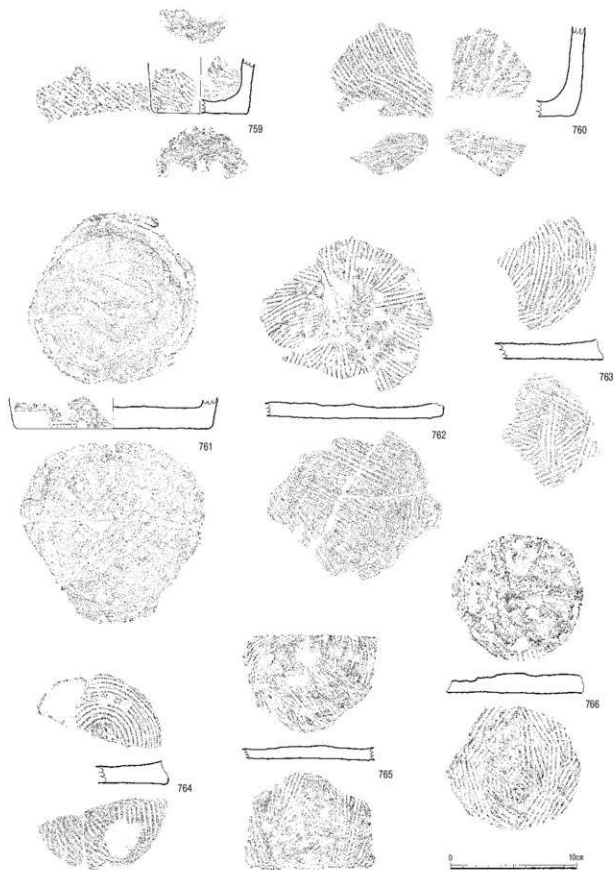
第60図 縄文土器60



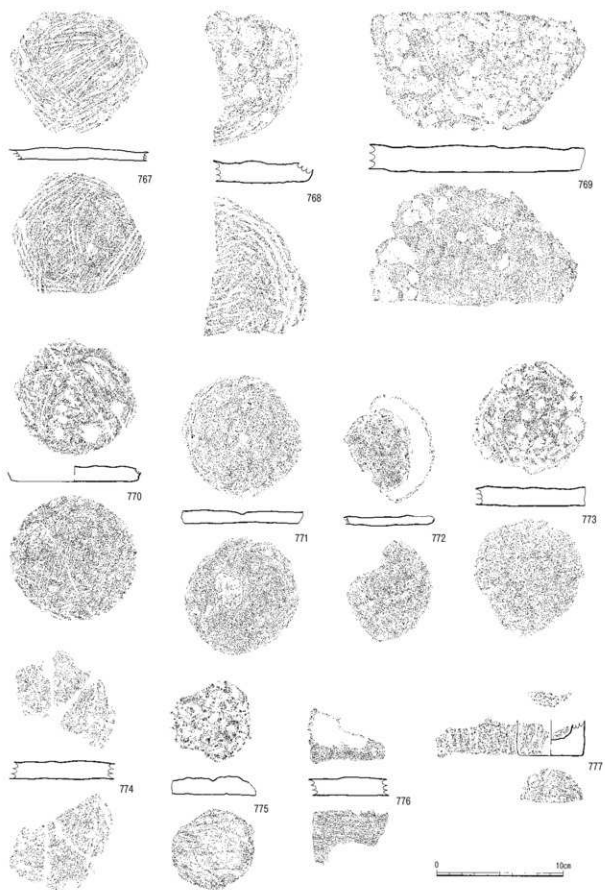
第61图 補文士器61



第62図 補文土器62



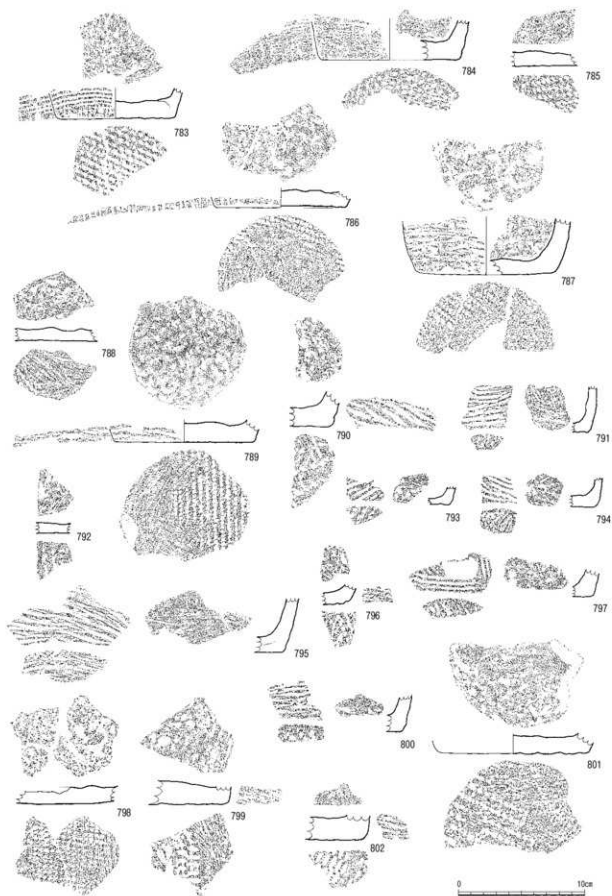
第63図 縄文土器63



第64図 縄文土器64



第65図 絹文土器65



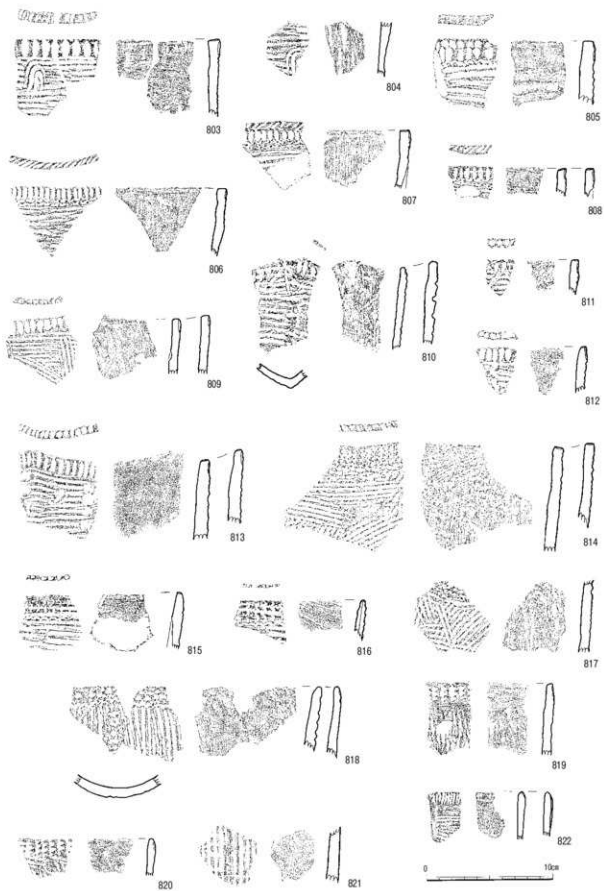
第66図 縄文土器66

2類土器 (803~983)

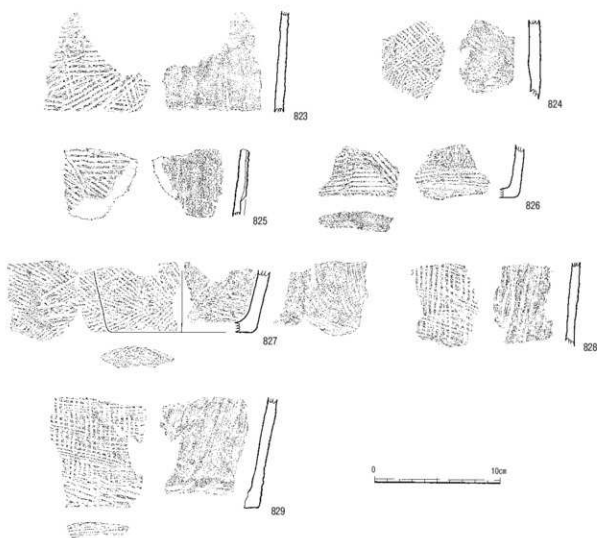
2類土器は、1類土器で口縁部上端のみに刺突文という形で施されていた文様が、胴部にまで下ってくるという特徴を持っている。2類土器は、その施文部位や文様構成から2A・2B・2Cの3つに細分しており、それぞれ、胴部上半のみではあるが文様や、文様を意識したと考えられる貝殻条痕調整が施される2A類、胴部下半にまで刺突文・流水文など様々な文様が施される2B類、胴部の文様の主体が連続した貝殻刺突文になる2C類となっている。2類土器の中には波状口縁を呈するもの・「上角下円」の器形を持つ土器・角筒土器・円筒土器・レモン形土器が含まれている。

2A類土器 (803~829)

2A類土器は1B類土器と比較して、口唇部を平坦に整形し押圧文などを施す点や、胴部に横位の貝殻条痕調整を行なう点が類似し、口縁部上端に1列のやや長めの縦位方向の貝殻刺突文を施す点、その刺突文の下位に横位の貝殻刺突文1~2条を巡らせる点、胴部に文様、または文様を意識したと考えられる貝殻条痕調整が行なわれている点が異なっている。ただし、胴部に施される文様や、文様を意識したと考えられる貝殻条痕調整は胴部上半のみに限られる。803~813は口唇部を平坦に整形する点や、口縁部上端に1~2列のヘラ状工具刺突文を施す点など1B類土器と類似する点が多い。803・804は胴部に行なわれる横位の貝殻条痕調整の一部が半楕円形になっている。貝殻条痕調整の行なわれ方・内面調整・胎土の違いから803と804は同一個体とは考えにくい点、少なくとも2個体はこのような土器が存在していることになる。また、曾於市狩保遺跡中央部でも同様の土器が出土している。805~808は1~2列のヘラ状工具刺突文の直下に横位の貝殻刺突文が2条巡らされている。809は胴部の貝殻条痕調整が横位に加えて、縦位や斜位方向にも行なわれている。810・811は角筒土器である。口縁部上端の刺突文下に、貝殻腹縁部を用いて施された短沈線文（以下、貝殻を用いて施された沈線文を「貝殻沈線文」とする）が斜位や縦位に施されている。また、810の角部には貝殻腹縁部を用いて刺突文が施されており、これが「m」や「ひ」に似た特徴的な形状に見える。812・813は胴部の文様が胴部下半にまで拡がる可能性があるが、口縁部断面形上や刺突文など2B類よりも2A類に類似する特徴が多いため2A類土器とした。812には貝殻腹縁部を用いた流水文が縦位に1条施されている。813は角筒土器であり、波頂部直下や胴部の中心には貝殻腹縁部を用いた刺突文が縦位方向に間隔を空けて施されている。この貝殻刺突文は810に施される刺突文よりも浅く刺突されるために、貝殻腹縁部の先端だけが器面に刺さり、まるで点を横に二つ並べたような2連点状の刺突文となる。また813には、その胴部に横位の貝殻条痕調整が一部変化する部分が見られるが、これが意図して行なわれたものかは、破片資料であり全体が把握できないこともあり不明である。814~816は口縁部上端に縦位の貝殻刺突文を1列巡らし、直下に横位の貝殻刺突文を1~2条巡らす土器である。814は胴部の貝殻条痕調整が多方向に行なわれ、815・816は胴部上半から口唇部にかけて器壁が薄くなる断面形状をしている。また、816は断面に縦方向の接合線が確認できる。817は口縁部が破損しているが、横位の貝殻刺突文が2条巡らされている。818~821は胴部の貝殻条痕調整が縦位方向に施される土器の一群である。818は縦位の貝殻刺突文が施される部分がやや角張り、上面観や角部の開きの角度から、わずかに角をもつ上角下円形かレモン形の器形をもつ土器と考えられる。822は縦長の貼付突帯をもつ土器である。823~829は胴部から底部の破片である。貝殻条痕調整が多方向に行なわれているが、828・829などは貝殻条痕調整が横位と縦位方向に二重に行なわれているため格子文様のように見える。



第67図 縄文土器67



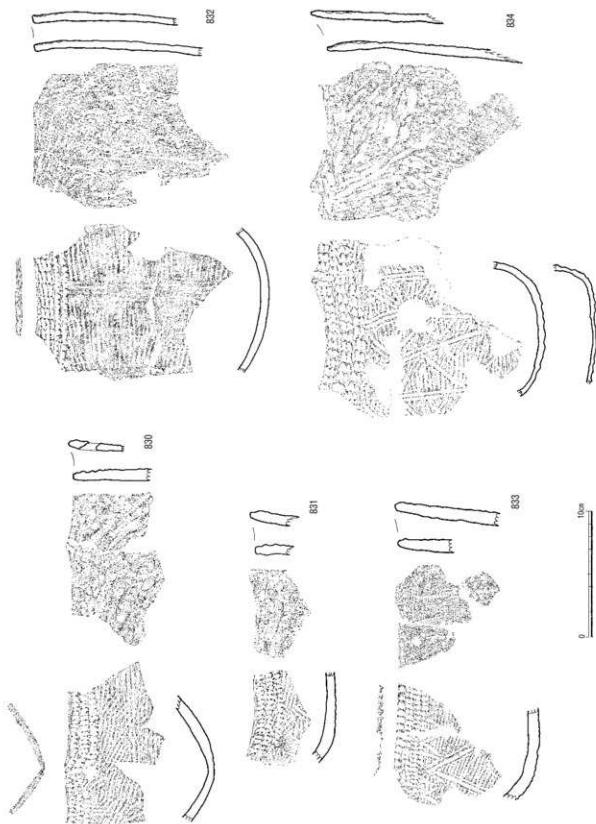
第68図 縄文土器68

2B類土器 (830~927)

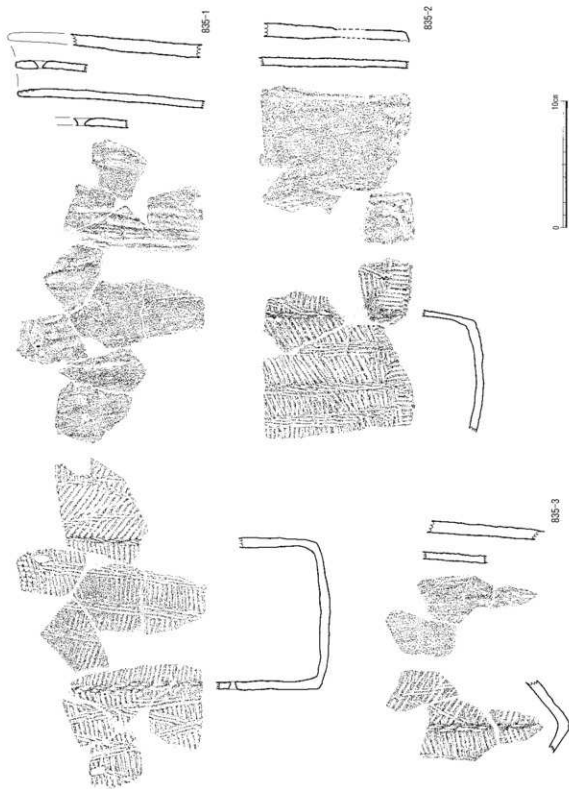
2B類土器の特徴としては外面胴部に施される文様の範囲が外面全体に拡大し、施される文様の種類も増え、単独ではなくいくつかの文様が組み合わせられて施されることが挙げられる。引き続き口唇部は平坦に整形されるが、押圧文を施すものが減少し、胴部上半から口唇部にかけて器壁を薄くするものが多くなる。口縁部上端には様々な貝殻刺突文が施され、短い貝殻押引文を施すものも見られる。胴部には横位や斜位の貝殻条痕調整が行なわれ、その上から刺突する力の強弱により様々な形状になる貝殻刺突文や、貝殻腹縁部で直線を施す貝殻沈線文や曲線を施す流水文、などが単独もしくは組み合わせられて施されている。定塚遺跡ではこの2B類を含めて、2C類・3類と角筒土器の割合が円筒土器を陵駕しており、特に2B・2C類ではそれが顕著である。830~834は角部に丸みを持つ角筒土器であり、胴部上半が角筒形、胴部下半が円筒形のいわゆる「上角下円」の器形の土器も見られる。830・831は波状口縁を呈しており、口縁部上端に貝殻腹縁部を用いて施されたと考えられる横位の連続刺突文が3列施されている。刺突文の下位には多方向に貝殻条痕調整が施されており、内面は粗いケズリが行なわれている。830は波頂部直下に補修孔のような穴が開いており、当初は補修孔と考えていたが、よく観察して

みると発掘調査時の破損の可能性が高いことが分かった。832は波状口縁を呈す口縁部が若干内湾し、内傾した平坦な口唇部をもち、丸みをもった角部をもつ角筒土器である。胴部下半に行くに従い器面の湾曲が大きくなることから上角下円の器形である可能性が高い。胴部の横位の貝殻条痕調整が非常に浅く行なわれているのが特徴である。833は高低差の少ない緩い波状口縁を呈し、口縁部上端に2種類の異なった形状の貝殻刺突文が施されている。上段には貝殻の背面を押し付けた様な押圧文が1列巡り、下段には短い縦位の貝殻刺突文が2列巡らされている。胴部には貝殻条痕調整の上から斜位の貝殻沈線文が施されているが、使用される肋の数により形状の異なった貝殻沈線文になっており、刺突文直下のみに1箇所のみ貝殻腹縁を用いた短沈線が施され、2箇所のみ貝殻腹縁を用いて施された沈線文は胴部中ほどに向かって施されている。特に刺突文直下に施される短沈線の文様は2A類に施されている文様と類似している。834は丸みをもった角部をもつ波状口縁の角筒土器である。角部以外は胴部中ほどから口縁部に行くに従い器壁が薄くなり、口縁部が若干内湾する器形である。文様は832と同様に口縁部上端に横位の短い貝殻押引文が3列巡らされている。

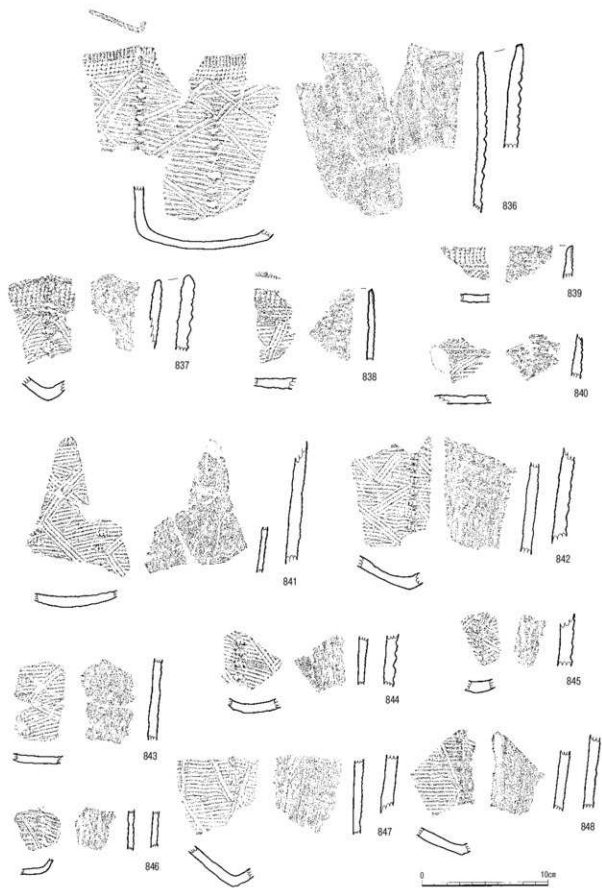
835～868は胴部に貝殻沈線文を施す土器群である。835-1～835-3は同一個体であり、はっきりとした角部をもつ波状口縁の角筒土器である。口縁部上端には縦位の貝殻刺突文が1列巡り、刺突文の下位には横位の貝殻刺突文が1条巡らされている。角筒土器であるために4つの面を持っているが、そのうち対面する2面は文様は貝殻沈線文が縦位に3条施されるという共通点をもつが、器面調整は横位の貝殻条痕調整のみ、斜位の貝殻条痕調整のみというように異なった方向に器面調整が行なわれている。残りの2面にはそれぞれ異なった文様が施されており、1面は器面調整に横位の貝殻条痕調整を行ない、その上から斜位の貝殻沈線文をX字状に施している。最後の1面には斜位の貝殻条痕調整が行なわれ、その上から斜位の貝殻沈線文が施されているが、残存部の面積が少ないため文様構成の詳細は不明である。しかしながら、対面に施されているX字状文様とは明らかに異なった文様構成をもっていることは確認できる。また、角部には短い貝殻沈線文が縦位に間隔を空けて施されているが、沈線文が短すぎて刺突文の様に見える部分もある。外面底部付近には縦位の貝殻条痕文が施されており、内面調整は縦位方向のケズリが行なわれている。836～854は胴部に斜位の貝殻沈線文を施す土器群である。836は平坦に整形した口唇部に押圧文が施される波状口縁の角筒土器である。口縁部上端には貝殻の異なる部位を用いて施された2種類の刺突文が施されており、上段には横位の細かい筋が多く残る縦位の刺突文が1列巡らされ、下段には押引文の様にも見える連続刺突文が同じく縦位に1列巡らされている。胴部には横位の貝殻条痕調整の上から斜位の貝殻沈線文が交差するように施されている。さらに角部と4面の各中央部の斜位貝殻沈線文の交差する部分に、縦位の貝殻刺突文が施されている。貝殻刺突文は刺突が深いために「m」や「ひ」に似たいわゆる千鳥文の形状になっている。837～840は口縁部上端に縦位の貝殻刺突文が1列巡り、その下位に横位の貝殻刺突文が2条巡らされる角筒土器である。口唇部は平坦に整形され、837のみキザミが施されている。841～848は角筒土器の胴部片である。どれも横位の貝殻条痕調整の上から貝殻沈線文をX字状もしくはV字状に施し、角部や面の中央部には貝殻腹縁部による刺突文が施されている。貝殻刺突文は浅く刺突されるため貝殻腹縁部の先端のみが突き刺さり、見た目には横位の2連点もしくは3連点状の刺突文となっている。846の角部には千鳥形の貝殻刺突文が施されている。847・848の角部には2連点状の貝殻刺突文が施されているが、848の角部にはさらに縦位の貝殻沈線文も施されており、文様が重なって施されている形になる。



第69区 絹文土器69



第70図 絹文土器70

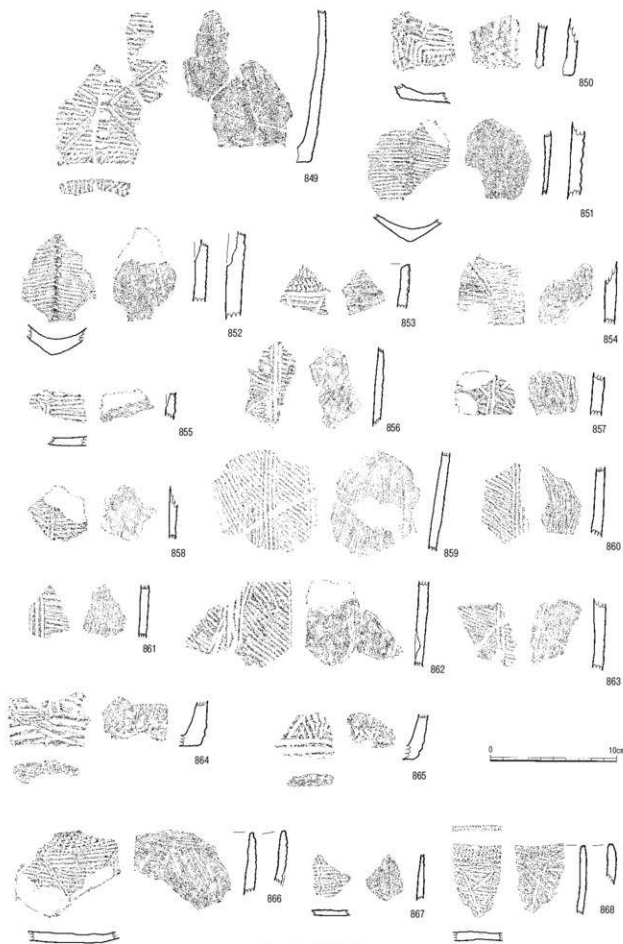


第71図 縄文土器71

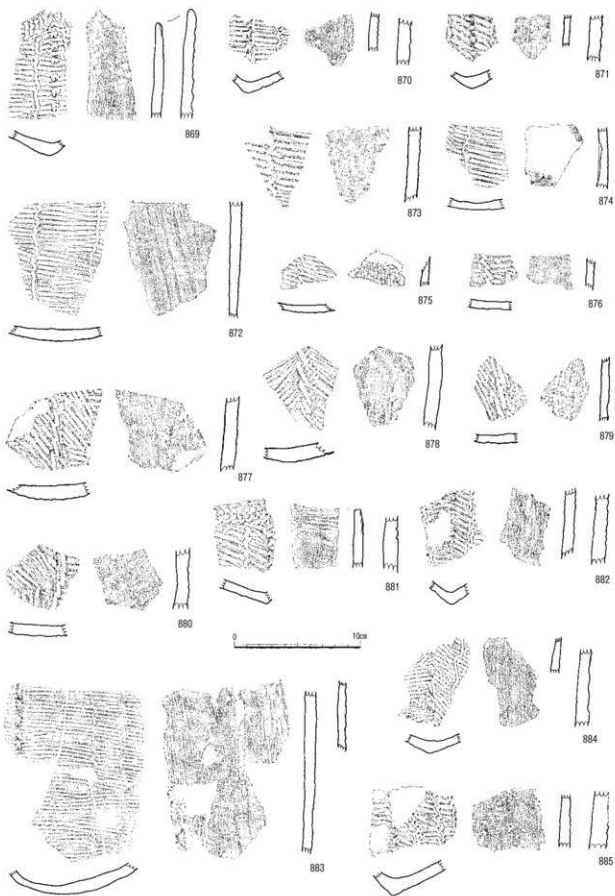
849・850は底部付近の破片資料である。849は円筒土器で、X字状に施された貝殻沈線文の交差する部分に縦位に間隔を空けて貝殻刺突文がされている。850は角筒土器であり、底部付近に「L」字を横に寝かせたような貝殻条痕調整が行なわれている。851・852は同一個体と考えられる角筒土器の胴部片である。横位の貝殻条痕調整の上から貝殻で細沈線文がX字状に施されており、角部には縦位方向に貝殻刺突文が施されている。角部のみの破片資料であるために、胴部に角部同様の縦位方向の貝殻刺突文が施されているかどうかは不明である。853・854・856～865は円筒土器である。853・854は胴部に斜位の貝殻沈線文が施されている。853は内傾した口唇部を平坦に整形しているが文様は施されていない。口縁部上端には2種類の刺突文が施されており、上段には細かい筋のたくさん入った刺突文が縦位に2列巡らされ、下段には縦位の貝殻刺突文が1列巡らされている。上段の刺突文の施文具も貝殻と考えられる。855は角筒土器の口縁部付近の破片資料であり、口縁部上端に幅1cm弱の横位の短沈線文が2列かそれ以上施されている。856～865は胴部に縦位や斜位の貝殻沈線文を施す土器の一群である。864・865は底部付近の破片資料であり、同一個体である。焼成が非常に良く、器壁に厚みがある点や外器面にミガキを施した様な光沢がある点、太めの貝殻条痕調整および貝殻沈線文を施す点など、同じ類の他の土器とは少し異なった特徴を持っている。

866～868は貝殻沈線文に加えて、貝殻刺突文が連続して施されることにより線状に見える連続貝殻刺突文や、貝殻沈線文を曲線的に施す流水文が施されている。866は観察が困難ではあるが口唇部にも細かいキザミ目が施されている。口縁部上端には斜位の貝殻刺突文が1列巡らされており、その下位に横位の貝殻刺突文が1条巡る。胴部には横位の貝殻条痕調整の上から貝殻沈線文をX字状に施し、その交差する部分に縦位の流水文が施されている。868は平坦に整形した口唇部に貝殻で施したと考えられる押圧文が施されている。胴部には横位の貝殻条痕調整の上から、斜位の貝殻沈線文、縦位の貝殻刺突文が施されている。さらに斜位の貝殻沈線文の一部が連続貝殻刺突文に置き換えられている部分も確認できる。

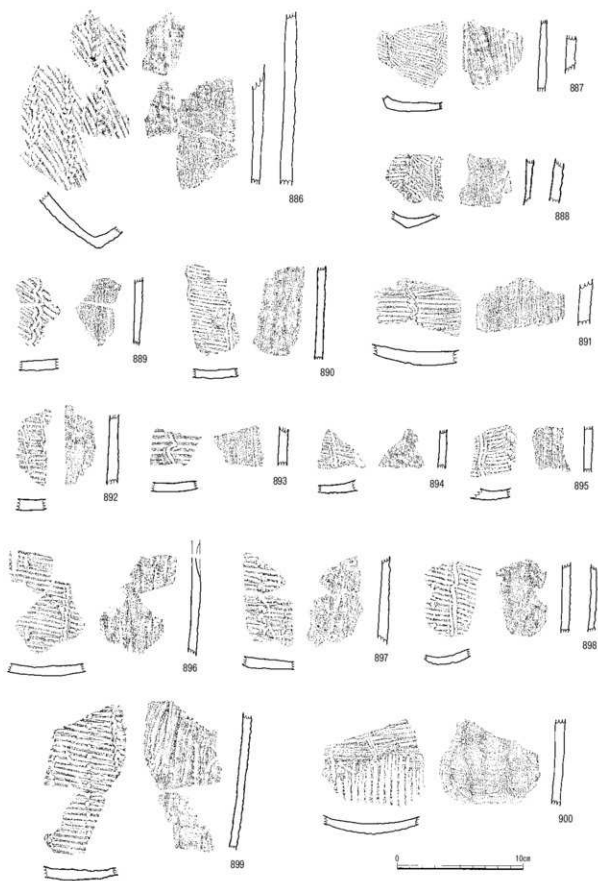
869～903は胴部に貝殻腹縁を用いて流水文を施す土器の一群であり、基本的に流水文は縦位方向のみに施されている。869は波状口縁を呈する角筒土器の口縁部片である。口縁部上端には縦位の貝殻刺突文が1列巡り、その下位には2連点状になった斜位の貝殻刺突文が1列巡らされている。口縁部上端に施される縦位の貝殻刺突文の下位には、通常横位の貝殻刺突文が巡らされるため、869のように斜位の貝殻刺突文が巡らされるものは珍しい。胴部には横位の貝殻条痕調整の上から縦位の流水文が施され、角部には貝殻刺突文が施されている。870～880は胴部片であり、873のみが円筒土器である。877～880に施される流水文は若干ではあるが直線的な形状をしており、記号化された雷のような形状をしているが、これも流水文の一種であると考えられる。881は平坦に整形した口唇部に押圧文を施す波状口縁の角筒土器である。口縁部上端には縦位の貝殻刺突文が1列巡り、その下位には横位の貝殻刺突文が2条巡らされている。角部には一見キザミに見える斜位の貝殻刺突文が施されている。882～900は角筒土器の胴部片である。883は緩い角部を持つ角筒土器である。浅く行なわれた横位の貝殻条痕調整の上から浅い流水文が施されており、角部には貝殻刺突文が施されているがその形状は一定ではない。内面調整は異なるが、胎土・焼成・器面調整・文様の施され方・角部の形状が832に類似している。897・898には2連点状の、899には連点状の貝殻刺突文が施されている。900は底部付近の破片であり、底部付近のみ横位の貝殻条痕調整の上から縦位の貝殻条痕調整が行なわれているのが分かる。



第72図 縄文土器72



第73図 縄文土器73



第74図 縄文土器74

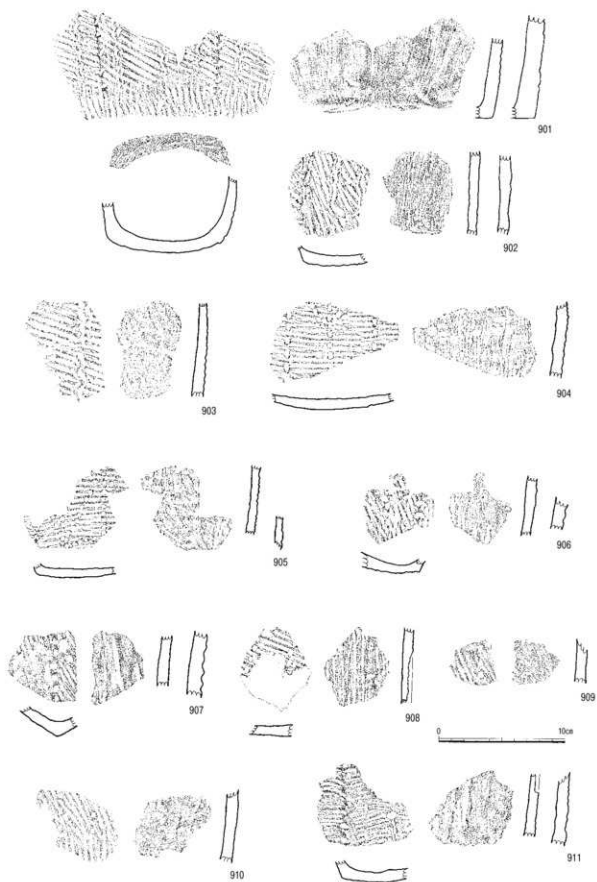
901・902は底部付近および底部片であり、901は2条一単位になった縦位の流水文が一つの面に3列施されている。外面器面調整は斜位の貝殻条痕で行なわれているが、底部付近のみは斜位の貝殻条痕調子の上から縦位の貝殻条痕調整が行なわれている。902は流水文の末端がL字状に曲がる形状をしており、それが互いに向き合う形で施されている。903は円筒土器の胴部片であり、2条一単位になった縦位の流水文が施されている。この2条一単位の流水文が後述する上野原タイプの2条一単位の連続貝殻刺突文へと変化していくと考えられている。

904～927は角部を除いた胴部の文様を貝殻刺突文のみで構成している土器の一群であり、909・910・912を除く全てが角筒土器である。904～911・913・914は胴部の文様を連点状の刺突文のみで構成している土器の一群である。連点状という刺突文の形状から棒状の施文具で施された可能性もあるが、観察する限りではこの連点状の刺突文も貝殻を用いて施されていると考えられる。904・905は縦位方向と斜位方向の連点文によって文様が施されているが、905には一部横位気味に変化した連点文も確認できる。904を見る限りでは斜位の連点文が施されるのは胴部の上半までであり、胴部下半には縦位の連点文のみが施されているようである。連点文の施される方向に差異はあるが904と905はその他に類似した点が多く同一個体の可能性がある。908は外面に剥落が確認できる。

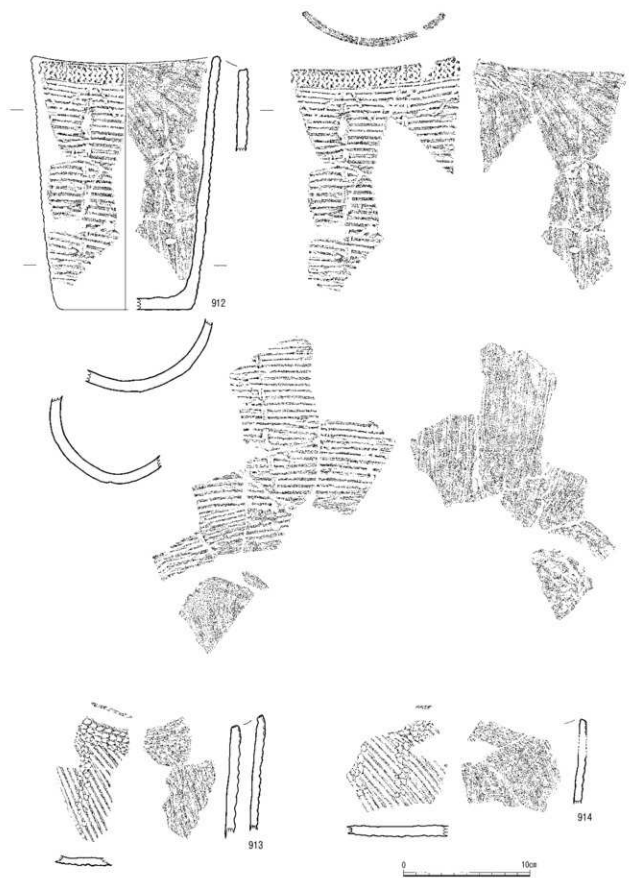
912は口唇部を平坦に整形した波状口縁のレモン形土器である。口唇部に押圧文やキザミなどの施文は見られず、丁寧にナデ調整が施されている。口縁部上端には縦位の貝殻刺突文が1列巡る。胴部には横位の貝殻条痕調整が行なわれており、口縁部上端の貝殻刺突文の下位には連点状の貝殻刺突文が鋸歯状に施されており、鋸歯の付け根から底部に向かっては縦位の2連点の貝殻刺突文が施されている。このように文様の一部が胴部上半に集中するという特徴は2A類土器に見られる特徴の一つであり、外面胴部器面調整が横位の貝殻条痕調整のみで行なわれていることも含めて、やや古手の特徴の一つと考えられる。内面の器面調整はケズリが行なわれており、口縁部付近から、横位→斜位→縦位とケズリの行なわれる方向が変化している。

913と914は平坦に整形した口唇部にキザミを施す波状口縁の角筒土器であり、同一個体と考えられる。口縁部上端には縦位の貝殻刺突文が1列巡り、その下位に横位の貝殻刺突文が1条巡らされる。胴部には縦位の2連点の刺突文が施されている。縦位の刺突文同士の間隔から推測すると角筒土器の一つの面に3列の縦位刺突文が施されていたと考えられる。915は胴部に2連点状の刺突文が縦位に施されており、角部にも貝殻刺突文が施されている。形状は違うがどちらも貝殻を用いて施された刺突文であり、面と角部では刺突文の形状を変えていることが分かる。919は胴部の面の部分に3連点状の貝殻刺突文が施されており、角部には2連点状の貝殻刺突文が施されている。

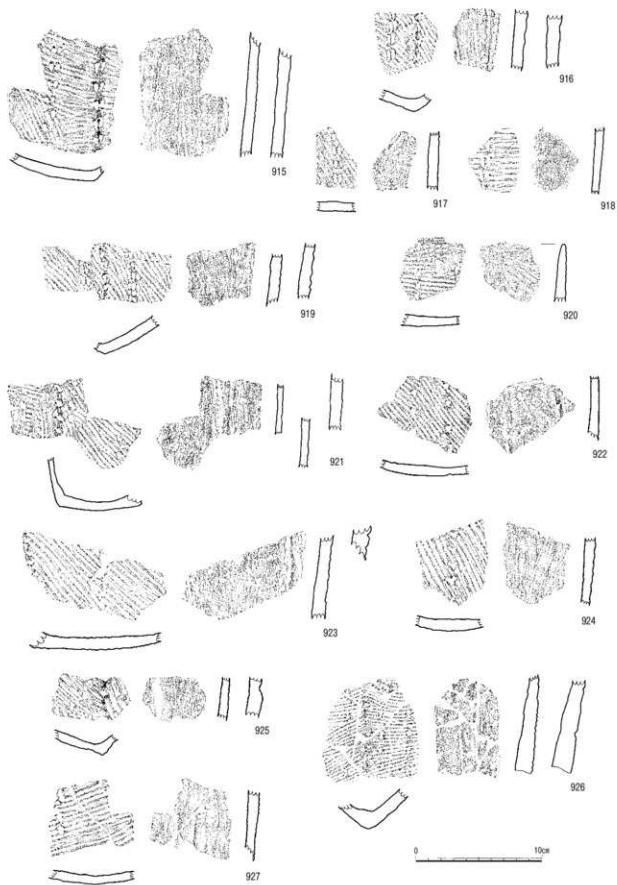
920～927は貝殻を用いて刺突文を施した土器の中でも外見が少し変わった形状の刺突文になっている土器の一群である。920は口縁部上端に縦位の貝殻刺突文が1列巡らされており、胴部には刺突文というよりは貝殻腹縁部で引っ掻いたような文様が縦位方向に点々と施されている。921～923は胴部に斜め向きの貝殻刺突文が縦位に点々と施されている土器である。921は小型の角筒土器であり、1辺の長さが約7.5cmの手にすっぽりと収まるサイズになっている。924に施されている貝殻刺突文は非常に特徴のある形状をしている。925～927は縦位方向の貝殻刺突文を点々と施す土器である。926は底部付近の破片と考えられ、下部に接合面が確認できる。



第75図 縄文土器75



第76図 縄文土器76



第77図 縄文土器77

2C類土器 (928~982)

2C類土器は胴部の文様に連続貝殻刺突文を施すことを一つの指標としている。ただし、単独で施されているのではなく、流水文やその他の貝殻刺突文との組み合わせで施されている。また、口縁部上端には縦位の貝殻刺突文列が巡らされるものと、横位の貝殻刺突文が3条ほど巡らされるものの2種類が存在しているが、胴部の文様を連続貝殻刺突文のみで構成している土器群も前者のような縦位の貝殻刺突文列を巡らすものに関しては2C類土器として分類している。

928~944は連続貝殻刺突文とその他の貝殻刺突文との組み合わせにより胴部文様が施される土器の一群である。928・929は口縁部上端に縦位の貝殻刺突文を1列巡らし、その下位に横位の貝殻刺突文を1条巡らせる波状口縁の角筒土器である。横位の貝殻刺突文の下位には連続貝殻刺突文が鋸歯状に施されている。931も連続貝殻刺突文を鋸歯状に施していると考えられ、鋸歯の先端から底部に向かって斜め向きの貝殻刺突文が縦位に点々と施されている。

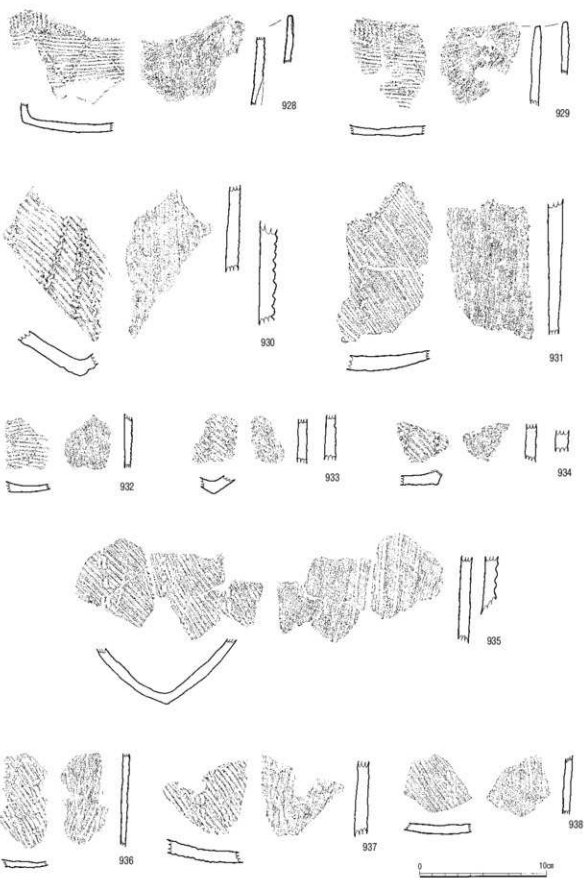
945~952・955は2条一単位の連続貝殻刺突文とその他の貝殻刺突文との組み合わせにより胴部文様が施される土器の一群である。特にこの2条一単位の連続貝殻刺突文が施される土器に関しては、霧島市国分上野原遺跡の名前を取り上野原タイプという名称が付けられている。945は口唇部に押圧文を施し、口縁部上端には縦位の貝殻刺突文を1列巡らし、その下位に横位の貝殻刺突文を2条巡らせている。946は口唇部にキザミを施し、口縁部上端に横位の貝殻刺突文を3条巡らせている。このように945・946は口縁部付近の文様構成こそ異なっているが、胴部文様は斜位の連続貝殻刺突文と縦位の貝殻刺突文の組み合わせという共通性を持っている。947~955も同じように斜位の連続貝殻刺突文と縦位の貝殻刺突文の組み合わせで文様が構成されている。

953・954・956~968は連続貝殻刺突文と流水文の組み合わせにより胴部文様が施される土器の一群であり、そのほとんどが斜位の連続貝殻刺突文と、その交差する部分に施される縦位の流水文の組み合わせで文様が構成されている。960は直線的な流水文が施されている。また、この960に関しては角筒土器の隣り合った面で文様構成が違うのか、隣の面では斜位の連続貝殻刺突文が確認できない。963・966~968には胴部の途中までしか連続貝殻刺突文は施されておらず、967・968などは斜位の連続貝殻刺突文が交差し鋸歯状になる部分から縦位の流水文が施されており、施される文様は異なるが931と同様の文様構成となっている。また、966~967の連続貝殻刺突文は2条一単位で施されていることから上野原タイプに分類できる。

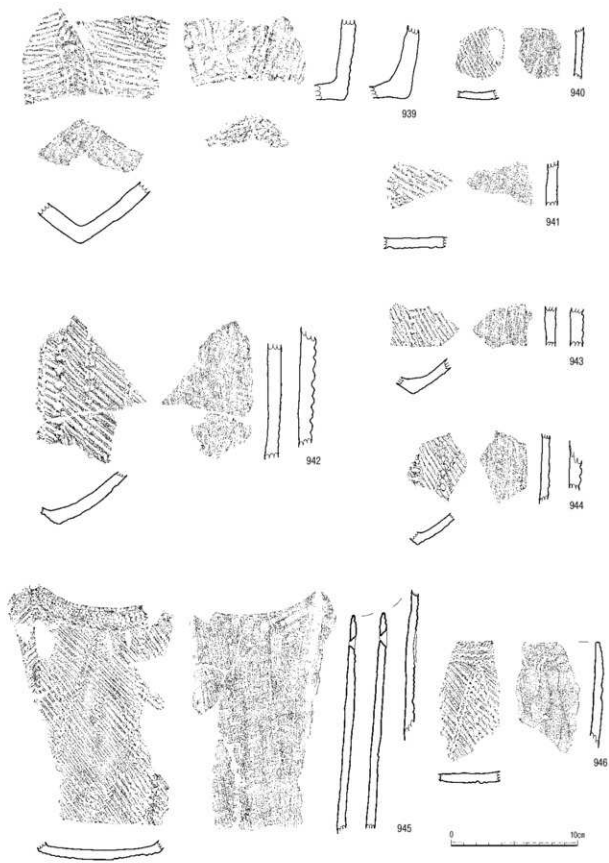
969~977は連続貝殻刺突文のみで胴部文様が施される土器の一群である。すべて口縁部上端に縦位の貝殻刺突文列が施されているために2C類に分類された。平坦に整形された口唇部にはキザミが施されているものが多い。972~977は連続貝殻刺突文は2条一単位で施される上野原タイプである。

978~981は口縁部上端に縦位の貝殻刺突文を巡らせる土器の一群である。口縁部のみの小破片であり、胴部の詳細は不明であるため2B類の可能性もある。どれも縦位の貝殻刺突文が1列巡らされている。

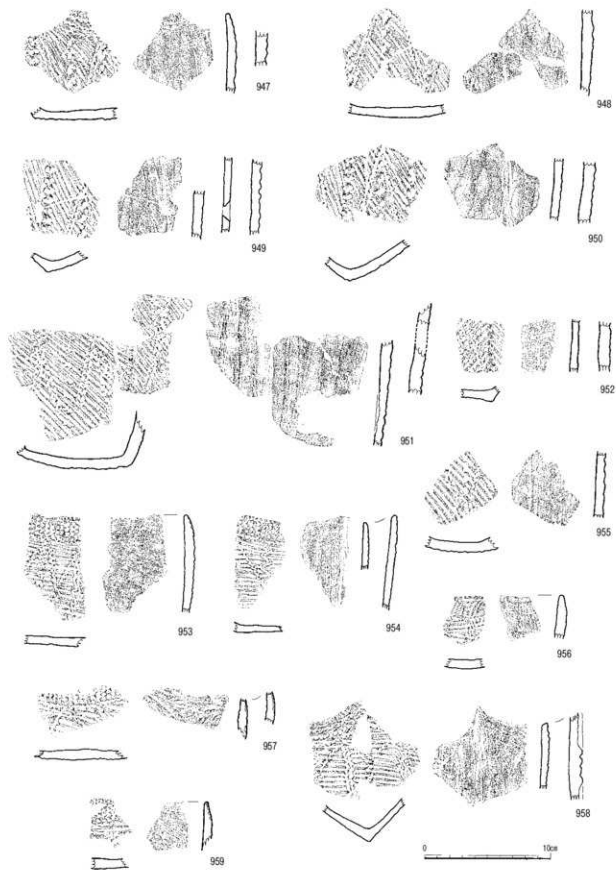
982・983はレモン形土器である。口唇部は平坦気味に整形されるが押圧文などの文様は施されていない。口縁部上端には縦位の貝殻刺突文が施されているようであるが、刺突文部分の残存部が極端に少ないために明言はできない。982・983ともに角部に沿って縦位の連続貝殻刺突文が施される珍しい文様構成になっている。胴部の文様は残存部分では確認できない。



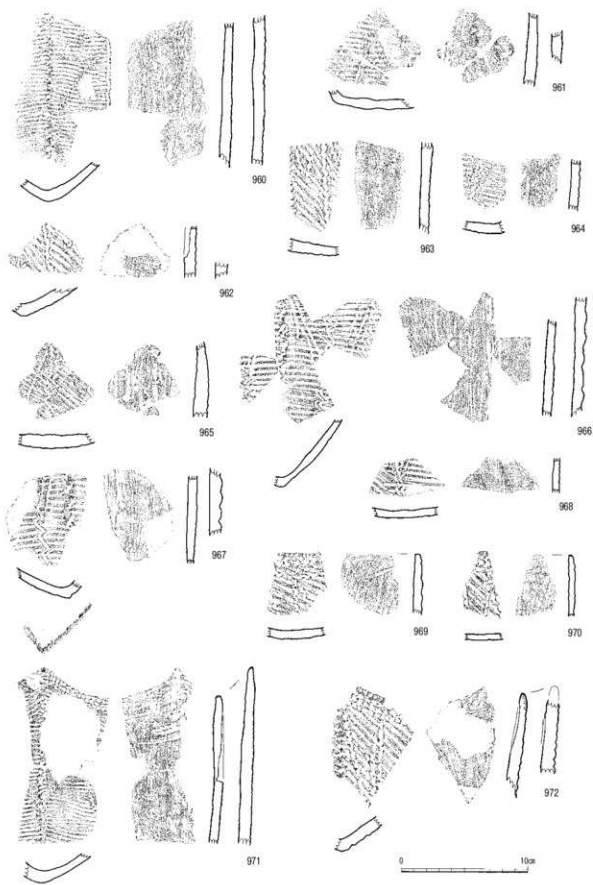
第78図 縄文土器78



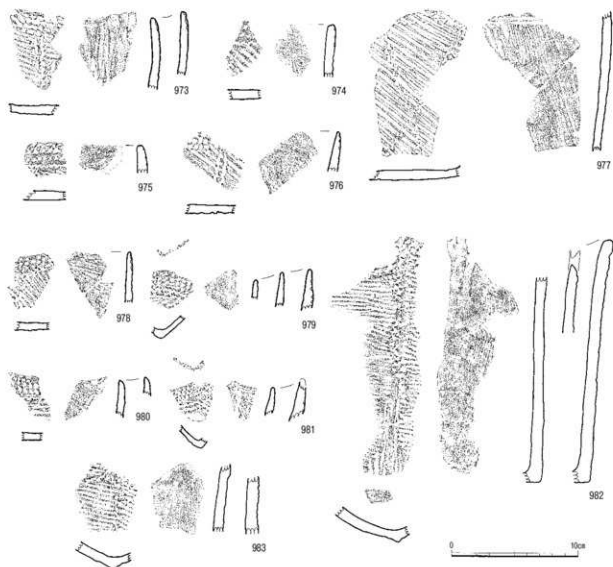
第79図 縄文土器79



第80図 縄文土器80



第81図 縄文土器81



第82図 縄文土器82

3類土器 (984~1153)

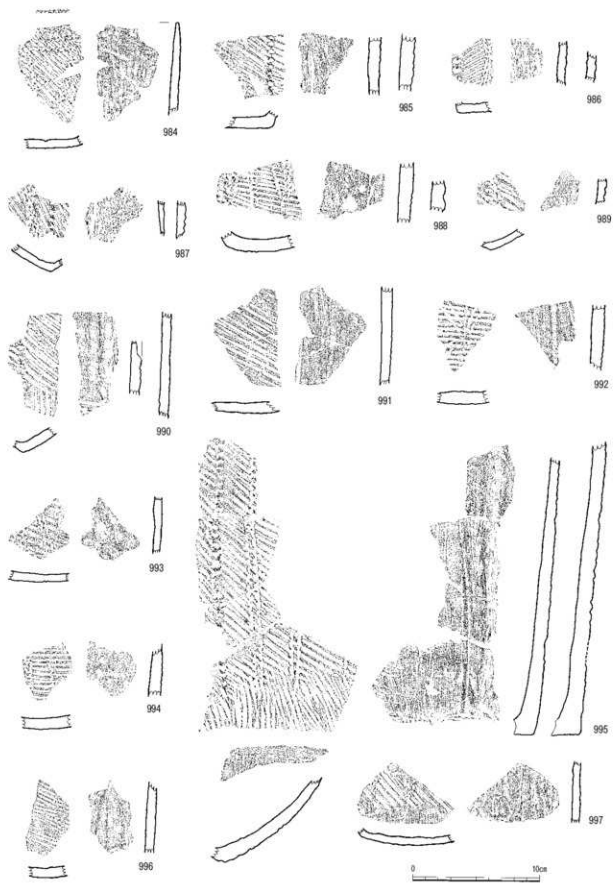
3類土器は口縁部上端に横位の3条ほどの貝殻刺突文を巡らし、角部を除く胴部の文様が連続貝殻刺突文のみで施されているという点を分類の指標としている。ただし、角筒土器の角部には2類土器から引き続き貝殻刺突文が施されている。器形は2類土器と同様に円筒形・角筒形・レモン形の3種が確認できる。また、口縁部上端から口唇部に向かい先細りする口縁部断面形になり、口唇部は平坦に整形され、キザミが施されているものが大半である。器面調整は外面には横位や斜位の貝殻条痕調整が施されるが、斜位方向に施されるものが大半を占める。また、ほとんどの土器が外面底部付近のみ縦位の貝殻条痕を行ったり、縦位の沈線文・細沈線文を施している。内面調整はケズリを行なうものが大半を占め、それに伴って器壁が薄くなる傾向にあり、同じ器形の土器が作られている2類の土器と比較すると器壁が薄くなる傾向にあるのが良くわかる。

984~1000までは胴部に2条一単位の連続貝殻刺突文を施す上野原タイプの土器群である。2C類と3類土器の分類を口縁部上端の刺突文の文様構成と、角部を除いた胴部の文様構成で行なっているため

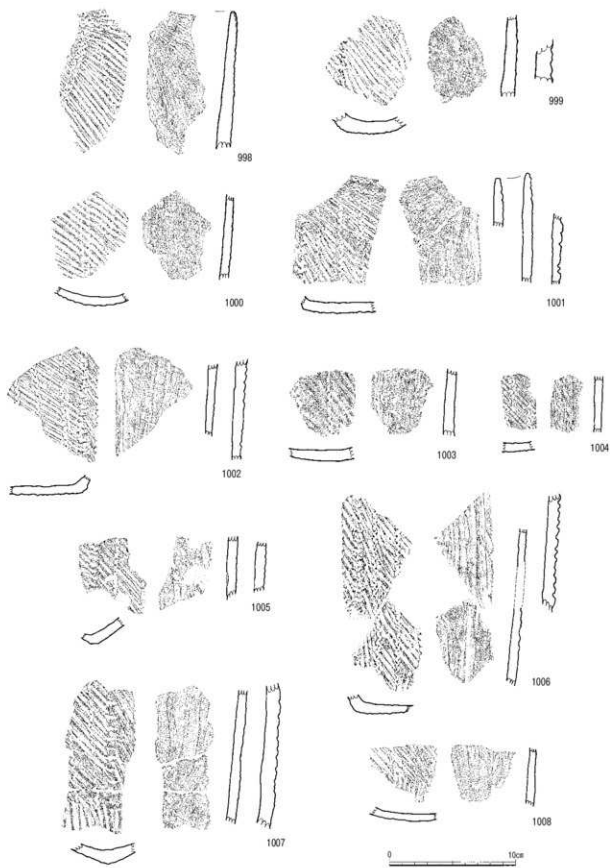
上野原タイプの土器が2つの分類にまたがって存在していることになる。984~1000は998を除くすべてが角筒土器である。984は口縁部片であり、平坦に整形された口唇部にはキザミが施されている。この3類土器の口唇部のほとんどに見られるキザミ目は、その文様の細かさからなかなか施文原体が確定し難いが、口縁部上端の横位貝殻刺突文・胴部の連続貝殻刺突文・外面器面調整がすべて貝殻という一種類の施文具・調整具を用いて施されていることを考えれば、この口唇部キザミ目も貝殻で施されている可能性が高い。同様に底部付近に施されることのある縦位の細沈線文も、細い棒状の工具ではなく貝殻で施されている可能性が考えられる。984~987の胴部には2条一単位の連続貝殻刺突文が斜位に施されており、985~987の角部には貝殻刺突文が縦位方向に点々と施されている。988は胴部文様が2条一単位の縦位の連続貝殻刺突文と1条の斜位の連続貝殻刺突文の組み合わせで構成されており、斜位の連続貝殻刺突文が交差する部分に縦位の連続貝殻刺突文が施されている。このような文様構成は2C類土器の中で連続貝殻刺突文と流水文との組み合わせで文様が構成される964~966などと同様の文様構成になっており、2条一単位の流水文が2条一単位の連続貝殻刺突文へと置き換えられていることが良く分かる。989~993は斜位の連続貝殻刺突文がX字状に施されている胴部片である。2C類土器では斜位の連続貝殻刺突文が交差する部分には必ずと言っていいほど縦位の貝殻刺突文が施されていたが、3類土器ではそれが見られない。994~997は2条一単位の連続貝殻刺突文が縦位方向に施されている土器群である。995は2条一単位のはずの連続貝殻刺突文が胴部中ほどの一部で1条のみになっている。また、底部付近に施される縦位貝殻条痕調整も粗く行なわれており、一部やや斜位気味に行なわれている。内面器面調整はヘラを用いたケズリが行なわれているが、底部付近では工具ナデが行なわれており、細かい縦の筋になった工具痕が確認できる。また、底部片との接合面も確認することができ、底部パーツの側面に胴部パーツを接合していたと考えられる。997は外面器面調整に斜位の貝殻条痕調整が行なわれているが、底部付近のみナデ調整を施した上から縦位の細沈線が施されている。998波状口縁を呈し、口唇部にはキザミが施されている。残存部が少なく器形を復元することが難しいが、波状口縁であるということからレモン形土器の可能性もある。999は胴部の途中で文様が途切れている。1000には2条一単位の縦位の連続貝殻刺突文と、1条の斜位の連続貝殻刺突文が施されているが、斜位の連続貝殻刺突文は縦位の貝殻刺突文を中心軸としたシメトリーには施されていない。

1001~1029は角筒土器の角部を除く胴部の文様が縦位の連続貝殻刺突文のみで構成されている土器群である。1001~1009は縦位連続貝殻刺突文どうしの間隔が割りと広く空いている土器群である。1006は角部に「m」字に似た形状の貝殻刺突文が施されている。1007~1009は底部付近の破片であり、外面器面調整が底部付近のみ縦位方向に行なわれている。1007は角部にやや横長の貝殻刺突文が、1009は斜めに傾いた形状の貝殻刺突文が施されている。さらに1009には底部パーツとの接合面が確認できる。1010~1029は縦位の連続貝殻刺突文同士の間隔が非常に狭くなっていく土器群である。さらに1011・1012・1021・1024に施されている連続貝殻刺突文のように、長方形の連点状に見えるものもある。これは刺突が浅く施されるためにこのように見えると考えられる。1028や1029は外面の底部付近のみナデ調整を施し、その上から縦位の細沈線が施されている。

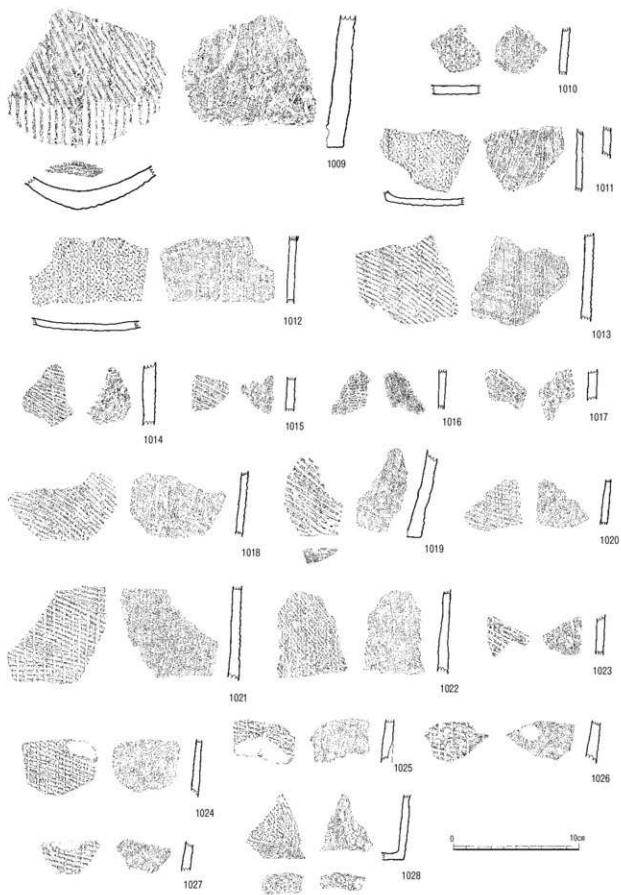
1030~1033は角筒土器の口縁部片であり、角部を除く胴部には斜位の連続貝殻刺突文による文様が施されており、それが交差されX字状の文様になっている。1030・1032が波状口縁を呈し、1032・1033が平口の口縁を呈しているが、どちらの口唇部も平坦に整形され、そこにキザミが施されている。



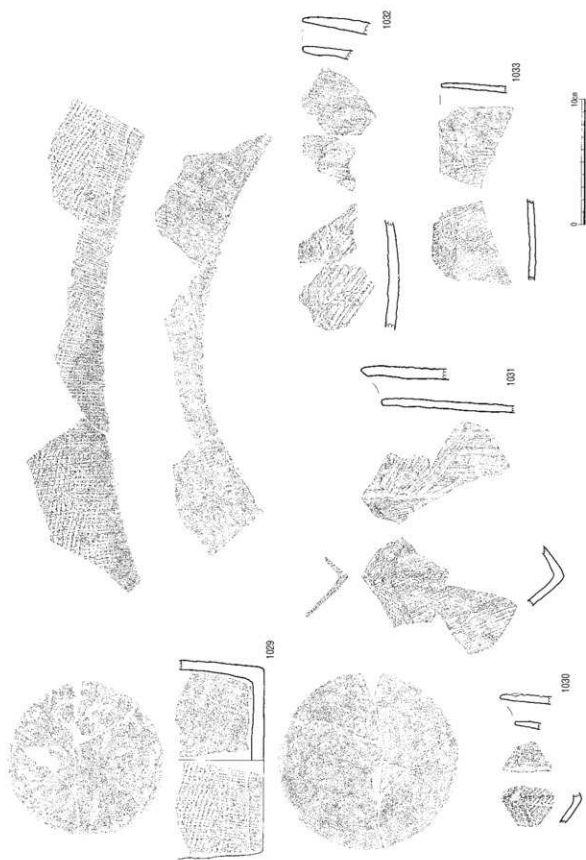
第83図 縄文土器83



第84図 縄文土器84



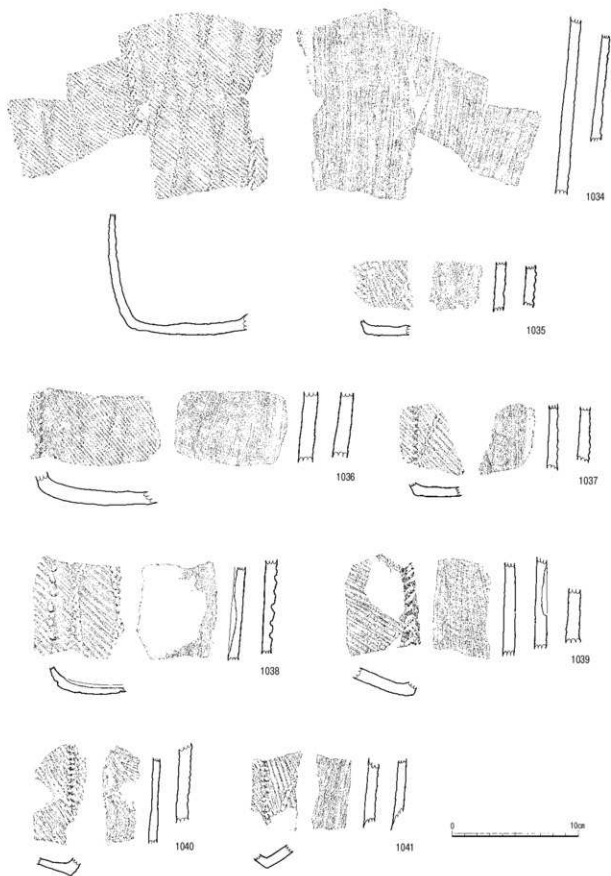
第85図 縄文土器85



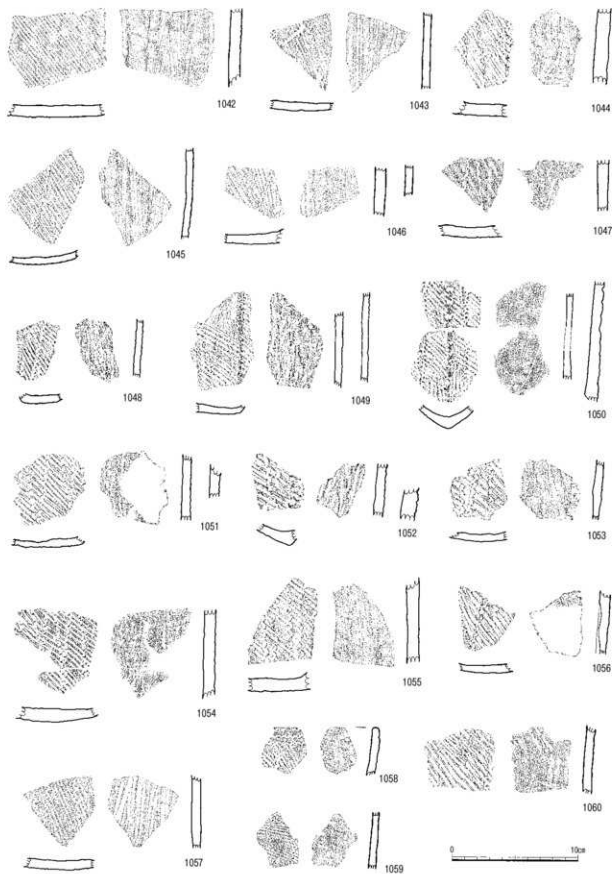
第86図 絹文土器86

1034～1068は斜位の連続貝殻刺突文をX字状に交差させて施す土器の一群であり、1034～1057が角筒土器、1058～1068が円筒土器である。1034～1047は割と広い間隔を空けて文様が施されている土器の一群である。1034は角筒土器の1つの面に4つのXが施される形で斜位の連続貝殻刺突文が施されており、角部には斜めに傾いた形で貝殻刺突文が縦位に点々と施されている。内面調整はヘラ状工具によるケズリが行なわれているが、ケズリの頻度は一定ではなく器壁の厚さに違いが生じている。1036も1034と同様の文様が施されている。1034や1036には外面器面調整として斜位の貝殻条痕調整が行なわれているが、この貝殻条痕調整も一定の角度で非常に丁寧にこなされており、2類土器と比較したときの3類土器の精緻さの一つとして認識できる。1038は内面が大きく剥落しており、1039は外面が一部分剥落している。しかしながら、1類土器に見られる剥落の状況と比較すると、剥落し露出した面がややデコボコとした形状をしており、きれいにパカッと外れたようには見えない。1040は非常に角張った角部を持つ角筒土器である。1041に施されている連続貝殻刺突文は浅く刺突されたためか、長方形の連点状に見える刺突文になっている。1042・1045の行なわれている斜位の貝殻条痕調整も非常に丁寧にこなされている。1048～1068は斜位の連続貝殻刺突文が密に施される土器の一群である。1049は外面の器面調整に斜位の貝殻条痕調整が行なわれているが、全面には行なわれておらず、一部にナデ調整のみが行なわれている箇所が確認できる。また、斜位の貝殻条痕調整もナデ調整が行なわれた後から行なわれているために、この斜位の貝殻条痕は器面調整ではなく文様として施されたと考えられる。1050は胴部下半から底部付近の破片資料であり、底部付近の器面調整は斜位の貝殻条痕の上から縦位の貝殻条痕調整が行なわれている。1051・1056は内面に大きな剥落が見られるが、この剥落も1類土器に見られる剥落とは異なり、表面が薄く剥がれたようになっている。1054・1059・1064・1065・1068なども1049と同じように外面の器面調整にナデ調整を行なった上から斜位の貝殻条痕が施されている。

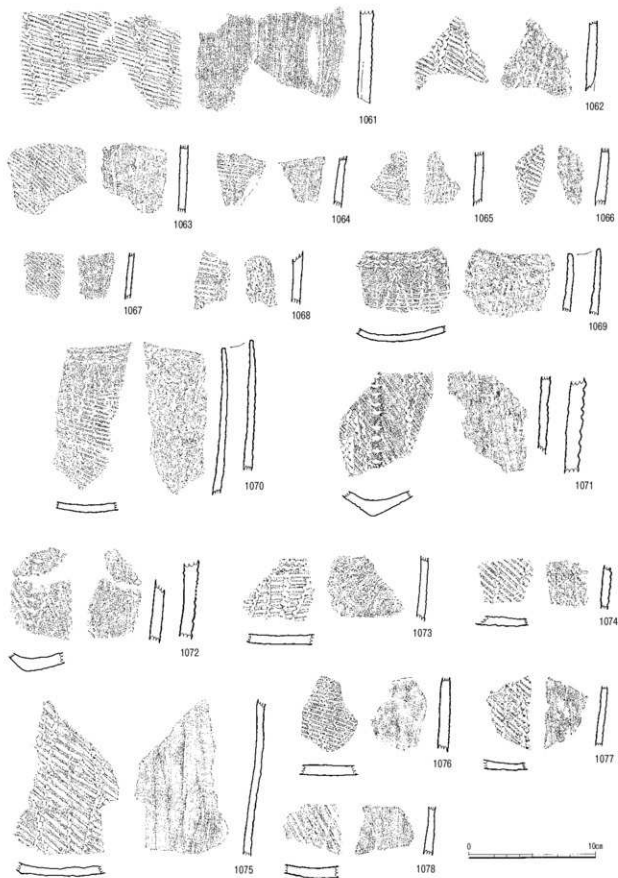
1069～1093は斜位の連続貝殻刺突文に加えて、縦位の連続貝殻刺突文が施される土器の一群であり、1069～1086は角筒土器である。1069～1075は割りと広い間隔を空けて文様が施されている土器の一群である。1069・1070は非常に類似しており同一個体の可能性が考えられる。ともに波状口縁の角筒土器であり、口唇部は平坦に整形されるがキザミ目などの文様は施されていない。口縁部上端には3条の横位貝殻刺突文が巡らされ、その下位に斜位と縦位の連続貝殻刺突文が施されている。外面器面調整はナデ調整が行なわれており、その上から横位や斜位の貝殻条痕が施されている。内面は粗いケズリが行なわれているが、工具痕などは確認できない。極限まで器壁を薄くしようとしている意図が感じられる器面調整になっている。1071は外面器面調整にまずナデ調整を行ない、その上から斜位の貝殻条痕を施し、さらにその貝殻条痕を完全ではないがナデ消そうとしている。1076も外面器面調整にナデ調整を施した上から貝殻条痕を施している。1076～1086は文様が密に施される土器の一群である。特に1082・1083・1085などは文様が密すぎるために、連続貝殻刺突文が縦位に施されているのか、斜位に施されているのか判別が難しい。1087～1093は円筒土器である。1087はやや内傾した口唇部を平坦に整形しキザミを施している。口縁部上端に3条の横位貝殻刺突文を巡らし、その下位には斜位と縦位の連続貝殻刺突文が施されており、縦位の文様は斜位の文様が交差する部分に施されている。円筒形という器形のためか割付はやや雑な印象を受ける。外面器面調整はナデ調整を施した上から斜位の貝殻条痕が施されている。内面は口縁部付近のみ横位方向のケズリが行なわれ、それ以下には縦位方向のケズリが行なわれている。1088・1091の口唇部も平坦に整形されキザミが施されている。



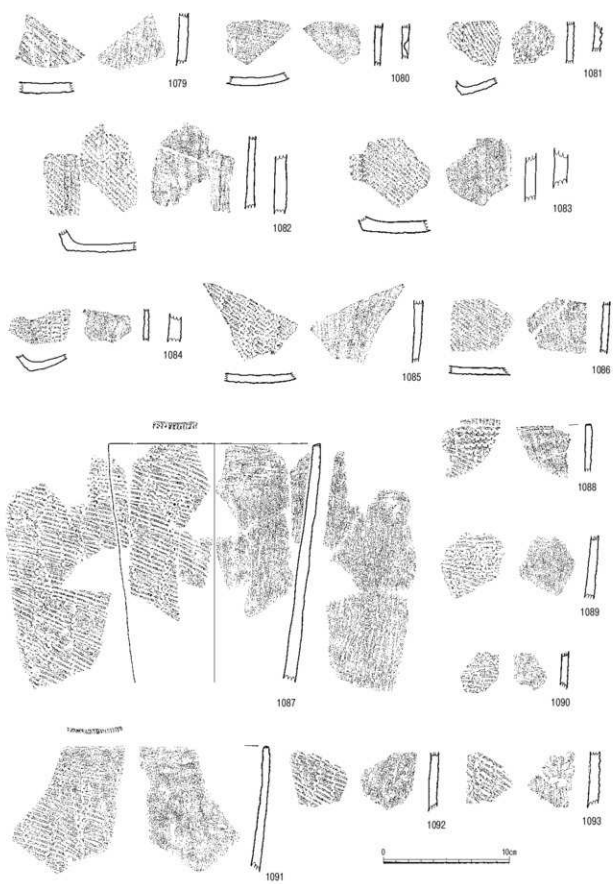
第87図 縄文土器87



第88図 縄文土器88



第89図 縄文土器89



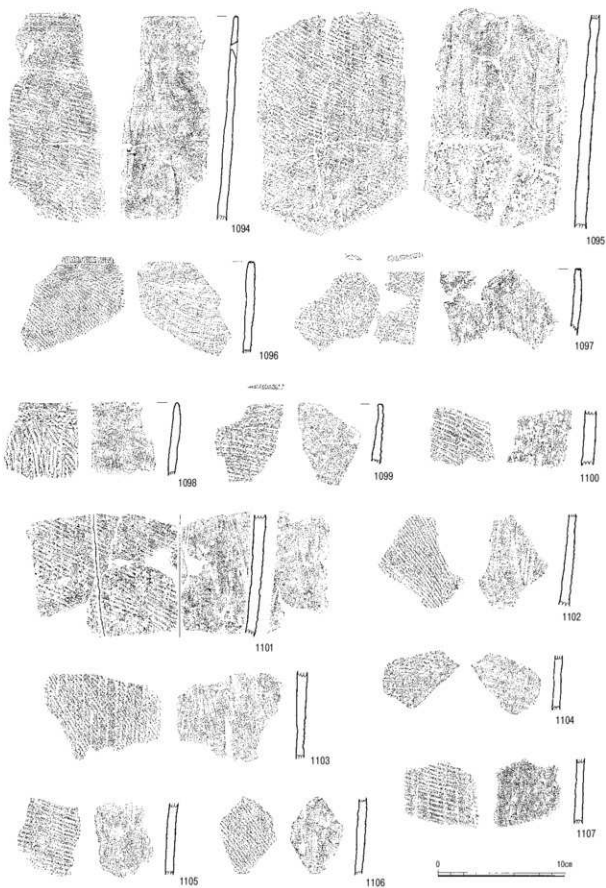
第90図 縄文土器90

1094~1107は胴部に斜位と縦位の連続貝殻刺突文を密に施す円筒土器の一群である。1094は平坦に整形した口唇部にキザミを施し、口縁部上端には4条の横位貝殻刺突文が巡らされる。口縁部上端にはまた補修孔が作られており、縦長の形状の彫り切りによる穿孔がなされている。器面調整は外面が斜位の貝殻条痕調整、内面がケズリを施した後にナデ調整が行なわれている。1096~1099は口縁部片である。1098を除き口唇部は平坦に整形されキザミが施されている。1096も1094同様に口縁部上端に4条の横位貝殻刺突文が巡らされている。1098は口唇部を平坦に整形しない口縁部片である。また外面胴部の器面調整も非常に粗く行なわれている。1101は器面の劣化が激しい。1102・1103・1106などに施されている文様は特に密に施されているため、その施されている方向を確定するのが難しくなっている。1108・1109は外面胴部に縦位の貝殻刺突文をランダムに施す土器である。一つ一つの貝殻刺突文が途切れて施されており、上下の連続性を持っていない。どちらも円筒土器である。

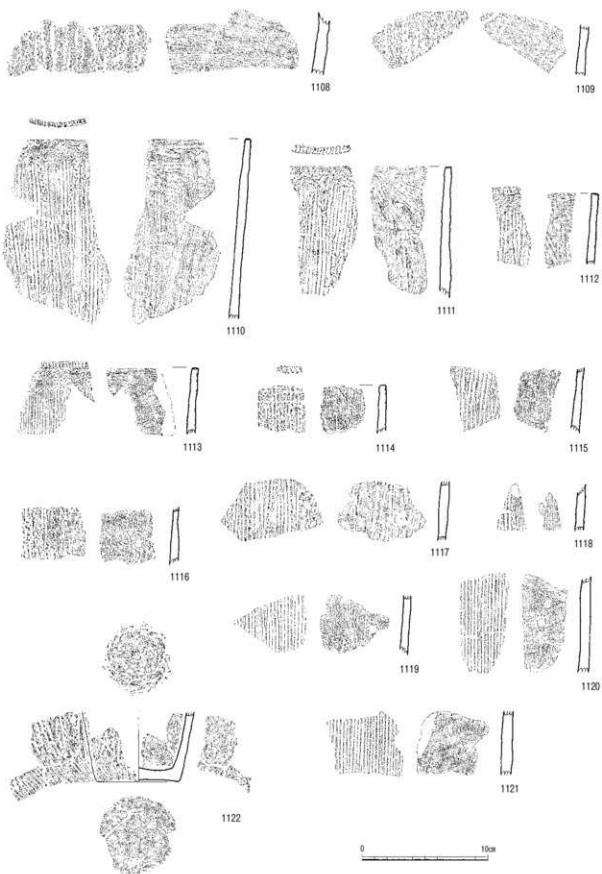
1110~1122は外面胴部の器面調整に縦位の貝殻条痕調整を行なう土器の一群であり、すべて円筒土器である。1110~1114は口縁部片であり、平坦に整形された口唇部にはキザミが施されている。1110~1112は口縁部上端に3条の横位貝殻刺突文が巡らされ、その下位には斜位の連続貝殻刺突文によりX字状の文様が施されている。内面調整はすべてケズリが行なわれており、口縁部付近のみ横位方向に行なわれ、それ以下は縦位方向のケズリが行なわれている。1113は口縁部上端に3条の横位貝殻刺突文を巡らしているが、それ以下の胴部に施される文様は確認できない。1114にも口縁部上端に3条の横位貝殻刺突文が巡らされ、その下位にはやや密に縦位の連続貝殻刺突文が施されている。1115~1121は胴部片である。1115・1117には斜位の連続貝殻刺突文がX字状に施されている。1116にはやや密な縦位の連続貝殻刺突文が施されている。1118は小破片のため文様が分かり難いが、縦位の連続貝殻刺突文が施されているようである。1119~1121は胴部に縦位の貝殻条痕調整しか確認できない資料であり、1113も合わせて同一個体である可能性が高く、そうすると文様は口縁部上端のみに施され胴部は貝殻条痕調整のみ行なわれていると考えられる。1122は底部片である。縦位の貝殻条痕調整の上から縦位の連続貝殻刺突文が施されている。また外面底部付近のみはナデ調整が行なわれており、その上から縦位の沈線文が施されている。

1123~1142はその他の3類土器であると考えられる土器を集めたものである。どれも角部を除いた胴部の文様を連続貝殻刺突文のみで構成しており、口縁部上端の文様は3条ほどの横位貝殻刺突文である。

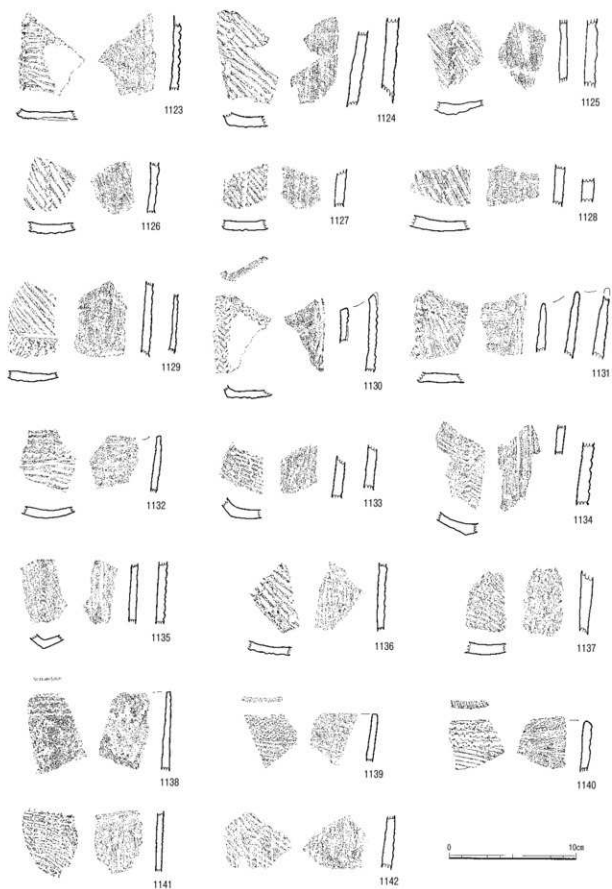
1143~1153は口縁部上端や胴部上半に貼り付け突帯文を施す土器の一群であり、すべて円筒形土器である。1143は胴部片であり、貼り付け突帯文の形跡が上部に僅かに残っている。文様は縦位の連続貝殻刺突文がやや密に施されており、外面の器面調整はナデ調整が行なわれた上から斜位の貝殻条痕が施されている。1144は口縁部片であり、平坦に整形された口唇部にはキザミが施されている。口縁部上端には3条の横位貝殻刺突文が巡らされ、その下位に楔形の貼り付け突帯文が2列巡らされているようである。楔形の貼り付け突帯の上部には刺突を施した痕跡が確認できる。1145は平坦に整形された口唇部にキザミを施し、口縁部上端に1条の横位貝殻刺突文を巡らせ、その下位に楔形の貼り付け突帯が1列巡らされる。器面調整はナデ調整を行なった上から横位気味の貝殻条痕が施されている。貼り付け突帯は器面調整後に貼り付けられた様で、突帯と隣合う突帯との間に横位の貝殻条痕が確認できる。また、縦長の彫り切り穿孔による補修孔が2箇所確認できる。1146~1148は同一個体と考えられ、ポテツとした厚みのある貼り付け突帯が施されている。文様は連続性の無い縦位や斜位の貝殻刺突文が施されている。



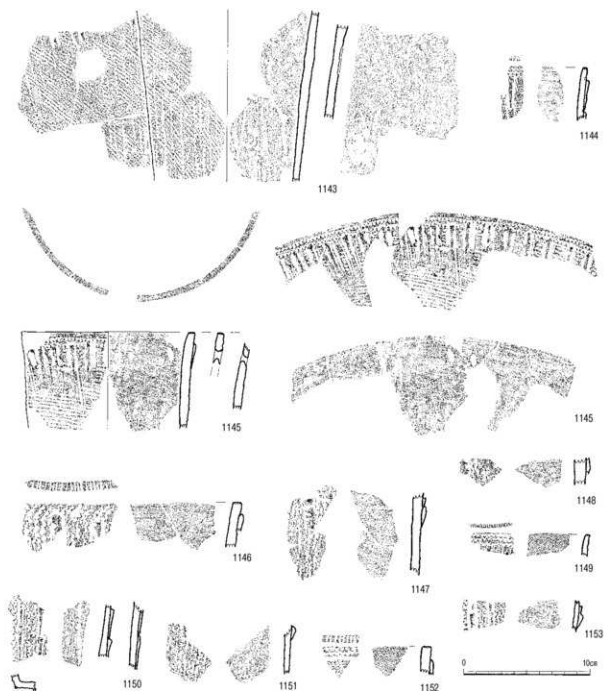
第91図 縄文土器91



第92図 縄文土器92



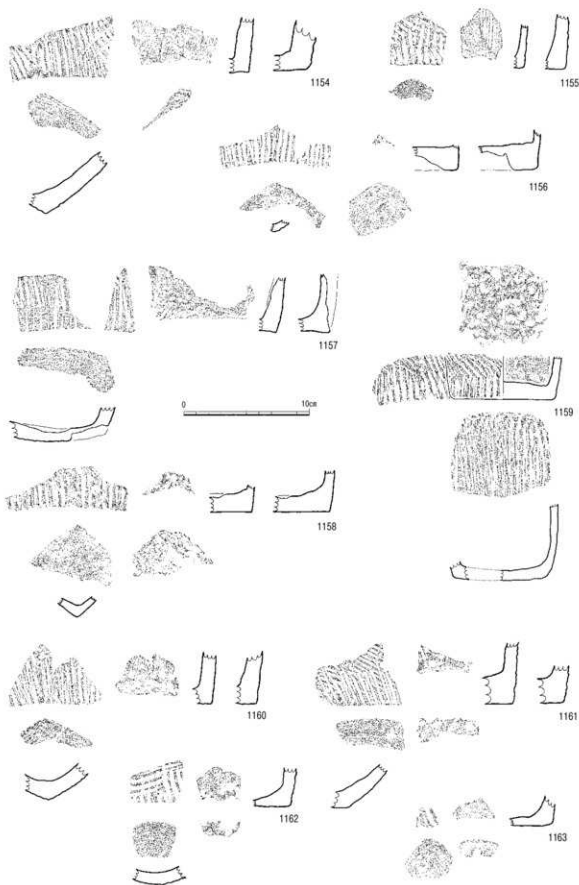
第93圖 縄文土器93



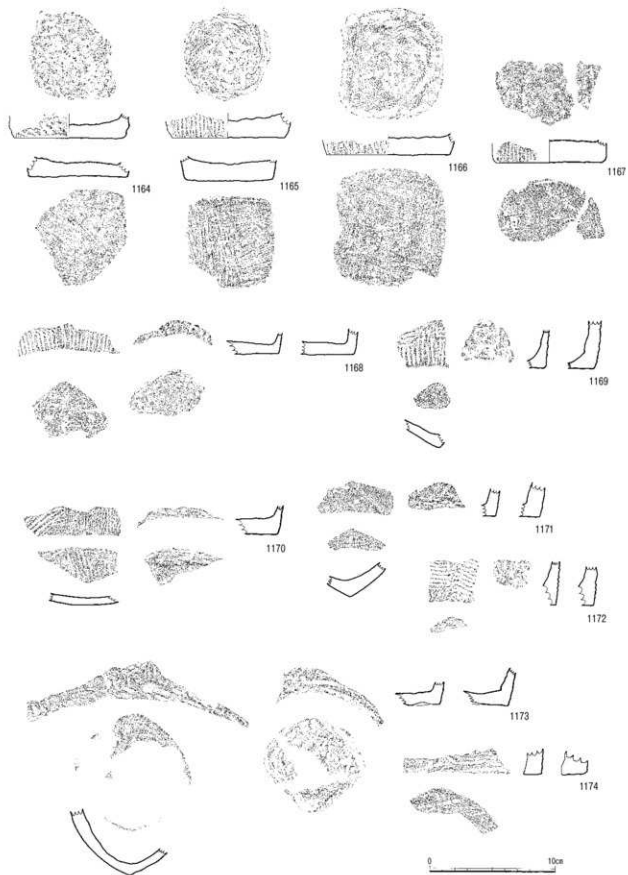
第94回 縄文土器94

2・3類土器底部 (1154~1174)

1154~1174は2類土器および3類土器の底部片と考えられる土器群である。特徴としては、外面の底部付近のみ斜位の貝殻条痕調整の上から縦位の貝殻条痕調整を施したり、ナデ調整を施した上から縦位の沈線文や細沈線文が施されている。2・3類土器は器壁が薄くなる傾向にあるが、底部は厚くなる傾向がある。2類土器と3類土器は非常に似通った底部を持つために破片資料での分類はあえてしなかった。1173はレモン形土器の底部片である。



第95図 縄文土器95



第96図 縄文土器96

4類土器 (1175~1177)

4類土器は文様が口縁部付近のみに集約される。

4A類土器 (1175・1176)

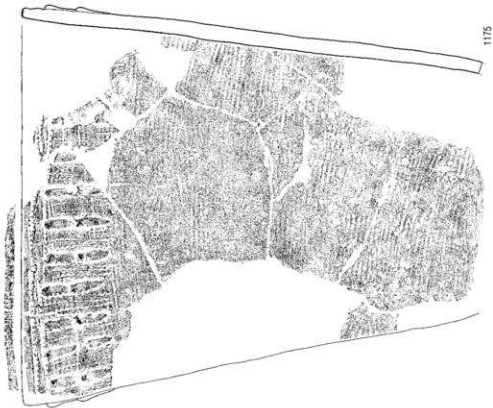
1175は底部から口縁部にかけて外傾するバケツ形の器形を呈している。口唇部は平坦に整形されキザミが施されている。口縁部上端には2条の横位貝殻刺突文が巡らされているが、貝殻腹縁を垂直に刺突する3類土器などに見られる刺突方法ではなく、貝殻腹縁を押し付けるような刺突が施されている。横位貝殻刺突文の下位にはボテッとした形状の厚みのある貼り付け突帯文が2列巡らされており、その隣り合う貼り付け突帯文の間には、縦位の貝殻刺突文が2条もしくは3条施されている。この貼り付け突帯文と貝殻刺突文は同じ長さで揃えられている。外面器面調整は横位の貝殻条痕調整が行なわれている。この貝殻条痕調整はナデられており非常に浅い調整となっている。内面調整は全体的にケズリが行なわれているが、口縁部付近では横位、胴部中ほどでは斜位、底部付近では縦位とその調整が行なわれる方向が変化している。残存部の最下部には底部との接合痕と考えられる接合面が確認できる。1176も1175と同様にバケツ形の器形を呈している。口唇部も同じく平坦に整形されキザミが施されている。口縁部付近には少しボテッとした貼り付け突帯文が2列巡らされている。1列目の突帯文を貼り付けた後に2列目の突帯文を貼り付けたと考えられ、1列目の突帯文の下部に2列目の突帯文が重なっている箇所が見られる。隣り合う貼り付け突帯文の間には2段の異なる貝殻刺突文が施されており、上段には貝殻刺突文を斜位に交わるように施しX字状の文様が2つずつ施されている。下段には縦位の貝殻刺突文が2条もしくは3条施されている。外面調整は器面全体に横位の貝殻条痕調整が行なわれている。3・4類土器に共通することであるが、1類土器と比較して小型の貝殻を用いて調整が行なわれていると考えられ、条痕の溝の幅が小さくなっている。内面調整はケズリが行なわれたあとにナデ調整が行なわれている。1176も1175と同じように底部との接合面が確認できる。

4B類土器 (1177)

1177は底部から胴部中ほどまではある程度のカーブをもって立ち上がり、胴部中ほどから口縁部にかけては緩やかに立ち上がる器形を呈している。口唇部は平坦に整形されているがやや外傾しており、キザミが施されている。口縁部上端には横位の貝殻刺突文が4条巡らされている。胴部には文様は施されておらず、斜位の貝殻条痕調整のみが行なわれている。内面調整はケズリ後にナデ調整が行なわれている。外面にはススの付着が観察でき、胴部下半にかけて多く付着している。

5類土器 (1178~1200)

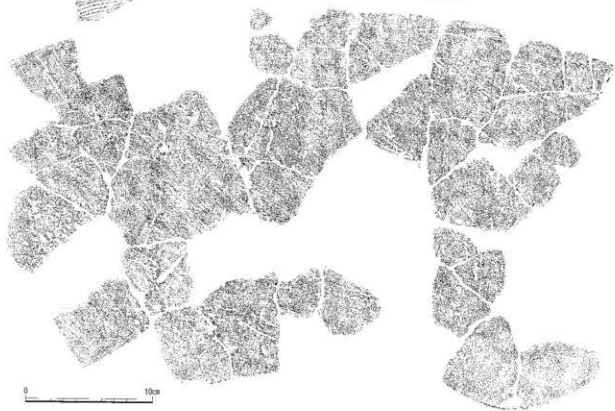
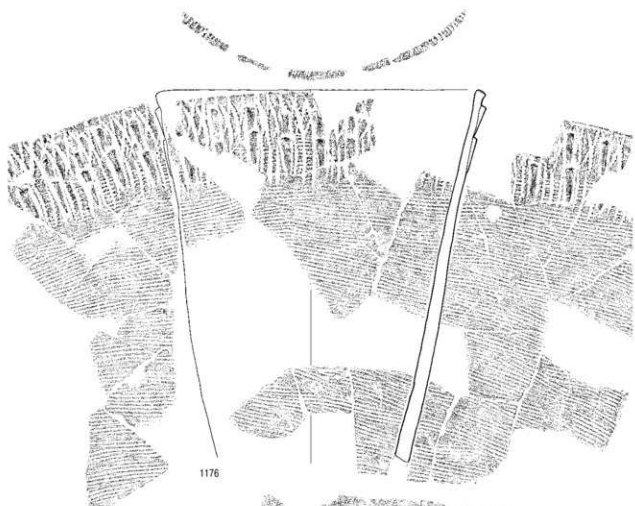
5類土器は胴部上半に楔形の貼り付け突帯文を施し、その他の面全体に縦位の貝殻刺突文を施す土器の一群である。少なくとも5個体の出土が見られ、すべて円筒土器であり、口唇部は平坦に整形されキザミが施されている。1178~1181は同様の文様構成を持つ口縁部片であり、口縁部上端に横位の貝殻刺突文を巡らし、その下位に2列の楔形の貼り付け突帯文が施されている。隣り合う突帯文の間や、胴部には縦位の貝殻刺突文が密に施されている。1182~1187は胴部片である。1188は底部付近の破片であり、底部付近のみ縦位の細沈線文が施されている。以上の土器はすべて外面器面調整にナデ調整が行なわれていることが、文様と文様の隙間から確認できる。1189~1200は基本的な文様構成は1178~1188と同様であるが、縦位の貝殻刺突文が貝殻腹縁を押し付けるような刺突文で施されている。1189は波状口縁を呈している。



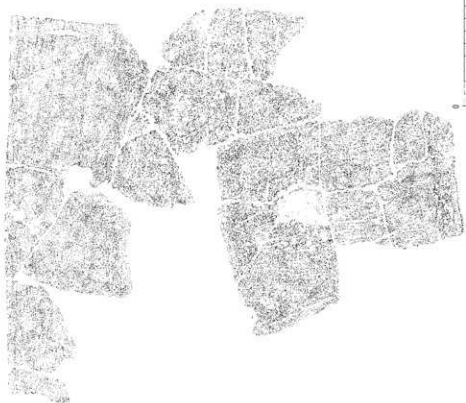
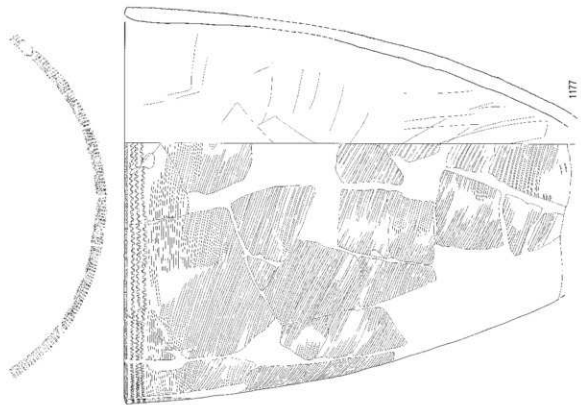
第97図 絹文土器97



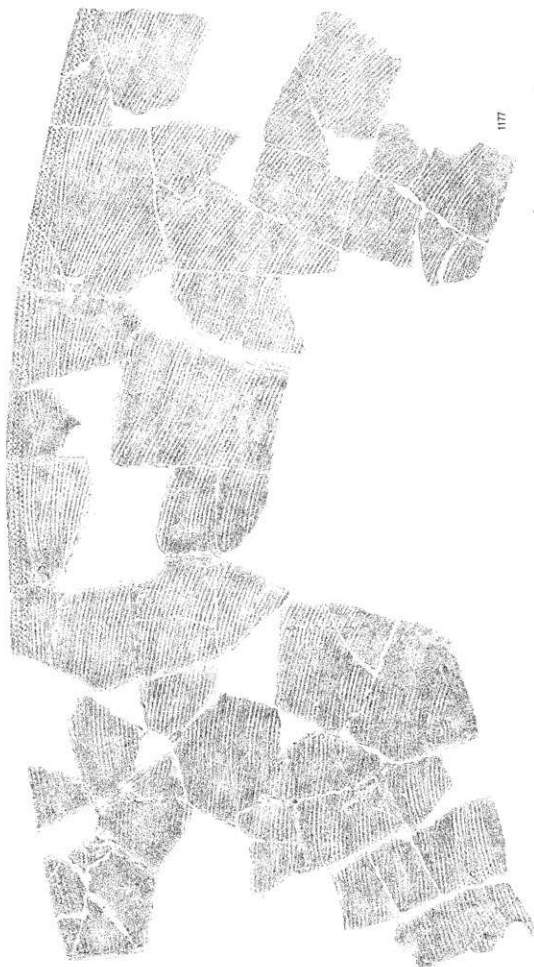
第98区 絹文土器98



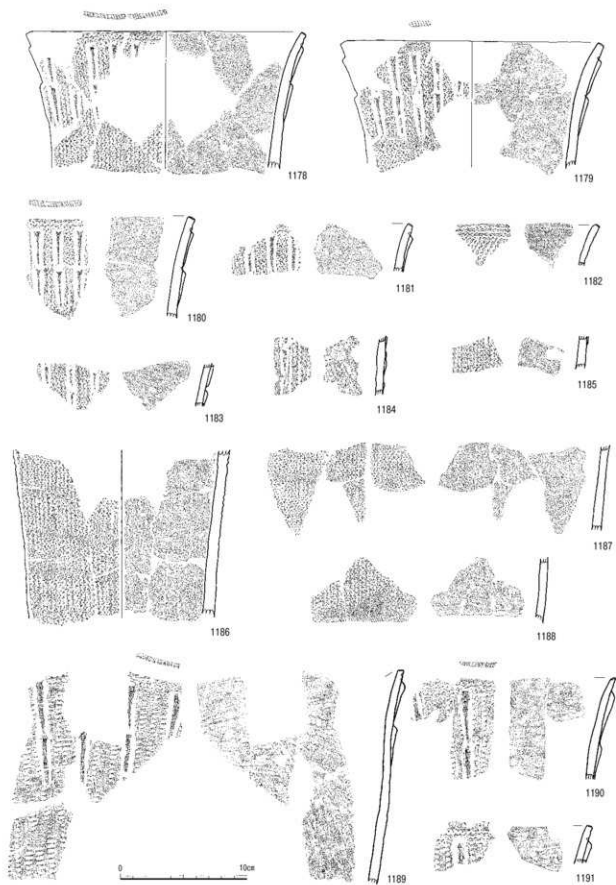
第99回 縄文土器99



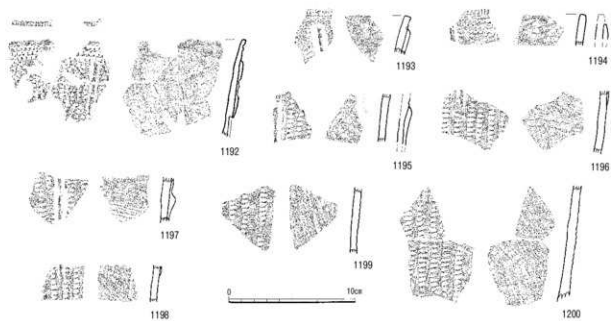
第100図 絹文土器100



第101图 絹文士器101



第102図 縄文土器102



第103図 縄文土器103

6類土器 (1201~1359)

6類土器は、口縁部に貝殻腹縁部による刺突文を有し、胴部には押型文が施されるという基本的特徴をもつ土器である。口縁部文様の違いにより、6A~6Cの3種類に分類した。胴部に押型文が施されるという点は共通である。

6A類土器 (1201~1221)

6A類土器は口縁部が緩やかに外傾する円筒形で、口縁部下にクサビ形突起、あるいはそれを意識したものと考えられる文様を有するものである。分類設定はしたものの、実際にクサビ形突起を有する土器は1201のみであった。しかも小片のため、同様にクサビ形突起をもつ3類土器や4類土器との違いも不明瞭な部分もあるが、1201は地文に横位の条痕が観察されることや突起がシャープなことから6類土器とした。

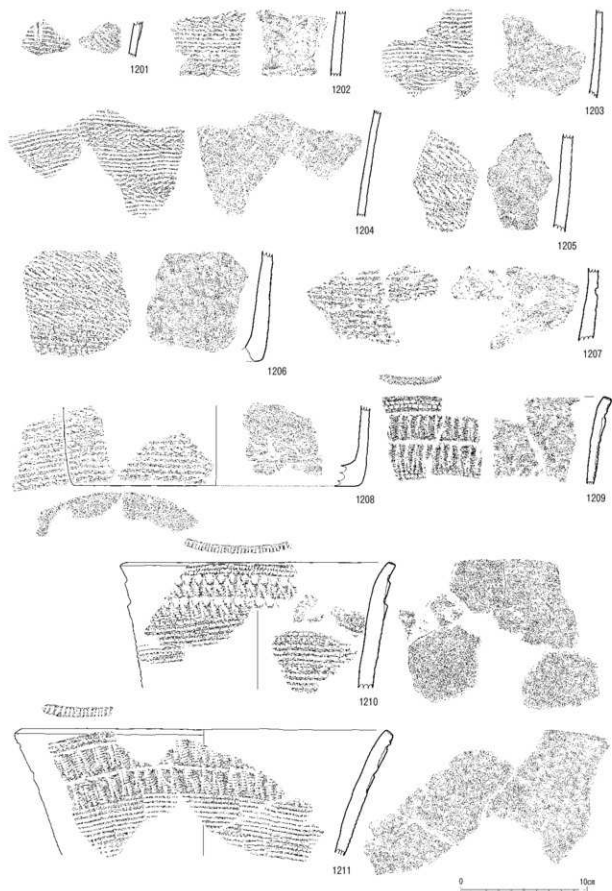
1202~1208は胴部に押引文だけではなく、二枚貝の貝殻の背面を押圧したと考えられる文様が見られるものである。吉田式土器が比較的多く出土する遺跡からは、この種の土器が一定程度出土する傾向がある。胴部片のみの出土であったが、前原遺跡A地点や大中原遺跡では、口縁部下にクサビ形突起が密に施された同タイプの土器が出土していることから、本報告でもここで取り上げた。1209~1221は貝殻腹縁部による縦位の刺突文をクサビ形突起様に施すものである。1209~1218は2段、1219は1段施文されたものである。

6類土器は、個体は異なっても規格性の高い文様構成をもつ。本類も平坦な口縁部に密な刻みがあること。口縁部直下には横位の貝殻刺突文が1ないし2段施されること。そしてクサビ形突起様の刺突文があり、胴部に押引文を施す。というような具合である。ところが本遺跡から出土した吉田式土器の特徴として、口縁部文様は明らかに吉田式土器であるのに胴部が横位の条痕文のみ、あるいはあっても極めて一部の押引文が浅くみられる土器の存在がある。1215がそうである。口縁部下にはまさにクサビ形突起を想起させる縦位の貝殻刺突文が施されているのに対し、吉田式土器の最大の特徴でもある「胴部の押引文」はわずかに残るのみである。もともと、「胴部の押引文」も全面押引文の場合と、押引文と条痕文を交互に施すタイプも多い。そのことを考えれば、押引文が見られないことは必ずしも吉田式土器の範疇から外される要因にはならないのかも知れない。同じような文様構成をもつ土器に倉園B式土器がある。この段階になると、すでに押引文は無くなり、基本的には斜位の条痕文様となる。「横」から「斜」へという流れである。ただし、1361や1362のように横位を基調とする条痕文があり、口縁部文様との関係も重要となってくる。吉田式土器から倉園B式土器への流れを構築する上で有効な情報である。

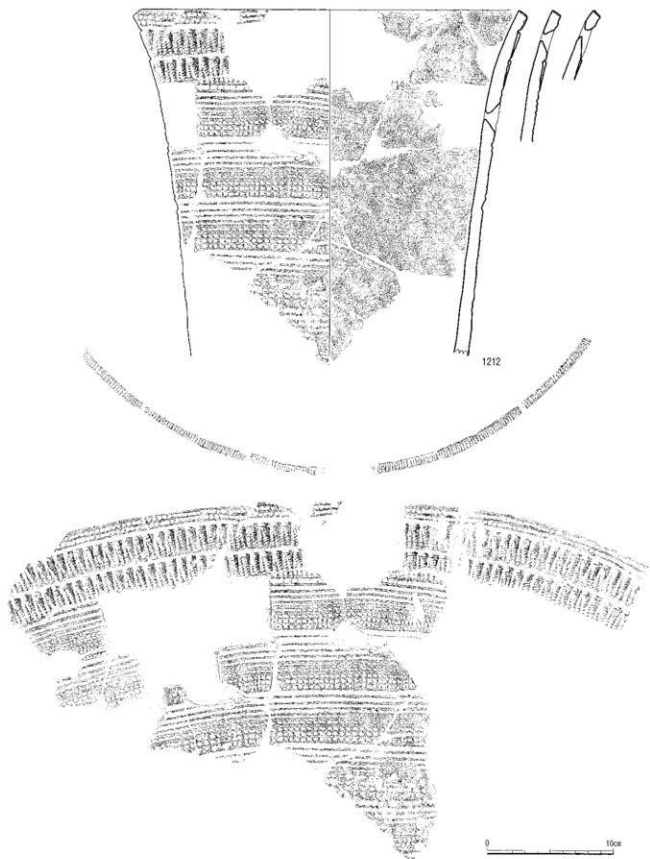
1215は口径28.1cm、底径21.3cm、器高33.1cmを測る完形資料である。1219~1221は同一個体と考えられる。1219はその完形復元図である。口径25.8cm、底径22.1cm、器高30.7cmを測る。胴部の押引文が極めて浅いという特徴をもつ。1212と1214には縦形、1218には円形穿孔の補修孔がみられる。

6B類土器 (1222~1290)

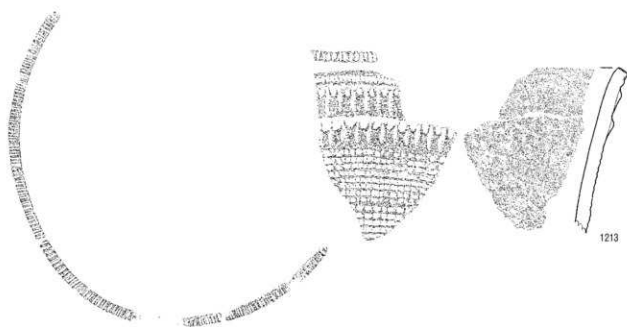
6B類土器は、口縁部下に貝殻腹縁部やへら状工具等による刺突文が施されるものである。刺突文は貝殻腹縁部による文様を縦位や斜位に施すもの、あるいは「C」字状に施すもの等がある。クサビ形突起の流れをくむ文様と考えられる。6A類からさらに単純化されたものと理解したい。胴部には押引文が横位に施されることを基本とする。



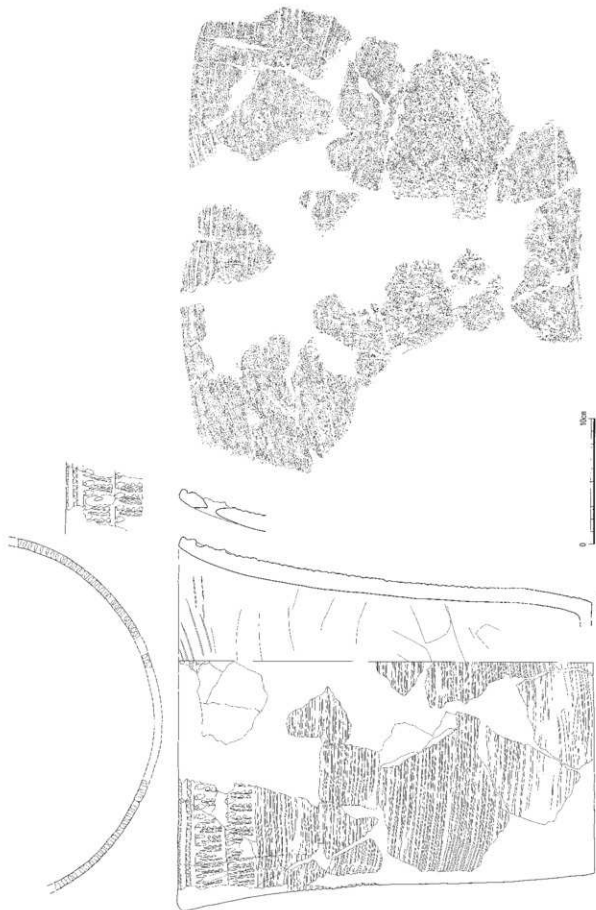
第104図 縄文土器104



第105図 縄文土器105



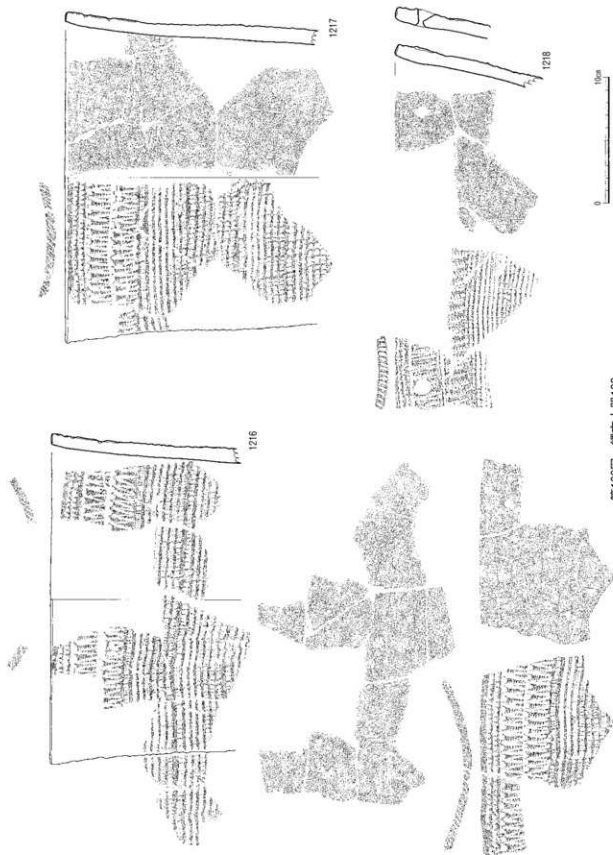
第106図 縄文土器106



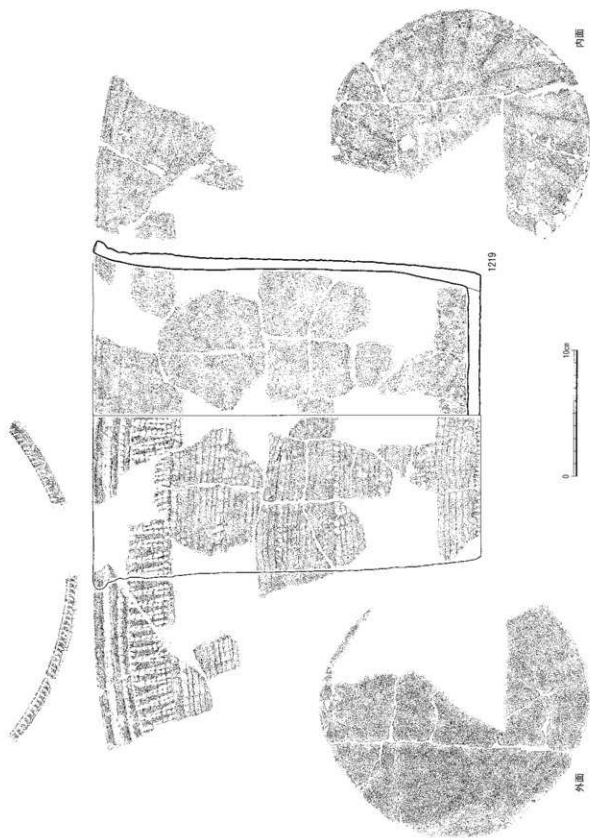
第107図 絹文土器107



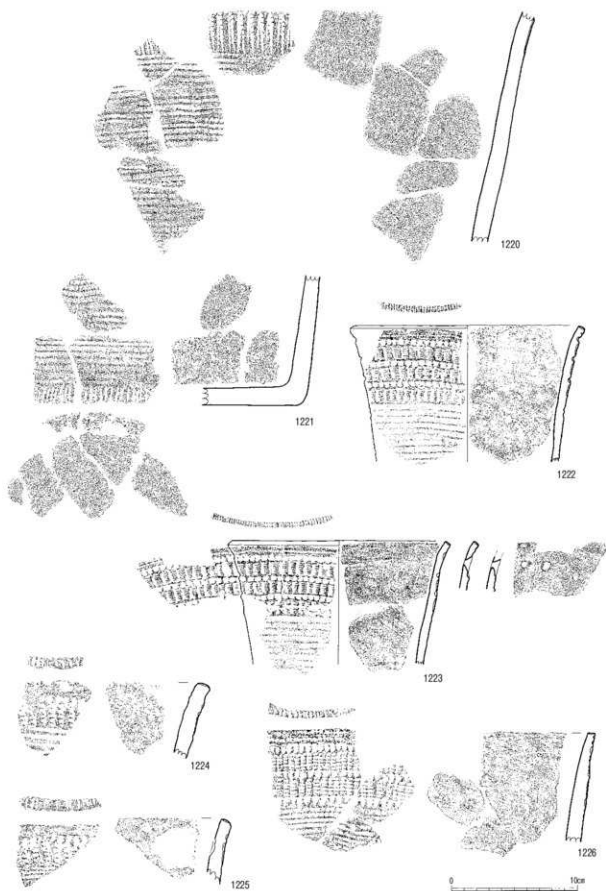
第1088图 補文士器108



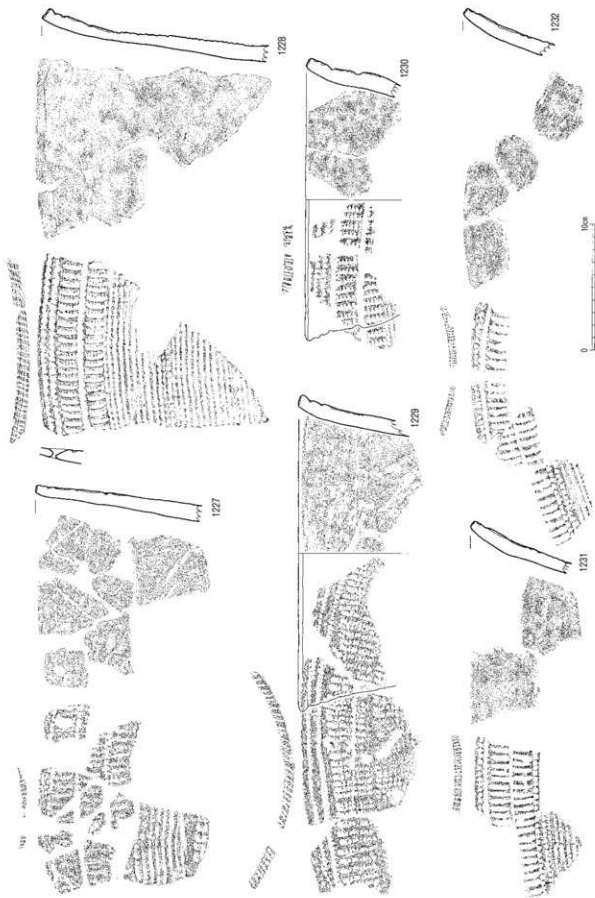
第109図 補文土器109



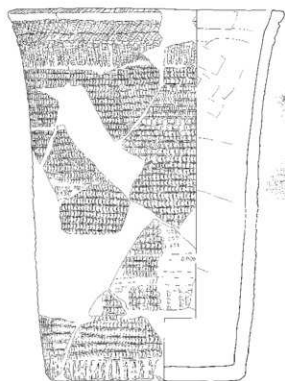
第110号 絹文土器110



第111图 縄文土器111



第112図 補文士器112



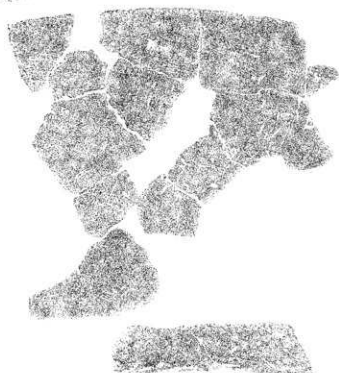
1233



外面

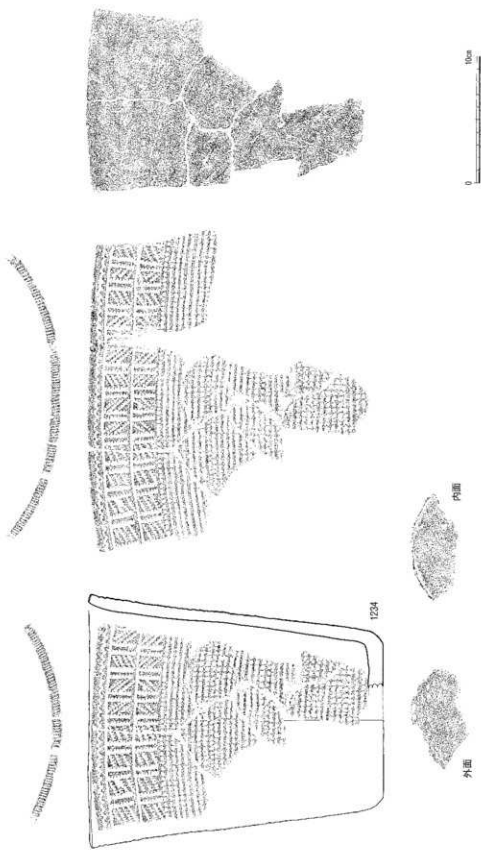


内面

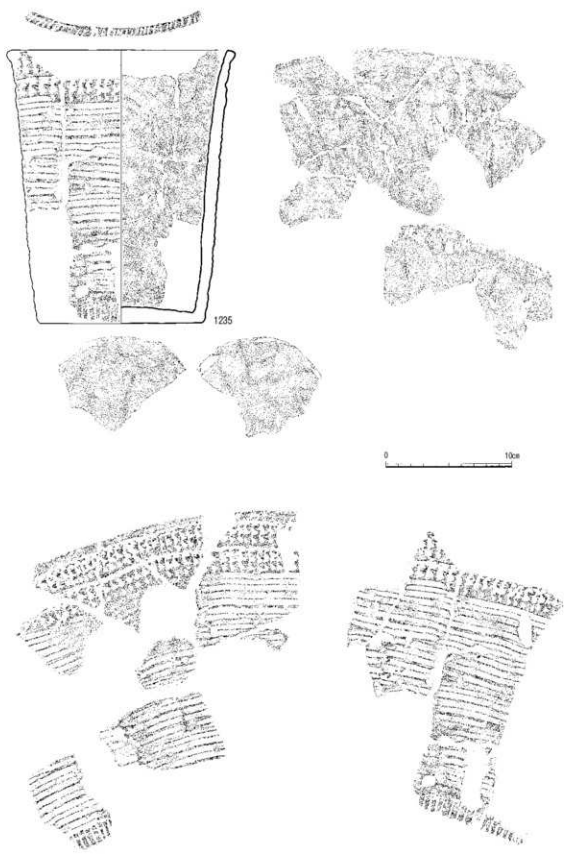


0 10cm

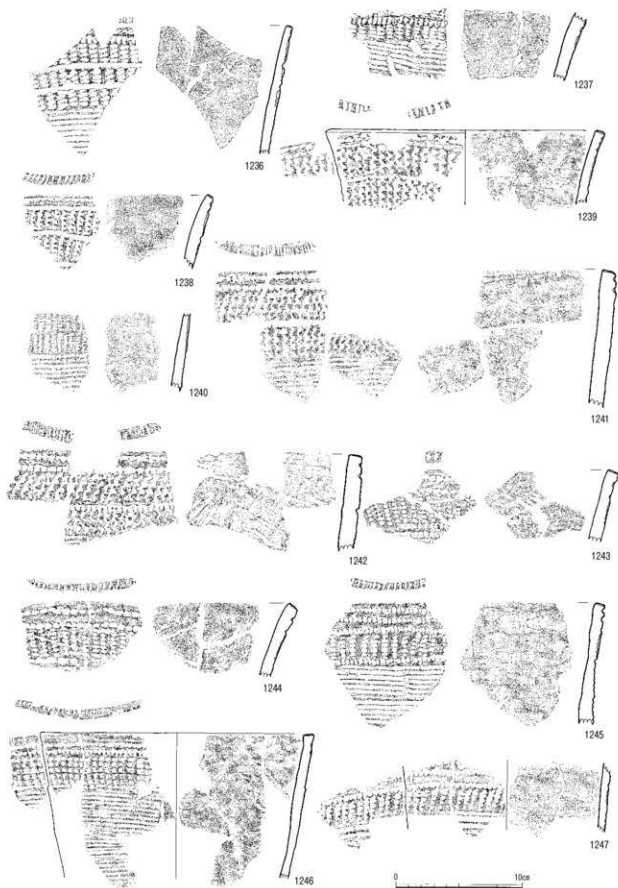
第113図 縄文土器113



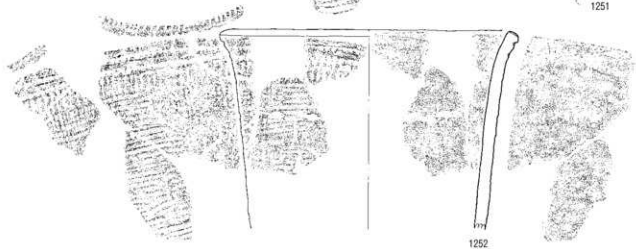
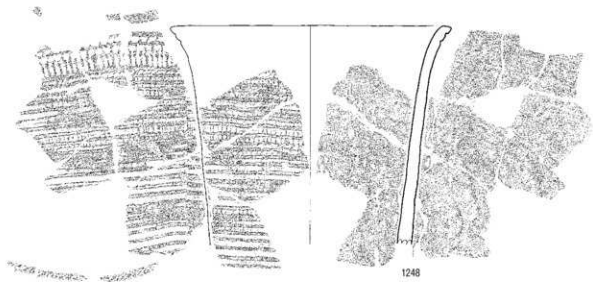
第114图 絹文土器114



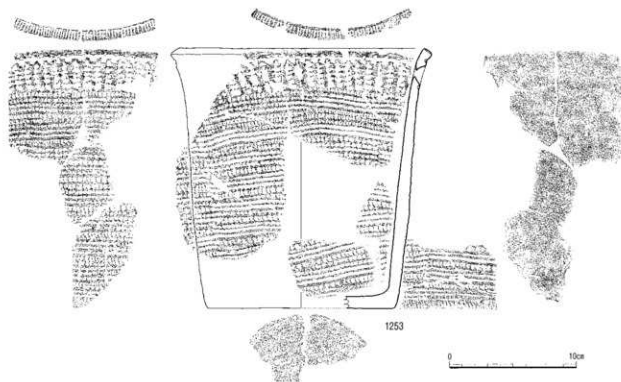
第115図 縄文土器115



第116図 縄文土器116



第117図 縄文土器117



第118図 縄文土器118

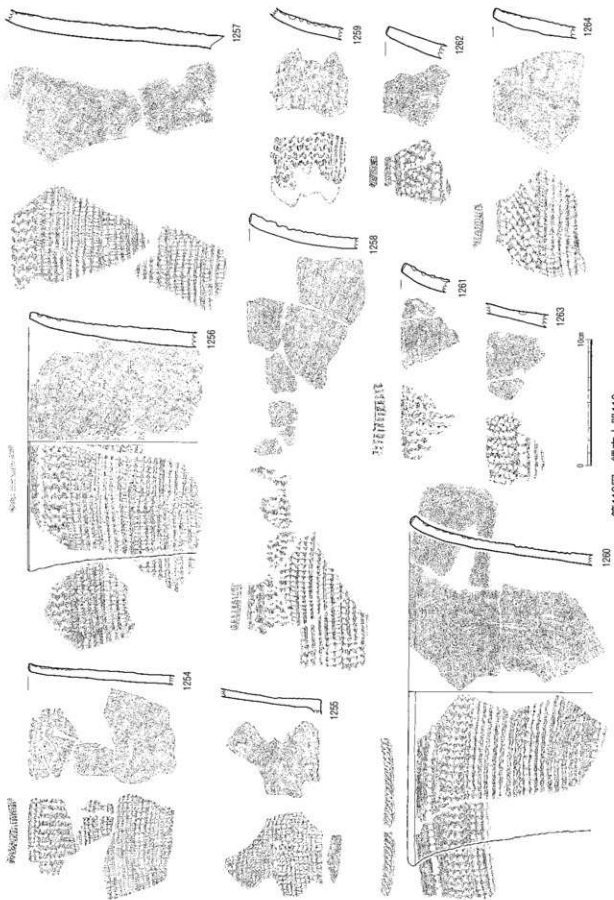
1222, 1223, 1226, 1233などは、縦位の貝殻刺突文が密に施されており、クサビ形突起の名残がみられるものである。1233は口径20.0cm、底径15.9cm、器高29.5cmを測る完形資料である。口縁部下に横位2段の貝殻刺突文と斜位・縦位の貝殻刺突文を組み合わせたもので、文様構成的には珍しいタイプである。胴部全面に押引文が施され、底部付近には縦のシャープな刻みが入っている。

1234も完形資料で、口径18.8cm、底径12.0cm、器高23.2cmを測る。口縁部下に縦位・横位・斜位の貝殻刺突文を幾何学的に組み合わせたもので、他にあまり類を見ない文様構成をもつ。胴部はほぼ全面に押引文が施されているが、段ごとに強弱をつけることで、文様効果を高める工夫がなされている。1233と同様に、胎土に雲母を多く含むという特徴がある。施文状況や整形等、極めて端正な土器である。

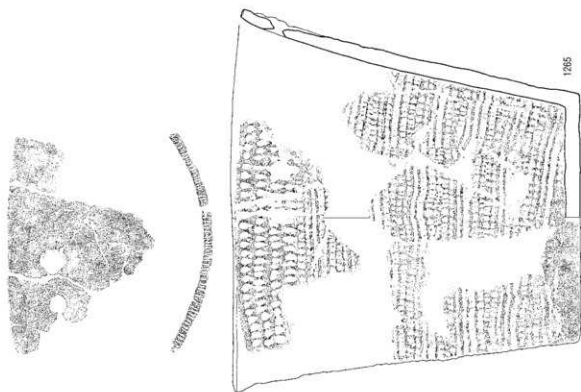
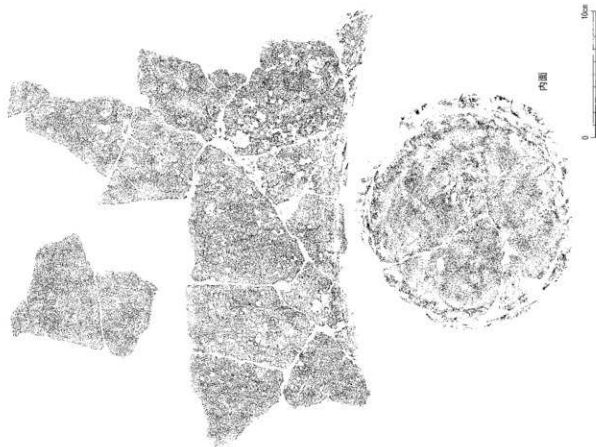
1235や1239, 1245等は縦位の貝殻刺突文がやや間隔を置いて施文されたものである。1235は口径16.8cm、底径13.0cm、器高21.8cmを測る完形資料である。口縁部下に横位と縦位の貝殻刺突文を上下交互に施文したものである。胴部には押引文も見られるがかなり浅く施文されていることから、全体的には横位の条痕文様の土器にみえる。

1248は口径22.2cmを測る土器で、口縁部下に横位2段の貝殻刺突文、そしてその下に縦位の貝殻刺突文が施されたものである。胴部には押引文と条痕文が交互に施文されている。口唇部が無文という点は珍しい個体である。

1253は口径20.6cm、底径14.8cm、器高20.4cmを測る完形資料である。口縁部下に横位1段の貝殻刺突文、そしてその下に縦位の独立した貝殻刺突文が施されている。胴部には押引文と条痕文が交



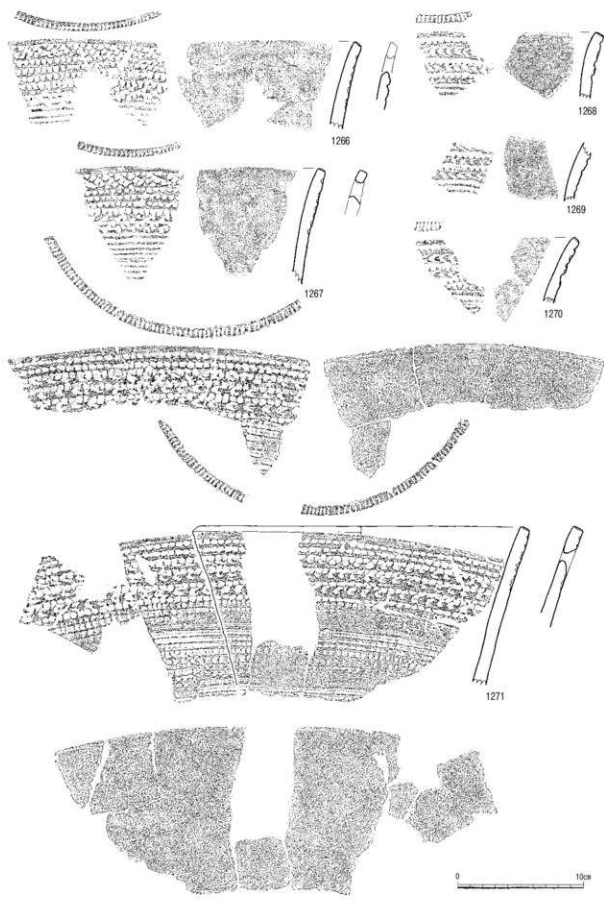
第119图 織文器119



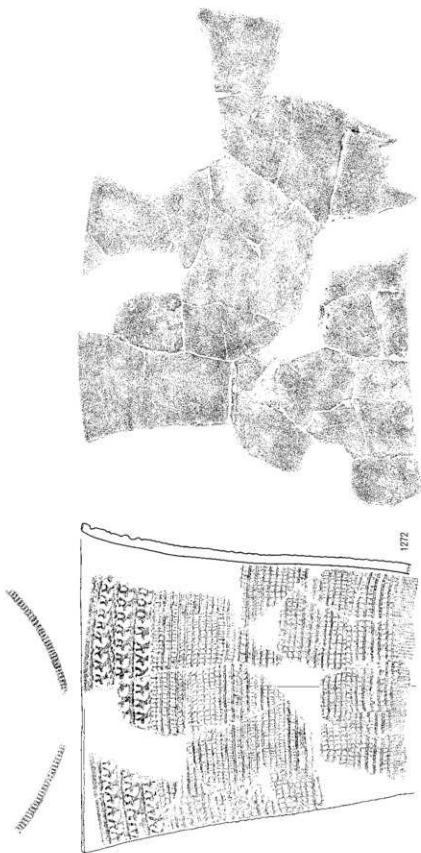
第120図 絹文士器120



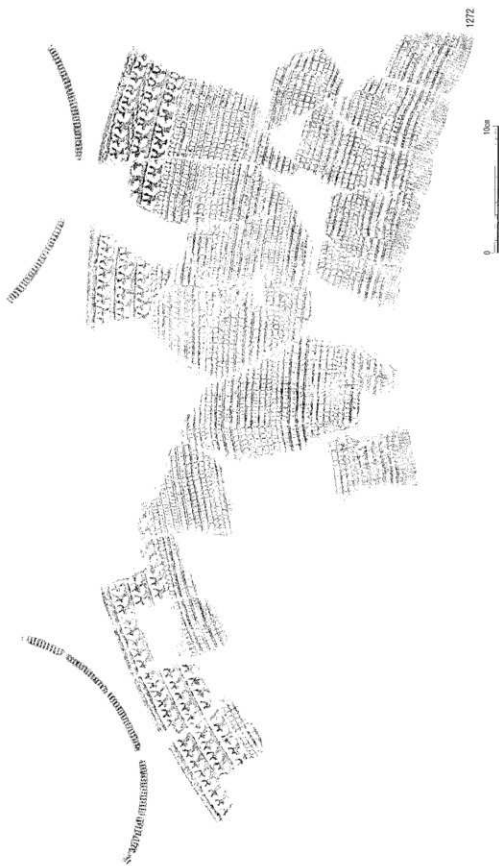
第121図 補文士器121



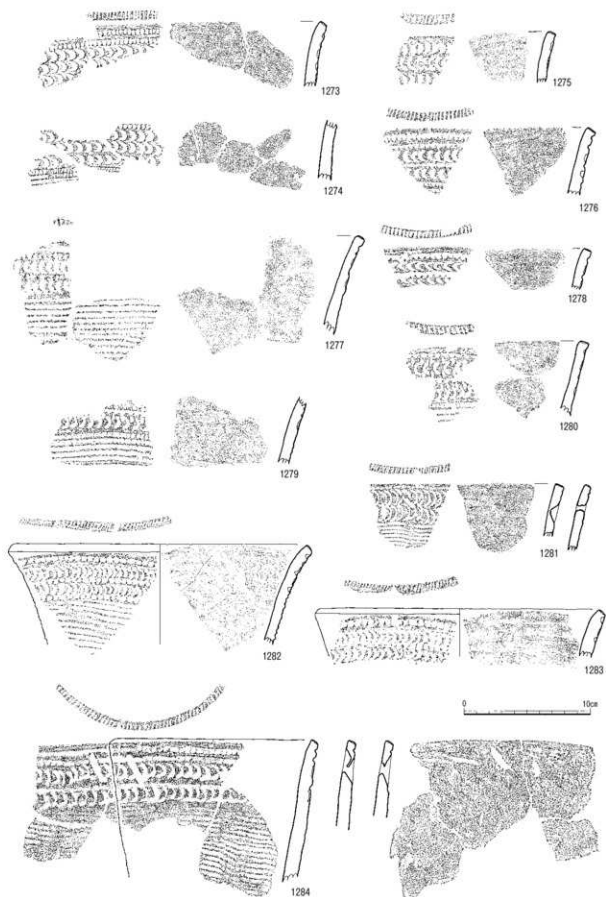
第122圖 縄文土器122



第123図 補文土器123



第124图 补文土器124



第125図 縄文土器125

互に施文されている。口唇部の刻みは細かくて密である。

1265は口径29.2cm、底径19.7cm、器高27.7cmを測る大形の完形資料である。口縁部文様は貝殻腹縁部による短刺突文を4段施すのみで、胴部の押引文と条痕文の交互文様へと続いている。口唇部には細い刻みが施されているが、底部からの立ち上がり部分には無文帯が存在する。円形穿孔の補修孔がある。口径や底部系のわりに器高が低いため、バケツ状の器形を呈している。

1268～1288は口縁部文様に「C」字状の刺突文が施されるものである。

1272は口径26.2cmを測る土器で、ほぼ関係に近い資料である。底部からの立ち上がり部分に施される刻みが明瞭であることを考慮して推定した器高は約27.0cmである。口縁部には、まず口唇部直下に横位の貝殻刺突文が1段施され、それより下位に貝殻腹縁部による「C」字状の刺突文を3段施したものである。また、上から1段目と2段目の間には斜位の貝殻刺突文を入れている。

1273～1284は「C」字状や逆「C」字状の刺突文が明瞭に残された土器である。施文具としては半截竹管状のものや、大形のアナガラ属二枚貝の貝殻腹縁部を利用したもの等が考えられる。1275や1280のように「C」字状と逆「C」字状の刺突文が同一個体に施されてものもある。

刺突文は2段以上施されるものが多い中で、1285～1288は1段施文の例である。1285は口径22.8cm、底径16.4cm、器高24.6cmを測る完形資料である。口唇部直下に横位2段の貝殻刺突文を、その下に「C」字状刺突文を1段施すものである。胴部には押引文と条痕文の交互文様が全面に施されている。

1286も完形資料で、口径17.8cm、底径12.0cm、器高20.3cmを測る。口縁部の文様構成は1285とほぼ同様であるが、刺突文が逆「C」字状に施文されている違いがある。胴部にはほぼ全面に押引文が施されているが、押し引きに強弱をつけることにより、交互文様をなしている。「押引文+条痕文」という組み合わせだけではなく、「押引文(強)+押引文(弱)」という組み合わせがあることがわかる。

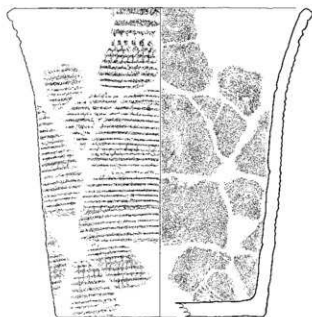
6C類土器 (1291～1318)

6C類土器は、口縁部下に貝殻腹縁部による横位の刺突文を1～数段施すものである。胴部は押引文を横位に施す文様を基本とする。端正な横位の貝殻条痕文のみのものも含まれた。

1291・1294は口縁部下に横位5段の貝殻刺突文が施されている。本遺跡の資料では最も段数が多い土器である。1291の胴部には押引文が顕著に施されているが、1294の胴部は横位の貝殻条痕文のみである。1295と1296が同一個体と考えられる胴部から底部の資料である。これらにもやはり明瞭な押引文はみられない。横位の条痕文は端正な仕上げで、横方向という強い意識が働いていると考えられる。底部からの立ち上がり部分に見られる刻みもシャープで密であることから、6類土器の範疇として捉えた資料である。

1297は口径24.2cm、底径14.8cm、器高25.0cmを測る完形資料である。口縁部下に横位4段の貝殻刺突文があり、胴部には強弱をつけた押引文の交互文様が施されている。刺突文と押引文の境界に縦位の貝殻刺突文がみられる。密に施され、押引文との中間的な状況がみられたことからここで取り上げた。口唇部には細くて浅い刻みが施されている。また、底部からの立ち上がり部分にも口唇部同様の浅くて短い刻みが見られる。

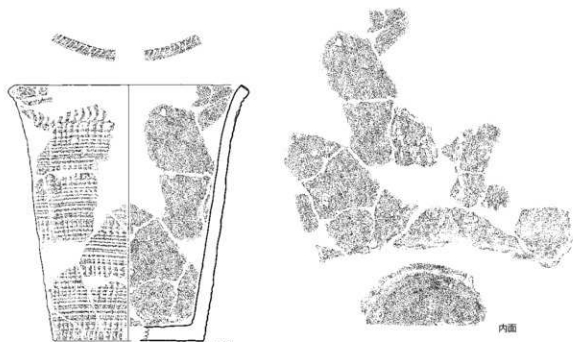
1298は口径15.4cm、底径11.8cm、器高18.35cmを測る小形の完形資料である。口縁部下に横位2



1285



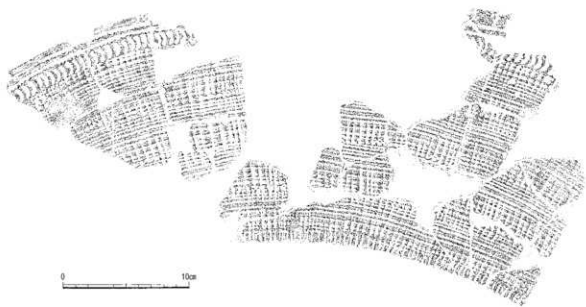
第126図 縄文土器126



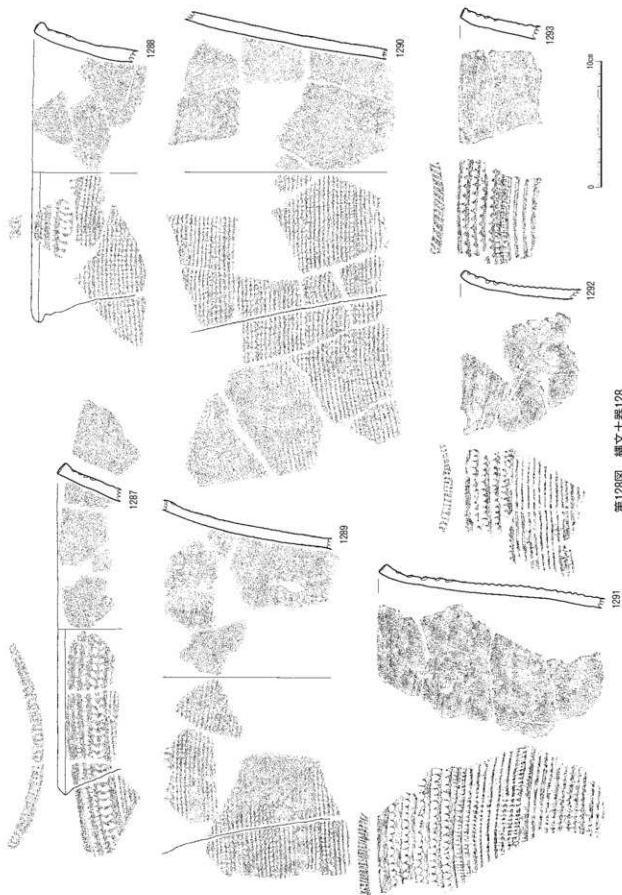
1286



外面



第127図 縄文土器127



第1288图 絹文土器128

段の貝殻刺突文が施されている。その他は器面全体に押引文が施されている。口縁部下の刺突文が浅いため、押引文との区別がつかない部分もある。

1299は関係に近い資料で口径20.4cm、現存器高21.0cmを測る。口縁部下に横位4段の貝殻縁線部による短刺突文が施されている。胴部全面に押引文が見られるが、部分的にナデ消したような痕跡があり、文様効果を狙った意図的な表現のような様子も見られる。

1300は口径20.5cm、底径12.8cm、器高20.2cmを測る完形資料である。口縁部下に横位3段の貝殻刺突文、胴部には横位の貝殻条痕文が施されるものである。胴部文様には若干押引文的な部分も見られることからここで取り上げた。口唇部には刻みが見られるが、底部の立ち上がり部分は横位の条痕文のみである。底部から口縁部へ直線的に開くバケツ状の器形を呈している。

1318は口径19.2cm、底径13.6cm、器高22.0cmを測る完形資料である。口縁部下に横位1段の貝殻刺突文がみられ、胴部には押引文と条痕文の交互文様が施されている。横位刺突文の直下にはあたかも縦位の貝殻刺突文的な文様が見える。これは胴部の押引文との境界を意識したものと考えられるが、貝殻と土器面との距離の違いがもたらす文様効果の1つであろう。口唇部には斜の刻みが施され、低分等の立ち上がり部分の短いながらもやや太めの刻みがみえる。

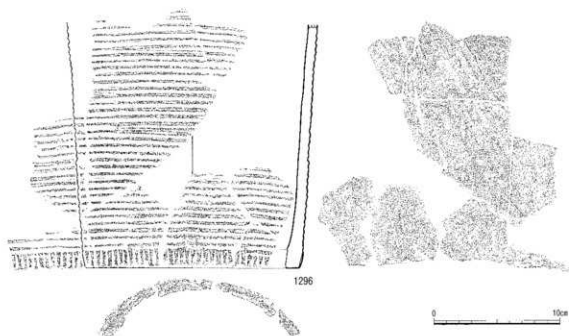
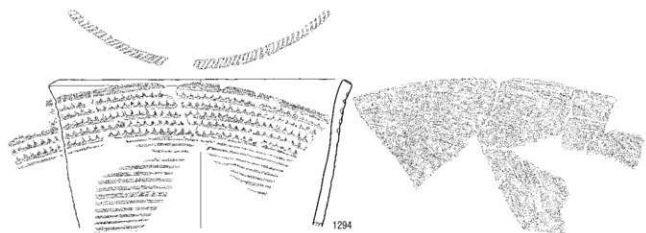
1319～1359は胴部から底部、あるいは底面のみ資料である。6類土器の胴部文様については、これまでも述べてきたように、器面全体を押引文で飾るもの。強弱をつけた押引文による交互文様をもつもの。押引文と条痕文による交互文様をもつもの。横位を強く意識した条痕文のみのものの4つのパターンがみられる。押引文そのものも単に強弱だけでなく、引き具合に長短があったり、やや小刻みに上下しながら押日いて、やや波状を呈するもの等もある。地域差や個人差、いろいろであろうが、押引文様は、時間と手間のかかる施文法を選択した人々の共通の思い入れみないものが強く感じられる表現法である。

底部から胴部への立ち上がり部分に見られる刻みについては、6類土器の多くに見られる文様である。細くてシャープな線形をなすのが特徴で、施文具を下から上へ跳ね上げたような施文が多い。つまり、底部から同部に行くに従い、線が細くなっているものが多いということである。また、なかには1347や1348のように刻みでなく、縦位の貝殻刺突文が施されたものもある。他の遺跡でも類例があり、一定程度存在するタイプのようである。

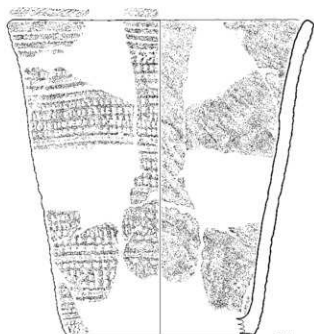
底部の残存状況を観察すると、1349のように底面の外側から粘土を積み上げたと思われる例もあるが、1337～1340のように完全に外側まで残るものが多いことから、6類土器の多くは底面の縁辺に粘土を積み上げて整形していったものと考えられる。

また、底部は内外面共に平滑に仕上げ、器壁も均一なものが多い。接合面で割かれた円盤状の底面は、それが1つの製品のような完成度が漂っている。また、底面は磨いたように光沢感が見られる。

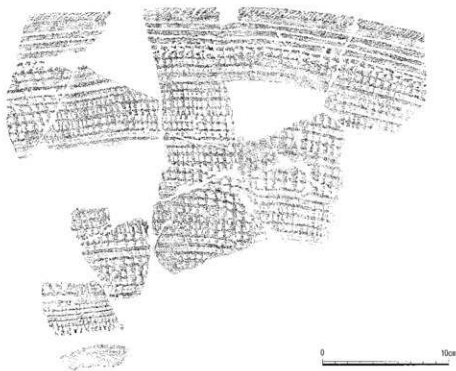
さて、定塚遺跡から出土した全土器の胎土を観察した大久保浩二氏によると、6類土器に雲母・正長石が多く含まれるという特徴があるという報告がなされている(第七章参照)。これまでも吉田式土器や下?峯式土器等には雲母が入っている例が多いという漠然としたイメージがあった。本遺跡では、6類土器の24.5%に含まれているという数字が出ている。これは次の3類(加栗山式土器)が10.8%、2類(志風頭式土器)が10.5%であることを考慮すれば高い数字と言える。縄文人の行動パターンを追究する上で有効な研究テーマといえる。



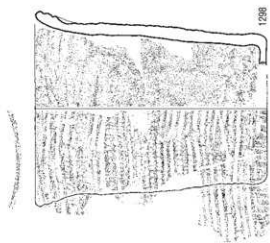
第129図 縄文土器129



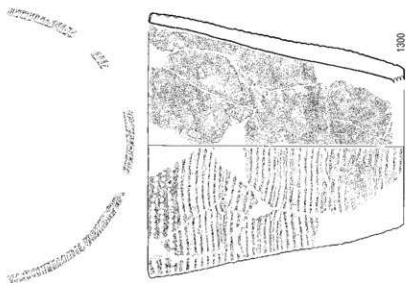
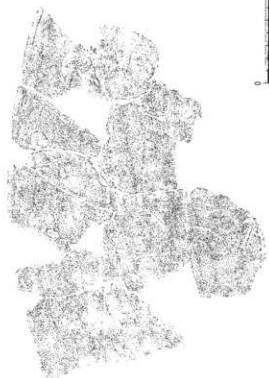
1297



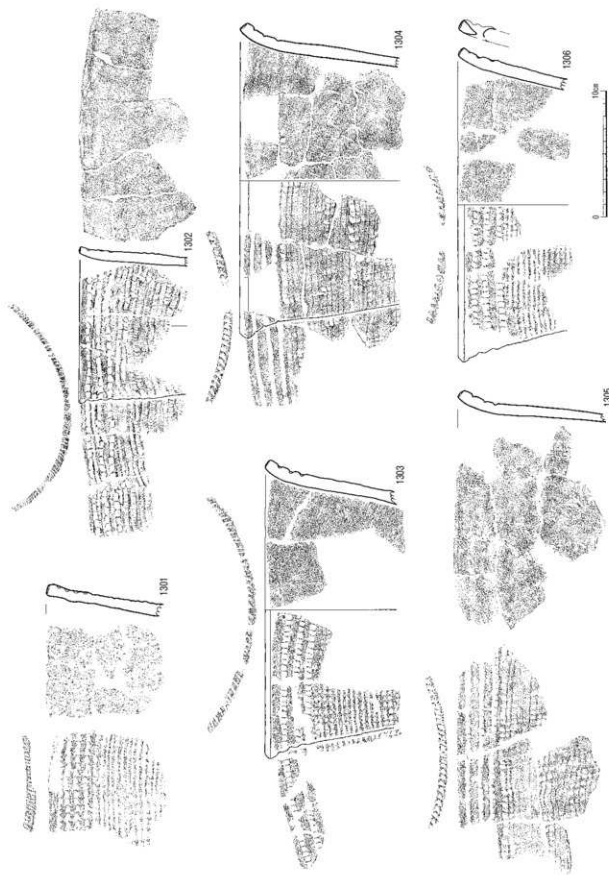
第130図 縄文土器130



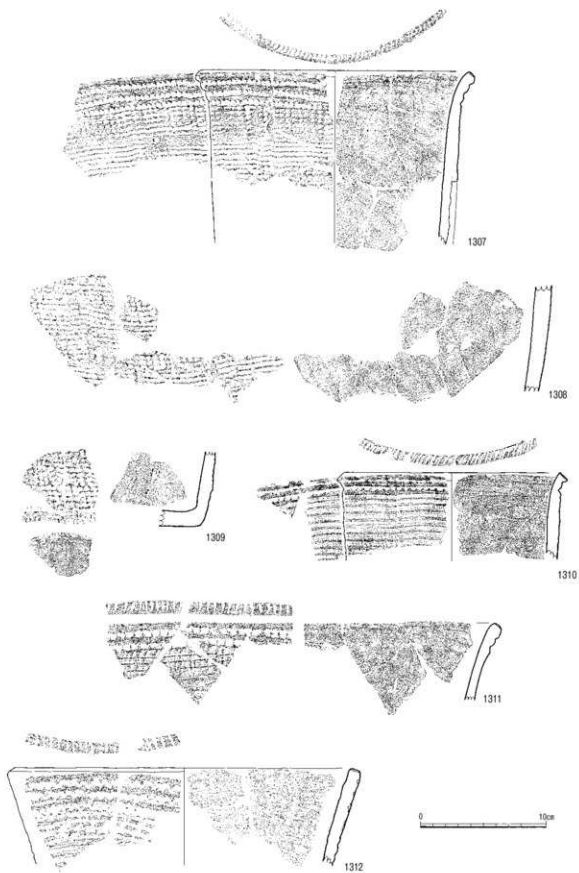
第131图 补文土器131



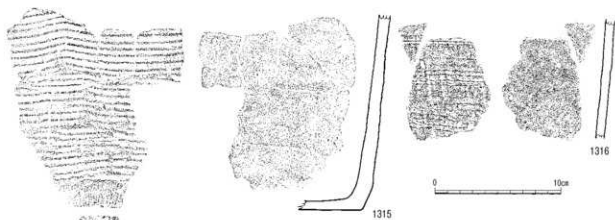
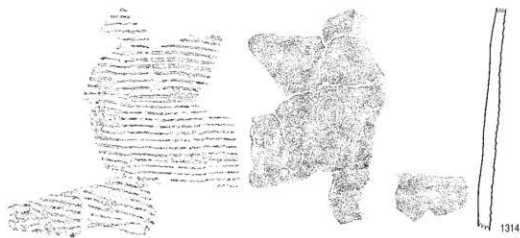
第132图 补文土器132



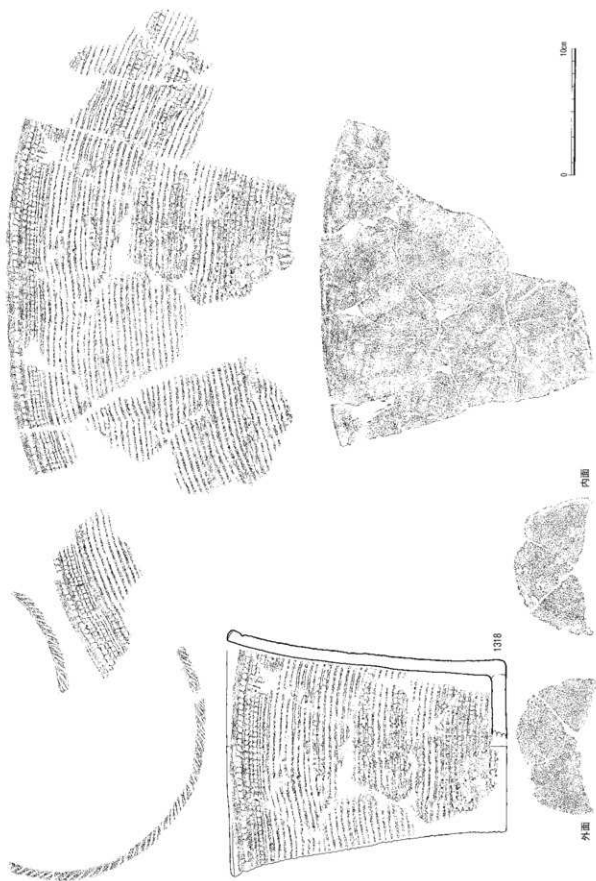
第1333図 補文士器133



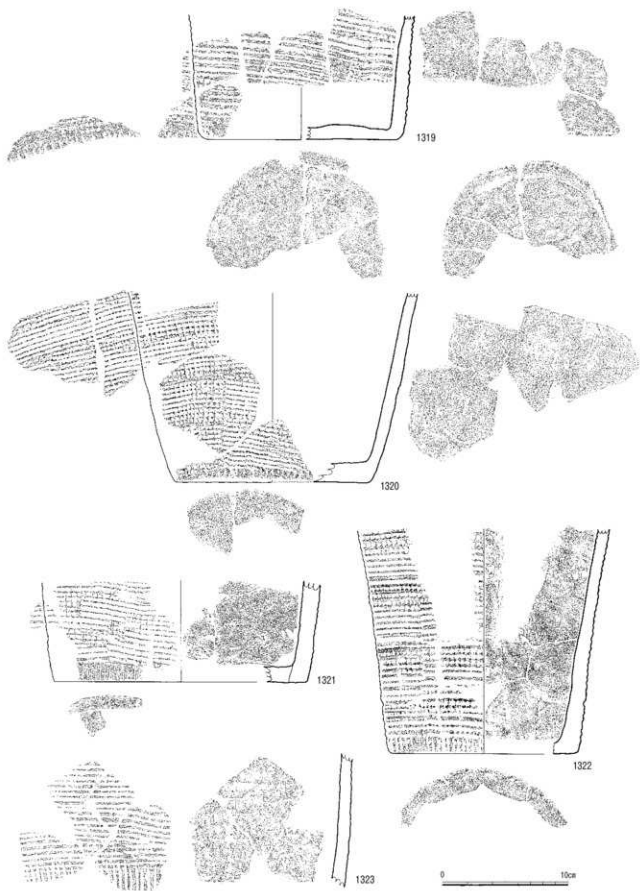
第134図 縄文土器134



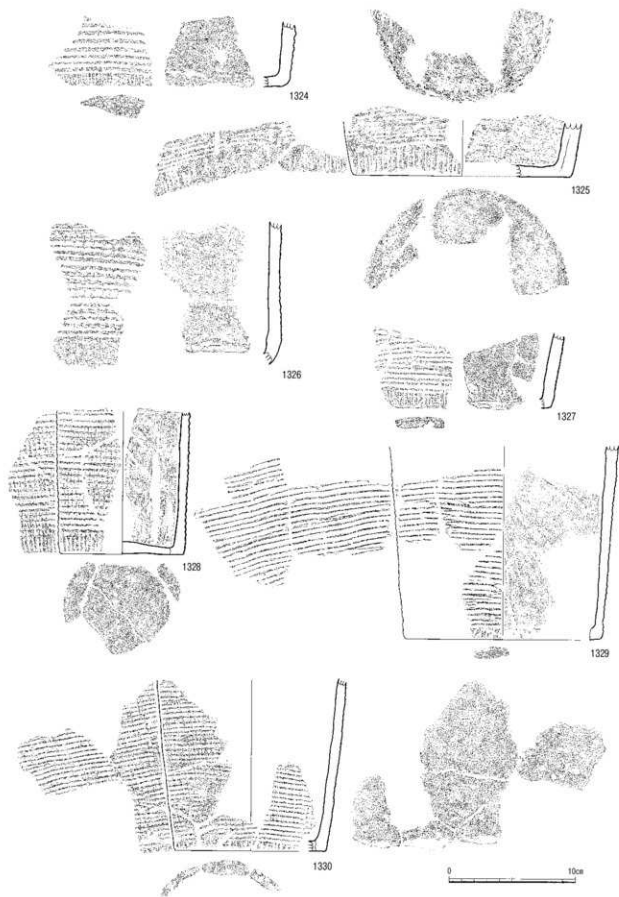
第135図 縄文土器135



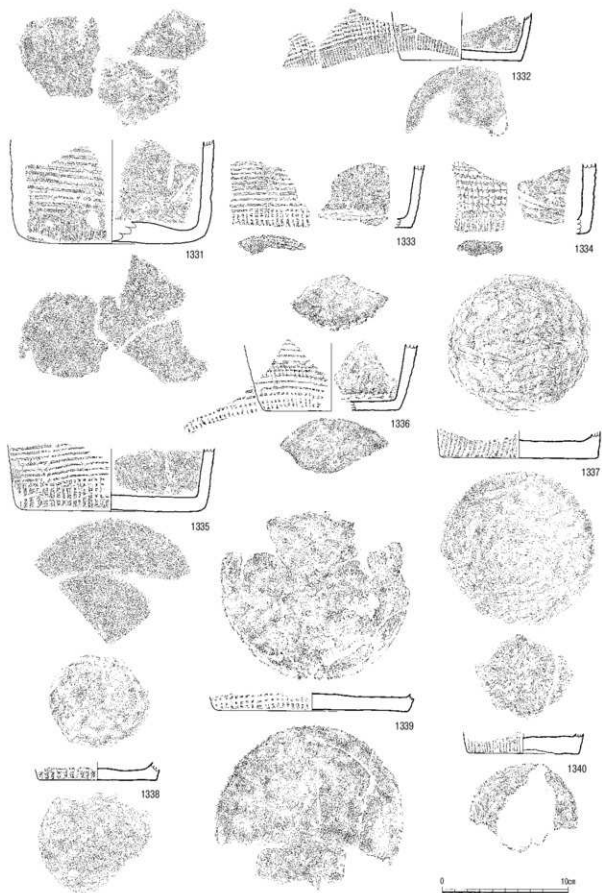
第136図 補文土器136



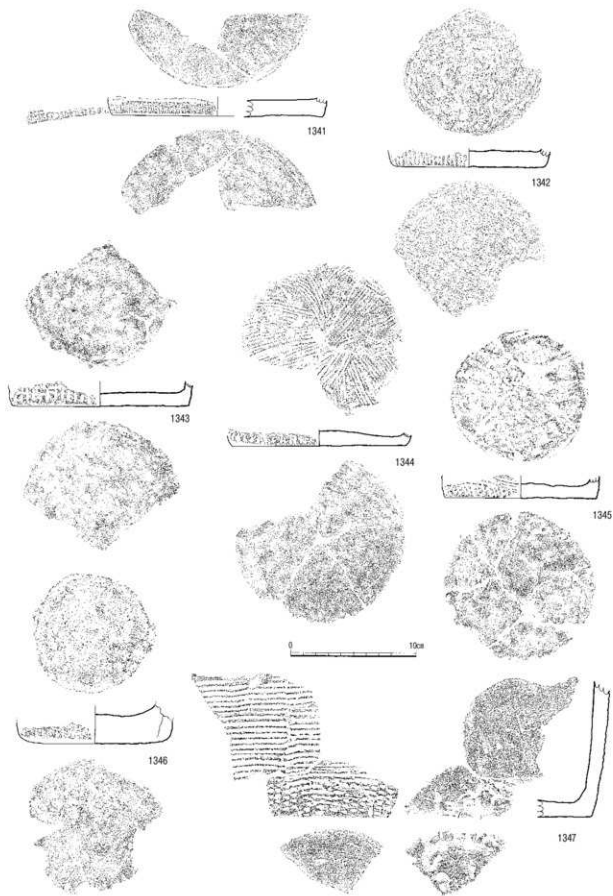
第137图 绳文土器137



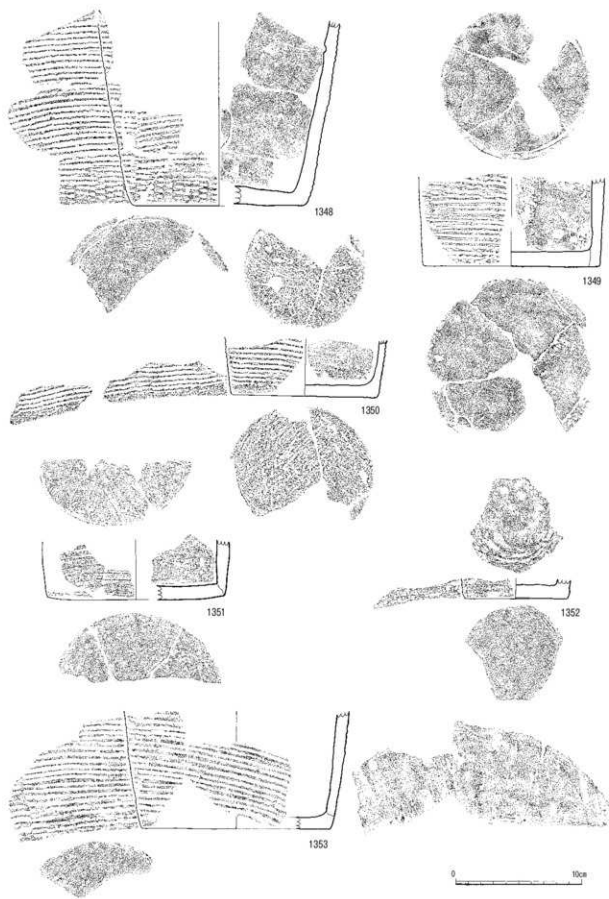
第138図 縄文土器138



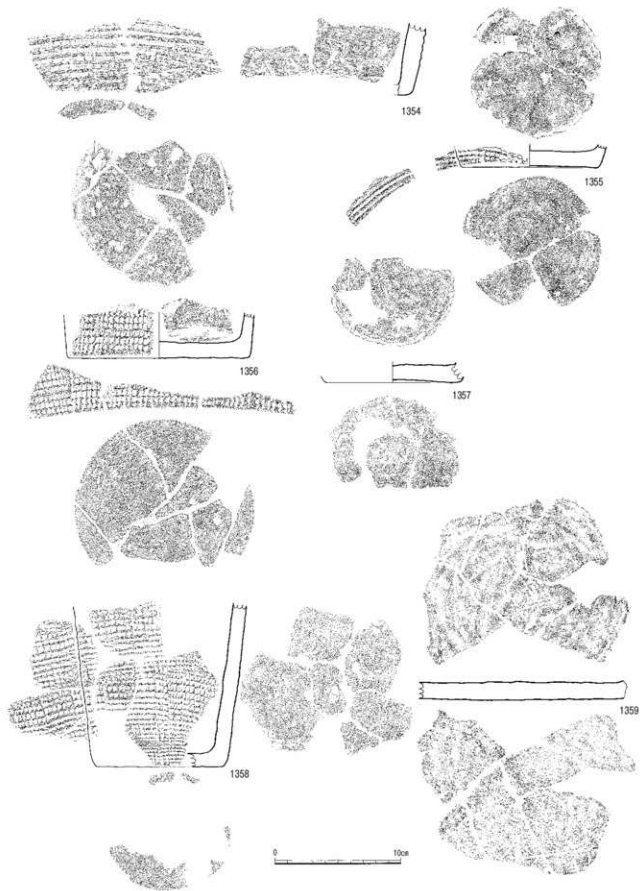
第139図 縄文土器139



第140图 縄文土器140



第141図 縄文土器141



第142図 縄文土器142

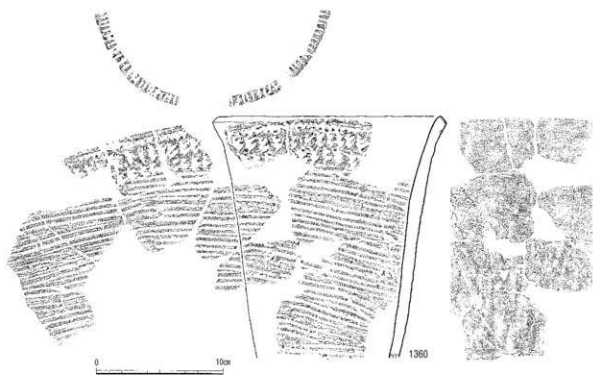
7類土器 (1360~1368)

7類土器は、口縁部が緩やかに外傾する器形を基本とする土器である。口縁部径と底部径が近く、直線的な立ち上がりを示すものもある。底部は明瞭な平底を呈する。口縁部は平縁で、口唇部は平坦面を有する。また、文様は口縁部下に貝殻腹縁部による刺突文を横位・縦位・斜位に施すものである。ここまでは6類土器（特に6B、6C類）とはほぼ同じ内容である。相違点は胴部文様である。6類土器が横位の押引文を基調とすることに対し、7類土器は斜位の条痕文を基調とする。ただし、明瞭に区別が付かない個体があることも事実である。型式分類として進めているが、個体によっては分類を超えて時間を共有しているものもある可能性が高い。

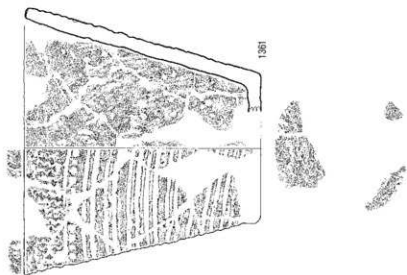
1360は完形近く復元できたもので、口径18.2cm、現存器高18.8cmを測る。口縁部下に横位1段の貝殻刺突文と縦位の貝殻刺突文を上下2段に施している。胴部には横位から斜位の明瞭な貝殻条痕文が施されている。口唇部は平坦で、丁寧な刻みが巡る。

1361は口径21.2cm、底径12.0cm、器高18.8cmを測る完形資料である。口縁部下に横位1段の貝殻刺突文と縦位の貝殻刺突文、さらには連点状刺突文を施したものである。問題は胴部文様である。条痕というより沈線的な施文で全体を飾るものである。器形はバケツ状を呈する。これは6C類土器の範疇なのか7類土器に入れた方がいいのか悩む土器である。胴部文様が横位ではあるものの、押引文からはほど遠いことを考慮して、ここでは7類土器の項で取り上げた。今後の課題である。

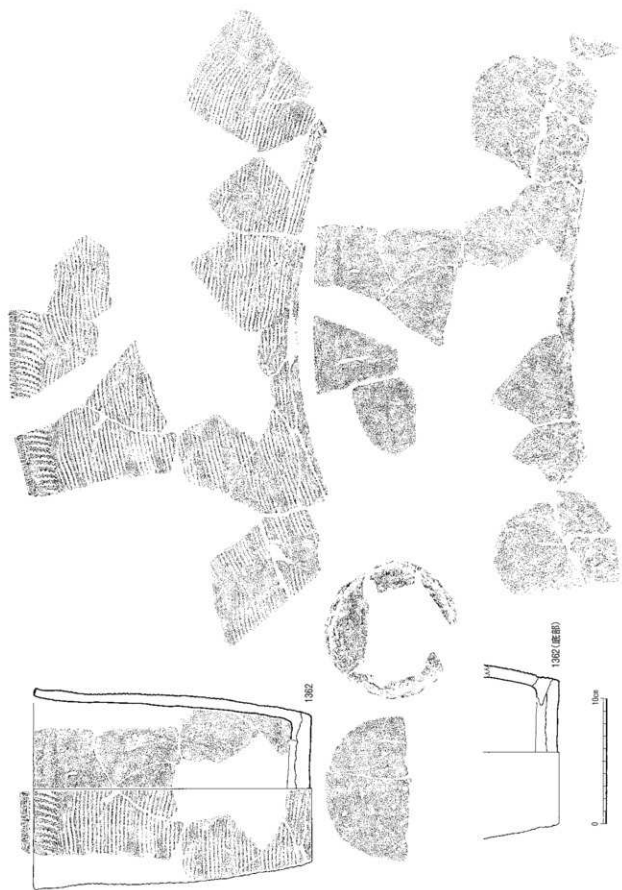
1362も完形資料で、口径15.0cm、底径11.8cm、器高22.2cmを測る。口縁部下にやや斜位の貝殻刺突文が1段施され、あとは横位主体の浅め貝殻条痕文で全面を飾るものである。当初、どの範疇に入る土器なのか悩んだ土器である。共通する文様の属性から、7類土器としたが、円筒度の高い器形は他の7類土器と比較してやや違和感がある。これも今後の課題である。底部中央が剥がれてお



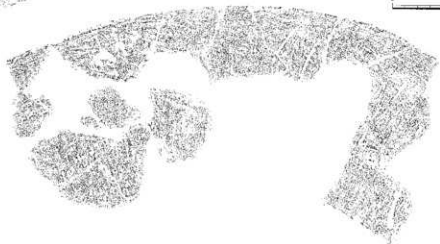
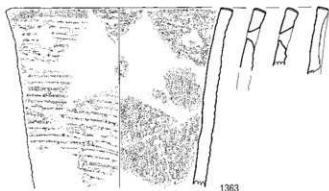
第143図 縄文土器143



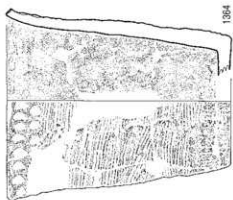
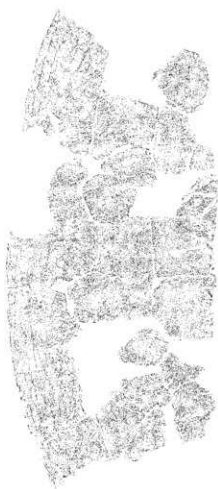
第144图 絹文士器144



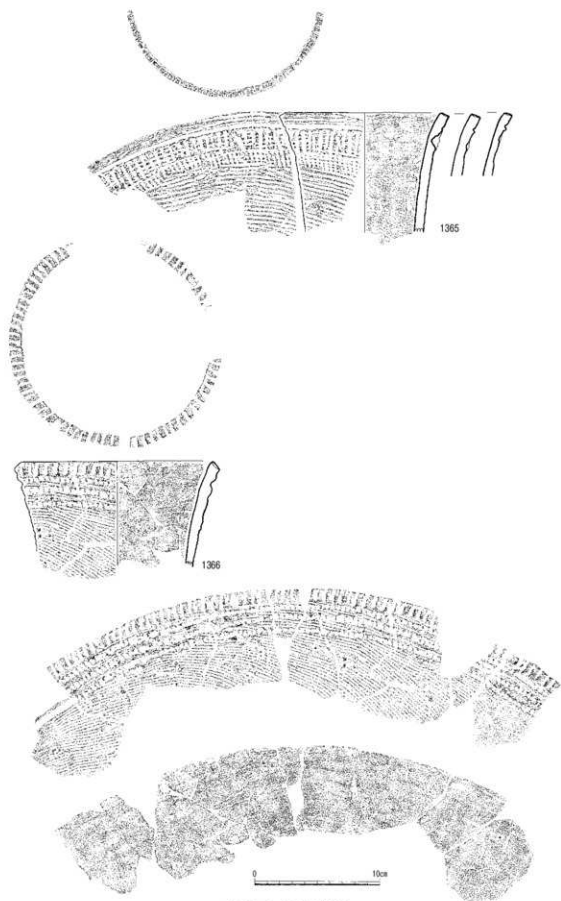
第145図 織文土器145



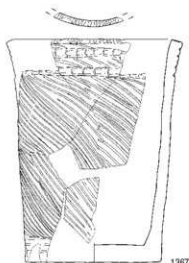
第146図 縄文土器146



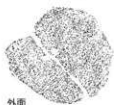
第147图 补文土器147



第148図 縄文土器148



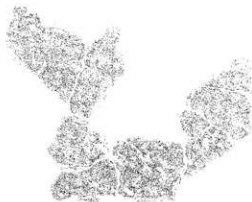
1367



外面



内面



1368

0 10cm

第149図 縄文土器149

り、土器製作時の状況が観察できる。

1364は口径15.2cm、底径10.4cm、器高18.0cmを測る完形資料である。口縁部下に貝殻腹縁部による連点状刺突文を2段施し、胴部を横位から斜位の条痕文で飾るものである。口唇部には明瞭な刻みがみられる。また、底部からの立ち上がり部分には、長さ3cmに迫るほどの長い刻み（もはや沈線）がシャープに施されている。

1367も完形資料で、口径13.8cm、底径10.4cm、器高17.8cmを測る。口縁部下に半截竹管状（貝殻腹縁部？）の施文具で押引状刺突文を2段施し、胴部を斜位の条痕文で飾るものである。口唇部には密で浅い刻みがみられる。また、底部からの対上がり部分には刻みはなく、代わりに横位の条痕文が施されている。胴部最下部を横位の条痕文で飾る土器は、石坂式土器に顕著に見られることから、注目される事例である。

8類土器（1369～1408）

8類土器は、口縁部文様に貝殻刺突文、胴部文様に綾杉状の条痕文を施すことを基本とする。口縁部が外反し、胴部が若干膨らむものと、底部から口縁部へ直線的に開く器形の2種があり、8A類と8B類とした。

8A類土器（1369～1377）

8A類土器は、口縁部が外反し、胴部が若干膨らみをもつもので、出土量は少ない。

1369は口径19.8cm、底径10.2cm、器高25.2cmを測る完形資料である。やや外反する口縁部には貝殻腹縁部による羽状の刺突文が巡る。胴部には極めて浅い条痕文が綾杉状に施されている。また、条痕文は底部付近では横位となり、一般的な石坂式土器の特徴を有している。口唇部には浅くて細い刻みが密に施されている。

1370は完形近く復元できた資料で、口径17.0cm、現存器高22.2cmを測る。やや外反する口縁部には貝殻腹縁部による斜位の刺突文が巡る。胴部には粗めの条痕文が綾杉状に施されている。口唇部は無文であるが、同一個体の底部と考えられる1371をみると、底端部に貝殻腹縁部による縦位の刺突文が巡っている。

1372も外反する口縁部をもつもので、2～3段の貝殻刺突文と綾杉状の粗い条痕文で文様構成がなされている。

1373は若干外反する口縁部片で、3段横位の貝殻刺突文とその下連点文を施すものである。

8B類土器（1378～1408）

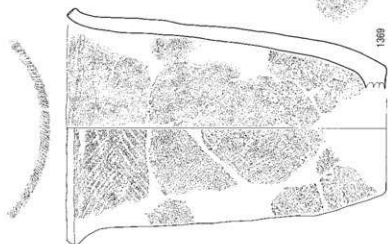
口縁部が緩やかに外傾する器形を基本とする。円筒状のものとバケツ状のものがある。口縁部は平縁あるいは山形（2か所にピーク）口縁がある。山形部分には瘤状の突起が付く場合もある。

1378はやや外傾する口縁部片である。横位2段の貝殻刺突文と綾杉状の条痕文からなる。口唇部はフラットで無文である。

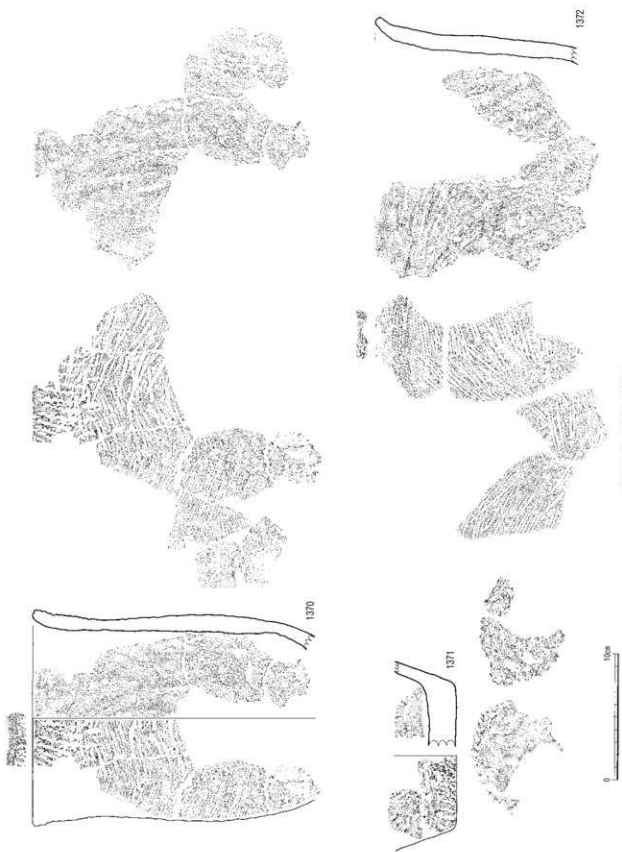
1380は口径17.4cmを測る。やや外傾する器形をもつ。横位1段と斜位の貝殻刺突文と綾杉状の条痕文からなる。口唇部には浅めの刻みが施されている。円形の補修孔1対が残っていた。

1381は口径19.4cmを測る。円筒状の器形を呈し、斜位の貝殻刺突文と綾杉状の条痕文からなる。

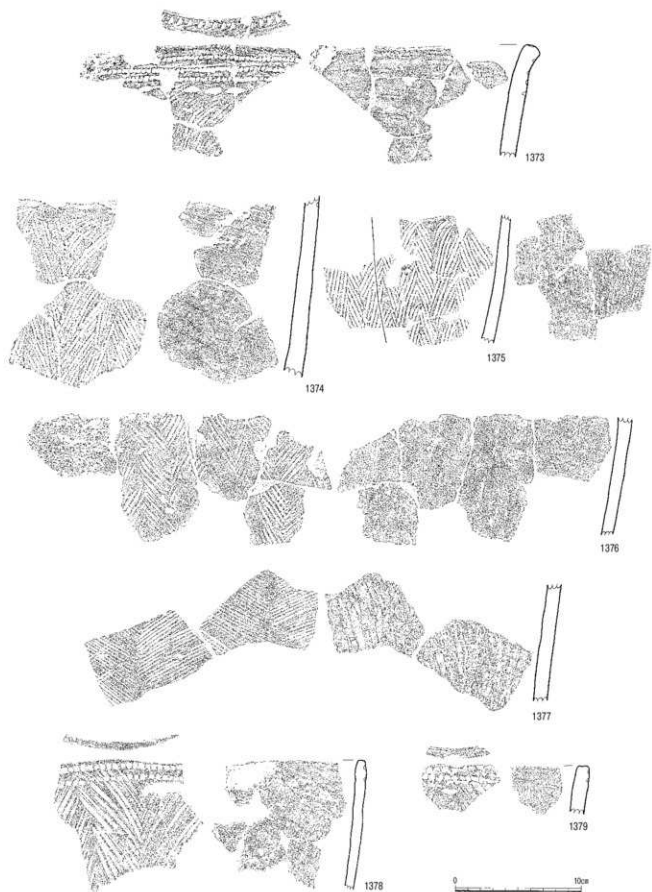
1382はやや外傾する器形をもつ。口径20.0cm、現存器高17.2cmを測る。口唇部直下に横位1段の貝殻刺突文があり、その下には同じ刺突文を鋸歯状に施文している。胴部には綾杉状の浅い条痕文



第1500図 絹文土器150



第151图 补文土器151



第152図 縄文土器152



第153図 補文土器163

が施されている。口唇部はフラットで無文である。

1383は口径20.6cm、底径13.6cm、器高28.0cmを測る完形資料である。口縁部には縦位の貝殻刺突文と横位の貝殻刺突文が梯子を横にしたような状態で施文されている。胴部には浅くて粗い条痕文が綾杉状に施されている。底部付近は横位の条痕文となっている。口唇部と底端部に刻みはみられない。

1384も完形資料で、口径19.8cm、底径12.0cm、器高26.8cmを測る。口縁部には縦位2段と横位の貝殻刺突文がみられる。胴部文様は綾杉状ではなく縦位の条痕文が丁寧に施されている。しかも口唇部直下から底端部までほぼ全面に施されている。また、口縁端部に瘤状突起をもつ点も合わせ、特徴的な土器である。瘤状突起は、比較的独立しており瘤状というよりも耳状とした方が近いかも知れない。突起には本体と同様な貝殻刺突文が施されている。ほぼ円筒状の器形を呈する。

1385は口径14.0cm、底径9.2cm、器高18.0cmを測る完形資料である。口縁部に縦位と横位の貝殻刺突文を巡らす。胴部には綾杉状の条痕文が細かにかつ丁寧に施文されている。フラットな口唇部と底端部には刻みはみられない。底部は若干上げ底状を呈する。1385と同様に、ほぼ円筒状の器形を呈する。

1386も1385と同様な文様構成をもつが、口縁部文様の貝殻刺突文が沈線状をなしている。胴部の条痕も綾杉状ではあるが、全体的に雑な仕上げとなっている。また、目立たないが小さな瘤状突起が付く。突起部に文様はない。口径22.0cmを測る資料であるが、同一個体の底部と考えられるのが1387である。底径12.0cmを測る。胴部条痕が少し見えるが、底部付近は無文部を形成していることがわかる。

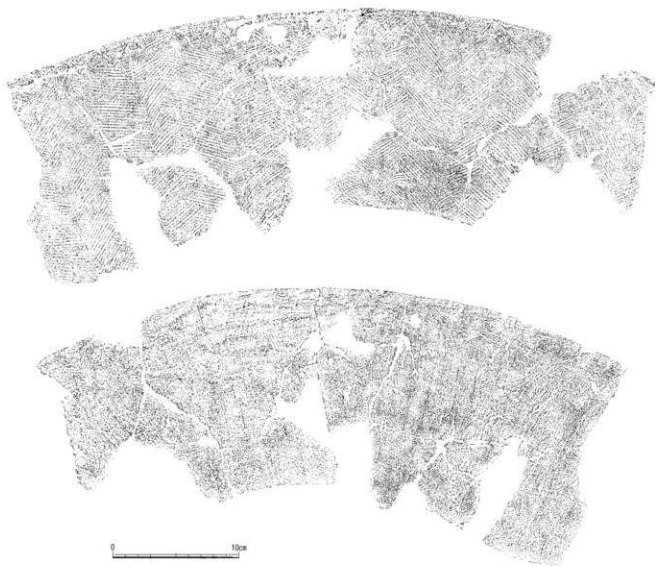
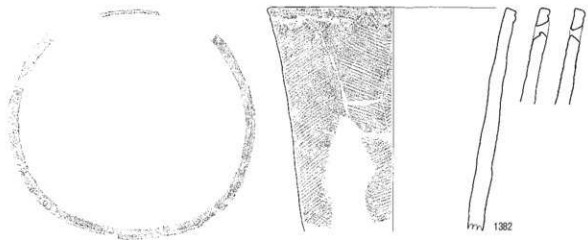
1390と1391は接合こそしなかったが、同一個体と考えられる資料である。口縁部下に横位2段の貝殻刺突文がみられる。胴部は丁寧に綾杉状の条痕文、底部付近は横位の条痕文が施されている。フラットな口唇部に文様はない。口径は17.6cmを測る。

1392は口径12.6cmの小形の土器である。拓影図をみればわかるように、口縁部の上面観は楕円形を呈している。その楕円形の長軸方向の端部2か所がやや山形を呈する器形となっている。胴部には浅い綾杉状の条痕文がみられるが、無文部も多い。

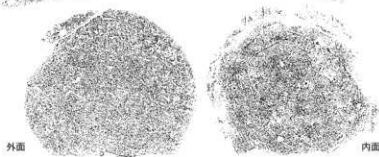
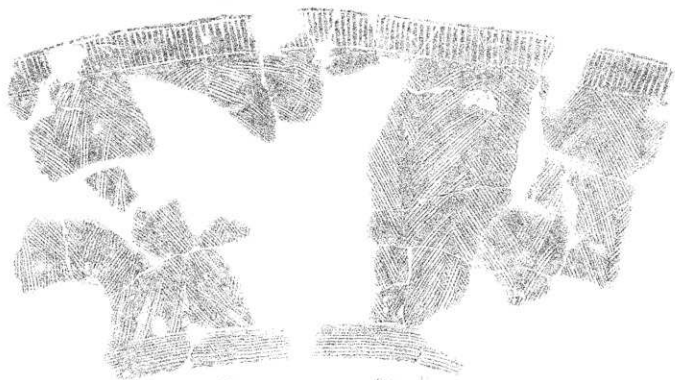
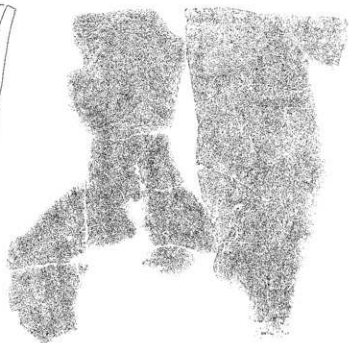
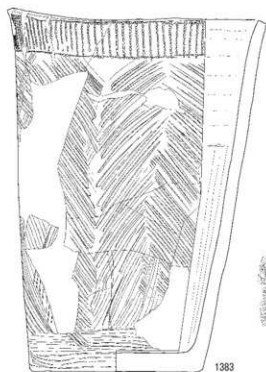
1393と1394は瘤状突起部分である。いずれも口縁端部に位置するものである。まさに瘤状に微妙な影らみをもつ。突起部分には、土器本体と連続すると考えられる貝殻刺突文が施されている。

1395は口径19.8cm、底径11.0cm、器高21.6cmを測る完形資料である。上面観はやや楕円形状を呈し、口縁部は2か所の山形部分を有する。この山形部分にはやや影らみをもつ瘤状突起が付いている。突起部分は通常の器壁の約1.5倍の厚さをもつ。口縁部に横位3段の貝殻刺突文が巡り、胴部には綾杉状の条痕文が丁寧に施されている。また、条痕文は底部付近で横位となり、石坂式土器の特徴をよく表している。口唇部は平坦に仕上げられ無文である。器面全体に文様が施されている場合、口唇部の無文部分は、むしろ文様のな意味合いがあるのではと感じさせる土器である。底端部に刻みはみられない。

1396は口径8.8cm、底径5.6cm、器高9.2cmを測る超小形の完形資料である。マイカップ的な大きさである。口縁部に横位の貝殻刺突文を巡らし、胴部には綾杉状の条痕文を施している。個体が小さい分、文様はやや雑であるが、一定のルールは保持している資料である。口唇部はやや舌状を呈

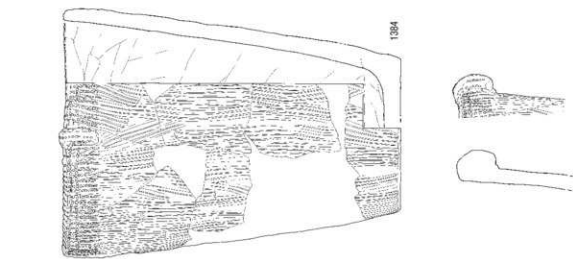
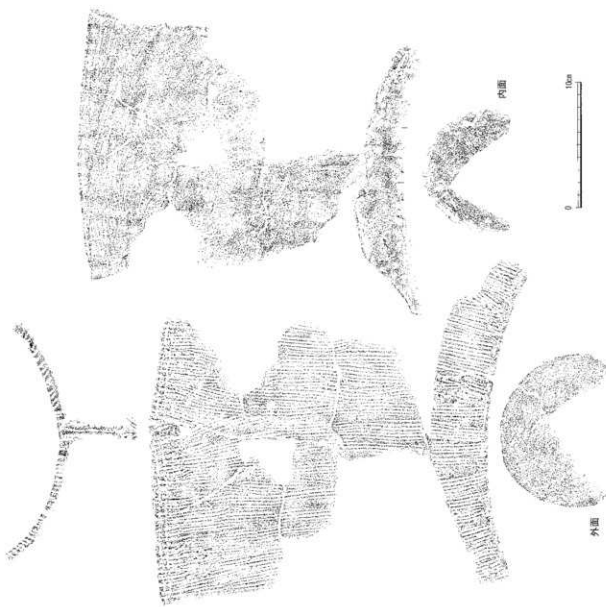


第154図 縄文土器154

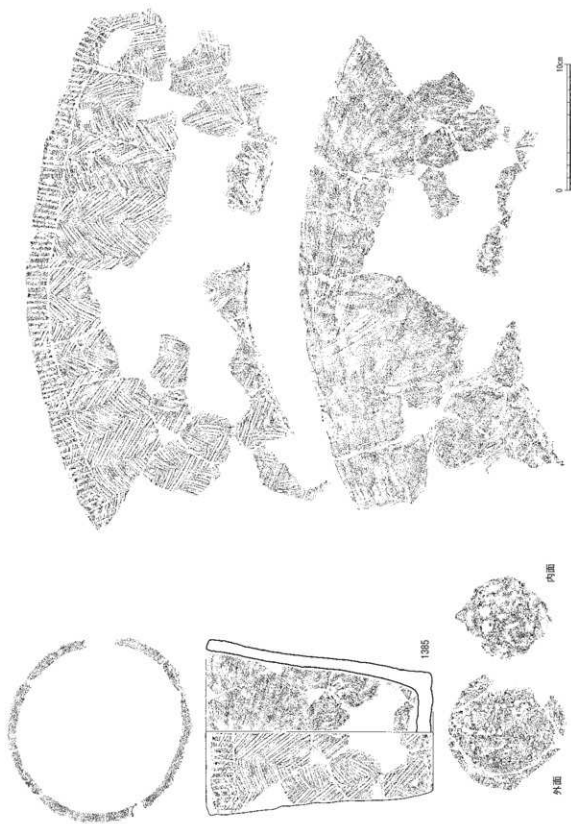


0 10cm

第155図 縄文土器155



第156図 絹文土器156



第157图 补文土器157

し、刻みはみられない。本遺跡の中で確認できた最も最小の土器個体である。

1397～1399は瘤状突起をもつ口縁部片である。いずれも微妙な影らみをもつ。山形口縁の頂部に位置するものと考えられる。突起上の文様は、1397が貝殻刺突文、1398と1399が沈線となっている。いずれも1395のような器形を有する土器であると考えられる。

1400は口径12.8cm、底径8.6cm、器高16.6cmを測る完形資料で、円筒状を呈する器形をもつ。器面全体に刺突文はなく、すべて条痕文で表現されている。口縁部下と底部から胴部への立ち上がり部分に横位の条痕文が施され、その間にある胴部には、綾杉文を意識したと考えられる鋸歯状の条痕文がみられる。口唇部はフラットで無文である。

1401は口径11.8cmを測る口縁部片で、1400と同様に刺突文がないタイプである。それどころか、口唇部直下まで綾杉状の条痕文が施されたものである。口唇部はフラットで無文である。

1402は器高約19.0cmを測る土器であるが、破片の残存状況から復元できなかったため、口径や底径は不明である。口縁部にみられる横位の貝殻刺突文は他の土器と同様であるが、胴部に明瞭な文様が無く、わずかに横位から斜位の浅い条痕が部分的に見える程度という状況の土器である。他に類例がない。実測図では、やや内傾する器形を呈するが、土器の残存状況を考えると情報が少ないことを付け加えておく。

1403～1407は胴部から底部片である。綾杉状の胴部文様に加え、底部付近は横位の条痕文となっている資料である。また、底部の中心部が厚くなる例（1404）や若干上げ底気味になる例（1406）などがみられる。

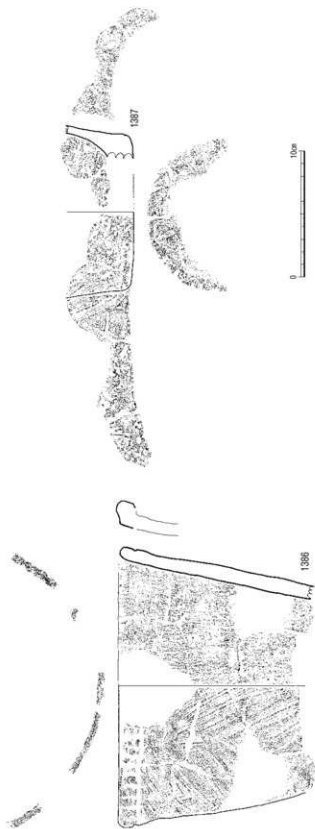
1408は口縁部から底部付近まで接合した土器であるが、接合状況から復元に至らなかった資料である。口縁部下に横位3段の浅い貝殻刺突文がみられるが、口唇部寄りにかかなり密な状態の施文のため、刺突文が一部重なり合っている部分もある。胴部には極めて浅い条痕文が綾杉状を意識しながら施文されている。とは言え、条痕間には隙間が目立ち、かなり雑な仕上げとなっている。それでも底部付近は横位の条痕を施し、一定のルールは保持していることは興味深い事例である。

口縁部はやや山形を呈するが、最頂部の資料（土器片）が無く、瘤状突起の有無については不明である。

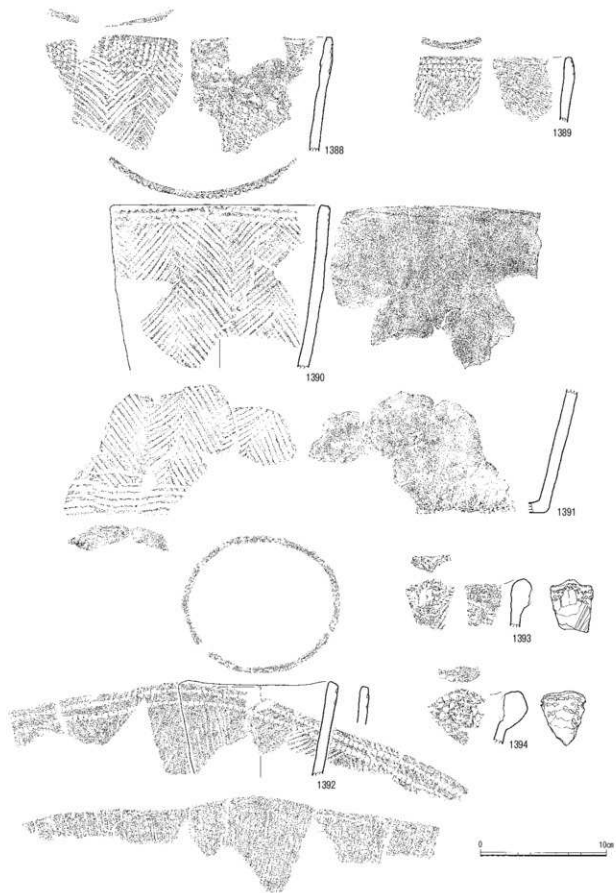
本遺跡の8類土器、いわゆる石坂式土器は、ほとんどがB類土器としたものであった。少量出土したA類土器にしても、石坂式土器の大きな特色である、「外反口縁部」にはほど遠い状態のもので、限りなくB類の段階に近い資料であるといえる。

石坂式土器をⅠ式とⅡ式とする分類に当てはめると、8A類土器が石坂Ⅰ式土器、8B類が石坂Ⅱ式土器ということになる。本遺跡の石坂式土器はほとんど石坂Ⅱ式土器の資料であるということになる。

石坂Ⅱ式土器については、近年資料が増加し、大隅半島においては、石坂Ⅰ式土器よりも遺跡数が多くなっており、石坂式土器の編年を考える上で新たな段階にきていると考えられる。Ⅰ式とⅡ式は、器形こそ異なるが、文様構成はほぼ同じである。大きな違いは瘤状突起がⅡ式の段階で登場することくらいである。本遺跡の資料のように、雑な割には文様のルールを頑なに守っているように見える状況をどう解釈できるか。縄文人の心に迫る切り口の1つとして、新旧石坂式土器の在り方は興味深い。



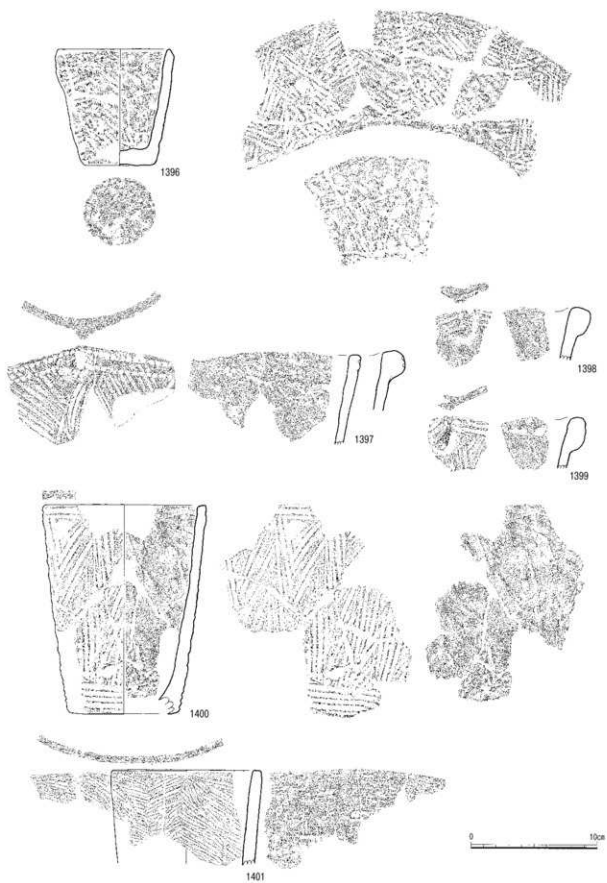
第158図 補文士器158



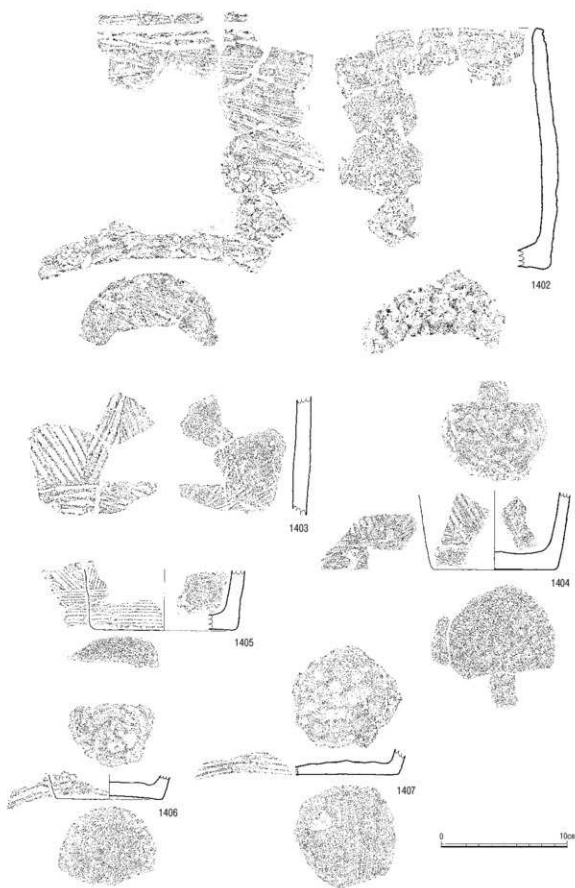
第159図 縄文土器159



第160图 补文土器160



第161図 縄文土器161



第162図 縄文土器162

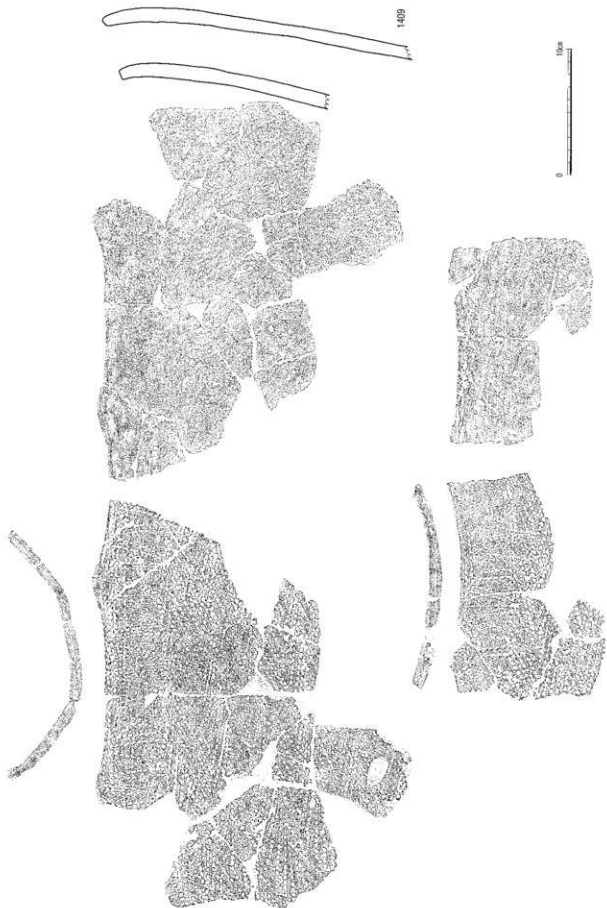


第163図 縄文土器163

9類土器 (1409~1424)

9類土器は口縁部が緩やかに内湾あるいは直行する器形を基本とするもので、器面全体に貝殻腹縁部による刺突文を施す文様をもつ。内湾口縁の口唇部分をやや肥厚させたり、口縁部下に瘤状突起を付したりする場合がある。次の10類土器とも類似する土器である。

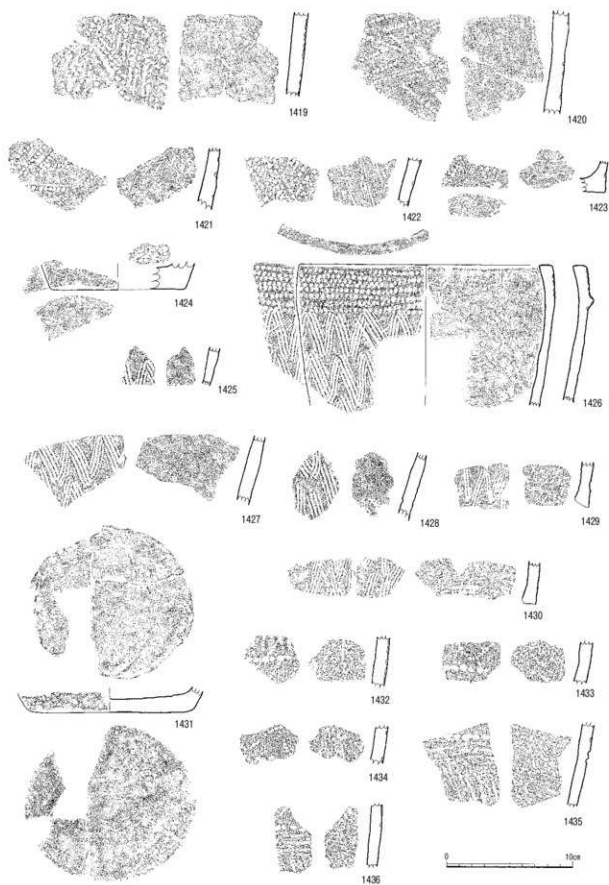
1409は9類土器の最も大きな破片資料である。土器片は多かったが、復元までは至らなかった。山形を呈する口縁部は若干内湾気味に立ち上がる器形をもつ。得られた資料では山形部が2か所存在する。しかも近接していることから、山形の頂部は少なくとも5か所以上ありそうである。このような多くの頂部をもつ土器の例として、鹿屋市の打馬平原遺跡の例がある。破片のため正確ではないが、報告者は6か所の頂部を想定している。文様も本例と類似していることから、本段階の土



第164図 絹文土器164



第165図 縄文土器165



第166図 縄文土器166

器の特徴の1つと言えそうである。

文様は連点状に表現される貝殻刺突文を横位・縦位・羽状に施し、器面全体を文様で飾っている。口唇部はフラット面をもち無文である。

1410と1412はやや外傾する口縁部片で、器面に横位の貝殻刺突文を数段施している。同一個体と考えられる。

1416はやや外傾する口縁部小片で微妙に膨れる突起状の肥厚部をもつ例である。肥厚部がわずかながら山形口縁状を呈している。外面には横位や斜位の貝殻刺突文がみられる。

1417は角度のある頂部をもつ口縁部片である。外面全体に貝殻腹縁部による刺突文を鋸歯状に、しかも密に施ものである。文様、整形共々丁寧な仕上げとなっている。口縁部は若干内湾し、口唇部は無文である。

1418は大きく内湾する口縁部片である。口唇部から3cm下位に橋状把手がつく。器面には貝殻腹縁部による横位の刺突文が密に施されている。

1419～1424は9類土器の胴部や底部片である。胴部には貝殻腹縁部による羽状の刺突文がみえる。1424の底面には、ミガキによる光沢痕が残る。

10類土器 (1425～1430)

10類土器は口縁部が緩やかに内湾あるいは直行する器形を基本とするもので、器面全体に貝殻腹縁部による短い条痕文を鋸歯状に施す文様をもつ。内湾口縁の口唇部分をやや肥厚させたり、口唇部下に瘤状突起を付したりする場合がある。9類土器とも類似する点が多い土器である。

1426は口径20.2cmを測るもので、若干内湾する口縁部片である。口縁部下に横位8段の貝殻刺突文が施されている。そして胴部には短条痕文を鋸歯状に施す文様が丁寧に表示されている。また、口唇部から約3cmのところには、長さ4cm、幅1cm程度の隆起部がみられ、本類の特徴の1つを表している。1425～1427は同一個体と考えられるものである。

1431は比較的残りの良い底部片で、底面にミガキの痕跡が残り光沢がみられる。

1432～1436は同一個体と考えられるもので、鋸歯状の貝殻刺突文や文様帯の区画的な連点文がみられる。詳細については不明である。

11類土器 (1437～1452)

11類土器は、口縁部が「く」字状に開きながら外反し、4か所の頂部をもつ山形口縁を呈する。胴部はやや膨らみをもつ。深鉢がほとんどであるが、壺形を呈する土器も若干俵う。大きく膨らむ胴部に内傾する口縁部が付く。深鉢の文様に結節縄文が施されるという特徴がある。

1437は11類を代表する土器である。口径が19.0cm、現存器高が13.6cmを測る。4か所に頂部をもつ山形口縁を呈する。大きく開く口縁部から頸部にかけての文様は、沈線文や刺突連点文や刻みのある微隆起文等で構成されている。やや膨らみをもつ胴部には結節縄文が施されている。舌状を呈する口唇部には刻みがみられる。比較的小形の土器で、丁寧な作りがなされている。

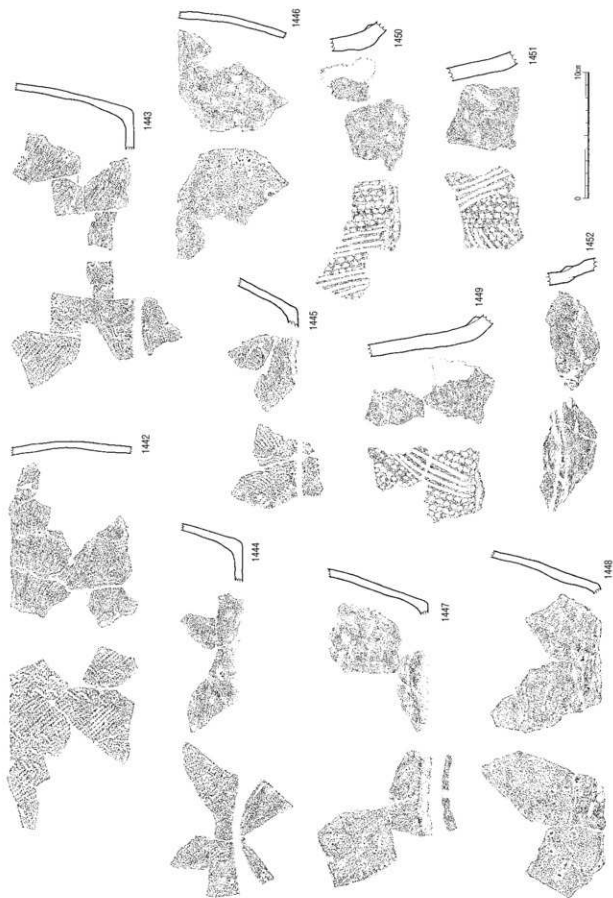
1438と1439は口縁部片。1440～1442は結節縄文のある胴部片。1443～1445は結節縄文のある底部片である。

1446～1448は無文であるが、類似する器形から11類土器の無文土器としてとらえた。

1449～1452は壺形土器である。内傾する口縁部から頸部にかけての資料である。



第167図 補文士器167



第168図 織文土器168

12類土器 (1453~1466)

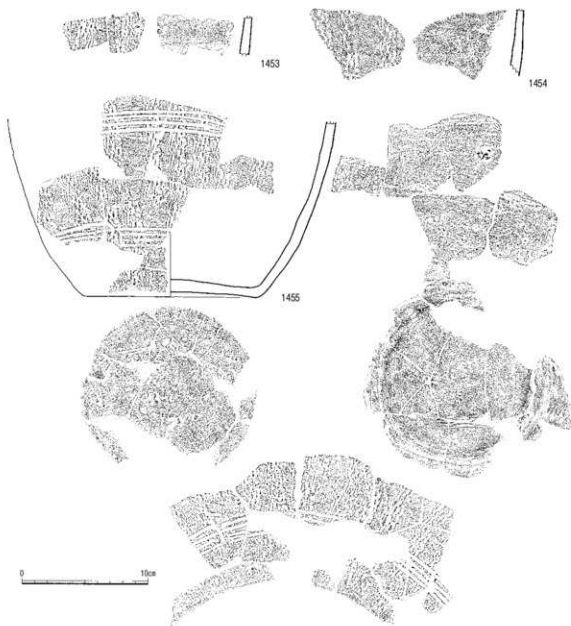
12類土器は緩やかに膨らむ胴部をもつ。本遺跡では出土していないが、口縁部はラッパ状に開くのが特徴である。全体的に器壁が薄い。また底部は上げ底気味になるのが一般的である。

1455は本類の最も大きな破片資料である。沈線と縦に転がす撚糸文の組み合わせで胴部文様を構成するものである。底部はやや上げ底気味である。

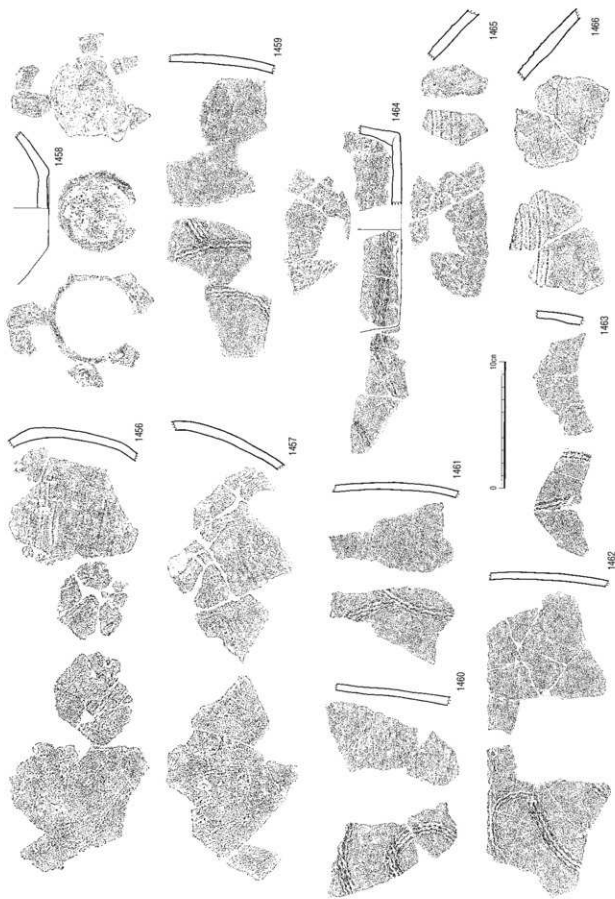
1456~1458、1459~1464はそれぞれ同一個体と考えられるもので、胴部に撚糸文が施される深鉢である。1465と1466は壺形土器の肩部と考えられるもので、数条の微隆帯がみえる。

13類土器 (1467~1476)

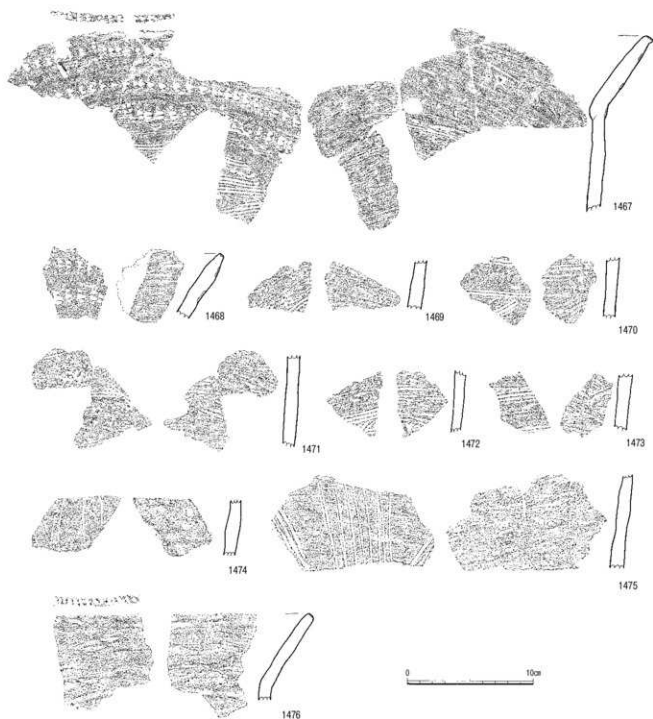
13類土器は、ラッパ状に大きく開く口縁部をもち、やや膨らみをもつ胴部へと続く器形を有する



第169図 縄文土器169



第170図 織文土器170

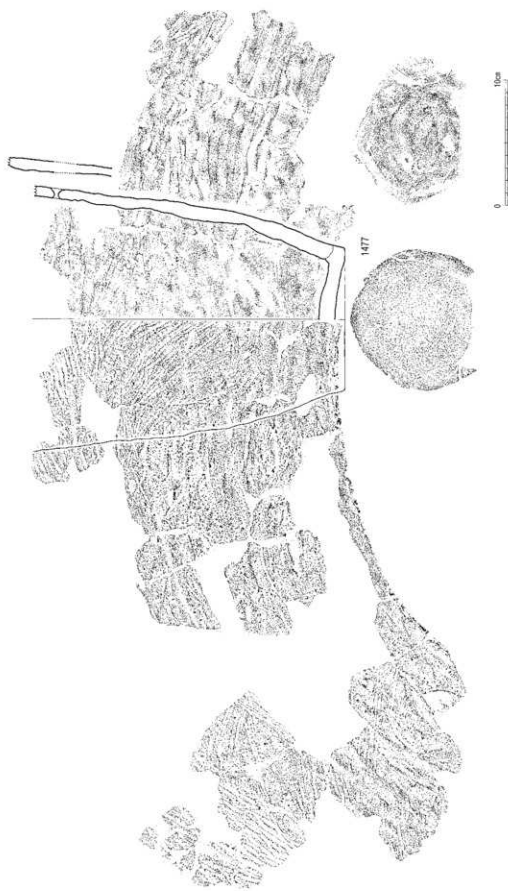


第171図 縄文土器171

ものである。貝殻文を基本とする文様をもつ。

1467は本類を代表する資料である。大きく口縁部とやや膨らみをもつ胴部からなる。口縁部には貝殻腹縁部による連続刺突文、胴部には沈線状を呈する貝殻条痕文が施されている。

1474と1475は胴部に細沈線による直線文が数条施されたものである。1476は口唇部に刻みがみられるが、口縁部は無文の資料である。1467と同様な器形を有するものと考えられる。



第172図 絹文土器172

《定塚遺跡出土縄文土器一覧》

定塚遺跡では多くの完形土器や完形に近い土器の出土があったことから、全体的な器形の把握、同一型式内での土器の大きさなど法量の比較、さらに口縁部から底部まで器面全体での文様の組み合わせや把握など、完形土器だからこそ知ることのできる情報を多く確認することができた。そこで、定塚遺跡から出土した縄文時代土器の中でも早期土器を主とした完形土器や、底部のみ欠損している完形土器に近い土器を一覧として図化した。なお、ここで言う完形土器とは口縁部から底部まで残存しており、口縁部径や底部径の残りが良好で、全体の器形が復元可能なもののことを言う。また、口縁部片や底部片の中でも残りの状態が良いものに関しては、口縁部径や底部径を復元し一覧表として掲載している。

完形土器および完形に近い土器一覧（第173図～第175図）

第173図～第175図には1類（広義の意味での前平式土器）～8類土器（石坂式土器）の中から完形土器および完形に近い土器を掲載している。ただし、3類土器（加栗山式土器）と5類土器（小牧3 A段階）に関しては完形土器も完形に近い土器も出土していないために掲載していない。

1類・6類・7類・8類土器の完形土器一覧（第177図）

第177図には1類・6類（吉田式土器）・7類（倉園B段階）・8類土器を器高の大きな順に並べたものである。

1類・6類・8類土器の完形品によるフォルムの比較（第176図）

第176図は1類・6類・8類土器の外形をトレースし重ねた図である。より確実な比較を行なうために、ここでは底部まで残存しており、器高を確実に数字化できる完形土器のみを図化している。この図をみると1類土器の中に特大の器形を持つものが存在すること、6類土器には少しずつ大きさの違う様々な大きさの土器が作られていること、8類土器は器形が左右対称ではなく歪んだ器形をしたものが存在していることが一目瞭然である。

定塚遺跡出土土器法量一覧（表2・3）

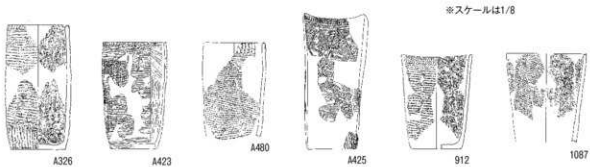
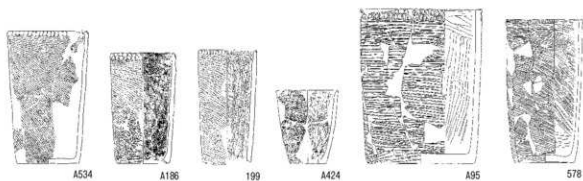
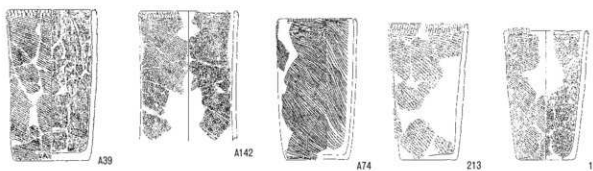
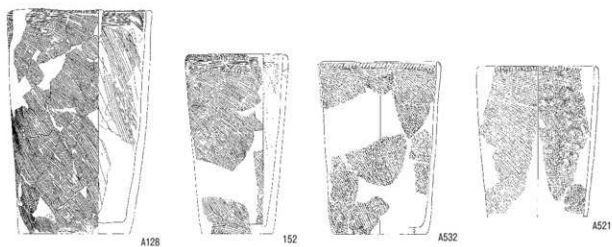
表2・3は器高・口径（口縁部径）・底径（底部径）を完形土器と破片資料に分けて一覧にしたものである。定塚遺跡からは現在のところ最大の大きさ（器高）となる前平式土器が出土しており（A128）、第176図を見てもこの土器だけが頭一つ飛び出ている。しかしながら、前平式土器の破片資料の中には、この最大の前平式土器の底径とはほぼ同じ大きさの底径をもつ底部破片資料があり、この特大の土器だけが特別に大きさの規格を無視して製作されたのではなく、同じような特大の大きさの土器がやはり何かしらの基準を基に製作されていた可能性が考えられる。

定塚遺跡出土土器のススおよび炭化物の付着状況一覧（第178図～第181図）

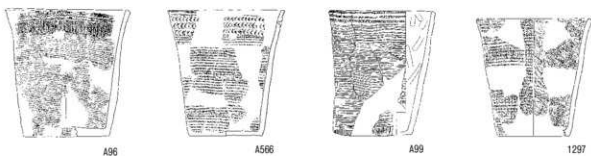
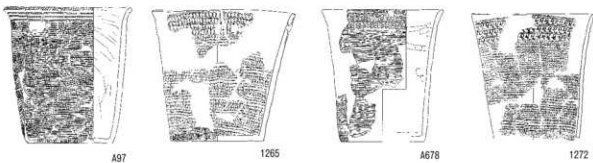
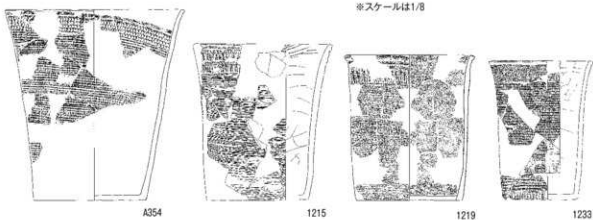
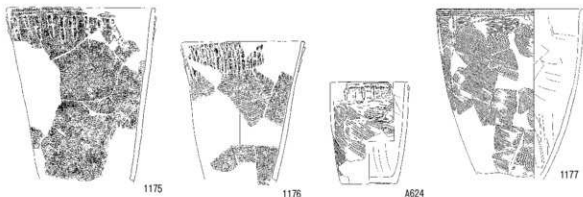
第178図～第181図には完形土器を中心として、定塚遺跡出土の縄文土器のなかでも底部も含めた器面の内外にススおよび炭化物の付着が認められたものを図化し、その付着範囲を黒く表示した。完形品に関しては、ススおよび炭化物が付着している資料は全て掲載しているため、ここに掲載されていない完形土器にはススおよび炭化物の付着は見られないということを表している。

1類・6類・8類土器の口縁部径および底部径の比較（第4分冊 データ5）

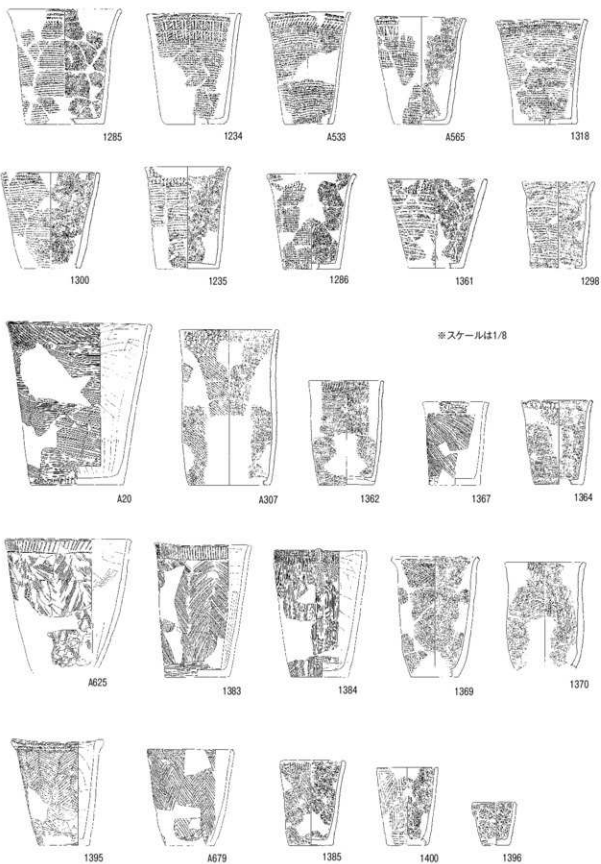
第4分冊のデータ5（P184）では、表2や表3で計測した口縁部径や底部径の数字を基にして、資料数の多い1類・6類・8類に関して、その口縁部径と底部径を図化することを行なった。法量からみた土器の在り方について興味深い状況が見えてきた。第七章（第4分冊 P83）を参照していただきたい。



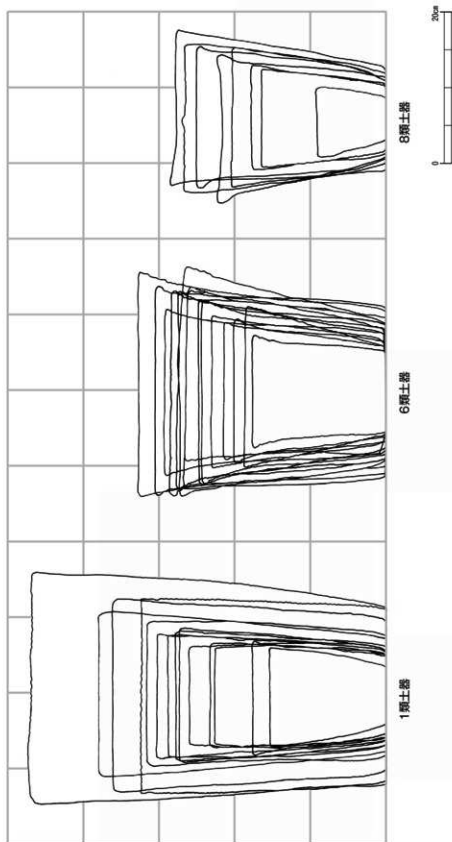
第173図 定塚遺跡出土の縄文時代早期土器 1



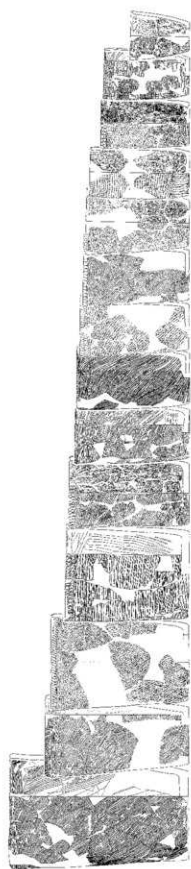
第174図 定塚遺跡出土の縄文時代早期土器2



第175図 定塚遺跡出土の縄文時代早期土器3



第176図 縄文土器のサイズ1



1 塙土器(前平式土器)



6 塙土器(高田式土器)

※スケールは1/10



8 塙土器(石坂式土器)



7 塙土器(倉庫B式土器)

第177図 縄文土器のサイズ2

《定塚遺跡出土遺物法量一覧 例言》

本表は定塚遺跡から出土した土器の中から器高・口縁部径・底部径が計測できるものを掲載している。計測は実測を担当した職員が行ない、岩永が編集を行なった。以下に各項目の詳細を示す。

器高：完形品の中から、口縁部から底部まで直線的に残存しているものを計測している。ただし、

底部直上まで残存しているものに関しては、カッコ書きで残存部の器高を表記している。

口縁部径：口径と略する。基本的には口縁部径が1/4以上残存しているもののみ計測している。

また、計測値の精度に関わるため口縁部の残存部の割合を表記している。(完形のみ)

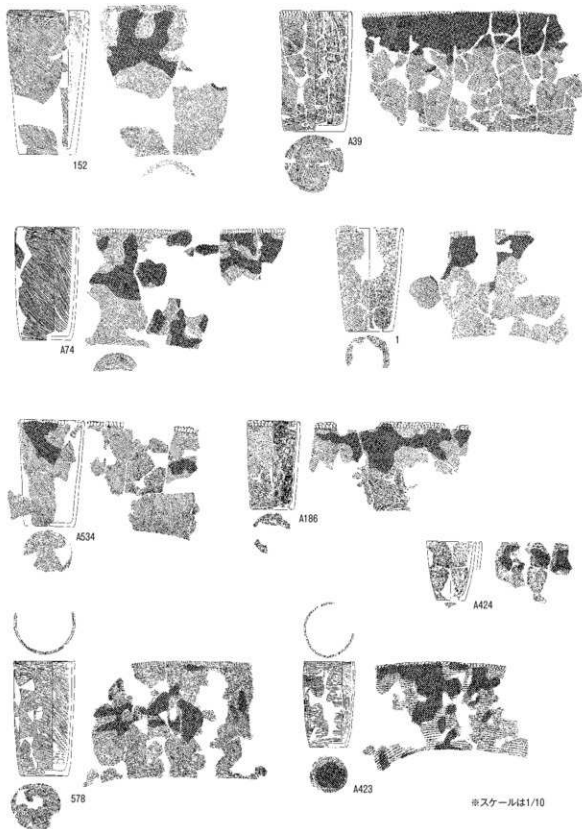
底部径：底径と略する。基本的に底部径が1/3以上残存しているもののみ計測している。

表2 完形品法量一覧

遺物番号	器高 (cm)	口径 (cm)	口縁部残	底径 (cm)	遺物番号	器高 (cm)	口径 (cm)	口径残	底径 (cm)
A20	34.6	29.4	2/3	19.5	1297	(24.9)	13	1/4	
A21		22.6	1/2		1298	18.35	14.2	1/4	10.8
A39	31.8	17	5/6	15.1	1299		19	2/3	
A74	29.8	15.4	1/2	12.8	1300	(20.2)	19.4	1/2	
A95	32.6	23	1/2	22.6	1318	22.1	17.8	1/2	13.1
A96	27	24.6	2/3	18	1361	18.7	20.6	1/4	12
A97	28.8	26.2	完全	17.8	1362	22.1	14.8	11.6	
A99	26.7	21	1/2	16.6	1363		15.8	3/4	
A128	47.6	28.2	2/3	23.4	1364	17.8	13.4	1/2	10
A129		19.5	1/4		1365		12	2/3	
A186	(23.5)	12.8	3/4		1366		15	1/4	
A307	32.85	19.6	1/4	17.8	1367	17.7	13.6	1/4	10.6
A326	26	11.4	ほぼ完全	11.4	1369	25.3	17.4	1/3	12
A354	40	36.6	1/4	23.7	1370			10.8	
A422		19.4	1/4		1380		16.4	1/2	
A424	15.5	12.4	1/2		1381		18	1/3	
A532	36.35	24	2/3		1382		17.8	ほぼ完全	
A533	23.7	15.75	1/3	10.2	1383	28.7	19.2	ほぼ完全	13.7
A534	28	16.2	1/2	13	1384	27.1	18	1/3	12.1
A565	22.8	17.6	1/4	11.3	1385	17.9	13	ほぼ完全	9.4
A566	26.7	23.2	1/4	15	1386		20.6	1/4	12.45
A624	21.5	15.2	1/4	11	1395	(22.5)	16.2	3/4	
A625		24.8	1/3		1396	9.3	7.6	3/4	5.5
A678	27.8	24.8	1/4		1400	(16.5)			
A679	20.6	17.2	1/4	10.1	1402	(19.1)			
A682		36	1/3		1426	17.7			
1	32.5	16.4	1/4	11	1444				13.8
152	38.4	20	1/2	15.8	1477				11.2
213	29	16	2/3	11.8					
231		18	1/2						
912	20	13.6	1/4	10.4					
1175	(24.4)	20.2	1/4						
1176	(15)	26	1/3						
1177	(35.5)	30	2/3						
1215	33.1	28.1	1/4	21.3					
1219	30.7	25.8	1/4	22.1					
1233	29.5	20	2/3	15.9					
1234	23.2	18.8	1/4	12					
1235	21.8	16.8	1/3	13					
1265	27.7	29.2	1/4	19.7					
1272	(26.6)	24.6	1/3						
1285	24.6	22.8	1/4	16.4					
1286	20.3	17.8	1/4	12					

表3 遺構内・包含層出土土器法量一覧

遺物番号	口径(cm)	底径(cm)	遺物番号	口径(cm)	底径(cm)	遺物番号	口径(cm)	底径(cm)	遺物番号	口径(cm)	底径(cm)	遺物番号	口径(cm)	底径(cm)	遺物番号	口径(cm)	底径(cm)
A6	14.8		A568		14	515	10.5		732	15.4	1223	16.8		1356		11.6	
A24		12.4	A582	12.4		520	14.2		733	12.4	1229	23.2		1357		14.4	
A40	10.2		A594	13		521	13.8		734	24.8	1230	21		1358		10.8	
A46	12.6		A617	10.7		551	15		735	12.4	1239	20.6		1359		11.2	
A51		10.4	A623		15.4	574	12.8		736	12	1246	20		1369	17.8	10	
A54		16.2	A633		5.2	579	13.8		737	12.8	1248	20.6		1370	16		
A65	14.8		A636	11.2		591	14		738	9.2	1249	23.8		1371		11	
A92		13	A655		11.8	592	9.4		739	8.6	1253	22		1390	15.8		
A94		9.2	A660		13	593	11.4		740	10.8	1256	19.4		1392	11		
A105		14.2	A677		18.4	612	10.7		741	10	1260	26.4		1401	10.4		
A106	23.6		A680		15.6	640-2		16.6	742	12	1271	25		1404		10	
A125	12.6		A684		13.4	641	23		743	12.8	1282	23		1405		11.4	
A130	25.4		2	22		642	11.6		744	12.6	1283	22		1406		8.4	
A134	20.4		3	16.4		645	20.2		745	11.6	1284	15.4		1424		10.6	
A136	20		4	13.4		647	10.6		746	10	1287	24.4		1426	17.8		
A138	17		5	19.4		664	16.5		747	9	1294	22.4		1431		13	
A139	24.8		6	11		683	24		748	13.8	1296		16.8	1437	18.2		
A140	12		7	15		684	17.6		749	12.8	1302	11.4		1458		6	
A142	19.4		10	15		686	13.6		750	14	1303	22.4		1464		15	
A161		13.7	11	12.8		698	14.3		751	9	1304	24					
A162		13.6	163	13.6		700		14.6	752	15	1306	23.4					
A163		20	165	12.3		701		15	753	8	1307	20.8					
A166		9.6	167	14		702	14		755	12.6	1310	17					
A187		15.3	199	11		703	10.4		756	11	1312	26.2					
A227		14	203	13.4		704	9		757	14.6	1319		15				
A252	21		214	21.4		705	8.8		758	24.2	1320		14.8				
A254	14.6		216	17.6		706	11		759	7.4	1321		19.8				
A268		10.4	232	27.2		707	17.6		761	15	1322		14.8				
A269	18.7		236	8.6		708	13		770	10	1325		17.2				
A283		9.7	237	18.6		709	13.8		777	5	1328		9.8				
A300		12.2	238	11.4		710	11.2		782	6	1330		12				
A301		17	239	18.8		711	12.6		783	11.2	1331		15				
A332		6.4	335	15.4		712	13.4		784	11.2	1332		8.6				
A353	14.2		336	14.7		713	11		786	10.4	1335		15				
A398	16		401	19.8		714	9		787	11	1336		10.8				
A412		12.4	402	14		715	10.6		789	11	1337		12.6				
A450		19.6	403	14.6		716	10.4		801	11.8	1338		9.4				
A464		14.6	404	10.2		717	7.2	1029	1029	14.6	1339		15.2				
A473	23.8		405	16.4		718	19.2	1087	15.5		1340		8.8				
A494		8.2	406	18.2		719	15	1122		6.4	1341		16.6				
A496		8.2	453	11.9		720	16.7		1145	12.6		1342		12			
A505		13.6	461	18		721	15.2		1159		7.8	1343		14			
A521	24.4		462	15.4		722	11.2	1178	21.4		1344		13.6				
A530		14	463	19.2		723	13.6		1179	19.8		1345		12			
A535		11.2	464	10.5		724	17	1208		22.8	1346		11.8				
A541		21	465	15		725	16	1210	20.6		1348		13.4				
A544		14	469	18.6		726	16	1211	28.8		1349		14				
A545		12	470	15.2		727	13.4		1212	29.8		1350		11.4			
A549		21.2	471	16		728	11	1214	27.4		1351		14				
A553		17.4	472	13.6		729	12.4	1216	24.4		1352		9.8				
A560	13.4		473	11.2		730	16	1217	24.6		1353		8.2				
A567		17.4	515	10.5		731	15.8	1222	17.6		1354		14.8				



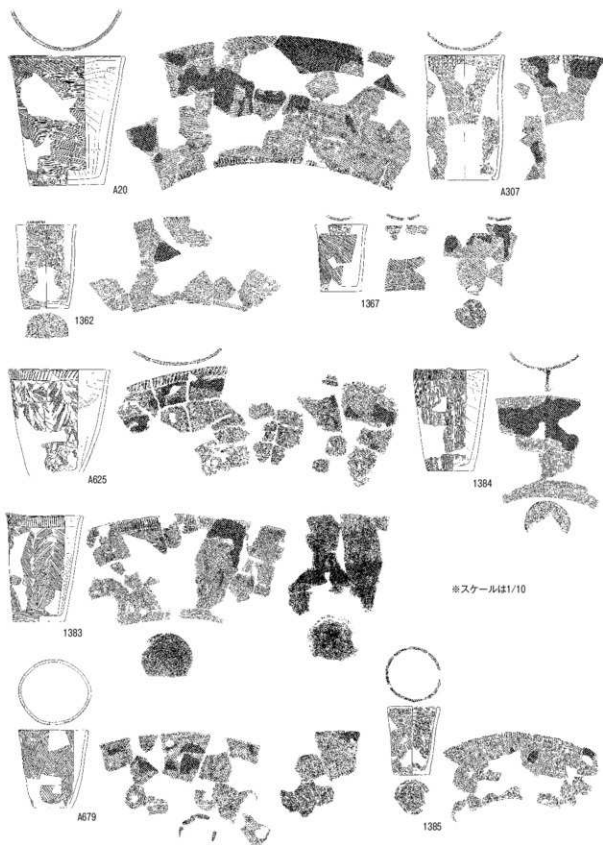
第178図 土器附着炭化物の状況 1



第179図 土器附着炭化物の状況2



第180図 土器附着炭化物の状況3



第181図 土器附着炭化物の状況4

1285

B	11	12	13
C		.	
D		.	.
E		.	.
F		.	.

1300

E	5	6	7
F		.	.
G	.	.	.

1299

C	4	5	6	7
D				.
E
F		.	.	.
G		.	.	.

1235

C	4	5	6	7	8	9
D		.				
E
F
G	

1369

D	9
E	.
F	.

1272

C	5	6	7	8
D				.
E
F
G		.	.	.

1234

B	6	7	8	9	10	11	12	13	14
C									
D									
E
F
G	

1265

D	4	5	6	7
E
F
G		.	.	.
H		.	.	.

1219

C	4	5	6	7	8	9
D	
E
F
G

1233

B	6	7	8	9	10	11	12
C			.				
D	
E
F

データ1 完形土器出土状況1

1177

B	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
C						•	•			
D					•	•			•	
E							•		•	•

1215

C	4	5	6
D			•
E		•	•
F	•	•	

1175

B	5	6	7	8	9	10	11
C							•
D							
E	•	•	•	•			
F			•	•			
G			•	•			

912

D	4	5
E		•
F		•

1212

D	5	6	7
E			
F			
G			•
H	•		

152

A	8	9	10
B			
C		•	
D	•	•	•

231

C	11	12	13
D			•
E	•	•	•

213

B	7	8	9	10	11	12	13
B						•	
B	•					•	•
B							

データ2 完形土器出土状況2

1

B	10	11	12	13	14	15	16
C					•	•	•
D	•				•	•	

1477

B	10	11	12	13	14
C	•		•	•	•
D			•	•	
E		•	•		

1395

B	9	10	11
C			
D	•	•	•
E			
F		•	

1386

B	9	10	11	12	13	14	15	16	17
C			•	•					•
D	•	•	•		•	•			
E		•	•						
F					•				

データ3 完形土器出土状況3

1364

B	4	5	6	7	8	9	10	11	12
C					.				
D		
E		
F		
G			.						

1318

B	7	8	9	10	11	12	13	14	15
C			.	.					
D
E	
F			

1365(+)-1366(+)-1408(+)

C	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
D						.			.		
E										.	
F		
G				
H					.						

1297

C	8	9	10	11	12	13	14
D	.				.		
E		.	.	.			
F
G	

データ4 完形土器出土状況4

1383

C	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
D			.							
E		.	.							.
F			
G						

1370

B	5	6	7	8	9	10	11	12
C								.
D			.	.				.
E			
F
G				

1367

B	6	7	8	9	10	11	12	13
C								.
D	.							
E
F	.	.						
G				

1363

D	5	6	7	8
E	.	.		.

データ5 完形土器出土状況5

1362

C	5	6	7	8
D				
E				
F				
G				

1286

B	9	10	11	12	13
C					
D					
E					
F					

1361

B	6	7	8	9	10	11	12
C							
D							
E							
F							
G							

データ6 完形土器出土状況6

(2) 石器

縄文時代早期の石器も土器と同様に大量に出土した。主体となる層はⅧ層やⅧ層であった。実際には、この2つの層を境界面として明確に区別することは困難な状況であった。ここでは、層位ごとの記録ではなく、広く縄文時代早期前半期の文化層としてとらえることとしたい。なお、挿図の作成にあたっては、器種ごとにⅧ層→Ⅷ層の順で掲載した。また、出土層位については観察表に記録してあるので参照していただきたい。

器種としては石鏃・磨製石鏃・石槍・局部磨製石槍・石匙・楔形石器・スクレイパー・スクレイパー状石器・磨製石斧・磨石・凹石・ハンマーストーン・砥石・石皿・異形石器・軽石製品等があった。

石鏃 (C101～C192)

C101～C192は石鏃である。C192の磨製石鏃を除き、あとはすべて打製石鏃である。C101～C116がⅧ層出土、その他がⅧ層出土の石鏃であった。圧倒的にⅧ層出土の石鏃が多いことがわかる。

Ⅷ層出土の石鏃をみると、小形の三角形鏃から長大な二等辺三角形まで、あるいは平基式から凹基式までと様々なタイプが混在していることがわかる。また、C116のように局部磨製石鏃も存在する。この傾向はⅧ層出土の石鏃でもいえる。2つの層から出土する土器をみると、前平式土器から吉田式土器、そして石坂式土器や下剝峯式土器とかなり時間的な幅を有している。このことを考慮すれば、Ⅷ層やⅧ層の石鏃の在り方は、その時間幅を表していると考えられよう。

ただし、Ⅷ層出土の土器は前平式土器が主体であったことから、早期前葉の様相を示していることにはかわりはないと考えられる。

土器型式が単独で出土する遺跡の石器出土状況を抽出整理し、比較検討することで、段階ごとの傾向を把握していく必要がある。

石材についてみても黒曜石やギョクズイ、チャート、安山岩、頁岩、水晶と様々である。黒曜石については桑ノ木津留産が最も多く、他に霧島、日東、三船、姫島、西北九州などがある。桑ノ木津留産は縄文時代早期前半期の特色とも言われる。小型三角鏃に用いられている例が多い。また、姫島産を用いた石鏃が12点出土しているが、比較的小型が多くC184などは一辺が7.8mmという小ささであった。

C192は磨製石鏃の頭部である。頁岩製で厚さ0.15cmと極めて薄い。

石槍 (C193, C194)

C193とC194は石槍である。いずれも欠損部をもつが柳葉形を呈するものと考えられる。C194は表裏両面に研磨痕が明瞭である。

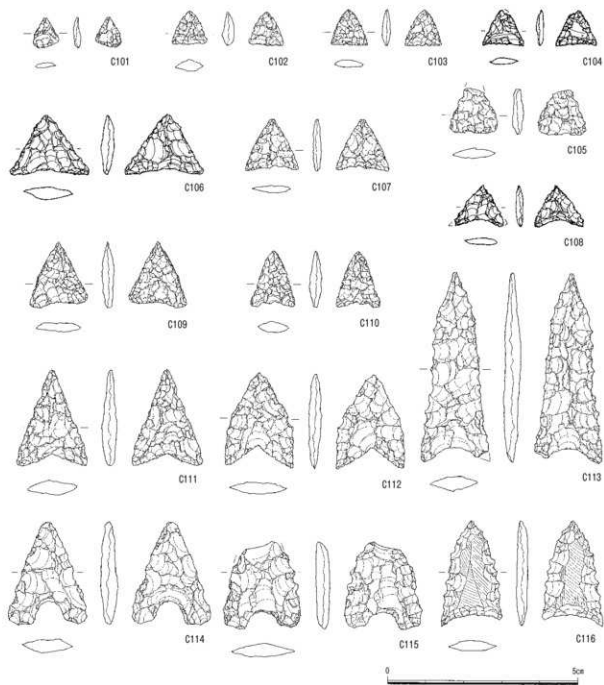
石匙 (C195～C196)

C195～C196は石匙である。早期前半期から石匙が出土する例は少ないが、本遺跡も3点のみ確認できた。C195がチャート製、残りの2点は安山岩製である。

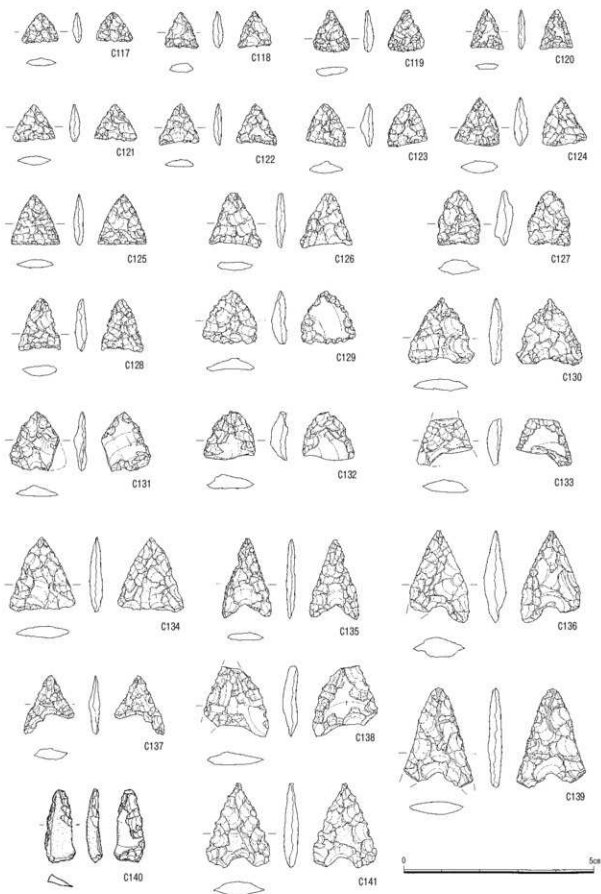
スクレイパー類 (C198～C211)

C198～C200はスクレイパーである。C199やC200は安山岩製で、丁寧な剝離を行い角度のある刃部を作り出している。

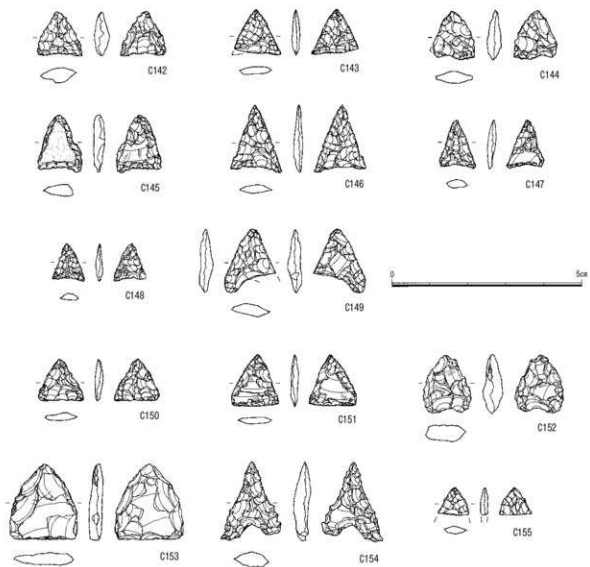
C201～C210は小型の黒曜石製スクレイパーである。ほとんどは桑ノ木津留産を用いている。



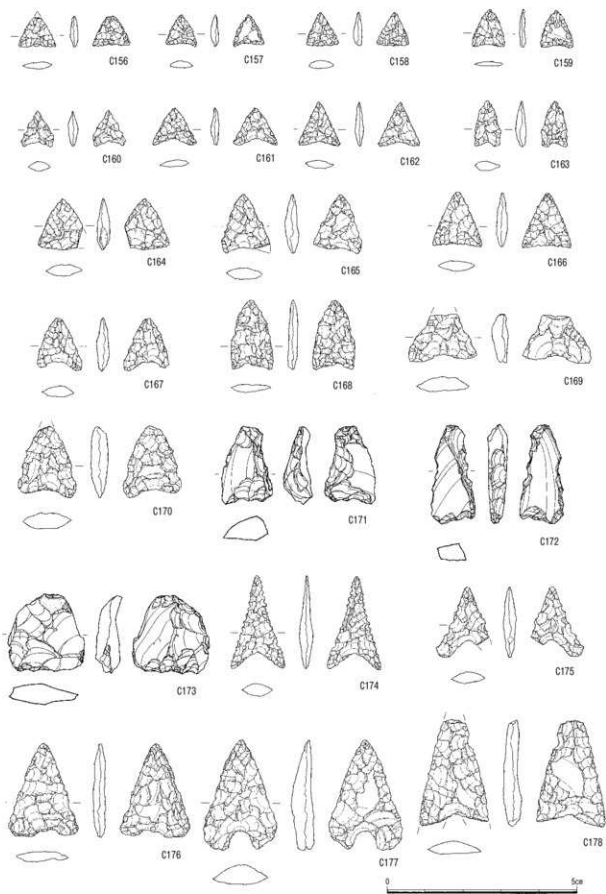
第182図 縄文時代の石器 1



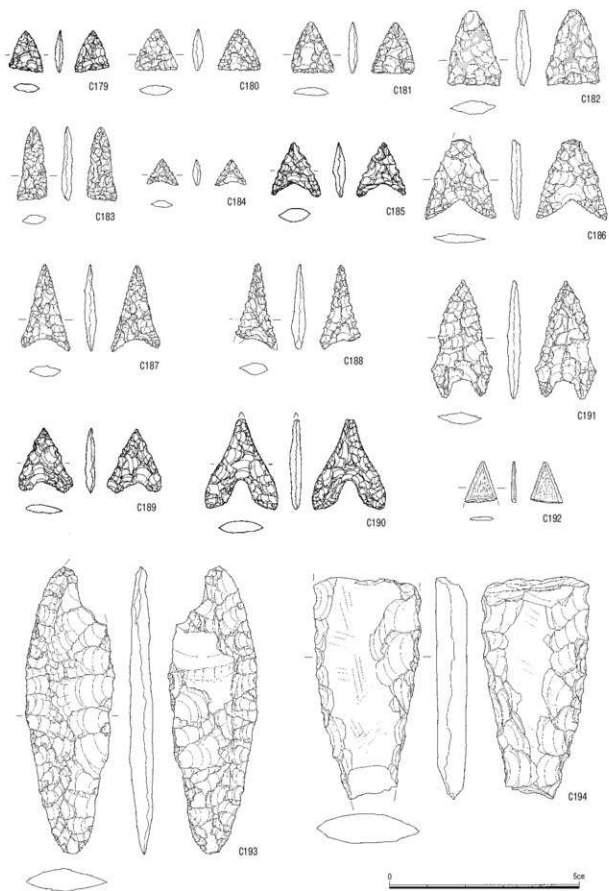
第183図 縄文時代の石器 2



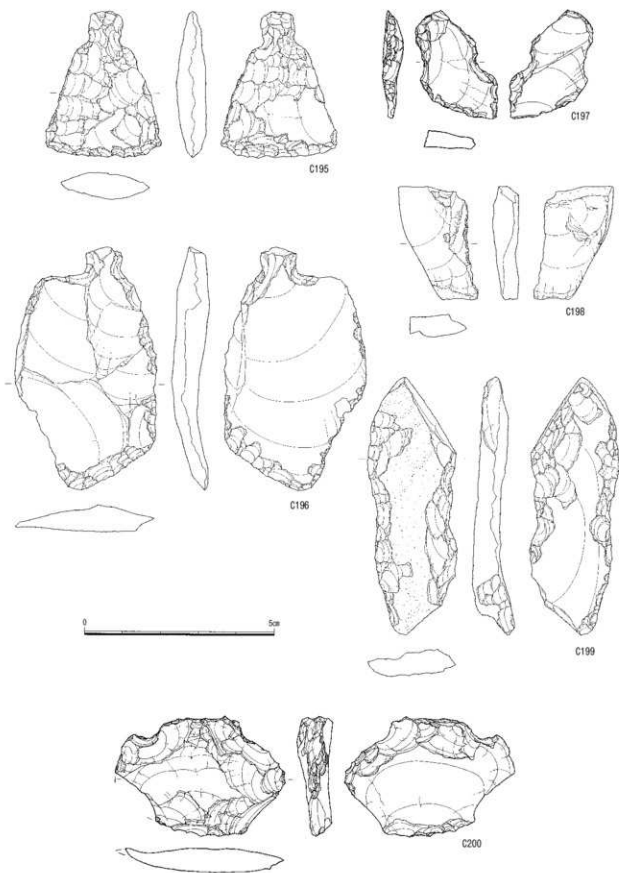
第184図 縄文時代の石器 3



第185図 縄文時代の石器4



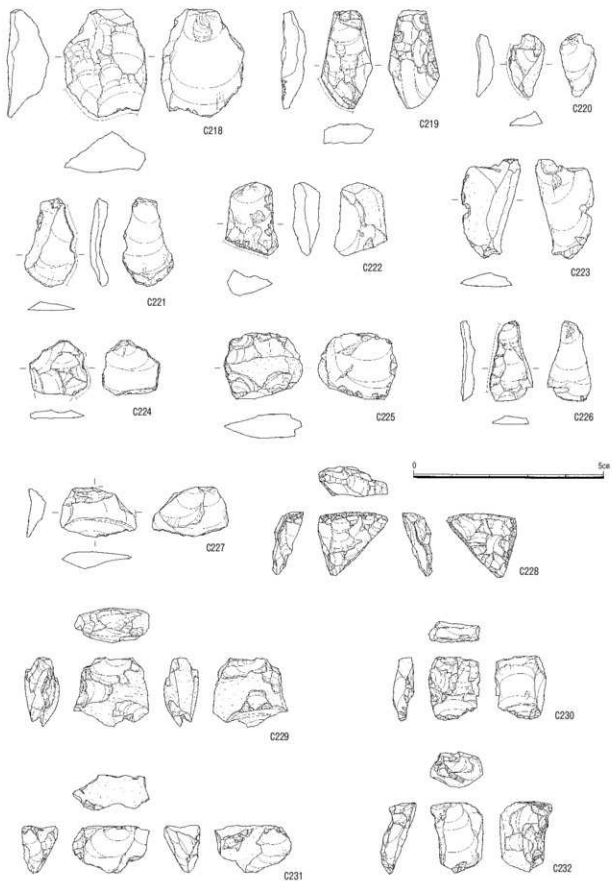
第186図 縄文時代の石器5



第187図 縄文時代の石器6



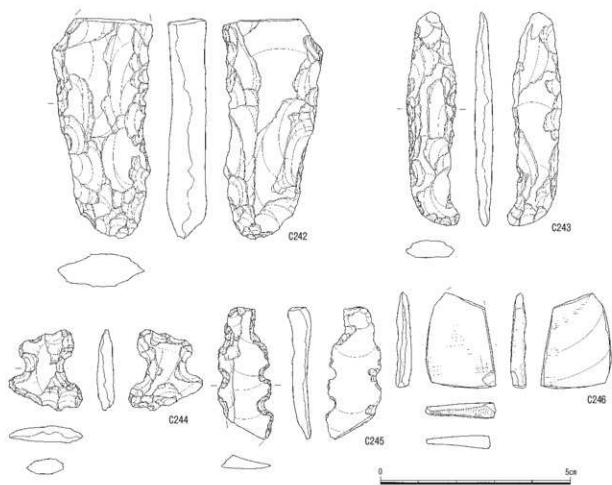
第188図 縄文時代の石器 7



第189図 縄文時代の石器8



第190図 縄文時代の石器9



第191図 縄文時代の石器10

C209やC210は石核を転用したものと考えられる。

楔形石器 (C212~C217)

C212~C217は楔形石器である。いずれも桑ノ木津留産の黒曜石を用いたものである。

使用痕のある石器 (C218~C227)

C220~C227は使用痕のある剥片である。大量に出土したフレイク類（多くは黒曜石）の中から抽出したものである。C227の姫島産黒曜石を除き、すべて桑ノ木津留産の黒曜石剥片を使用したものである。

石核類 (C228~C241, C499)

C228~C241は黒曜石の石核類で、多くは桑ノ木津留産である。小型剥片石器類の多くや剥片類の多くに桑ノ木津留産が含まれていることと合わせれば、本遺跡における石器製作の一端が見えてくる。

C499はⅧ層下部から出土した姫島産黒曜石の石核である。本遺跡で出土した黒曜石石核の中で最も大きい資料である。

異形石器等 (C242~C246)

C242~C245は異形石器としたものである。C243は「J」字状を呈する完形品（頁岩製）である。C244は両サイドに大きな抉りが施されている。C245は石匙形を呈するもので、ギョクズイを用いている。

C246は頁岩の剥片を研磨したものである。磨製石鏃の未製品と考えられる。

スクレイパー状石器 (C247~C325)

C247~C325はスクレイパー状石器である。自然に薄く剥落した扁平な安山岩を利用して石器としたものを本報告ではスクレイパー状石器とした。刃部形成状況や使用痕の差等から7つの種類に分類した。

1類 刃部あるいは基部に研磨を施したものの。

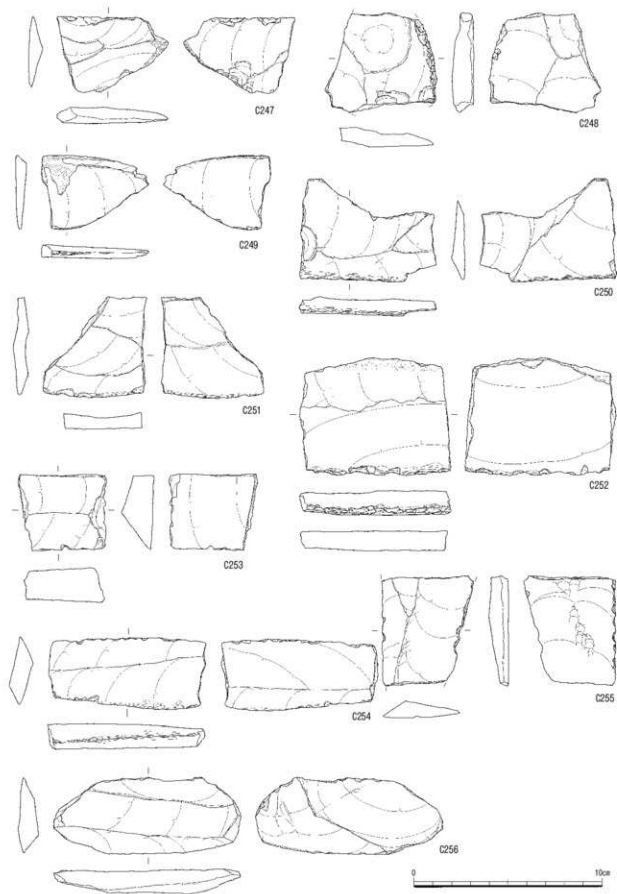
C247は三角形の尖った先端部分の表裏両面に研磨を施したものである。研磨は極めて部分的であるが丁寧であり、その延長線部が刃部となっている。C248は二次加工により刃部形成をしているが、その一部に研磨が施されている。

C249は包丁の形状を呈するもので、背縁部は研磨により丸味をもつように整形されている。下縁の刃部には刃部と平行する線状痕が認められる。刃部の断面形状は「コ」の字状である。

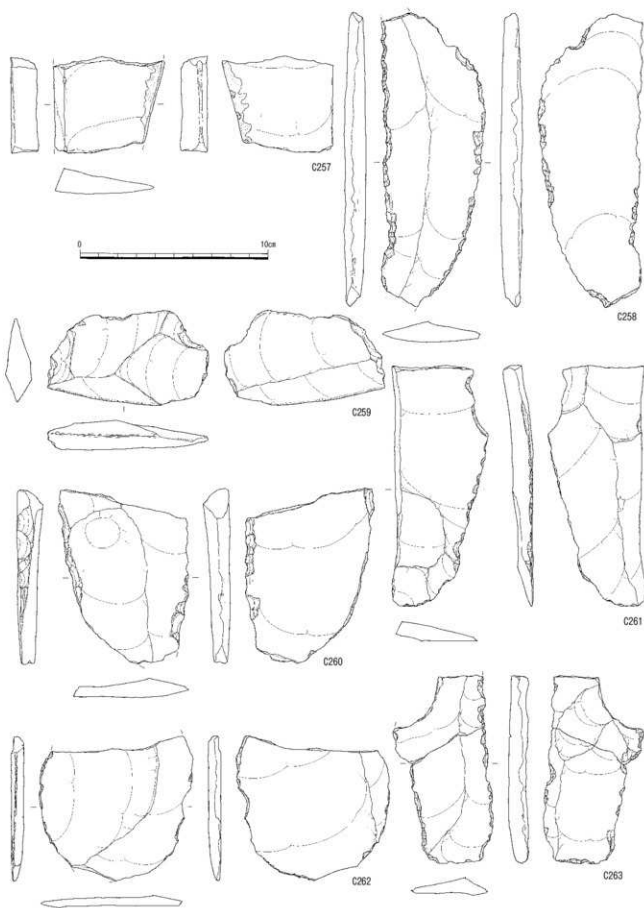
2類 刃部には長軸と平行する線状痕が観察されるもの。

C250は直線状の縁辺に使用痕と考えられる長軸と平行する線状痕が観察されるものである。線状痕はルーペで容易に確認できるような細く直線状であり、刃部の断面形は「U」字状となる。線状痕は図の下側のみでなく、被損した上側の短い残存部にも認められる。また本資料の左図にある稜線部は著しく摩滅している。C251も同様の刃部の長軸に平行する線状痕が観察されるものである。ただし、刃部はわずかに外反している。これは右図の稜線部が摩滅している。

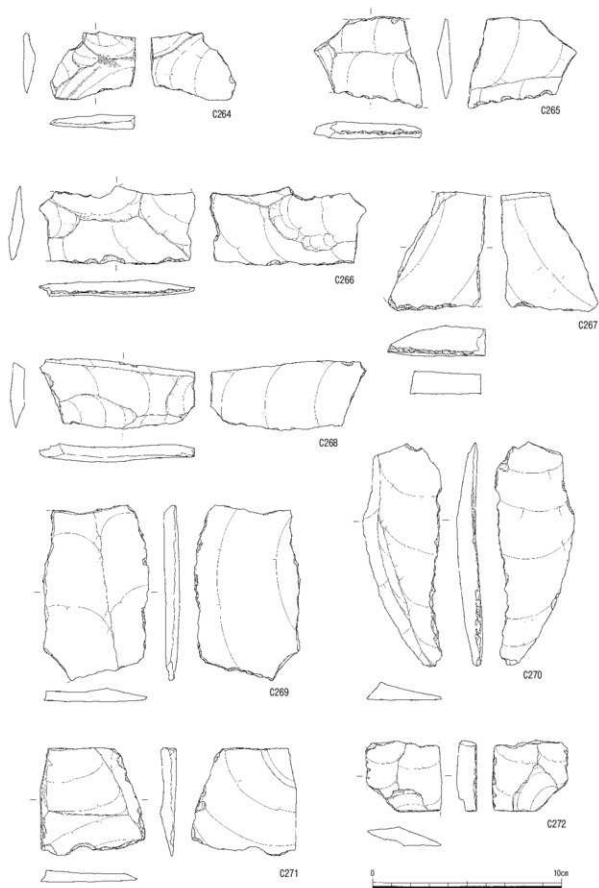
C252は長方形状を呈し、鋭利な方の縁辺に平行な線状痕が観察され、反対側は敲打整形が認められ、全体形状が推定できる。C254も線状痕が著しいものである。刃部は剥落した縁辺のまま使用されたことが明らかであり、刃部が加工によって形成された痕跡はない。



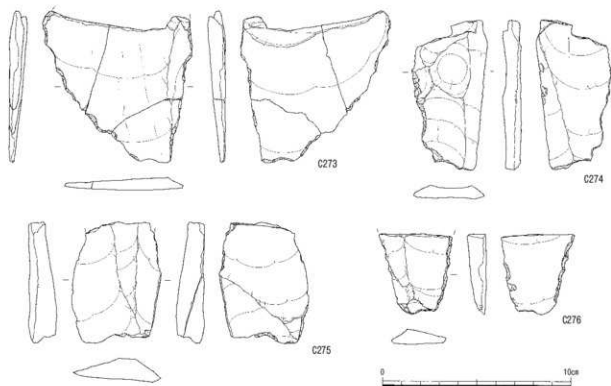
第192図 縄文時代の石器11



第193図 縄文時代の石器12



第194図 縄文時代の石器13



第195図 縄文時代の石器14

C253・C255・C256・C259も同様の資料である。いずれも刃部は未加工の緑辺をそのまま利用している。このうち、C259は図の下縁のみでなく、上縁にも平行線状痕が認められる。C257も2つの緑辺に平行線状痕が観察されるものがあるが、それぞれの刃部角度は大きく異なる。線状痕は比較的広く付いている。

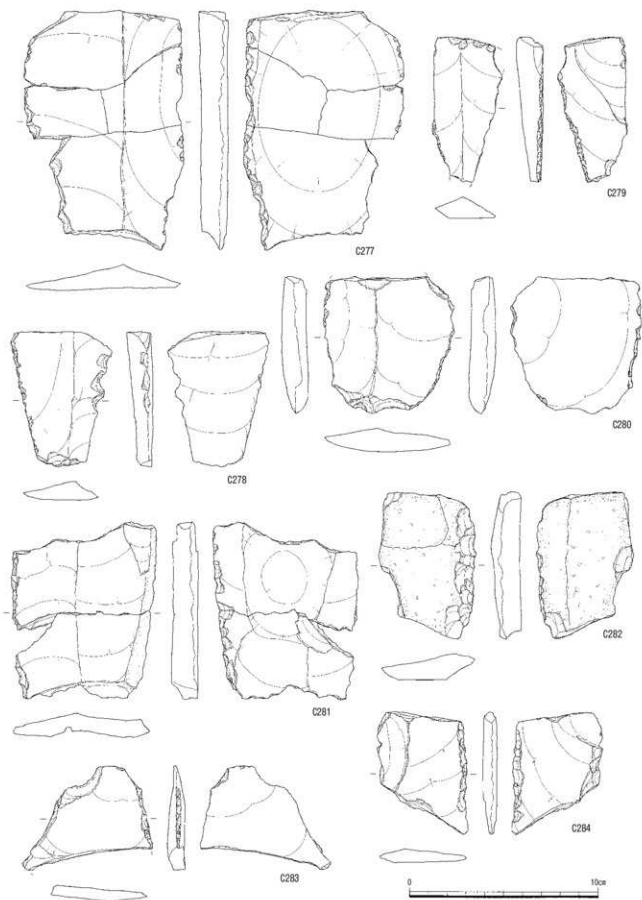
C258は左図側縁の一部に平行線状痕が認められるもので、他の緑辺は二次加工が施されている。これは線状痕の切り合い関係から、刃部の再加工が行われたことを示している。また反対の右緑辺にも刃部形成によるスクレイパーエッジが施されている。C260・C261・C263も同様に線状痕が一部残存するもので、大部分は刃部の再加工が行われているものである。C262は線状痕が認められる緑辺が円形となるものである。

3類 緑辺の使用痕が刃部の長軸と垂直方向に摩滅が観察されるもの。

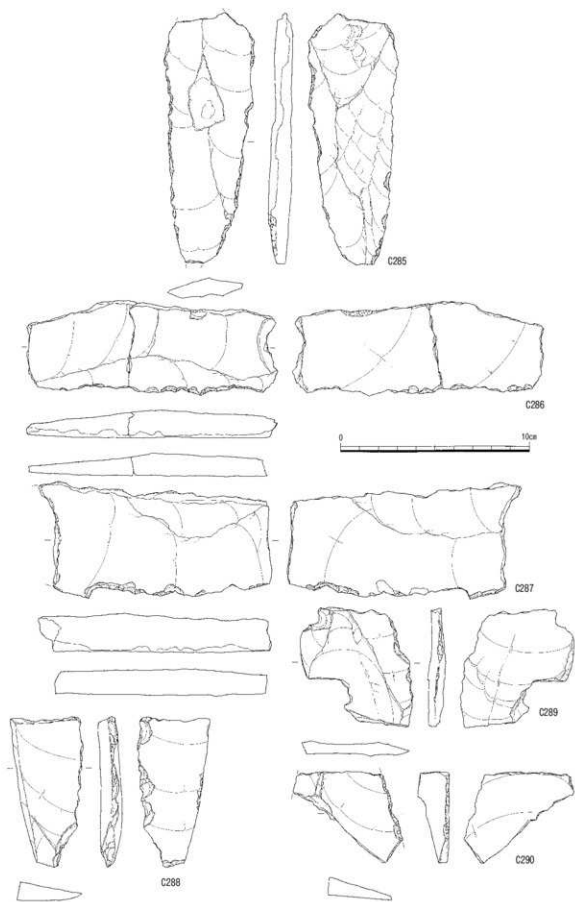
C264は緑辺に長軸と垂直方向の使用痕が観察されるものであり、左図の稜線部分は研磨が施されている。C265は両緑辺に垂直方向の摩滅状使用痕が認められるものであるが、これは中央の稜も摩滅している。柄の装着と関係するものであろうか。

C266、C267はいずれも図の下線部分に刃部と垂直方向の使用痕が認められる。C268は細身の長方形状で両側縁に使用痕がかんさつされるものである。C269は比較的幅広の形状であり、一端に同様の使用痕が認められるものである。図の下端には整形が施されている。

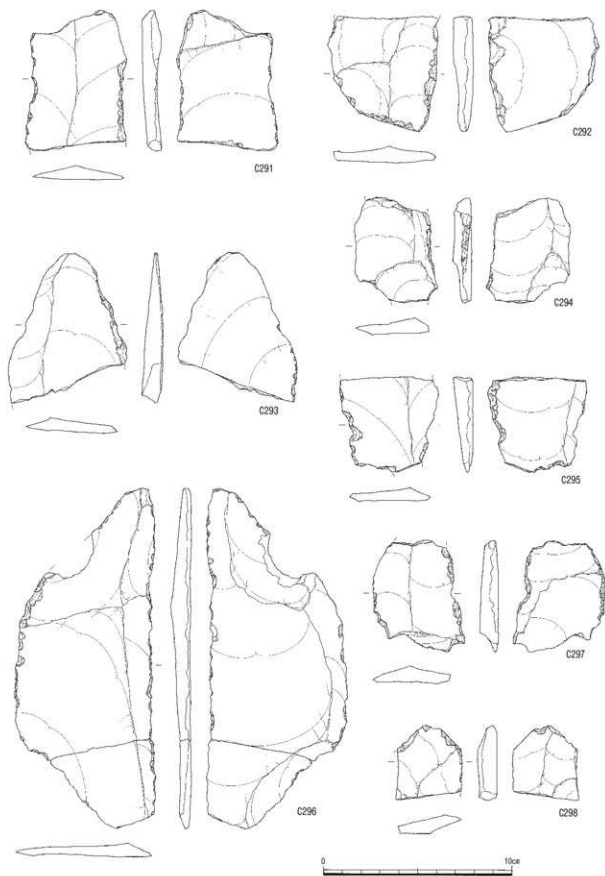
C270は細身の形状を呈し、両側縁に使用痕が観察されるものである。C271～C275も同様に緑辺の一部に刃部長軸とは垂直方向に摩滅した使用痕が認められるものである。これらはほとんど薄い



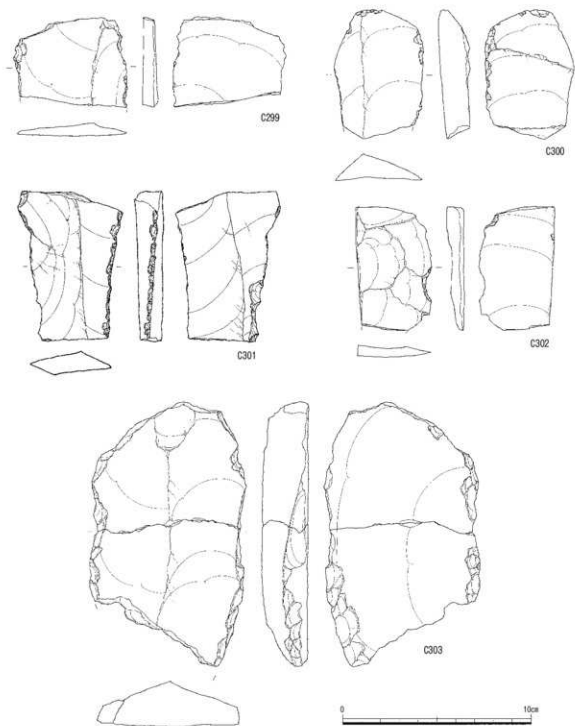
第196図 縄文時代の石器15



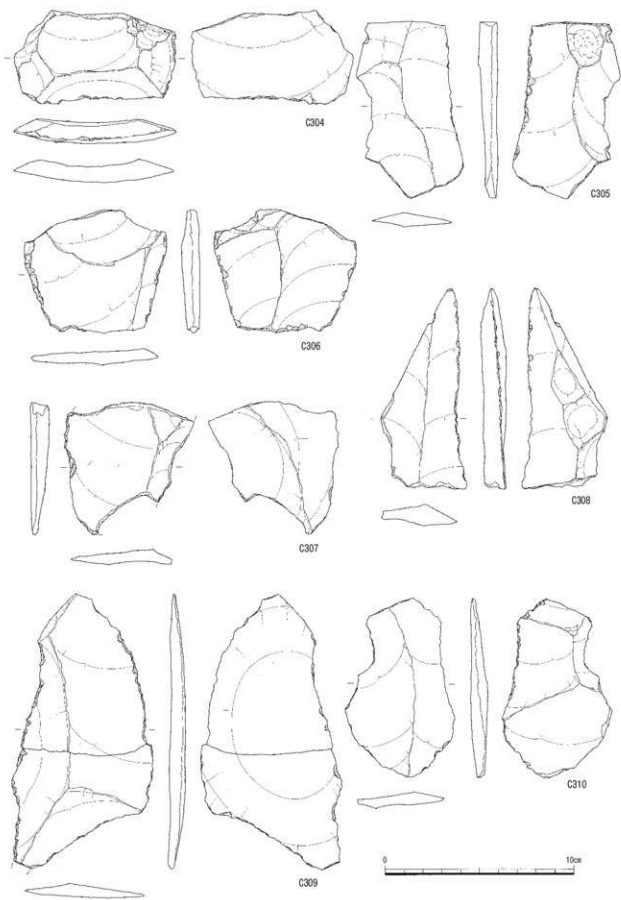
第197図 縄文時代の石器16



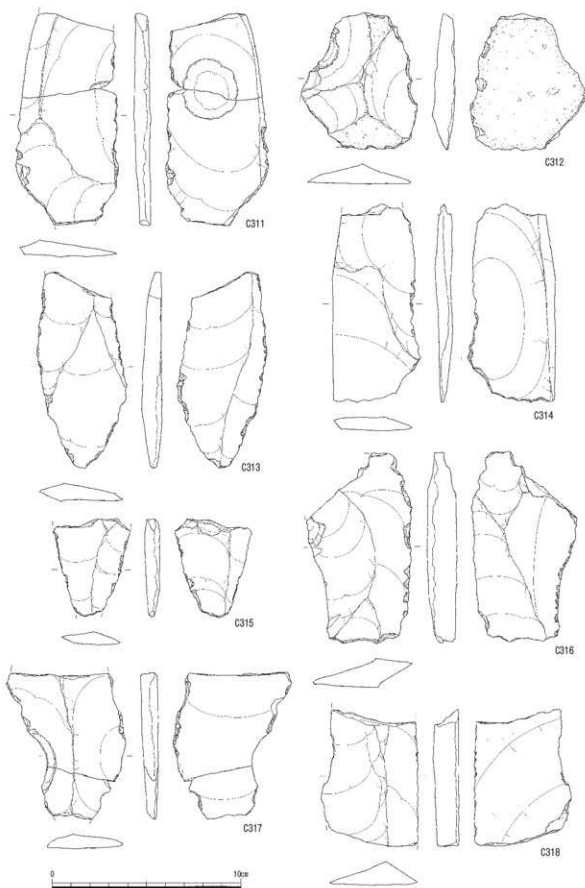
第198図 縄文時代の石器17



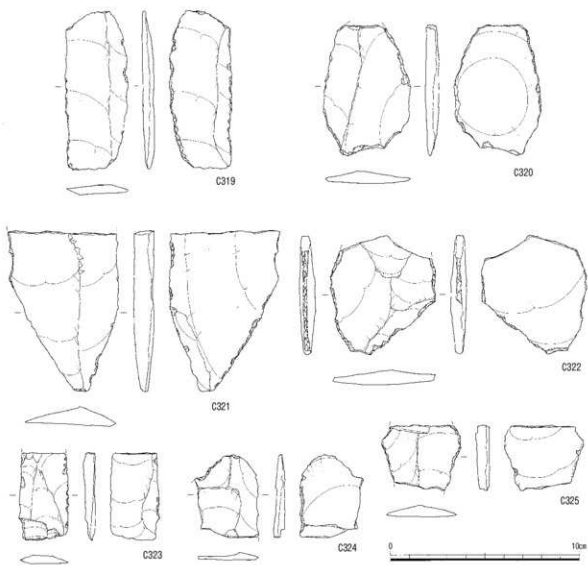
第199図 縄文時代の石器18



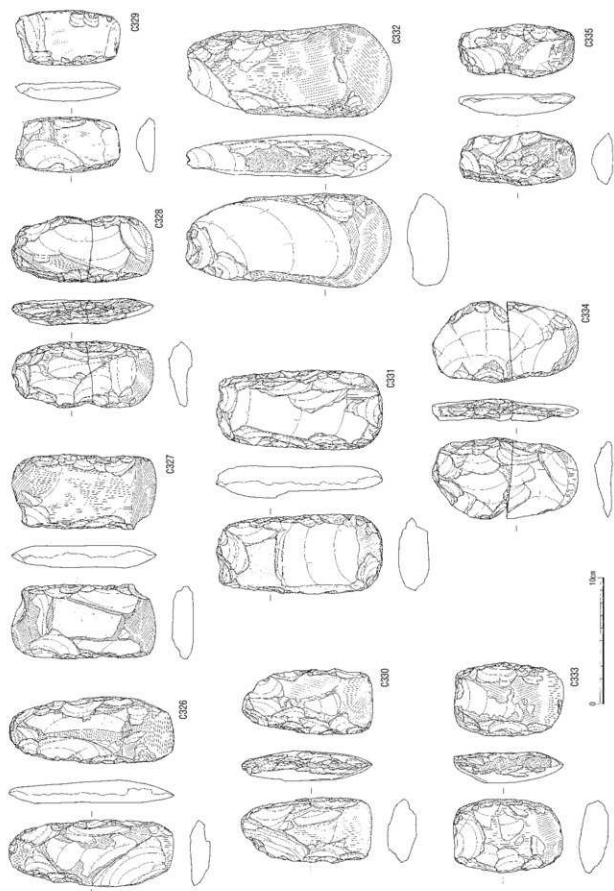
第200図 縄文時代の石器19



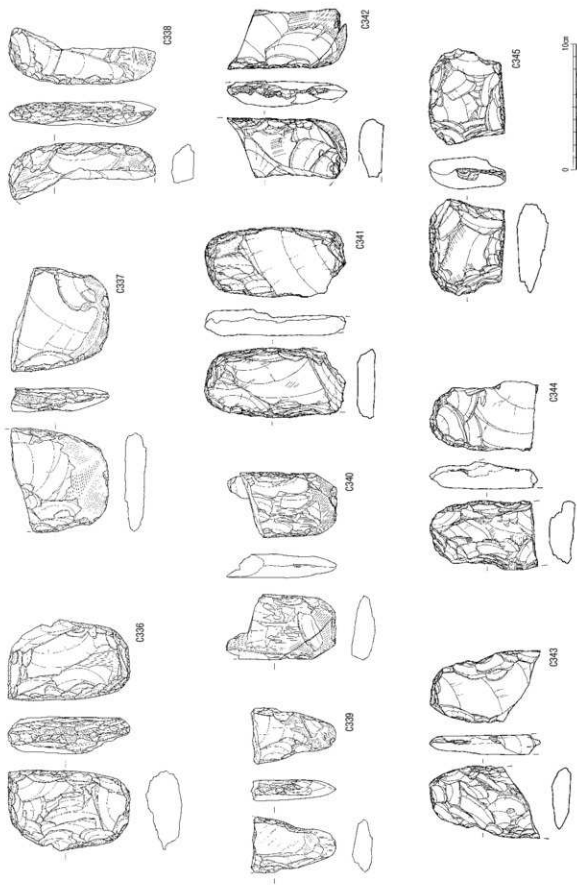
第201図 縄文時代の石器20



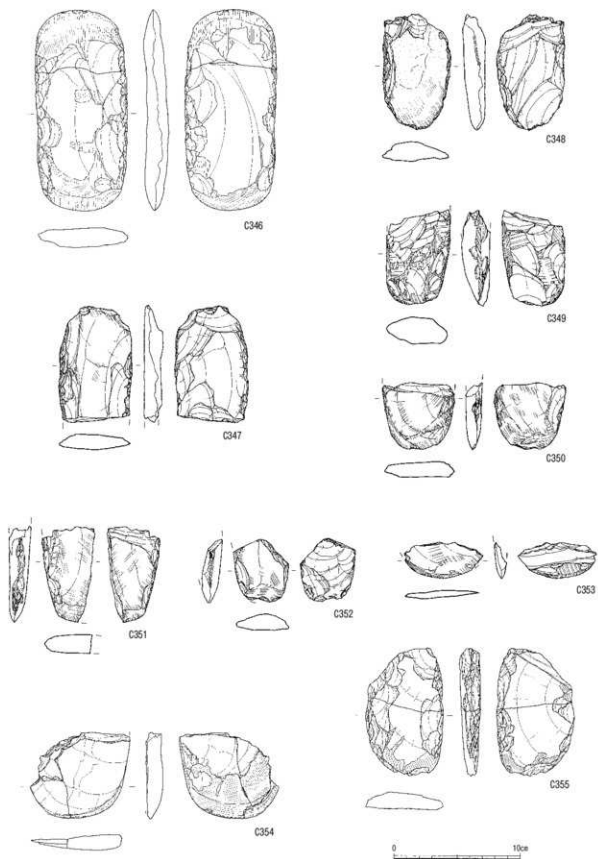
第202図 縄文時代の石器21



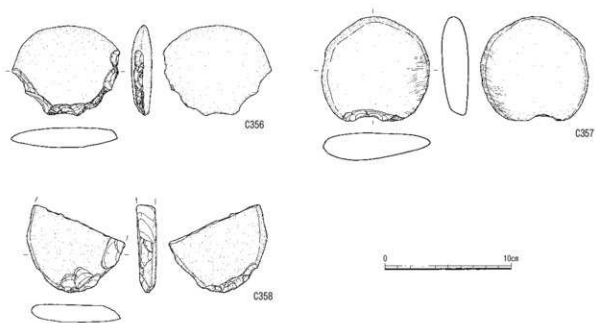
第203図 縄文時代の石器22



第204図 縄文時代の石器23



第205図 縄文時代の石器24



第206図 縄文時代の石器25

縁辺部分がそのまま使用されるものが多い。また刃部縁辺は直線のみでなく、外反するものも認められる。

4類 二次加工により明確な刃部形成が施されたもの。

C277は比較的大型の素材剥片が使用されており、両側縁に丁寧な二次加工により刃部が形成されたものである。破損したものが4点接合している。C281も縁辺に二次加工により刃部が形成されたものである。両側縁の刃部の一部が使用により摩滅している。

C278～C280、C283、C284も同様に二次加工により刃部を形成したものであり、C280は先端部を粗い剝離で搔器状としている。C278、C280、C283、C284の刃部縁辺の一部には摩滅が観察される。

C285～C300も二次加工により刃部を形成したものであり、刃部は直線状のものや外反した縁辺のものもあり多様である。このうち、C286～C288、C290、C292、C295、C296、C300の刃部の一部は使用による摩滅が観察される。

5類 ノッチ状の刃部をもつもの。

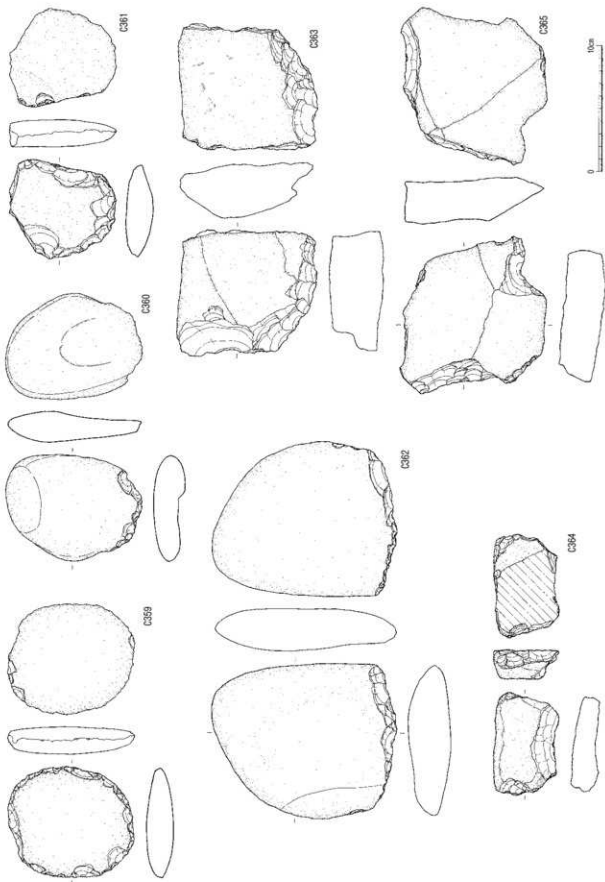
C302は縁辺の一部にノッチ状の二次加工を施した刃部をもつものである。

6類 全体の縁辺に粗い二次加工が認められるもの。

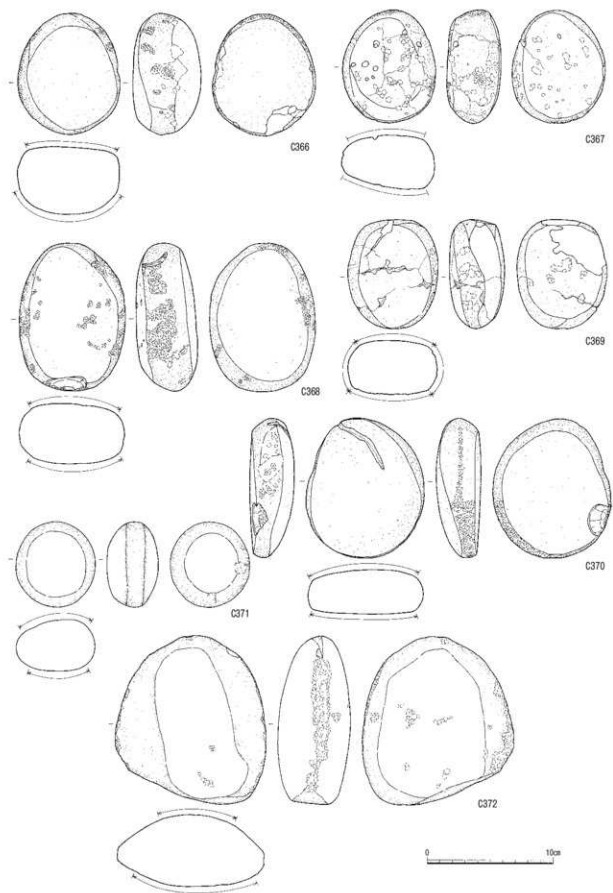
C303は比較的大型で厚みのある素材剥片が利用され、縁辺に粗い二次加工が認められるものである。

7類 素材剥片の薄くなった縁辺をそのまま刃部として利用したもの。

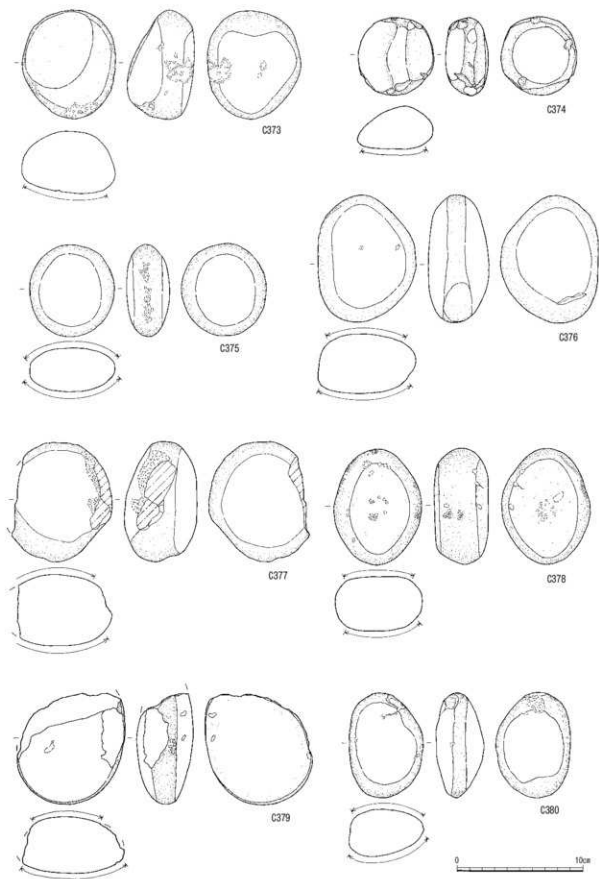
C304は長方形の薄くなった下縁部分を刃部として使用したものであり、そこに使用痕と考えられる刃つぶれと、わずかに摩滅痕が観察されるものである。基部にあたる右上部には整形加工が施されている。C306は薄くなった両側縁が刃部として使用され、摩滅痕が認められる。C310は刃部のみでなく、稜線部もまめつしているものである。



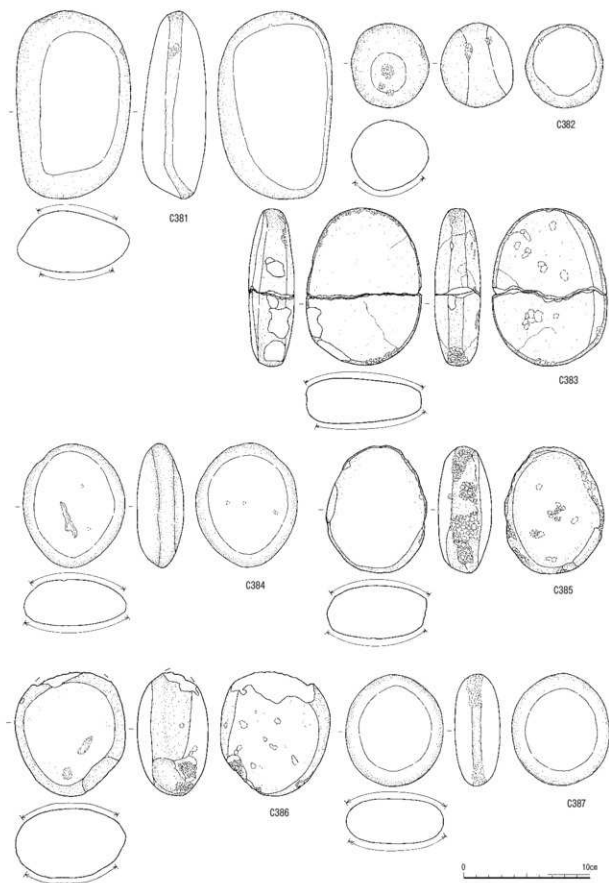
第207図 縄文時代の石器26



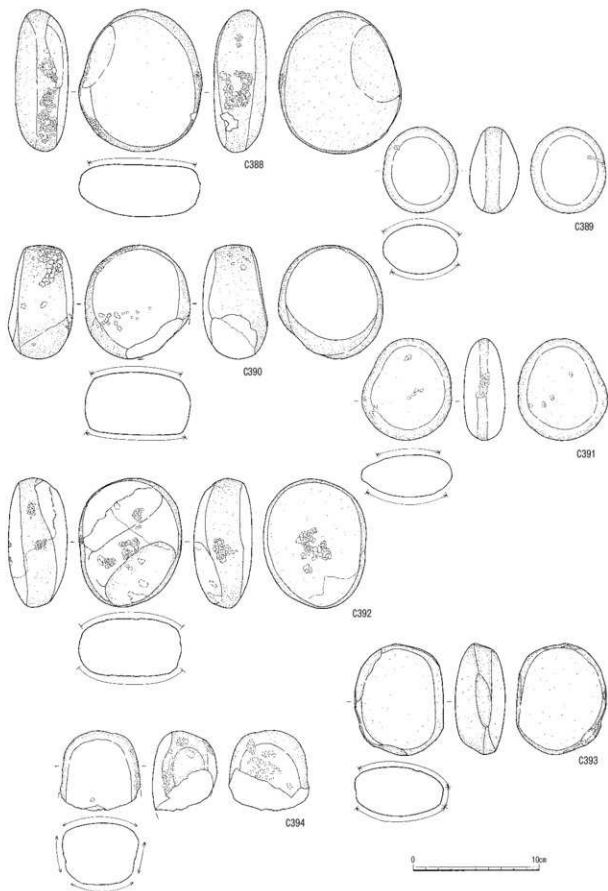
第208図 縄文時代の石器27



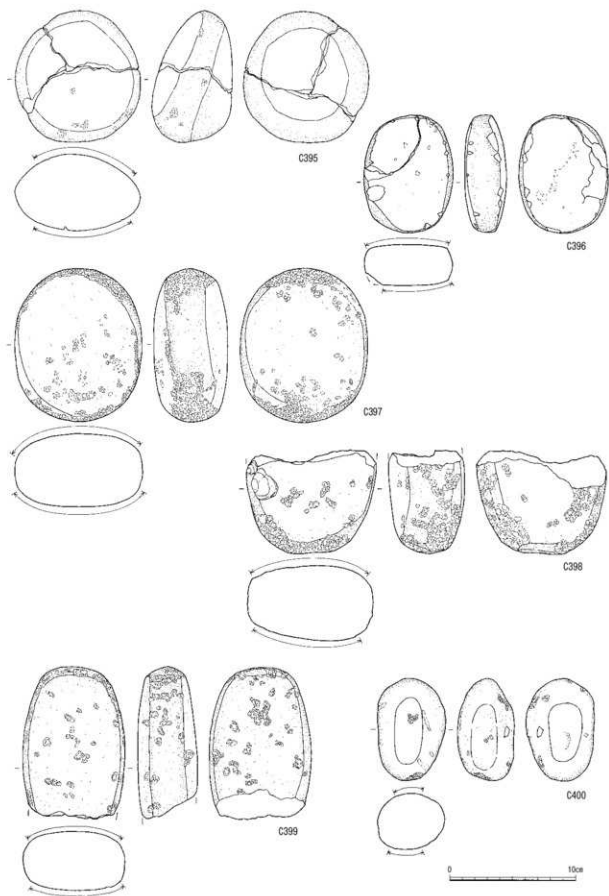
第209図 縄文時代の石器28



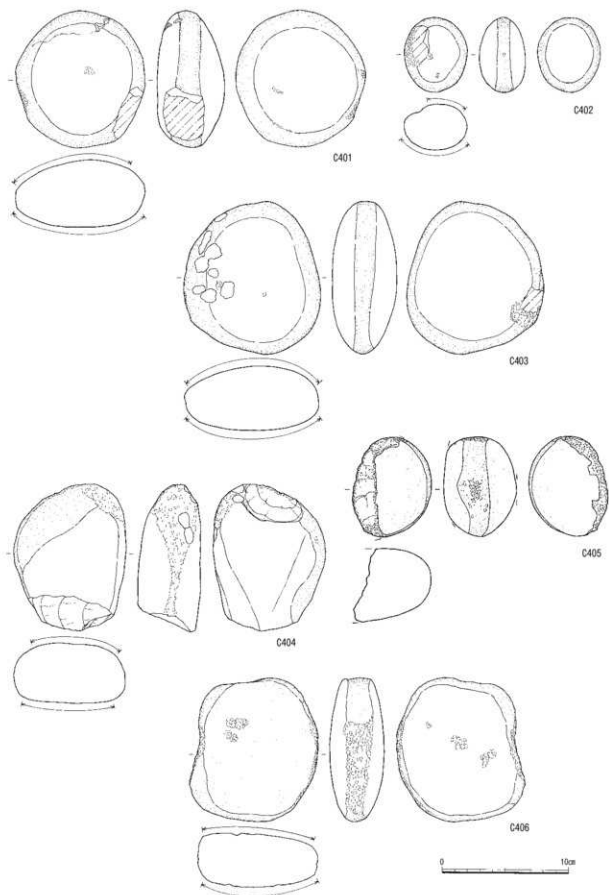
第210図 縄文時代の石器29



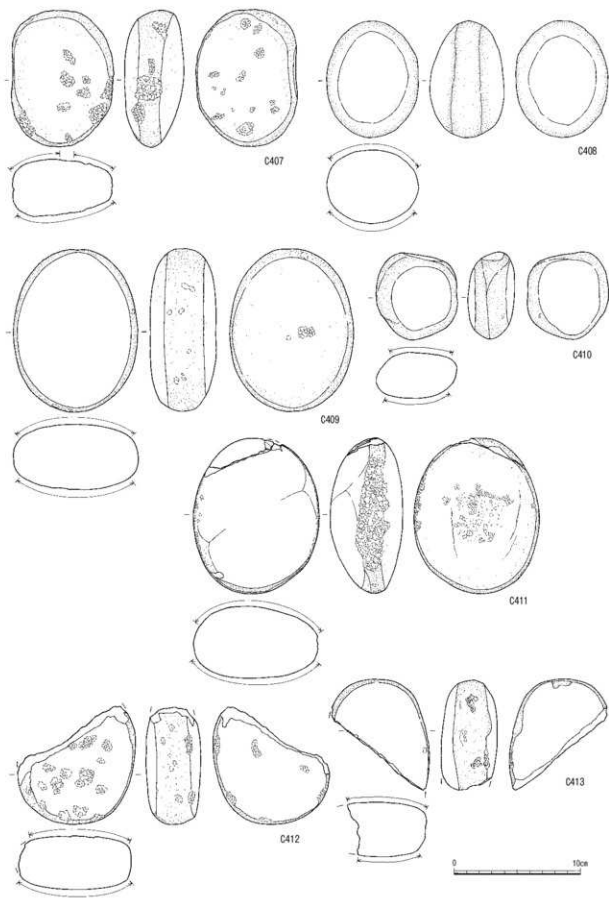
第211図 縄文時代の石器30



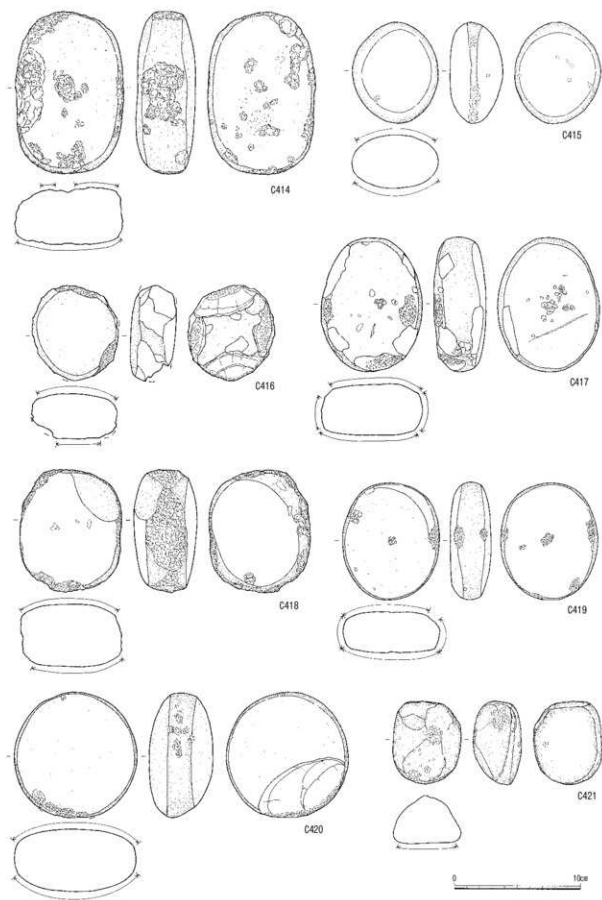
第212図 縄文時代の石器31



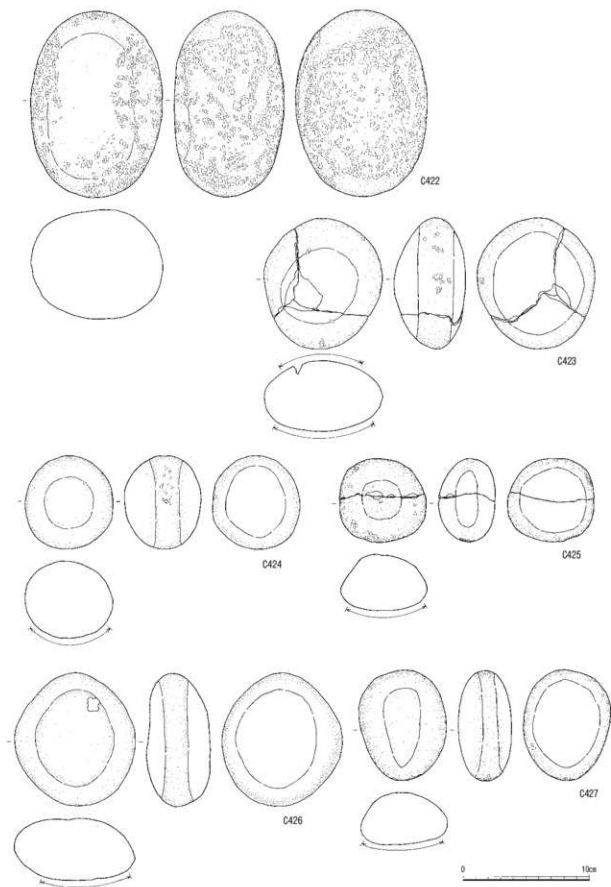
第213図 縄文時代の石器32



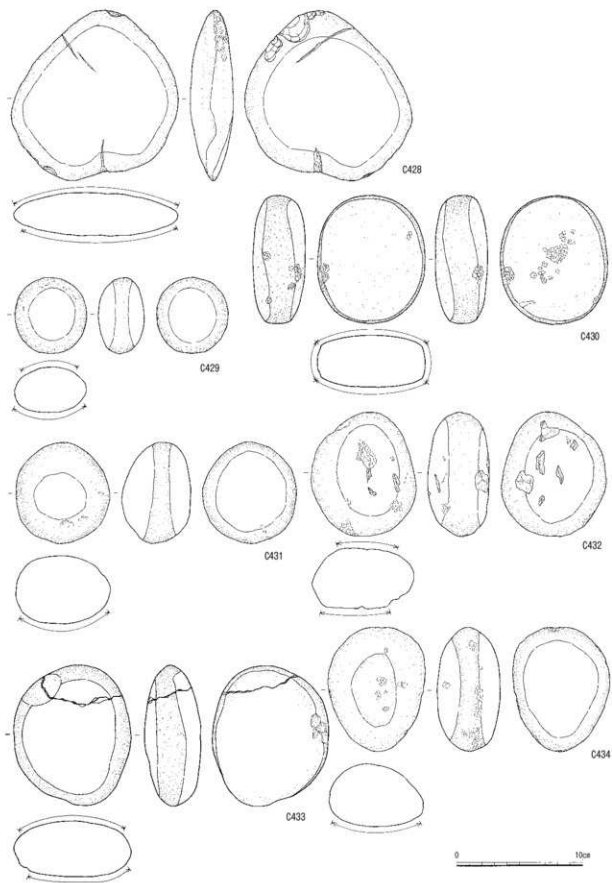
第214図 縄文時代の石器33



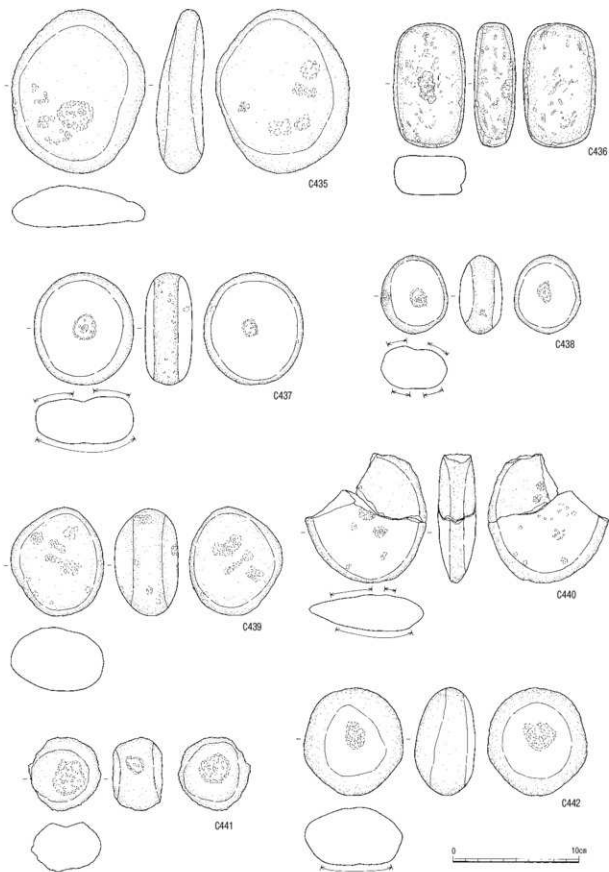
第215図 縄文時代の石器34



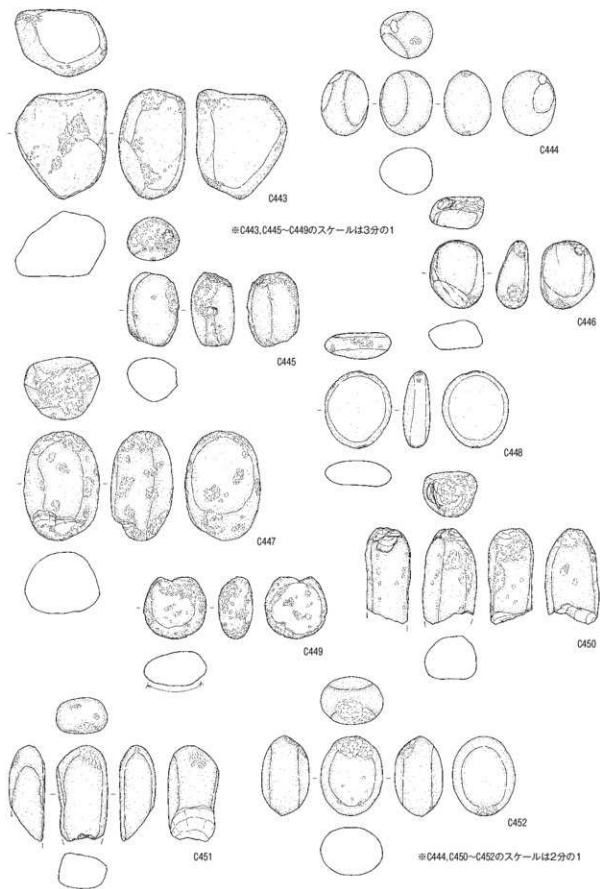
第216図 縄文時代の石器35



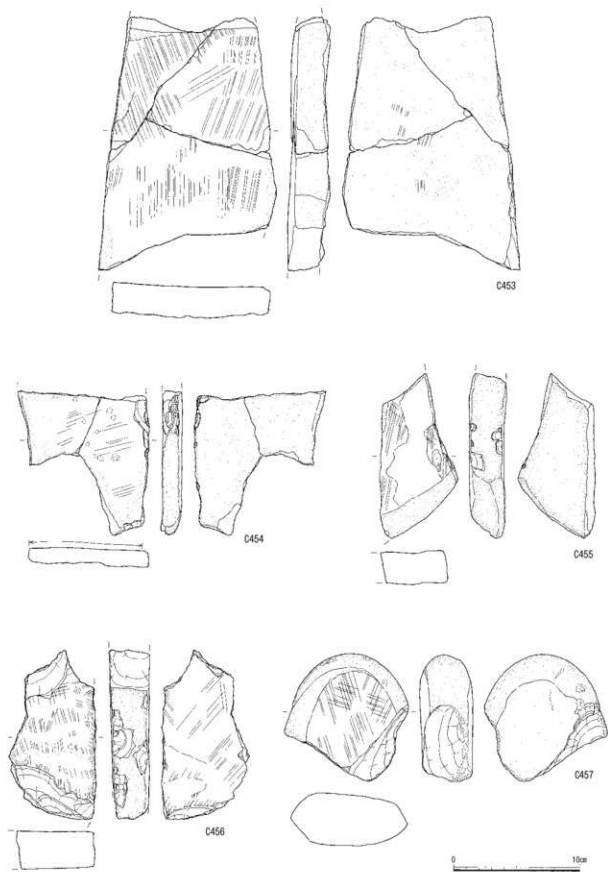
第217図 縄文時代の石器36



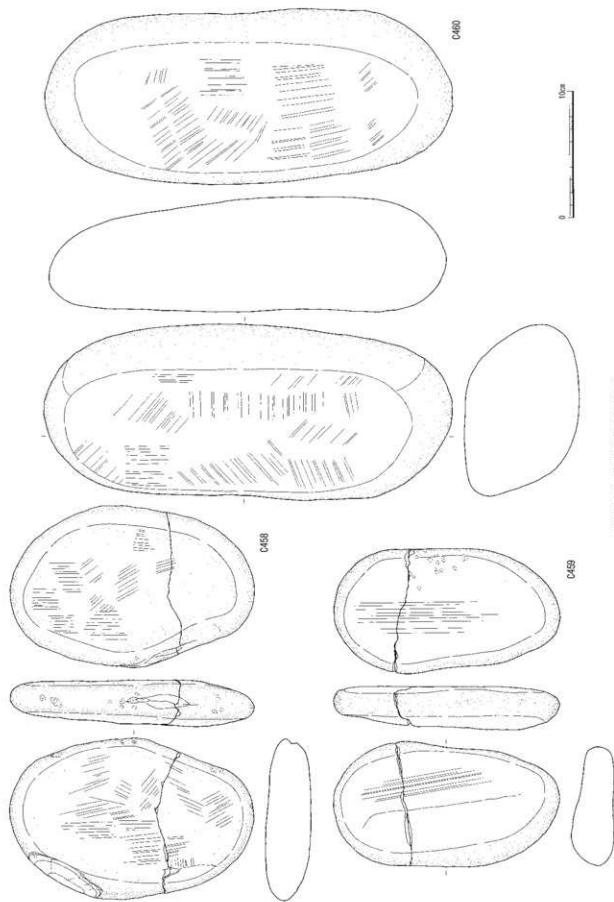
第218図 縄文時代の石器37



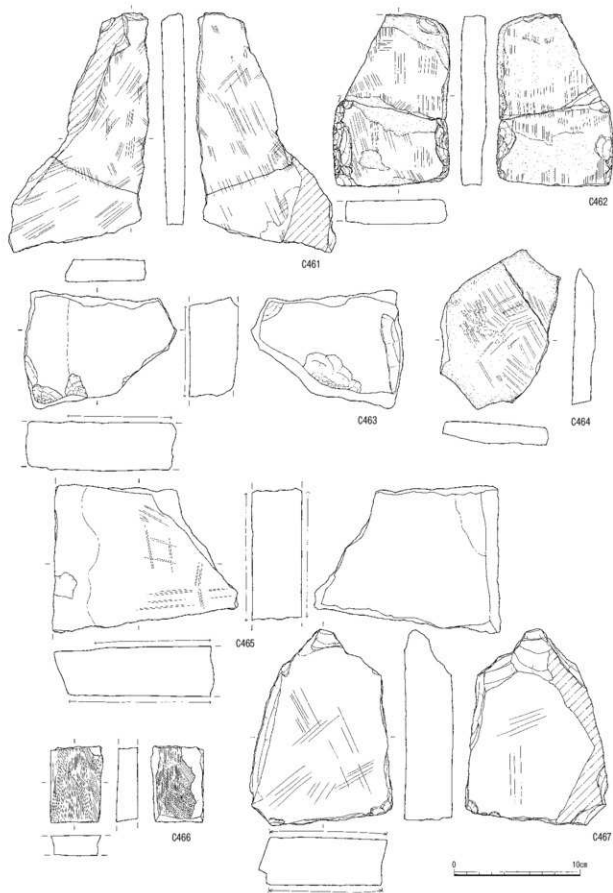
第219図 縄文時代の石器38



第220図 縄文時代の石器39



第221図 縄文時代の石器40



第222図 縄文時代の石器41

C307～C325も同様に素材剥片の薄くなった縁辺をそのまま刃部として使用したものであり、刃部にはわずかな摩滅痕が認められるものである。

刃部磨製石斧 (C326～C355)

刃部を研磨した磨製石斧が30点出土した。すべて頁岩製であった。長さが15cmを超える大型のもの (C332やC346) から長さ6.75cmの小型のもの (C335) までであるが、長さ10cm前後のものが平均的な大きさであった。素材剥片の剝離面を残したままのものが多く、面的な研磨を行っているものは少なかった。

礫器 (C356～C365)

安山岩製の礫器が10点出土した。扁平な円礫の一端ないし側縁を加工したもので、5～8cm程度の比較的小型のものも多かった。C362のように長さが15cm程度の大型のものはほとんど出土していない。本遺跡では多くの遺構が検出された。その遺構、つまり施設を掘削する労力も大変なものであったと考えられる。土地の掘削から施設用木材の伐採等、道具としての石器が活躍したであろうことは想像に難くない。そのような意味で、礫器のような石器は比較的万能な使用方法が考えられ、遺跡内での在り方が注目される。伐採具としての石斧はあるが、掘削具としての道具は何を用いたのか？ 硬い薩摩火山灰層の掘削には相応の道具が必要である。課題の1つである。

磨石類 (C366～C442)

いわゆる磨石、敲石、凹石類も多く出土した。主として安山岩を利用したものが多かったが、砂岩や花崗岩を利用したものもみられた。花崗岩製の磨石の中には、現地でも取り上げる際にボロボロになって崩壊した例もあった。石皿としても使用され、利器としての花崗岩も確実に存在するが、土器の混和剤としての花崗岩も指摘されており、遺跡の中での出土状況等に注意する必要がある (第Ⅶ章参照)。

ハンマーストーン (C443～C452)

円礫や棒状礫に敲打痕の残るものである。安山岩や砂岩を利用したもので、長さ3～8cm程度の小型ハンマーである。

砥石 (C453～C467)

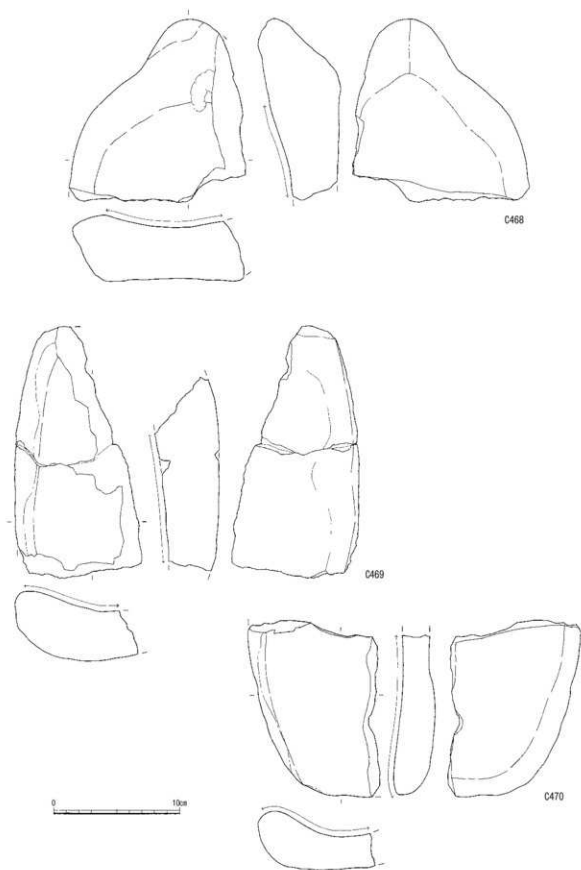
扁平な円礫や角礫の平坦面を用いた砥石である。多くは砂岩製で安山岩製も若干みられた。ほとんどは欠損品と考えられる。実際に2、3個が接合した例もあった。特に砂岩製の砥石は、破損度が高い。

石皿 (C471～C486)

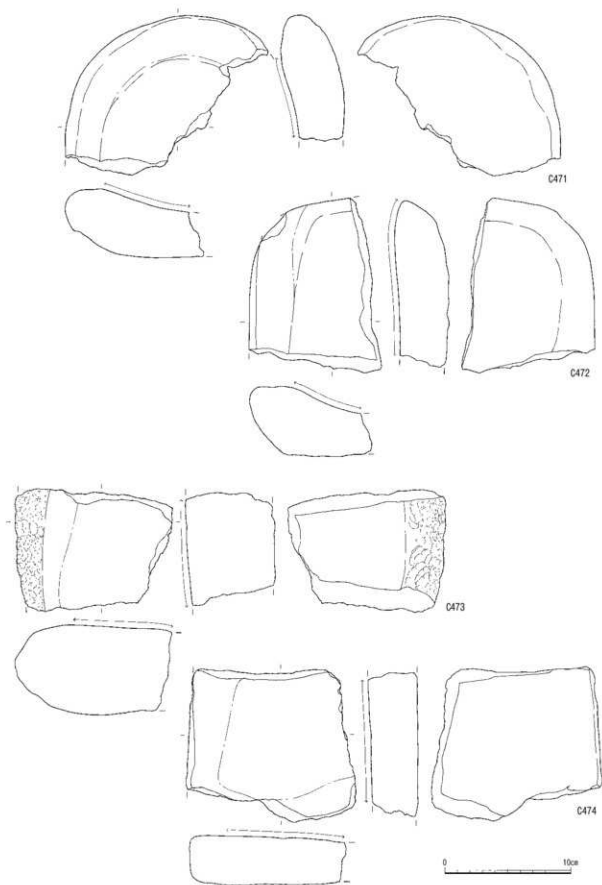
石皿としては安山岩を使用したものが多く、その他花崗岩や砂岩製のものもみられた。多くは欠損品であるが、C478やC484～C486などは当時のままの形状を有していると考えられる。

軽石製品 (C487～C498)

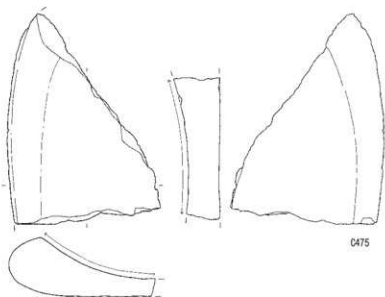
軽石製品も多く出土した。遺構内出土のものも合わせると50点以上出土した。線刻のあるもの。孔を有するもの。溝状の筋を有するもの。研磨による平坦面を有するものなど多様である。溝状の筋を有するものについては、骨角器の研磨具ではないかとの指摘もある (谷口康浩氏御教示)。軽石製品の用途については不明点が多い。ましてや資料数の少ない縄文時代早期段階の軽石製品についてはなおさらである。今後の重要な検討課題である。



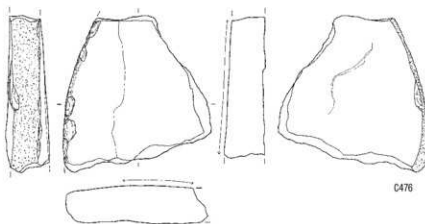
第223図 縄文時代の石器42



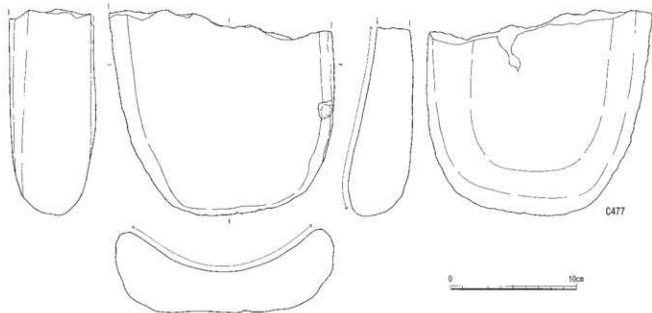
第224図 縄文時代の石器43



C475



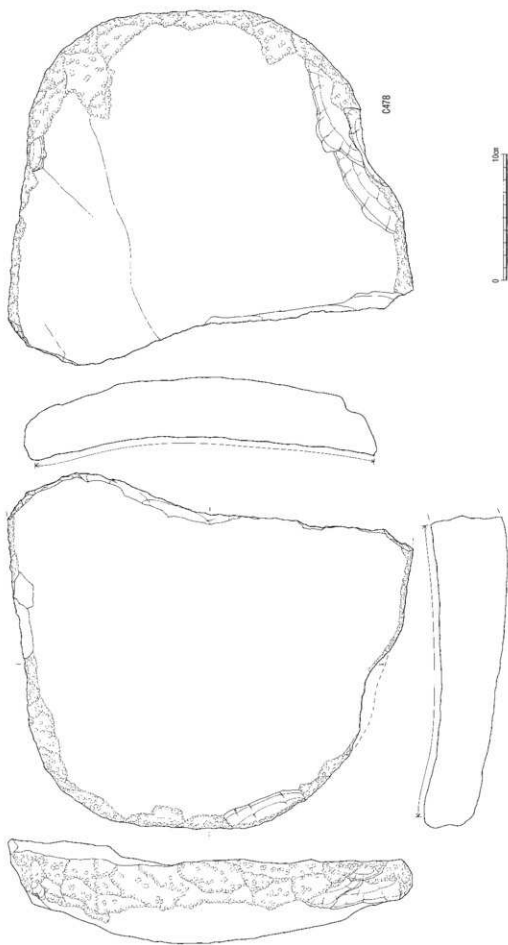
C476



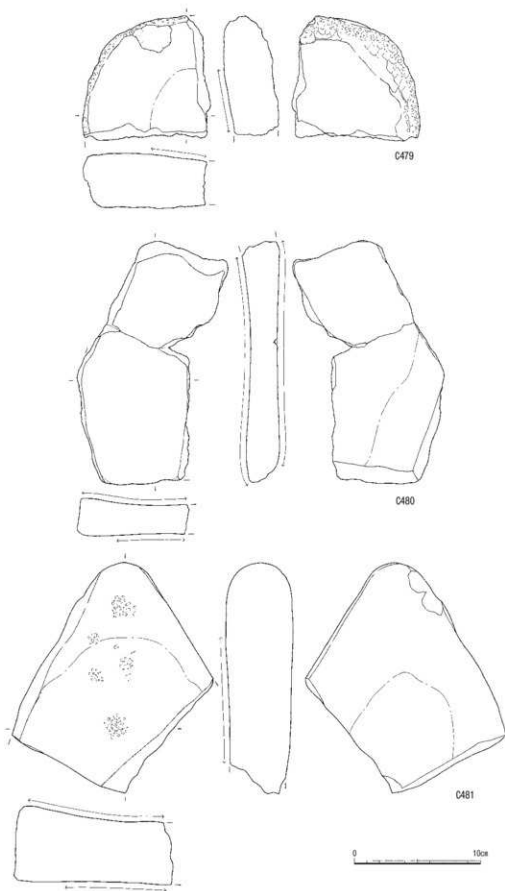
C477



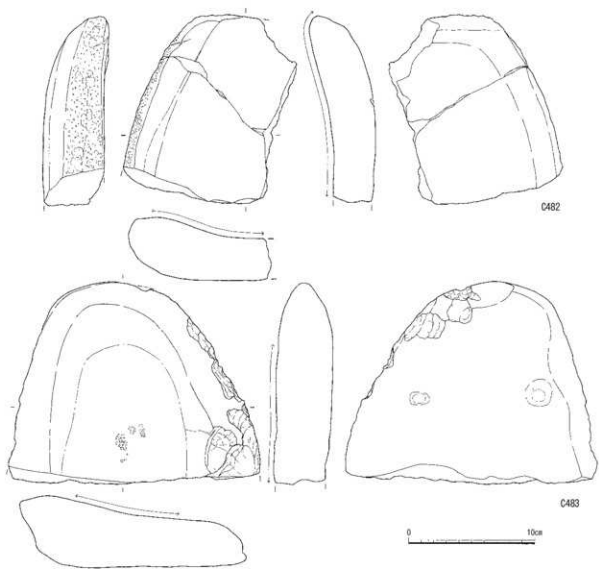
第225図 縄文時代の石器44



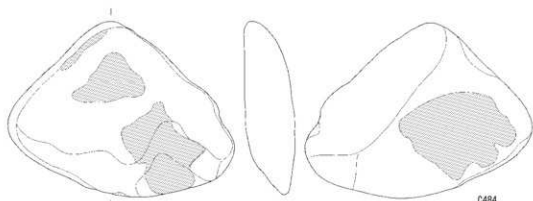
第226図 縄文時代の石器45



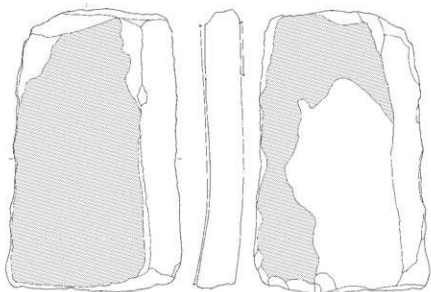
第227図 縄文時代の石器46



第228図 縄文時代の石器47

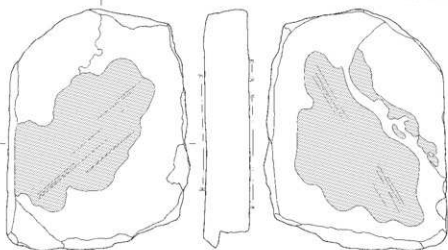


C484



C485

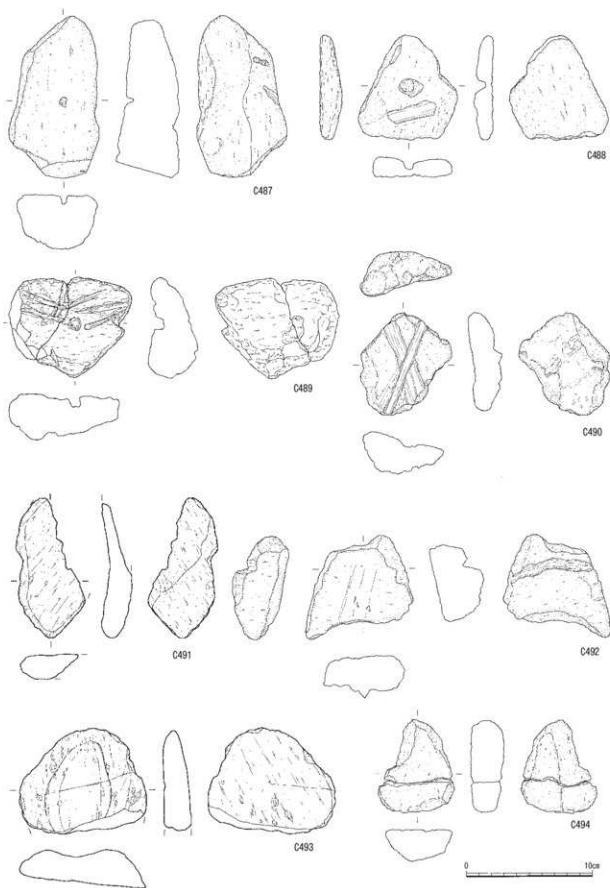
※網かけ部分は磨面が顕著に見られる範囲



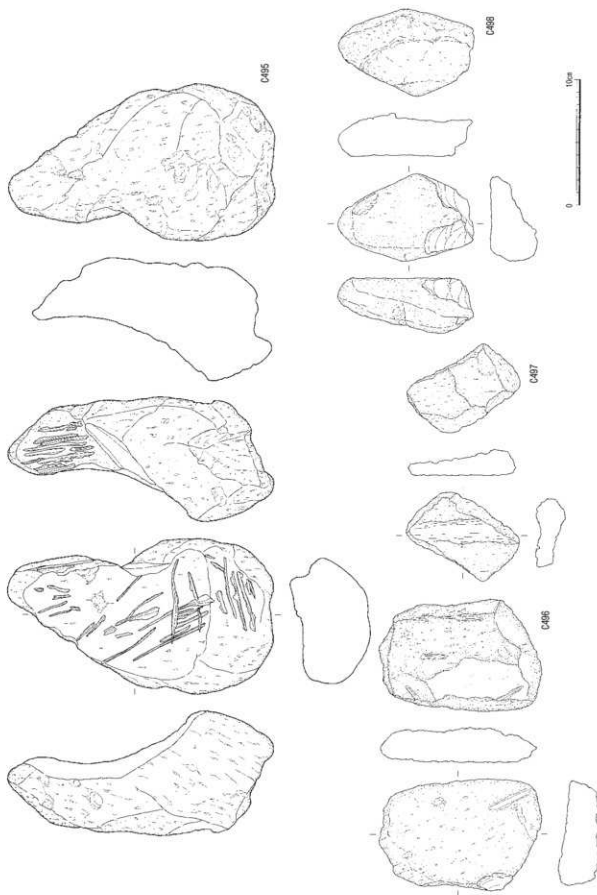
C486

0 20cm

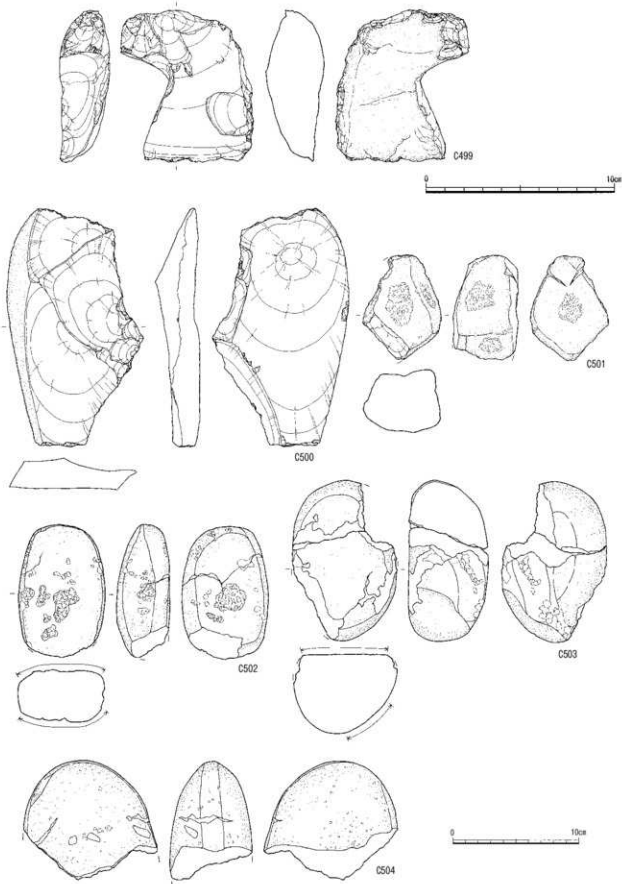
第229図 縄文時代の石器48



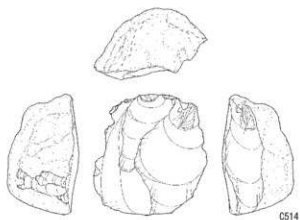
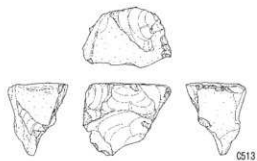
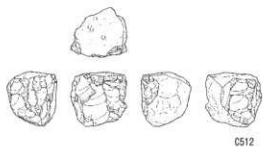
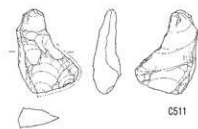
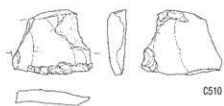
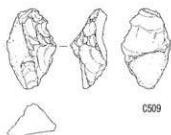
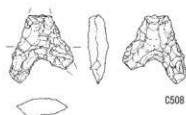
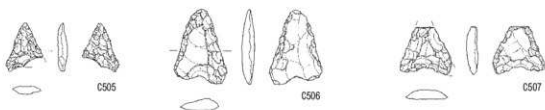
第230図 縄文時代の石器49



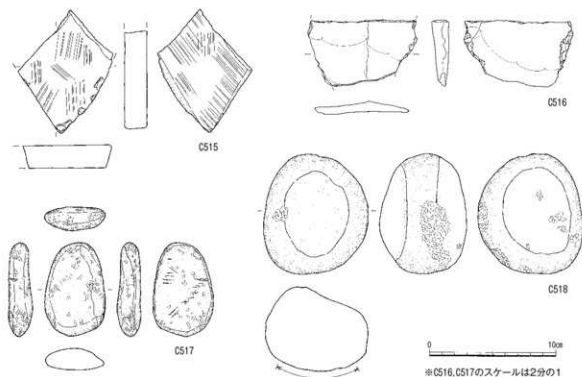
第231図 縄文時代の石器50



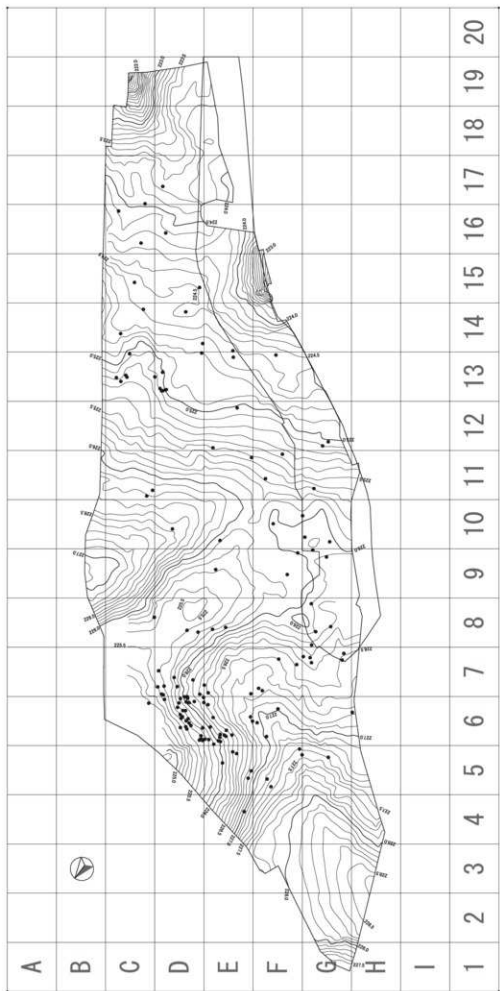
第232図 縄文時代の石器51



第233図 縄文時代の石器52

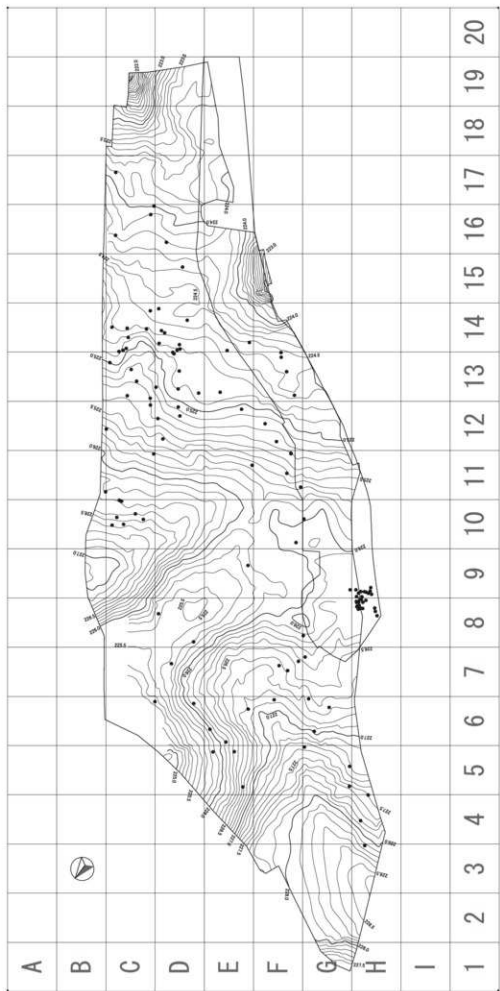


第234図 縄文時代の石器53



第235図 出土遺物分布図1 (石鏡)

(全圖対象)



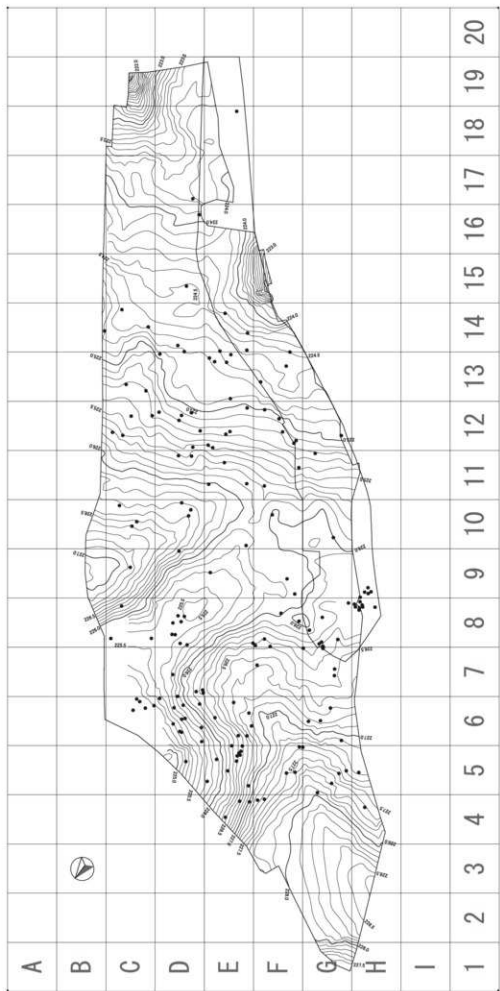
第236図 出土遺物分布図2 (スケレイバー類)

(全層対象)



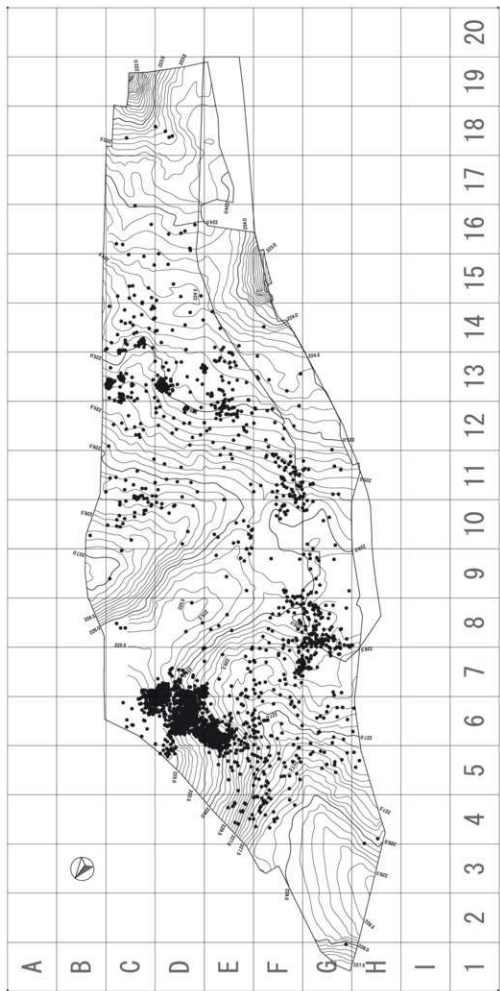
第237図 出土遺物分布図3 (磨石・石皿類)

(全層対象)



第238図 出土遺物分布図4（その他の石器）

（全層対象）



第239图 出土遺物分布图5 (照片類)

(全圖対象)

第5節 縄文時代前期・中期の調査

縄文時代前期から中期にかけての遺構としては、Ⅳ層やⅤ層を埋土とする落とし穴状の土坑が32基検出された。また、土器や石器も少量ながら出土した。主にⅣ層およびⅤ層から出土した遺物である。

1 遺構（落とし穴状土坑）

当該期の遺構としては、落とし穴的な機能をもつ土坑ではないかと考えられる遺構が32基検出された。全体的に遺構が少ない中で、単独でいきなり検出されるという印象があり、注意しないと掘り下げすぎていたという場面がいくつかあった。無遺物層やそれに近い部分の掘削の難しさを痛感した事例である。埋土状況から、Ⅳ層の御池軽石層をベースとするもの（A）とⅤ層のアカホヤ火山灰をベースとするもの（B）の2つがあった。基本的には当然埋土Bの方が古いと考えられる。埋土Aの場合、御池の軽石粒が指標となり検出することができた。

土坑の形状、特に底面の杭跡の状況をもとに以下の4種に分類した。なお、遺構底面はすべてスライスして、杭跡の有無を確認した。

Type1……底面に杭跡を1本（基本）もつもの

Type2……底面中央部に杭跡が複数並ぶもの

Type3……底面の壁面沿いに杭跡が並ぶもの

Type4……底面に杭跡が存在しないもの

① Type1

2号落とし穴状土坑 F12区で検出されたもので、検出面はⅤa層、埋土パターンはAであった。平面形は楕円形で、長軸120cm、短軸90cm、検出面からの深さが40cmを測る。杭は中央ではなく、東側に偏って検出された。

13号落とし穴状土坑 D13区で検出されたもので、検出面はⅧ層、埋土パターンはBであった。平面形は長方形で、長軸100cm、短軸50cm、検出面からの深さが50cmを測る。杭はほぼ中央に約50cmの深さで検出された。北側の壁際に1本の杭跡が見られるが、中央杭との関係は不明瞭である。

21号落とし穴状土坑 D8区で検出されたもので、検出面はⅧ層、埋土パターンはAであった。平面形は楕円形で、長軸120cm、短軸90cm、検出面からの深さが60cmを測る。杭は中央からやや北寄りて検出された。

② Type2

1号落とし穴状土坑 F12区で検出されたもので、検出面はⅤa層、埋土パターンはAであった。平面形は長楕円形で、長軸170cm、短軸80cm、検出面からの深さが100cmを測る。杭はほぼ中央に並び、10本確認できた。

4号落とし穴状土坑 E14区で検出されたもので、検出面はⅥb層、埋土パターンはAであった。平面形は長楕円形で、長軸140cm、短軸80cm、検出面からの深さが70cmを測る。杭はほぼ中央に並び、5本確認できた。中央の杭が最も深く、約60cmを測る。

5号落とし穴状土坑 G9区で検出されたもので、検出面はⅧ層、埋土パターンはAであった。西側に地層の横転があり、土坑の一部が削平されている。平面形は楕円形で、長軸75+a cm、短軸80cm、検出面からの深さが30cmを測る。杭は中央に2本確認できた。

表4 落とし穴状土坑一覧

遺構No.	検出区	形状	検出層	埋土	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	杭数	杭の配置	備考
1	F12	長楕円形	Va	A	170	80	100	10	中央に横並び	
2	F12	楕円形	Va	A	120	90	40	1		
3	F10, 11	円形	VII	A	110	90	35	0		
4	E14	長楕円形	VIb	A	140	80	70	5	中央に横並び	
5	G9	楕円形	VII	A	75+ α	80	30	2	中央に横並び	
6	D11	不明	VIa	A	90+ α		90	0		
7	D13	楕円形	VII	B	100	70	35	0		
8	E, F13	長楕円形	VI	A	200	80	90	11	中央に横並び	
9	E13	長方形	VII	P11?	120	40	40	4	ランダム	第VI章第8節
10	C12	長楕円形	VII	A	120	60	35	8	中央に横並び	
11	C12	円形	VII	A	100	90	40	11	円形状	
12	D13	長楕円形	VII	A	150	60	50	5	中央に横並び	
13	D13	長方形	VII	B	100	50	50	1	中央	
14	D13	円形	VII	A	100	90	45	15	円形状	
15	F12	円形	V	A	90	80	130	0		
16	E14	円形	VIb	A	85	70+ α	70	4	ランダム	
17	D15	楕円形	VIb	A	135	90	20	0		
18	C16	長方形	VI	A	170	70	85	6	中央に横並び	
19	D17, 18	円形	VII	B	70	60	40	0		
20	F11	不明	Vb	A	50+ α	20+ α	65	0		
21	D8	楕円形	VII	A	120	90	60	1	偏在	
22	D8	長楕円形	Va	A	160	80	110	6	中央に横並び	
23	D, E8	円形	Vb	A	100	100	80	0		
24	B10	円形	VI	B	70	60	15	0		
25	C9	楕円形	VIa	A	100	60	60	0		
26	B9	楕円形	VII	B	130	100	30	0		
27	C8, 9	楕円形	Va	A	150	110	100	0		
28	C9	楕円形	VIa	B	150	80	25	0		
29	B9	不定形	VII	B	120	80	30	0		
30	C7	円形	VII	A	110	95	80	0		
31	F8	長方形	VII	A	150	80	40	14	中央に横並び	
32	F7	円形	VII	B	100	90	30	0		

8号落とし穴状土坑 E・F13区で検出されたもので、検出面はⅥ層、埋土パターンはAであった。平面形は長楕円形で、長軸200cm、短軸80cm、検出面からの深さが90cmを測る。杭はほぼ中央に並び、11本確認できた。

9号落とし穴状土坑 E13区で検出されたもので、検出面はⅦ層、埋土は黄褐色砂質層でほぼ充填されていた。この砂質層を分析した結果、P13かP11である可能性が指摘されている。検出層位からみるとP11起源であると考えられる。平面形は長方形で、長軸120cm、短軸40cm、検出面からの深さが40cmを測る。杭は中央に並び、4本確認できた。うち2本は埋土中まで痕跡が見られた。

10号落とし穴状土坑 C12区で検出されたもので、検出面はⅦ層、埋土パターンはAであった。平面形は長楕円形で、長軸120cm、短軸60cm、検出面からの深さが35cmを測る。杭はほぼ中央に並び、8本確認できた。

12号落とし穴状土坑 D13区で検出されたもので、検出面はⅦ層、埋土パターンはAであった。平面形は楕円形で、長軸160cm、短軸60cm、検出面からの深さが50cmを測る。杭はほぼ中央に並び、5本確認できた。

18号落とし穴状土坑 C16区で検出されたもので、検出面はⅥ層、埋土パターンはAであった。平面形は長方形で、長軸170cm、短軸70cm、検出面からの深さが85cmを測る。杭はほぼ中央に並び、6本確認できた。

22号落とし穴状土坑 D8区で検出されたもので、検出面はⅤa層、埋土パターンはAであった。平面形は長楕円形で、長軸160cm、短軸80cm、検出面からの深さが110cmを測る。杭はほぼ中央に並び、6本確認できた。

31号落とし穴状土坑 F8区で検出されたもので、検出面はⅦ層、埋土パターンはAであった。平面形は長方形で、長軸150cm、短軸80cm、検出面からの深さが40cmを測る。杭はほぼ長軸中央に並び、14本確認できた。うち数本は、埋土中まで痕跡が残っていた。最も深い杭は約80cmもあった。

③ Type3

11号落とし穴状土坑 C12区で検出されたもので、検出面はⅦ層、埋土パターンはAであった。平面形は円形で、長軸100cm、短軸90cm、検出面からの深さが40cmを測る。杭は壁際を中心に配置され、11本確認できた。

14号落とし穴状土坑 D13区で検出されたもので、検出面はⅦ層、埋土パターンはAであった。平面形は円形で、長軸100cm、短軸90cm、検出面からの深さが45cmを測る。杭は中央の2本を取り囲むように壁際に並んで検出された。総数15本で、本遺跡の中では最も杭跡数が多い土坑である。

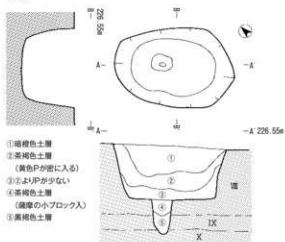
16号落とし穴状土坑 E14区で検出されたもので、検出面はⅥb層、埋土パターンはAであった。平面形は円形で、長軸85cm、短軸70+a cm、検出面からの深さが70cmを測る。杭は壁際で4本確認できた。西側が破壊されており、全容は不明である。

④ Type4

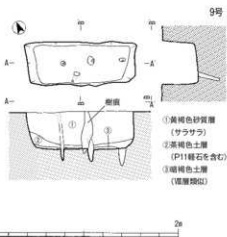
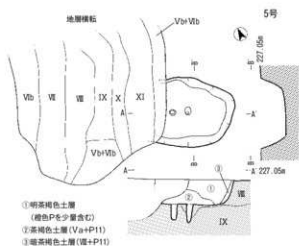
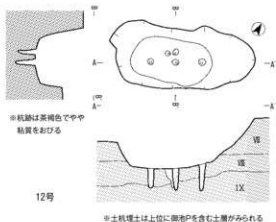
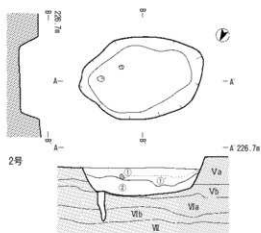
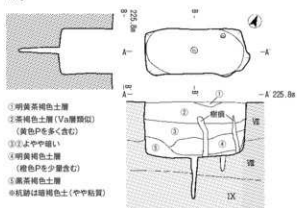
このタイプは、明らかに落とし穴であろうと考えられる15号のようなものもあるが、他については不明な部分も多い。ただし、検出面がⅦ層やⅧ層というものがあり、検出できた規模以上のものが想定されるものも少なくない。ここではいくつか特徴的なものを取り上げる。

3号落とし穴状土坑 F10、11区で検出されたもので、検出面はⅦ層、埋土パターンはAであった。

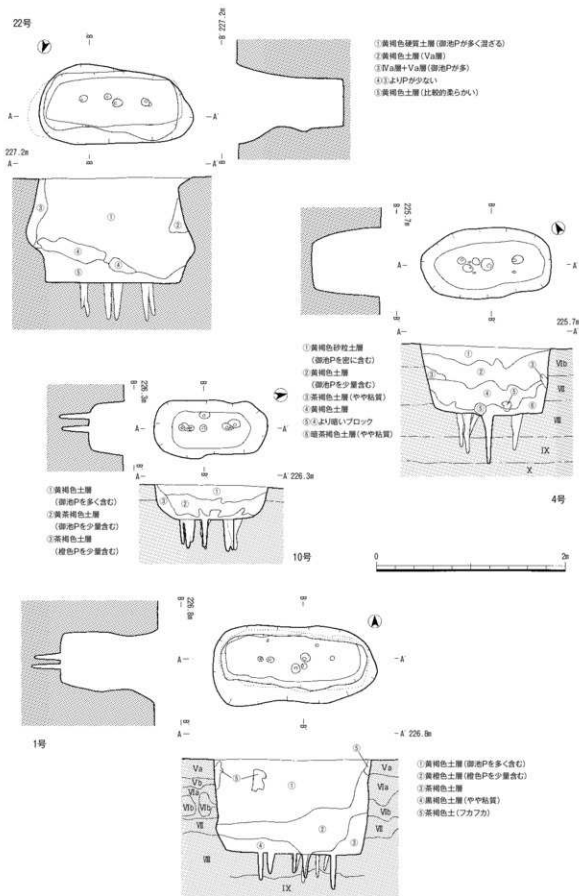
21号

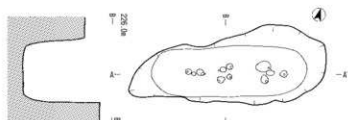


13号

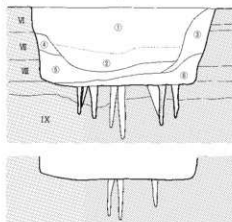


第240図 落とし穴状土坑1

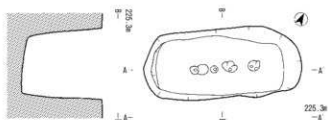




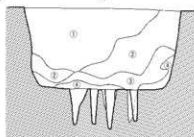
8号



- ① 明黄褐色土層 (溜池Pを多く含む)
- ② ①より溜池Pの量が少ない
- ③ 暗褐色土層 (溜池Pが密)
- ④ 黄褐色土層 (P11が少量入る)
- ⑤ 黄褐色土層 (P11が少量入る)
- ⑥ 暗茶褐色土層 (P11が多くサラサラしている)

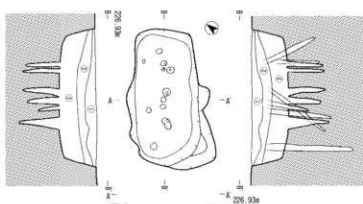


18号

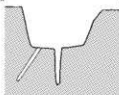


- ① 黄褐色土層 (溜池Pを少量含む)
- ② 暗黄褐色土層 (溜池Pを少量含む)
- ③ 黄褐色土層 (溜池Pは無し)
- ④ 暗黄褐色土層 (溜池Pは無し)
- ※ 坑跡は茶褐色土を主とし上部がサラサラ、下部はやや粘質をおひる。

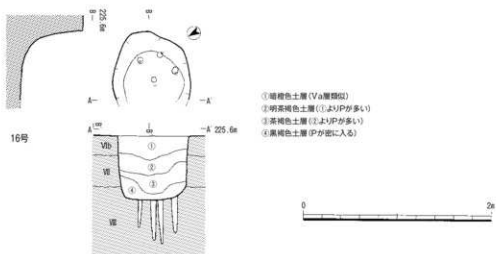
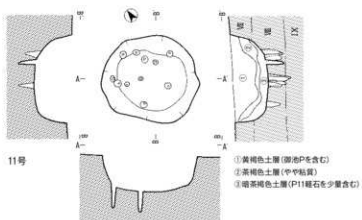
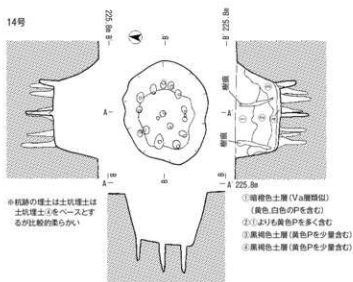
- ① 黄褐色土層 (溜池P)
- ② 暗黄褐色土層 (Pは無し)
- ③ 明黄褐色土層



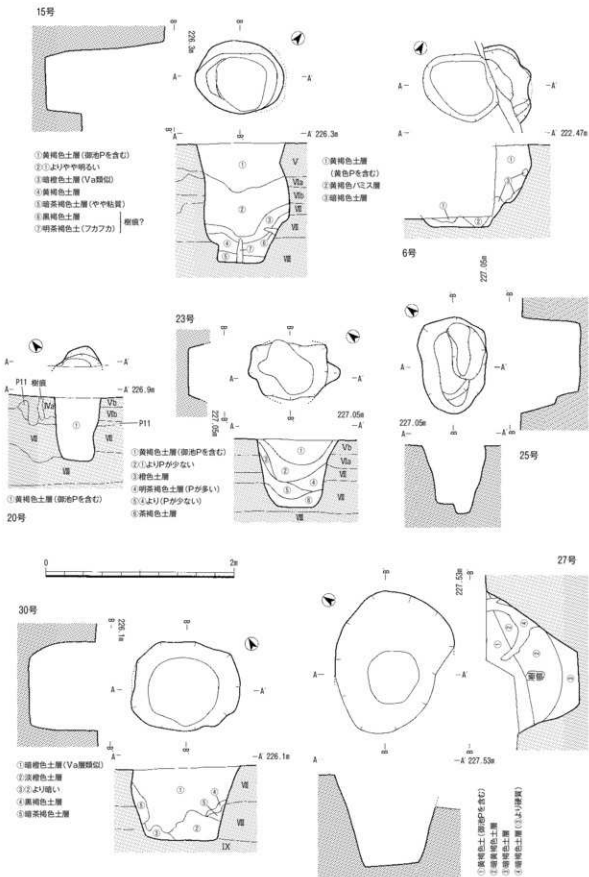
31号

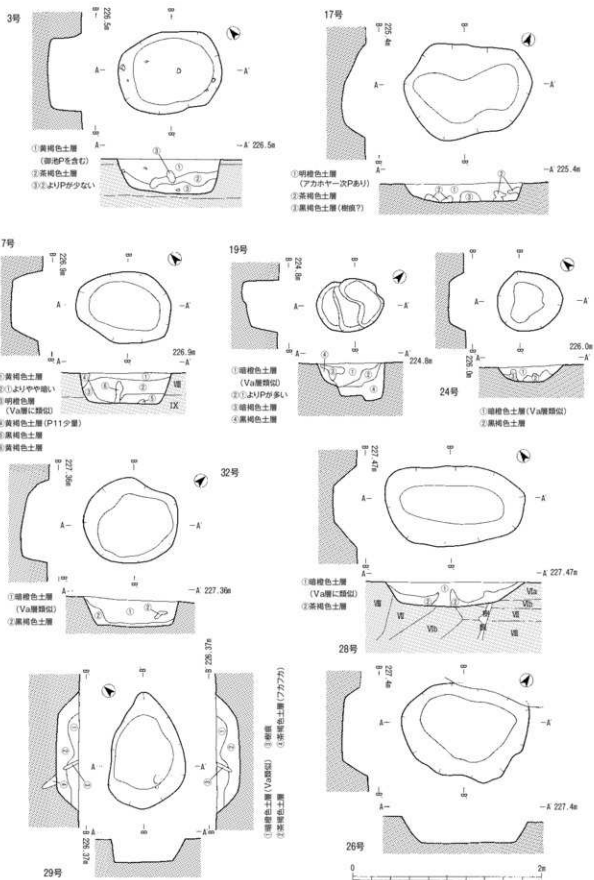


第242図 落とし穴状土坑3



第243図 落とし穴状土坑4





第245図 落とし穴状土坑6

平面形は円形で、長軸110cm、短軸90cm、検出面からの深さが35cmを測る。

6号落とし穴状土坑 D10区で検出されたもので、検出面はⅥa層、埋土パターンはAであった。多くは確認トレンチで掘削してしまい、詳細は不明であるが、わずかに残る形状や埋土の状況から落とし穴状の土坑として取り上げた。

7号落とし穴状土坑 D13区で検出されたもので、検出面はⅧ層、埋土パターンはBであった。平面形は楕円形で、長軸100cm、短軸70cm、検出面からの深さが35cmを測る。

15号落とし穴状土坑 F12区で検出されたもので、検出面はⅤ層、埋土パターンはAであった。平面形は円形で、長軸90cm、短軸80cm、検出面からの深さが130cmを測る。埋土中に杭跡らしき痕跡も見られたが、底面では確認できなかった。

17号落とし穴状土坑 D15区で検出されたもので、検出面はⅥb層、埋土パターンはAであった。平面形は楕円形で、長軸135cm、短軸90cm、検出面からの深さが20cmを測る。

19号落とし穴状土坑 D17、18区で検出されたもので、検出面はⅦ層、埋土パターンはBであった。平面形は円形で、長軸70cm、短軸60cm、検出面からの深さが40cmを測る。

23号落とし穴状土坑 D、E8区で検出されたもので、検出面はⅤb層、埋土パターンはAであった。平面形は円形で、長軸100cm、短軸100cm、検出面からの深さが80cmを測る。

27号落とし穴状土坑 C8、9区で検出されたもので、検出面はⅤa層、埋土パターンはAであった。平面形は楕円形で、長軸150cm、短軸110cm、検出面からの深さが100cmを測る。

32号落とし穴状土坑 F7区で検出されたもので、検出面はⅦ層、埋土パターンはBであった。平面形は円形で、長軸100cm、短軸90cm、検出面からの深さが30cmを測る。

2 遺物

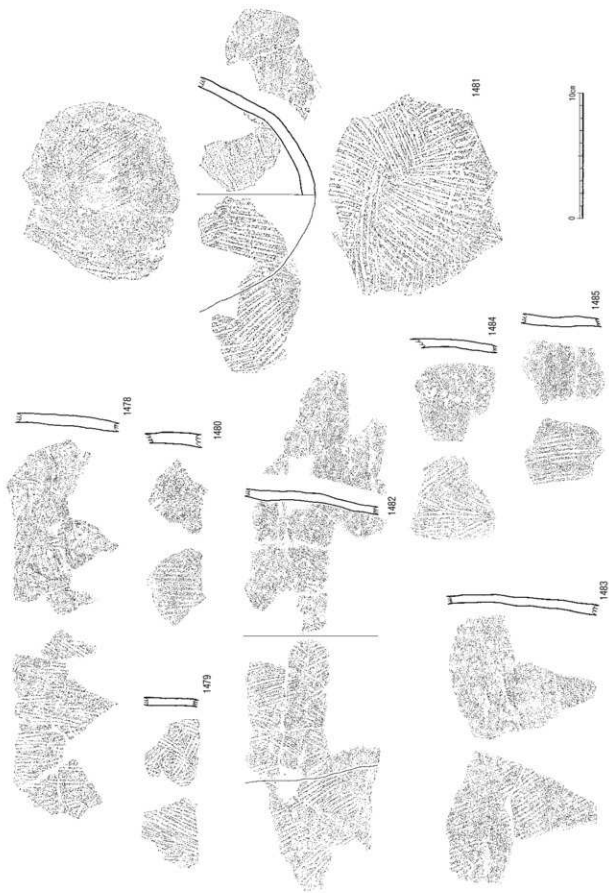
(1) 土器

土器は代表的なものを10点掲載した。基本的には条痕文系の土器と沈線文系の土器が出土している。1478～1480、1482～1485は外面に貝殻条痕が施された胴部片である。内面は基本的にナデ調整が見られるが、1479のみ外面と同様の貝殻条痕が施されている。胴部片のみのため、詳細は不明であるが、前期から中期にかけての資料であると考えられる。1481は唯一沈線文系の土器で、丸底を有する底部片である。底部外面の中心から放射線状に短沈線が施されている。短沈線同士で重なりが見られ、また長さも不統一なことから、やや雑な感がある。前期後半の曾畑式土器の底部である。

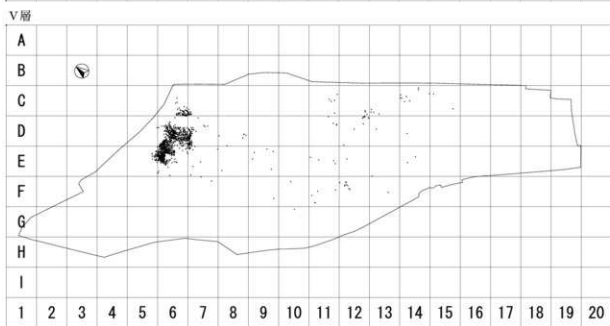
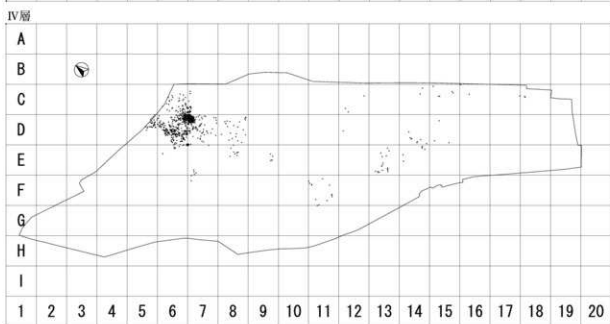
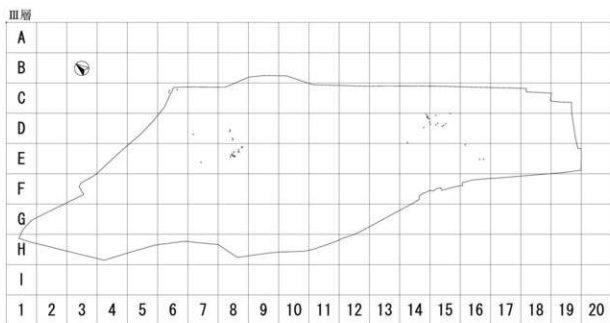
(2) 石器

ここではⅤ層（アカホヤ火山灰関係層）を主体として出土した石器を取り上げる。

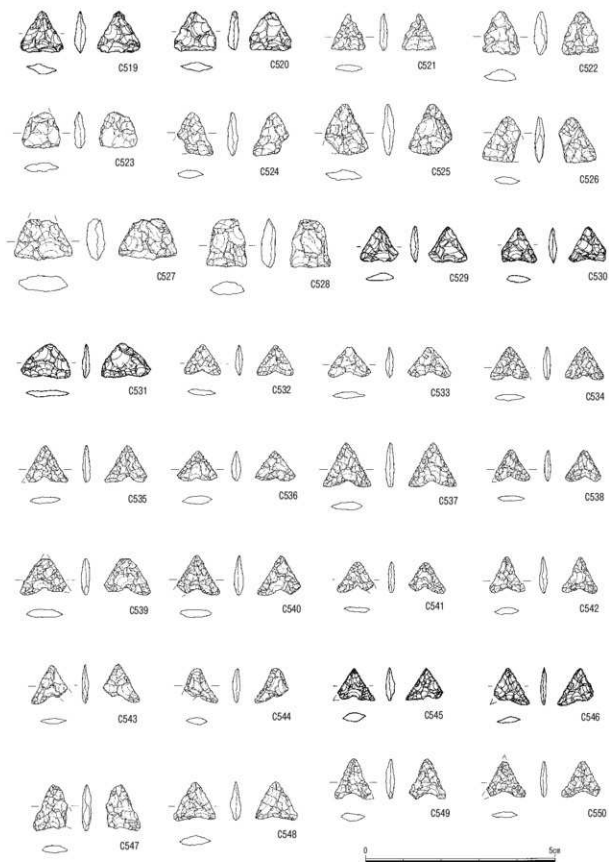
C519～C550は打製石鏃である。一辺が1cm前後の小形の三角形鏃である。特徴的なものとして、脚部がやや開く三角形の基部に、1ないし2mm程度の抉りを入れたものがある。C532やC534などがそうである。石鏃の多くは黒曜石を石材とするものであった。C551～C555は黒曜石製のスクレイパーである。後二者は小形の様相を呈する。C554とC555は石錐である。C556～C558は安山岩製のピエスエスキュー、C559とC560は使用痕のある剥片で、いずれも桑ノ木津留産の黒曜石剥片を利用している。C561は頁岩の剥片を加工したものである。丁寧な剥離が見られ、断面形が三角形を呈する。C562とC563は安山岩製の礫器、C564は安山岩製のスクレイパーで、本遺跡の早期文化層から多く出土したものと同種である。



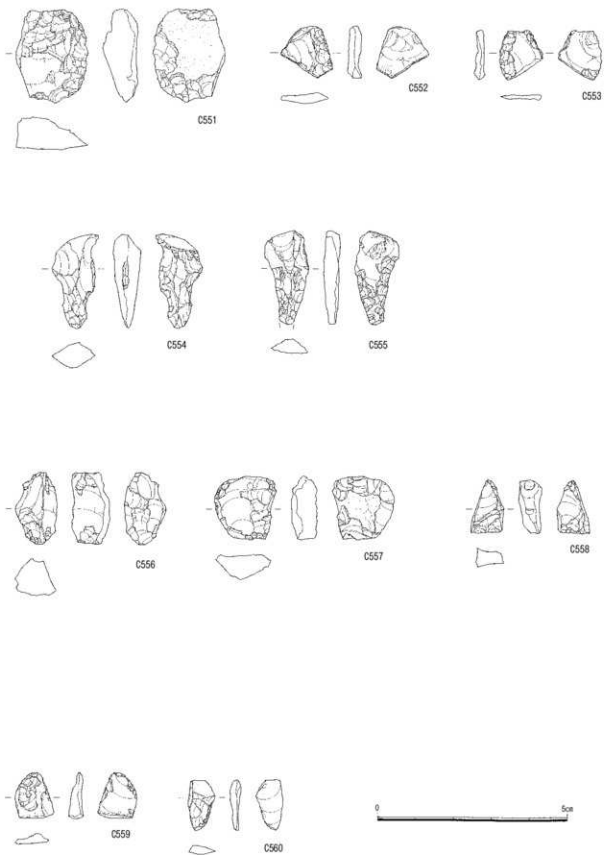
第246図 補文土器173



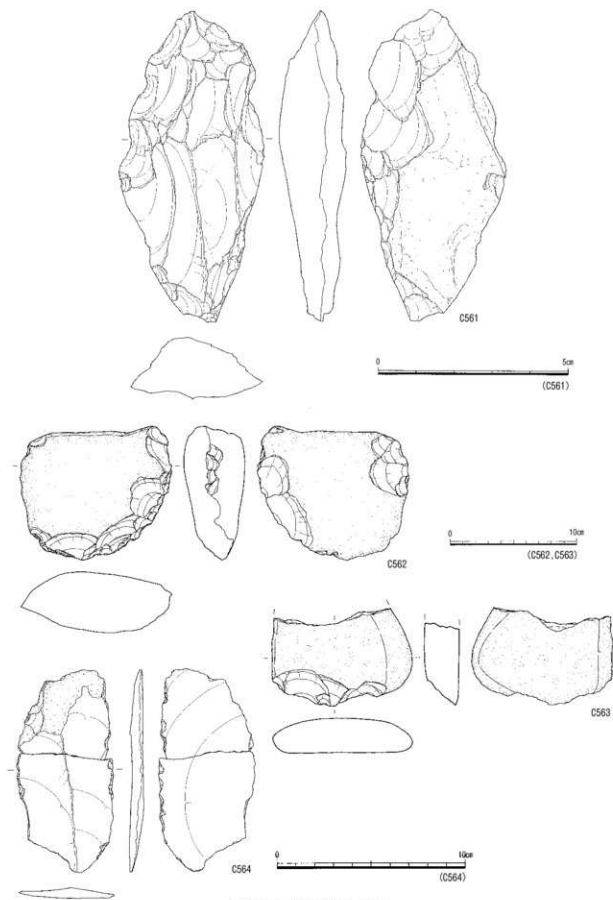
第247図 出土遺物分布図（Ⅲ～Ⅴ層）



第248図 縄文時代の石器54



第249図 縄文時代の石器55



第250図 縄文時代の石器56

第6節 縄文時代後期・晩期の調査

縄文時代後期から晩期にかけての遺構として晩期の土坑が2基検出された。また、土器や石器も少量ながら出土した。主にⅢ層およびⅣ層から出土した遺物である。

1 遺構（土坑）

当該期の遺構としては土坑2基がある。いずれもⅣa層中から検出された。埋土がⅢ層をベースとする点や、周囲から縄文時代晩期土器が集中して出土すること等から、晩期の所産と考えられるものである。

1号はD16区から検出された。長軸が170cm、短軸が100cmを測り、平面は長楕円形状を呈する。底面は2段階になっており、深さは下段で約65cm、上段で25cmであった。埋土中からの出土遺物はなかった。

2号はD15区から検出された。長軸が70cm、短軸が60cmを測り、平面は楕円形状を呈する。深さは25cmであった。埋土中出土遺物はなかった。

いずれの土坑も情報に乏しく、どのような機能を持った遺構なのかについては不明瞭な部分が多い。前述のように、周辺に比較的晩期の遺物が集中することから、何らかの活動が行われていたということになる。

2 遺物

(1) 土器

土器は代表的なものを10点掲載した。1486と1487は口縁部下の胴部片と考えられる。多重菱文と呼べる文様を、比較的太い凹線に描いている。内面には貝殻条痕による調整痕がみられる。中期末から後期初頭の土器と考えられる。同一個体の可能性が高い。胎土に雲母を多く含むという特色がある。

1488～1491も同一個体と考えられるもので、1488が口縁部片、その他が胴部片である。山形口縁部をもつ深鉢で、1488はその山形口縁部にあたる。細沈線と連点状の刺突文を組み合わせた文様を持つ。また、口縁部はやや肥厚させて、文様帯を作り出している。口唇部の沈線とあわせて、特徴的である。後期前半の指宿式土器期のものと考えられる。

1492～1494は晩期の浅鉢と考えられるものである。いずれも胴部の屈曲部分にあたる。いずれも内外に横方向のナデ調整痕が見られる。入佐式土器段階の資料と考えられる。

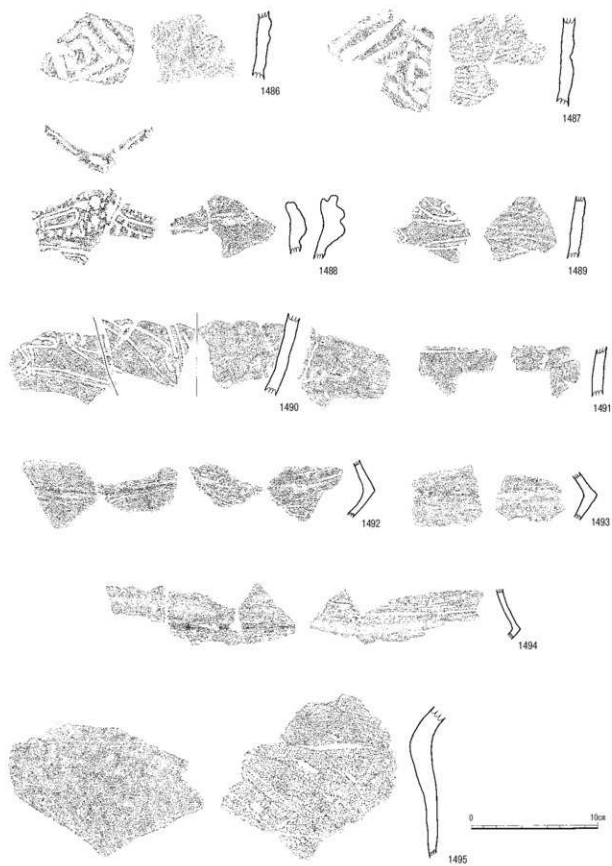
なお、本稿の該当時期ではないが、1495もここで取り上げたい。古代の土師器甕で、口縁部そのものではないが、頸部の屈曲部分にあたる。内面にはケズリ痕が残る。

古代関係では次節で述べる土坑が1基検出されているが、明らかな遺物はこの1点のみであった。

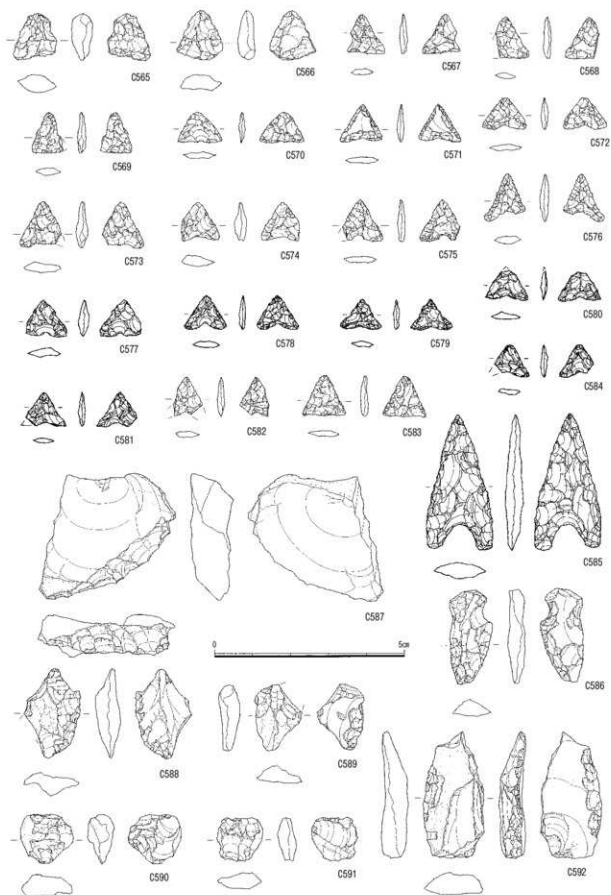
(2) 石器

ここではⅣ層（御池軽石関係層）を主体として出土した石器を取り上げる。

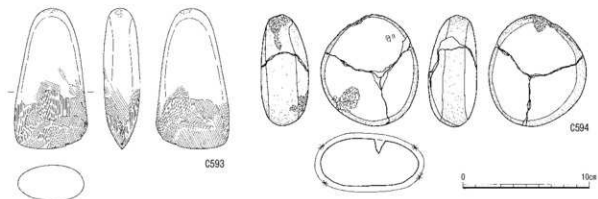
C565～C586は打製石鏃である。一辺が1cm前後の小形三角形を呈するものが多く出土した。中にはC585のように長さ3.60cmを測る長大なものも存在する。小形鏃で特徴的なのは、C571～C581の資料で、脚部がやや開く三角形の基部に、1ないし2mm程度の抉りを入れたもので、Ⅴ層中から多く出土している石鏃である。C585は基部に大きな「U」字状抉りをもつ。C571、C572、C574、C580～C582は頁岩製、C576、C585は安山岩製で、その他はすべて黒曜石であった。



第252図 縄文土器174



第253図 縄文時代の石器57



第254図 縄文時代の石器58

C587～C589はスクレイパーである。それぞれ頁岩、安山岩、黒曜石製である。いずれも角度のある刃部を持つ。C590とC591は小形のピエスエスキューである。いずれも黒曜石製である。

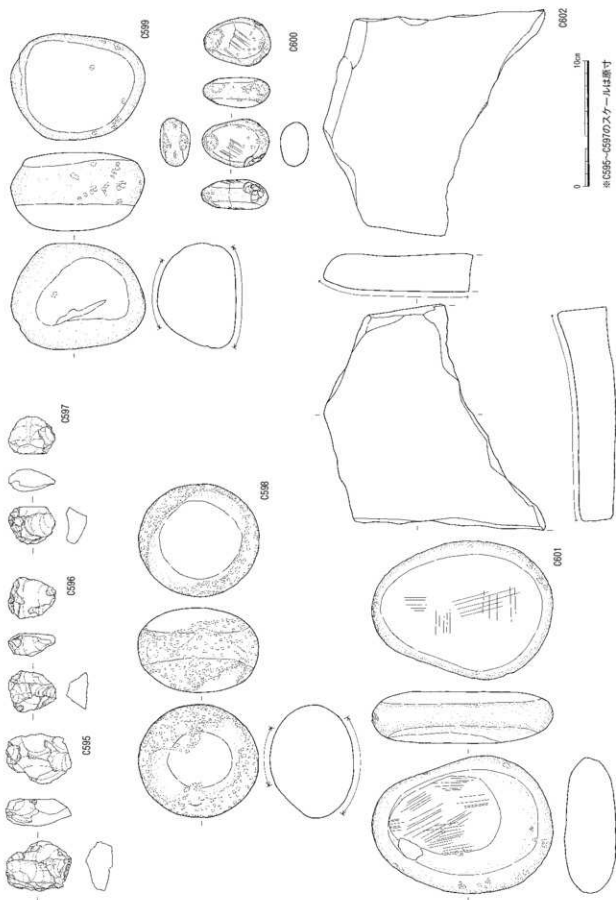
C593は頁岩製の刃部磨製石斧である。長さ11.05cm、最大幅5.75cm、厚さ2.90cmの完形品で、重さ248gを測る。C594は安山岩製の磨石で、3個が接合したものである。側面には敲打痕もみられる。長さ8.8cm、幅7.7cm、厚さ3.8cm、重さ371.8gを測る。

第255図は、横転の攪乱等で本来の出土層位が不明瞭なものを一括して掲載した石器である。C595～C597はピエスエスキューである。前二者は安山岩製、後者は桑ノ木水流産の黒曜石製である。

C598とC599は磨石である。C598は砂岩製で長さ9.5cm、幅8.9cm、厚さ6.7cm、重さ743.0gを測る。C599は安山岩製で長さ10.6cm、幅8.5cm、厚さ6.2cm、重さ785.0gを測る。いずれも肉厚な磨石の完形品である。

C600は安山岩製の小形ハンマーストーンである。長さ5.3cm、幅3.8cm、厚さ2.4cm、重さ65.7gを測る。C601は円礫を利用した砥石である。表裏両面に磨痕が残る。砂岩製で長さ14.3cm、幅11.0cm、厚さ4.1cm、重さ928.0gを測る。

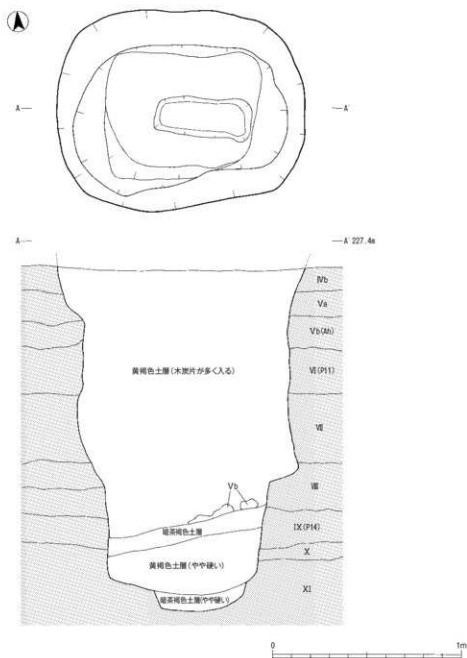
C602は安山岩製の扁平石皿片である。長さ17.45cm、幅17.7cm、厚さ4.6cm、重さ1330.0gを測る。表裏両面に平坦面を有するが、ややカーブする一面に磨痕が残る。



第255図 縄文時代の石器59

第7節 古代以降の調査

定塚遺跡からは弥生時代以降の情報がほとんど得られなかった。当該期の土層が耕作のための開墾や地下げにより削平されている部分が多いことから詳細は不明である。そのような中、IV層より上位から掘り込まれた土坑がD8区で1基検出された（第256図）。長軸130cm、短軸105cmを測る隅丸長方形を呈するもので、検出面からの深さが約180cmもある筒状の土坑である。底面では50×20cmで、深さが約10cmの小ピットが検出されている。埋土中に炭化木片が多く含まれていた。木炭の年代測定で1,211±33yrBP という結果が得られた。落とし穴的でもあるが詳細は不明である。



第256図 土坑実測図2

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（153）

じょう づか いな むら
定塚遺跡・稲村遺跡
(第3分冊)

発行 2010年3月

編集 鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899-4318
鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号
TEL 0995-48-5811 FAX 0995-48-5821

印刷 株式会社 トライ社
〒892-0834
鹿児島県鹿児島市南林寺町12-6
TEL 099-226-0815 FAX 099-225-7933

